



大觀



新心為築集

卷六

(兩角製本)

昭和十三年六月十六日印刷  
昭和十三年六月二十日發行

新萬葉集 第六卷

編纂代表者 山本三生

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座東京八四〇二番

電話芝(43)自一三二四番  
(一至一三二四番)



第  
六  
卷



那佳山 貞

積載機にてしきりに氷を積み居りしかの大船は鰹つる船

那賀壽美子

取りいれし洗濯物のところどころ荒地野菊の冠毛が著けり

那須祐三

わが聲に君が聲もて答する山彦あらば山に入らまし

名 木 勇

暑しとて肌ぬぐ父が二の腕の小さき刺青もかなしきものを

名 倉 信 光

時事新報社解散 一首

職場離れて他社の新聞読み居つつ眼先に暗く迫り來るもの



畑賣らむ思ひ侘びしも雪解けて青さ目に立つ麥を見て居つ

名 倉 清 作

丹澤に雪多ければ前山の阿夫利はいよいよあざやかに見ゆ

名 古 篤 代

病 間 抄

林檎汁僅かに飲みて生きの緒の細き命をけふも守りつ

紅に椿咲く日はたはやすく癒ゆべく思ひし病重りぬ

ひねもすに樋をあふるる春雨のよく降る事ぞ昨日も今日も

生き死にをやすらぎ思ふこのごろの夜々の眠りはふかくしありけり

名 越 那 珂 次 郎

椰子林遠くつづきて白浪のよする濱邊を土人ゆく見ゆ

劍橋にて

馬鈴薯の花さく畑にイギリスの農夫はかたる長崎のこと  
雪のごとさんざし咲ける牧場のかきねに紅き月いでにけり  
野に立てば秋の入日に中世の大學町はあはくかすめり

名 取 由 子

赤く大きき月出でにけり背戸山はまだしきりなる日ぐらしのこゑ  
こほろぎのこゑすみとほるこの夜半に隣人らのあらがふきこゆ  
堪へてをりし涙はたぎち落つるなり夜更けて來にし夫をし見れば

名 雪 理 輝

腹の兒の動き日に日にいや増すと妻の願望は足らへるが如し

おのが職務つとまらじと思へるとき貧しき人をわがせめて居りぬ  
差押物件引上ぐるべく語り居るに十あまりなる子がわれらを面罵す

名 和 盛 子

朝風の裾野貫くますぐ道富士はどこまでも青く大きく  
流れ來てこまごまかかる霧の粒わが梳く髪に眉に睫に

水淨きここの盆地に住みつきて安けく古きこの家がまへ(忍野八海)

知れる限りの言葉ならべて病む母に子はきかせくれぬ動物園の話

かにかくに十年は過ぎぬならびつつ歩む子の丈わが肩こえし(亡夫十年祭)

納 谷 歌 子

開けさよ茶を啜る時掠めたる思ひさりげなく茶碗をかへす(茶室にて)

奈 良 兵 亮

人にうとき吾はこのさきも妻子らとしたしみあひて安けかるべし  
たまさかに妻をともしひいでて來しあかるき街にせとものを買ふ  
髪をあらひてうすげはひせるわが妻のわかわかしさもやがてすぎなむ  
寂かに老を養へる師に逢ひて山の時雨にぬれて歸りぬ

年々に生くるなやみのふかまるにたはやすく涙のいづることなし  
うら山に風わたる夜はとほくよりしぐるごとし谿川のおと

奈良 峯 子

すこやかにありつつさびしひとはみな別れてうとくなりゆきにけり  
年月はすぎて寂けしかへらざる吾身の悔はひとり思はむ

こゑあげて笑ふ子見れば老いぼけてうとまるるまでも生きたかりけり  
いとけなきままに別れし生みの子のいとしさはひとにかたることなし

つきつめてもの嘆かひし日もすぎで今宵しづかに方丈記よむ

奈良井 新也

たそがれの山岨道に啼きそろふあわただしさよ蝸の聲

アルプスの嶺越しに凝る雲の峯の昨日より今日目にしるきかな

南 木 貫 之

おたまじやくしすくひてかけ來る子ろが掌ての水は早くもしたたりにけり

南 岐 蘇 山 人

木曾王瀧峽に遊び御料山小屋に泊る 二首

夜くだちて檜原ひまらあまねく照る月はそがひの山にかたぶきにけり

幾谿か谿を越え來て奥木曾の瀧越村の遅き春にあふ

木曾山の小木曾きぎその谿の牛尾菜食しほふつゆの季節になりにけるかも

向つ峯<sup>そ</sup>の檜原茂山樹々の間を何の木ならむもみぢいろこき

命ありてまた越えむかも時雨降る向ひのを嶺のもみぢ葉のいろ

南波佐間源治

松の芽のすくすくのびし松山の明るき中に鶯なくも

朝の陽のさして明るしはり替へし障子は糊のかわく匂ひす

静もれる朝の山に薪割れば谿<sup>こだま</sup>を三つ四つ越えて筈す

内藤 米雄

峯の上に間<sup>ま</sup>をおきて啼く山どりの夕べは谷に下りゆくらし

内藤 新三

日方吹く頃としなりぬほうとうを今宵は食べて汗ばみにけり

彼岸すぎけならべて降る雨の冷え今朝八ヶ嶺は雪かづきたり

内 藤 丈 叟

さざなみや志賀の穴穂のみやあとのかしの朽葉の上に降る雨

青山としみさびたてる二上の御山みまかしこし雲たちのぼる

内 藤 晴 野

針の手をやめてわが見る小川べに足洗ふ人はもの思はざらむ

内 藤 千 乃

わがこころさびしくなりてよるふかくひをみつめたりみるものはなく

しげりたるたけのはやしをわけいりてききいればさびしあらしのこゑは

しげりたるたけのはやしをわけいりてあふげばさびしみそらのいろは

うつしよにいきながらへてうつしよのひとのころははかりしられず

内 藤 進

颱風はおひる前後にくると云ふ此の静けさの不氣味なるかな

内 藤 ふゆ子

夫外遊留守

ねもごろに母の傳言書ことづてき添へつ遠き國への夫つまに送らむ

つつがなく歸り來ませと遠夫を日夜ひよに思ひて心ほそりし

寒餅に入れむと思ひ路ばたの雜草が中に蓬をぞ摘む

内 藤 はる子

賣上げの日記つけ行く吾が文字の商人あきうどらしくなりて略すも

内 藤 錦

このままに逢はじときめてわが歸る夕べを街は雨となりたり



秋季演習

内 藤 博

吾が家の軒端の柿に演習の電話線ひきて兵行きにけり

手綱とられ休める軍馬おとなしく顔照らされて月光つきかげにをり

内 藤 杜 美

いつの日か歩き初めむとあやぶみし子はこの朝をつかまり歩く

内 藤 道 直

暮れそめし嶋のいそべの寒靄に海猫がなく聲のするどさ(網地島)

中 勘 助

葛飾かつしかのあびこの岡のぼつぼどりぼつぼと鳴けばわれはさびしも

日くるれば沼べの小田のはさ竹に冬こふゆこと笛吹く木枯

春なれど赤はらつぐみきて鳴けば葛飾野べはいとどさびしき

朝日さす唐菜の畑のしやうごんに二十五菩薩あもりきまさね

葛飾の沼べに秋の風ふけばもろこしの穂もさびしきものを

あしびきの山もただよはすさみだれの相模の國をわれはめづるかも

潮の音はわが荒魂のをたけびかききくらせどもききのあかなく

松山にひとりころがる松かさはひとりなれどもさびしがらぬも

日くれて海かなし沖にかづくむら鳥を友とはもへどへにはよらぬかも

秋鳥の叫ぶやいづこあれ畑に茄子のから吹く山おろしの風

えらえらと日は燃ゆれどもちぢくれて秋はさびしき赤唐辛

いとど鳴く草ふか野らのすてかぼちや黄ばみ蟲ばみ秋たちにけり

あを紫蘇の花に蜜蜂つどひきてつぶらむらさきほろほろ散るも

春風をぬくみのどけみほくらほくら耳垢さらふこの日向かな

中江 忠一郎

夕飯を告げ來し妹に應へつつ残りの藁を吾が打ち急ぐ

中江 間人麻呂

香良野に夕風や立つこもり居のここの槓の葉さやさやと鳴る

ひる山の松にこもりて吹くあらしはるばると來し笠解きにけり(山國陵)  
こころたかぶり寢やらぬ妻のまなざしをうしろに思ひわれもねむらず

中 垣 五郎

軍港の空を飛びかふ水上飛行機見てゐるに一つ海に降り來ぬ

いちけつつ過ぎ來しを思ふ今にして貸費生たりし幾年月を

中 川 晴 雄

人揉みて得るいささかの錢貯めて買はむと思ふ辭書のあるなり

中川 一政

朝起きて寒し此家のくりや口に枯山のすそ見えてゐるかも

朝飯をすましてくれば田の日向鴉が一羽降りてゐにけり

枯山のさやかに見えてこの夜半にさしのぼり來る月かあるらし

家を出て一二町來し冬の小田日のさして氷わるる音する

曉のさむき光の枯山にあかくさしつつ下僕しもべ起き出づ

山際に風どよもせど見つつゆく川瀬の水はしづかなりけり

町中にけふ出で來れば雨の中を牛曳きて居りぬわが村の人

向つ峯たけの枯木の中に人居りて峯の上を走る犬を叱れり

にはとりの夕べ遊べる庭先に七輪ありても煮えにけり

この夕べ兒等の騒ぎてせはしなき庭に出してあり米を入れし釜

幼な兒のかへり行くときしめざりし襖なりけり寒しと思へば

庭先にわれを呼ばへる兒を見れば高くあがりし風を持ちきぬ

過ぎゆきし風しばしして冬の夜の据風呂の釜火を吹きにけり

寒き日にミルクのみつつ思ひ居りわが心中を知るは彼のみ

朝あしたより風の吹きしく裏山をひとめぐりして室にこもりぬ

幼な子の筆を逆さにさしにける筆立の筆穂先まがりぬ

小夜更けてしづかにふみを讀める時わがかしらより塵おちにけり

幼な兒をわれは持ち居りうち向ふ机の上の飯の粒かも

内ノ牧温泉 二首

山の湯に浸りて居れば窓のべの稲田にきたる阿蘇の百姓

山の湯に精靈とんぼうちむれて空にきこゆる秋かぜの聲  
わさびの葉噛みつつおもふこの谷にけふ遊べるもいのちなりけり  
この澤のわさび畑におりたちて見あぐる山は枯草の山  
吹きあれし風も落つればこの山のほこりは雪の上へのこりぬ  
入つ陽に枯草山を越えて来て林の中の雪暗きかも  
うららかな畑の家の障子より寒しと言ひて人の出で來つ  
埼玉のあがたに入れば雪どけの畑にながき電信柱のかげ  
二階より襯衣シヤツをば振ふかへり來し山道寒く日は落ちにけり  
折からの時雨はすぎてしづかなる山の上の巖ひかりてぞ見ゆ  
寒かりしあらしも夕べ吹き落ちてしばらく光る谷川の水  
月かげの遠くとどきて此夜半に谷のながれに碎くるあはれ

山の端に缺けたる月ぞあはれなる友の顔見えずならび歩きて

風止みてしづかなりと思ふ村の眺め藁屋根の上の猫おりにけり

中川伊津子

わが言葉素直に受けてうべなひし母は寂しも老いにけるかな

新しきパフの感觸こころよく朝の鏡にわが向ひをり

ビルディングの窓にわづかに陽はのこり蒼然として街はくれゆく

中川正太郎

滲み出づる額の汗はま裸の腕にふきつつ麥を刈りをり

ゆたかにも熟れなびきたる小麥畑うちさやがせて朝風渡る

割竹の樋をつたひて流れこむ稻田の水の泡立つ暑さ

嫁ぎたる妹の野良に働くを自動車に吾が見てすぎにけり

中川源太夫

うらうらの日が續くらし備中鍬の柄をすげ直し水につけおく  
夕陽照る遠の水田を鋤く馬の蹴上ぐる水は光散らせり

結婚前後

門川に煤け障子を洗ひつつ心おのづと君が上にあり

しめやかに雨の降る日は部屋ぬちに妻の箆笥のうるしが匂ふ  
二三日實家へ行くとてねんごろに部屋の掃除をしてをり妻は

中川正壽

諏訪高木

雨霽れて近く聳ゆる山肌に夏の光のあらあらしけれ

富士裾野



夜の風吹きおこりつつ蟋蟀のなほししげけれ高野原たかのののうへ  
ひろびろと草の並みふす裾原に日に光りつつ霧ぞ降りける

小佛峠越

山の秀すを光りつつこえて降る雨の梅の林にしぶき降りくる

母逝く二首

この夜半に命絶ゆるといふ母は幼き子らを寝ねしめにけり  
暁の風入る室にうつぶして水欲りゐたる母の目に見ゆ

ひと日晴れし空の光にこころなき莖あかみたる草抜きてをり

病床にて

花散りし梅の群枝にかかる雨こころしづまらば愉しかるべし  
様々に思ひ及べば切なけれどけふの命をわれまもるなり

中川美登理

寒さゆるむをよろこびて漬菜洗ひしが暖かりしはただ一日のみ

中川虹光

うつりゆく雲にゆたかにあらはるる山さやかにて雨霽るるなり  
かげろふの炎立ちの末にゆらぎゆく水の光りの春となりたり

中川澄子

舞ひ下りし鷺のゐどころたしかにてげんげ田圃の晝しづかなり  
張り終へし板の布より立つ蒸氣のゆらゆらとして春日かがよふ

中川化生

羽後國太平山に登る

谿川の日光とぼしき樹々の間に濕原植物の大き葉は見き

峰も裾も雪ばかりなる鳥海嶺の全けきすがたまなかひに見つ（山頂）

中川 薫

あけがたを一番筏くだるらし低きより呼ぶこゑのひびかふ

中川 龍一

この朝納屋の堆肥にほやほやと發つ湯氣見れば冬は至りぬ

池底の窪處に群れて穩しさよひれは振りつつ位置かへぬ鯉

下つ葉の受け餘したる牡丹の影地の平にふるへつつあり

人ひとり通りてすでに久しけれ月しづかなるわが家の前

中川 浅子

丈伸びて大人びし娘の亡き夫に似たるまなざし見れば愛しき

中川 杏果

生活難で親子四人が死せりてふ新聞記事は人ごとならず

中川彦典

ふと見たる机の上の埃よりこころかなしくなれる朝かな

朝霧の中にわかれを告ぐるほどはかなきものはなしと思へり

中川武

病中

うとうとと夕まどろむ枕邊に粗き龍舌蘭の香りは染みぬ

勢ひつつむさぼり読みし日を思へば書齋にけふははかなく過しぬ

氷雨すらけはひみださぬ夕凍みを昏れてまのある庭木の明るさ

病呆けて世に遠ざかる一朝も時雨がちなる季いたりけり

照りかけり雪の翳射す庭木々の膚青みてしたたる寒さ

輸血了へてまどろむゆふべ冬薔薇の眼にしるく顯たつ花瓣の一ひら

中川曙舟

段さまなして水の有る沼水なき沼日はよくあたる山の奥まで

中河興一

さむざむと霧おそひ來て國たかき山のはざまに汽車かかりたり

おのづから心おどろきしきりにも國の高原にたつと思ほゆ

天に近き國の高原あさあさの霧の流れにわがぬれにけり

山道をゆき疲れつつ聞きにけりまさやけきこの水のしたたり

濡れつぎて水しみ匂ふ谷苔の青き春べとなりにけるかな

ときわかず聞ゆるものか汝が聲は胸のふかどに住みてかなしも

槇の葉のかたまり黒き月の夜をひとの俵はゆきにけるかな

うつそみの命かたむけ戀しさのきはまる時しまへあともな  
いとどしく心わりなし磯草の光れる濱におりて嘆くも

魂あひて別れあるものはるけさも死も二人を割きあへぬべし

われ生けるしるしあり世に白玉の君が手はきて觸るるかなしく

大き木の下に來しとき息あひて唇ふれにけり死にて抱きし

死にてなほかたはらにありと言ひしかば呼吸もとまりて唇ふれにけり

待ち待ちて來ざる消息ほとほとに死ぬる心をひと知らぬやも

逢はぬ日の一日は十日逢はずして長く生くともわが何せんや

別れきて七日夕ぐれほそぼそとかなしき雨は降りいでにけり

魂あひて觸るる思へばこれの世の生き死のことは何か嘆かむ

一人ゐて吸ふとなき煙草火をつけぬ遠るる汝も同じと思ひて

いねらえぬ夜々のつづけばはしたなし冬近くして晝いねにけり  
わがために一人を守り生ける子のありと思はば何か嘆かむ

中 河 幹 子

瀬戸内海

朝霧はいづべゆわきし海へだて見えるし母の村になづさふ  
大き汽船すぎゆきにけむ夕霧の槌の戸瀬戸に煙たゆたふ  
西空にたたまる雲間赤くしてしづかなる海の水脈染まりたり  
すでにして夕日しづみし瀬戸の海の空一面にいろづく断雲

瀬戸内海沙彌島に柿本人麿碑の除幕式ありてその歸途日枝丸にて

星もなき冬の夜海を汽船ゆきてしら波しきりうしろに流る  
右舷のかた燈臺青くともれども夜の海くらく島かげもなし

荒るる夜の闇はてしなきわだなかに大島は煙吹きちぎれるむ  
汽船ふねの灯に白波しきり吹きとべどそのさきは天も海もなき闇  
わだなかの島に相より生くる人のかそけさはかの貝に異ならず

奥秩父三峰山

山ふかみ紅葉いちはやき峰々の相よる谷に人の住むはや

霧の海のはるかかなたはあゐいろの山々波だち天てんにとどけり

そのあひにしら雲をおき頂のみ見する山々の幾重なるらむ

おのづからみ山の霧のひそやかにあけ放つ部屋はとほりゆくらし

被服廠の兵士ら満洲へ送る防寒具の耐寒の度をしらぶるため  
に雪の男體山麓に露營せりといふ二首

八錘體の天幕てんまくのさきゆストープの煙あがれり雪晴れの山に

着ぶくれて朝登校の小學生てんまく近く兵を見てをり(露營の場所、小學校  
の麓つづみなれば)



雪ふかき山に生れて代々經つつ人は他國へ移らざるらし

華嚴の瀧青く氷りて冴ゆるときまともに死とを易く思へり

いつしかに蛙なくなり宵々を子らを寢部屋に率あてあはれなる

五分刈りの小坊主となりし子が名をば呼びていくたびも此方むかしむ(吾子散髮)

子供らのねたるおもわよ幾人も産むおろかさを口にはいへど

母が手につたはりて來こしをさなごの夢の笑ひの聲にいでにけり

眠りつつ笑まふ愛しと見てゐるにみどり子の口泣きそめにけり

中 越 一 梅

秋の日の晝深くして草の家に七面鳥の聲ききにけり

小鳴野の山際膚は天に浮び霞める春となりにけるかも

雨後の麥生の原に朝日射しあたたかければ足袋ぬぎにけり

中 込 松 彌

安部の谷木橋石橋いくつ越え自轉車くるまを下りし村は涼しも（安部梅ヶ島温泉）

中 込 純 次

溪ゆけば空にも通ふこちして光の如く白き路かな

中 里 政 一

算術をひろげたるまま寝入りたる吾子おこをしばらく起さずにをり

中 澤 一 良

昭和三年十一月十日御大典の御儀

ものわかぬ兒にも傳へて今日の日をほぎまつるかも心あかるく

中 澤 豊 三 郎

さしなみの隣の庭に點とまる燈の夜頃はしたし若葉ごもりに

めづらしく洋樂をかける隣家は遊學の娘が歸りしならむ

陽に乾してふくらみ厚きふとん被く母は老いませりみ顔小さく

中 澤 笛 聲

朝まだき竹買ひ人の來にければ雪沓穿いて竹伐りにけり

雪あれど日和よければ正月も山畑に桑の古株を掘る

中 澤 尙

夕ぐれて家に歸れば裏庭に落葉を掃ける母の聲する

山の峽吹きあぐる風の寒くして山がやさやぐ音のさびしも

中 澤 功

ふるさとに朝さめてきく門川はとどこほりなき音を立て居り

中 澤 松 枝

夕雲のたむろする方に消えゆきてなほ轟けり爆撃機の音

中澤金一郎

由布山の麓に雲はたたなはり曉おきの寒くすがしも(別府にて)

中澤庭柯

大掠のうれ葉した葉のはらはらに實さへ落ちにき時雨降れば  
春されば枸杞の新芽のほのあかみほのかにおける雪はかなしも  
あけがたを牛牽きとほる村人のほのかの足音あしないねてききをり

愛宕山上

稻刈りし水田の上やうす雲のはららにうきて寒しゆふべは

越後糸魚川にて

戸を鎖かしてまだ寝しづまれる曉方のさびしき町を見て行きにけり

庭竹の細筍ほそたけなの籜たけ毎に朝はこまかき露もちにけり

道端の末枯すれ草葉に夕日染み茶の木あらはになりけるかも

天 橋

橋立の磯廻いそみの小家秋暑く松にまじりてかほちや花咲く

播州坂越にて 一首

生島いまの木蔭に泊はてし苦舟のいよりかたまり安らげく見ゆ

夜毎來て猪が掘りあらず薯畑に繩張り禦まぐ妻と二人して

面白き石搔い撫でつにひとしの二日三日は庵ごもるかも

槻の葉のこまかく揃ふ朝空はさわやけくして晴れにけるかも

丹後久美濱

着くべくしとめ行く宿の裏畑に舟より見ゆるひまはりの花

女のわらはは二人三人がうちむつび山に遊ぶはかなしかりけり  
狐わな仕掛けて人の立ち去りぬあした山畑斑雪降れば

鶴山

大雪に壓されし山の楯原しもとやや起き上り芽立ちそめつる  
麥熟れて黄に透りしが夜眼に見ゆ中空にして月おし照れり  
埴土をしみ出て落つる山水のかそかに人のすみつつあはれ

由良河

河口に浪あがる見ゆ海の水河ときほひて砂をよせたる  
つきつめてものをおもへば下心妬むに似たり不よ樂しかれども

山蟬はひたすら鳴きてしづもれりここにひそかに憩ひて行かな

湖の背向そががの山の清き照り白鷺の行くはゆくりなきかも

いにしへの婦負めひの川原の薄穂のかがよふ今日し清らけきかも

中 島 哀 浪

柿もぐと樹にのぼりたる日和なりはろぼろとして背振山見ゆ

草のなかにもぎて落とせばつぎつぎに柿は赤くしてこほろぎ鳴きぬ

夕餉食せす子らのどの子かにほふなりすでに蜜柑をもぎはじめたり

夏蜜柑の落ちてゐる雪に日の照りてとなりのピアノ鳴りいでにけり

到來の林檎の箱をおきしかば師走の厨ゆたけくし見ゆ

蕨採る山の日あつし妻子らとたにのながれに口つけて飲む

蒸したてのもちごめの湯氣にぐもりたる眼鏡はづしてわが搗かむとす

わが搗けばあなすがすがしさみどりの蓬にそまる眞白米の色

肥前古湯 一首

湯の底の白砂うごき湧きにけり川音にまじる岩燕のこゑ

雨の漏る糍かたよせていねしかどなにかさみしき夜のながさなり

味噌豆の煮えたつ背戸のかまどには柿の落葉を掃きよせて焚く

魚を焼く家を出できて夕月のすでにほへるトマトをぞもぐ

もちの木の花散りしけり市内にもかかるしづけき路ありてゆく

ひねもすの事務につかれてるにければ苳をくれし子を撫でにけり

亡母法事 二首

みひつぎに觸れたる雪のこの樹よりおちしときより三十年過ぎぬ

雪ながらみひつぎにかけし土の音はいまだきこゆれど苔むしにけり



學校の廊下に白き蝶とべり硝子戸をゆする空梅雨の風

筑前芥屋大門

青潮をすかして見れば岩柱芥屋ひやの大門をふかく据ゑたり

豊前英彦山

行きくれて山の祠に眠るまであらざりし月の下にめざめぬ

旅順戦跡

皇軍のつよさはあれど天嶮を頼みて勝てるものかつてなし

この山の形變るまでしかばねのつもりしといふ勝たむばかりに

大連

寒帯灌木サビタの根にて作りたるパイプさすりつつ旅館にかへる

中島彦治郎

遠空の夕焼雲に見入りつつ君しのぶ涙おさへかねつも

中 島 貞 子

巖いわかしとあふぎし天城たなぞこにのるほどちさし霞のはてに(十國特展望)

花ありとおもふ安さにたづさはり野にいでてきてけふもあそべる

つくしんぼ袴をとればやはらかに陽にさへ染まぬいろのいみじさ

雪よふれしろがねなせる大地をまくらにまきていのち死なまし

梅の花いまひらくらむうばたまのやみをゆるがす音もきくがに

水浅黄空の涯より金泥のひかりとなりて落葉ふりくる

觸るる手もなき丈長のくろ髪はわがものなれどあまりつめたき

山ゆかば雲に随まりつつ谷ゆかば水に随りつつたのしくあらな

今年また夾竹桃の花さきぬ去年の扇に染みしうつり香

七情のもつれをさばくすべもがな石にすわるといふこころ知る

青笹の小舟にのせてするわれのねがひやとほき星のまたたき(七夕)

異國少女朝山徑にあらはれて白馬ゆたかに衣をなびかす

てのひらにとればこの世のものならずつめたくあをき梨のはなびら

中 島 冬 子

皇太子御降誕

二つ鳴るサイレン聞ゆわが兒等も朝餉の膳に箸置きにけり

中 島 花 楠

雪やけの友の面輪に親しさあり仕事はじめの今日を出で來れば

かげろふの燃ゆる枝とて寄り添ひし雀なるらむ慥び居る見ゆ

わが頬の血色にいまだ不安あり髻剃り居ればうぐひすきこゆ

睡蓮の巻葉とけたるやはらかき殿様蛙すずしげに居る

かいつむり岸にむかひて遊び來れば波のうごきは蘆むらに消ゆ(手賀沼)

霞ふる橋の上よりみおろしぬ曳き船に人の雲雀飼へるを(隅田川所見)

めづらしくまつ松雀の聲のながれ來ぬちかき邸の松かぜの中に

寂として地曳の綱にすがりゐる人のうごきにせまる白浪(鵜沼海岸)

ある人より古き三分蕊の石油ランプをもらひうけて 二首

身はつひにひとりと思ふ切なさか今宵しみじみランプをとも點す

しづかなる焰のゆらぎ目守りまもりゐて身の切なさの寢がへりをうつ

みじか夜のみはてぬ夢の中にして潮騒しほざわきこゆ松かぜきこゆ

朝溪の日かげうつろひやすくして聲おとしゆく山鴉とほし(伊豆湯ヶ島温泉)

麥の穂の芒ひげのひかりも濃まやかに風脚みゆれ檜山かげに

中 島 恒 子

みどりみどりただ一色にみどりなる那須野ヶ原に今吾は立ちぬ  
朝の風草にゆれつつ丘をゆく人かげ絶えてミサの鐘なる(横濱にて)

中 島 治 太 郎

魚 河 岸

照りつづく日のかげあつし大いなる鮪庖丁我がとぎて居り  
夜くらき棧橋ひらだにおろす大まぐろ鉤にかかりて窓に垂れたり  
曇天のいよよむし來ぬ人群におらびつつわれは生鮑なまあはひを賣る  
兌換券たいかんせんのしわ伸ばして居ればあはれなり魚の臭ひすひとつひとつに  
堀割に五大力船の黝きかげ暗夜の水に影ふかぶかし

眞夜中に我が目さめたり油蟬戸につきあたり落ちて鳴き居る

安房妙之浦

海なかに投げて與ふる餌のかげすでにくろぐろと浪の間に落つ

谷川温泉一首

しろじろと土かわきたる路なかを山葵栽培場の水のあふれゆく  
粉をふきし大き葡萄の垂り房を手につりてゐぬこころ親しく

床ぬちにわがぬくもりのおのづから廣ごりゆくを思ひつつ寝む  
吾が妻は寂しきほどに愼しみてひそけくぞあはれ身ごもるらしも

中島眞佐子

なほ寂し君と砂丘を行く日にも雲の上なる少女ならねば

なつかしく君に心を寄する日も戀せじとこそ嘆くなりけれ  
これをさへ聖なるものと君は言ふわが悲しみにくるる涙も

與謝野寛先生の死にあひて 一首

師の君も甦るべきこちすれ復活祭のしろきあけぼの  
牧師にて君誰よりも大いなるものと見ゆる日涙ながるる  
まことにも上なき天のあることよ我らが惱む世には似ぬかな  
信濃路は春となれども悲しかりしろき氷河の世のこちして  
わが手にもありて光りぬ舊約と新約の書と朝の消息

中 島 暉 人

もみぢ葉に置きたる露は静かなる光を持ちて朝をしたたる

中 島 誠

むれ匂ふ石灰の中に青々しき稲の匂を嗅ぎ分けにけり

脱殻につきて離れぬかまきりのはかなき迄に透きて青けれ

中 島 咲 子

わがのれる駕籠のあとさき舞ひて居し紋しろ蝶は溪へそれたり(伊勢孤野湯の山)  
草屋根の九品佛寺しづかなり季ときまたずして落つる銀杏

中 島 太 隈

しばらくは吹雪にかげる冬日影ここの障子に見らく乏しも

中 島 秀 夫

峠より見ればちひさし母の里風吹き荒れて濱は白浪

みくまぬの熊野の山に啼く鴉ふたこゑみこゑ太き聲かも

ほの白く月の明りに散る花の木槿は徑に落ちて溜れり



中島 房雄

漸くに這ふ子を這はせ遊ばせて夕餉仲々片づかぬなり

中島 光三郎

ささやかに門松<sup>ま</sup>は飾りぬ來る年にのぞみをかけて病みふすわれは  
目にみえて日永くなりし日のゆふべ妻が買ひ來し草餅を喰ふ  
臥<sup>ね</sup>疲れてけふもゆふべとなりにけりそこはかとなき寂しさにゐつ

中島 千代子

風やみて日本海をば渡り來し大雪の夜となりにけるかな(加賀にて)  
春立てば阿蘇のけぶりも我が夢を抱きて空にかがやけるかな  
噴くけぶり天を掩ひぬ阿蘇の山をぐらき晝となりもゆくかな

與謝野晶子先生より衣帶を送り給へるに

光をば紫<sup>し</sup>微<sup>ひ</sup>の星より引くごとく師のたまひけり紫の帯

中 島 耕 一

病みて右脚切斷 一首

嘆かひし日もありけりと思ふさへわが松葉杖古りにけるかも  
軒の端に吊れる干餅よく乾き寒<sup>か</sup>のさむさも過ぎにけらしも

中 島 保 藏

郵便局現業室

地方行きの小包郵便の大方は通信販賣の商品なるらし

中 島 眞 珠

大崎のいばらの花に雨降れば群渡りゆく白鷺の鳥

大谷の須賀の大楠今日みむと法院坂をこして來にけり(須賀神社)

かたまりて晝顔さける砂山をめぐりて潮のみちくる音す(土佐小笠瀨)

中 島 若 菜

小野鷺堂の水色の短冊かけにけりすだれもほしき風の吹ききぬ

中 島 勝

寂しさは消ゆるすべなしねもごろに夕影ぐさの種子まきにけり

より添ひて匂ひ堇を摘ましたるひとのおよびはほそかりしかな

ひとむきに雪踏みしめて歩みたりはかなき朝の別れなりけり

思ひ出をいまは嘆かじふるさとの草野がなかの夕べこほろぎ

この心より添ふひとにみだれをりあかき牡丹のはなのしづけさ

逢ひぬればこころひそけし歸りくるこの原みちの月夜こほろぎ

かへりみるちまたは暮れて夕月のほそきを言ひぬひとはかなしく

青田の中を小さき汽車にゆられつつはるばるきみにあひにゆくなり

中 島 義 佐

霜晴れのここの刈田の朝たけて明るかりけり風光り過ぐ

繫船池の空に黝々と聳ちてゐるクレーンの重壓感寒し夜ぞ更けにける

鑪場ろばや朝は冷たき陽の射して土間に寂しもひかる鐵粉

月夜寒きここの鋪道やありありと木の影はありて人は通らず

春淺し白きタイルが冷えびえと光る洗面所に朝の顔洗ふ(旅館)

春あつき練兵場や蝶一つ風塵の中にまぎれゆきつつ

更けし夜の谷地の蓮田の月明りむきむきの葉のただに大きさ

中 島 清 子

ふりつみて風しなれば木のうれは雪をたもちてしづかなるかも

しづかなる朝の臥床を樂しめり陽光ひかりに透きて立ちまよふ塵

中 島 恒 雄

うしろより砂丘を上りくる妻は脱ぎたる足袋を手に持ちてをり  
戒嚴令に依り開緘といふ印を捺されし手紙が東京より届きぬ

鼻の上にかく汗ばみていとけなき患者が吾の前に坐りぬ

かたまりて赤き口あく鵲の仔を賣りてをり蕙の上に

わが手紙の短きよりも老母は妻の書けるを喜ぶらしき

中 島 重 龍

山峽の朝明あさけまされり湯檜ゆの曾川そがは下手しもてをひろみたぎちゆきつつ

中 島 且 成

ほのぼのと風ぎし夜明の空の色山の端はに白く月も薄れぬ

先生の生れ給ひし家が見ゆ陽が當りゐる高き白壁(白秋先生)

夕映の障子に映うつる木の影もなにかひそかに秋ふかみたる

中 島 海 鷗

何人とも議論はすなと云ひやりし甥の歸りの今日は待たるる

中 島 梢 雲

峠道は下りとなりて久しけれ夏山の峽に村見えそめつ(澄川山峽)

汽車を降りて見ゆる山嶺やまねに霧白し朝鐘つくは大淨院か(津和野驛)

朝の日は山の上よりさしそめて鮑はなの遊げる水澄みて見ゆ(長門峽)

中 島 皋 二

枕べの水しるけくいき立ちて解くる夕べにいのち終りぬ(吾子急逝)

ひさびさに川瀬の音はしたしけれ碓氷へかかる道のほとりに(碓氷峠)

山萱の枯れ伏すなかに鈴蘭のひとむらがりにはほひ立ち居る

中嶋 喜美恵

しろじろと風に光りて行くバスのやがて小さく山をまはりぬ  
落ち散れる松の落葉のそこはかとにほひて晝の山しづかなる

中嶋 又喜

向山に草を食みゐる親子馬涼しかるらし草なびく見ゆ

中嶋 醇子

病床にて

かにかくに保ち堪へたる靜心體カ温表ルの波も今は風ぎつつ  
政變の號外の鈴しきりなる世の隅に我病みてかそけし

中 舍 清 二

山川にむかふ時さへおちつかずこの職工をあはれとおもへ

中 砂 寛 二

鐵の支柱吊りて廻るや操重機制動音の軋る冬空

計算尺スライドルすべり重たき午後三時聯立方程式の根を追跡す

多翼送風機すゑ了りたる夜の靜寂めぐるリズムに耳を凝しつ

うしろ浪にけむり逼ひよる朝のうみ水脈みぎのはたてに彦島は見ゆ

朝靄の霽れて小草をわたる風に颯爽たりG・U高速旅客機

冬の海水平線に白き雲の低くたなびきて壹岐の島見ゆ

移り住みて何か乏しきものあり朝を妻の吐く息白し

中 瀬 喜 信

ガラス戸に昨夜よの暴風雨あらしが吹きつけし柘榴の紅き花瓣のいくつ



この重き曇りは雨となるならん冷たく濕る新聞を閉づ

中曾根 白史

土間の上の巢箱にねむる鶏のみじろぎ見ゆれ夜半のこがらし  
吹き過ぎて遠しとおもふこがらしのしばらくは聞こゆ深夜の底に  
川端の大き鐵鍋に寒明のやはらぐ水を見て通りたり

屋根石の苔青む見ればわが父祖はこの山峽にしづかに住みし

中園 松二

仕事場にこもりくらししてこの夏もわれ青白くおとろへにけり

中園 退助

教會の祈りの鐘の胸に沁む秋の夕となりにけるかも

中田 勝正

おのがじし明るさ占むる竹のなかにふらば消ぬべき雪ふりこみぬ

中田精二郎

立ち罩むるあしたの霧をとよもして清しくもあるか鶴どりのこゑ

中田三郎

春風や港に浮かぶフランコニヤ號の巨大なる船腹の白きふくらみ

中田清次

融通講頼母子講と名のよくて富みたる人にかたよる金か

中田忠夫

どの窗もみんな四角いガラス張り海の遠景へ裸の旗だす

いつまでも沼はむかしの沼なりき鳥かげ陽かげ山のかげなど

もうすでに不幸ではないわが月日骨牌のごとくめぐられてゆけ

世界は今なべて夜なれば嵐ゆく闇のなかなり音のみ聞ゆ

あなたと僕のおひだの雨は透きとほりさらさらシネマのごとくふるなり  
わがかつて獣のごとくひそみゐてみし空のいろ今かはりなし  
齒朶類の白い葉うらにひそみゐた蝶や蜂らをまたおもひだす

春の雪はハンカチのやうにかなしくてちらちら並木にみえかくれする

中 武 茂 八 郎

かすかなるわが明け暮れにたのしみて矮鶏ちやばひとつがひ飼ひそめにけり

中 谷 照 尾

春日野ゆ新薬師寺へそれてゆくくづれ築地の草深小徑(奈良)

中 谷 秀

たたなはる遠山脈とほまほまのいやはてに白くかすみて光る大海

沖遠くひとり泳げばわが妻の濱の夕陽に子等と立てる見ゆ

思ふことありて

常ならぬ世こそつねなれむらぎもの心にしみて散る夕櫻

中 谷 ゆ り

母に似し子は幸ありと母の友はじめの吾にのたまひにけり

中 津 賢 吉

天狗祭てんぐまつりの火が消えはてて月夜なり村落むらのなかばはくろき山影

川の面に浮び來し鶺鴒や大き鮎をくはへなほすと空にぞ放つ(奥荒川鶺鴒)

孟蘭盆を兵舎に居ればちちははのみ靈をろがむことさへもなし(演習召集)

雪霽れて月のぼりたる山峽はくろぐるともの影ばかりなり

中津川 空郎

刈り田より草生にいつかあつまりし蝗のいろもかはりゆくなり

中塚 千里

橋の下に馬洗ひ居れば夕暮の挨拶をして人ゆきにけり

中西 草笛

出勤の我を見送りいつまでも呼びかけ手をふり立てる吾子たち

傳票の整理に疲れ窓にゆけば向うの屋上に氣球が上るところ

中西 爲義

けづり屑削ぎちらしつつ旋盤機は鈍き音して回轉をはじめ(旋盤工場二首)

ぬらぬらと油にぬれてくろがねの大旋盤の動きゆゆしも

忽ちに巨火燃え上るたまゆらは屋根裏の梁があきらかに見ゆ(鍊鐵工場)

黒ぐろと油にまみれ光りたるワイヤーロープの張りのゆゆしさ

灯かけ暗き倉の奥處に据りたる巨き金庫のたしかなる存在

新しき鐵瓶のかなけぬけきらぬを妻は言ひつつ茶を入れにけり。(新婚)

中 西 未 生

志太の温泉ゆに人戀ひゐたりふるさとにわく兒のいのちをはりし頃は

中 西 節 子

そのむかし社會機構をのしりし人しづまりて後のちぞひ添そひに嫁よめきぬ

中 西 稻 影

越中の魚津の浦の青き海寂しけれども見つつ歸らむ

玉島圓通寺良寛堂にて

良寛堂しろき障子に照る冬日見つつ思へば人遠からぬ

中西幾代

射す日光土藏の内の煤深き梁の太木に照り返したり

下田歌子先生御逝去の報に

被風召して笑ます面影眼に動き果てしなくしも見えくるものを

中西はつ子

夜具縫ひて一日くれたり綿のくづ拾ふ夕べを鯛のなく

わが父の割りて積みたる薪まきの上にここだ散りたる楓もみぢば

大正天皇崩御

み民われら一つ心に祈りたる甲斐なき今日となり果てにけり

中西悟堂

たどりゆく喜作新道岩尾根のみぎりひだりの石楠花のはな

信州大河原峠道

あけびの木花を持ちたりほのぼのと山澤水は霧立てながら

上信國境神津牧場

目に白き霧をなほ透き白樺の幹立もとたちしるしつばらつばらに

上信國境八風山

霧うごく落葉か松らばやし葉を透きて小徑の末の谷の水見ゆ

八ツ嶽横嶽

岩山の岩はまがなしとがりつつ重り合へり霧の底ひに

おのがじし霧にかくれて物言はず居るべきに居る岩のあはれさ

榛名山



日ならべて通ふ人なき榛原にい照る日光は寂しきろかも

駿河町附近

黒鶉鳴きしく森を程ちかくこの山みちは馬を通はす

富士須走

赤啄木鳥は首をふりつつ鳴くならむ椏の梢よりその聲きこゆ

中西華

生弓大巖寺

芋畑の露けき徑はるばると鶉の栖む寺を一人見に來し

上總南白龜祭

槍投ぐる支那の童の離れ技哀れと見たり南白龜祭に

中西松琴

道の邊の常山木の花よ命ありて今年も見つれくす師通ひに

すくひ來て爐にしうつせば繩のまま灰生きいきと火を保ちをり

妻戀に鳴き濡らしたる臺の顔見むと思へや戸を洩るる灯に

うちむかふ庭の八ツ手の彌廣葉の急にゆれ立ち雹降るらしも

騒然と降り來し雹かしまらくを八角金盤の上に遊びてゆけり

すくすくと松の新芽の伸びいそぐ庭空にしてけふも雷の音(春雷)

さみしらに鶯鳴けりそののちの峨山を訪へばまだ托鉢に(峨山は天龍寺管長)

城南長岡に行く

菅の根の長岡堤吾がゆけばあから蝗の飛びちれるかも

苔寺西芳寺

やはらかきびろうど苔の踏みごちふみをしみつつ歩むなりけり

青谷にて

片空はいや暗みつつ時雨來むけしきのなかの梅のましろさ

長岡吟行

揚雲雀ひばりは見えね中空のほのにあかるし日のありどころ

丹後城ヶ島 一首

櫻花うつる片瀬の水を浅み舟はをりをり底すり鳴らす

遠じろく藺田にわたりし一羽の鷺二羽とはなれり時うつりたり

水汲みにゆく灯ならしも崖の下あけび垂り花ともしくはゆれ

行雲流水

秋の空はろにあふぎつわが行けば我がゆく方に雲もゆくなり

見上ぐれば見おろすごとく雲もまたてんたんとして野をぞ歩める

中 根 貞 彦

西南の役薩軍の一隊岐れて豊後に入り、六月一日臼杵に迫るや、  
舊藩士等奮然起つて之を拒ぎしが、衆寡敵せず、死する者四十三、  
父も其一人なり。余は其翌年を以つて生る、即郷土にて所謂位  
牌子なり。大正十五年五十回忌法要を營む

位牌子のわれはも父に戀ひつつぞ五十年まつる夏となりにけり

有 馬

夏山の繁しの木末をうちなびけ今朝吹く風のすずしくもあるか

天雲のたゆたふ空にあかねさし山峽の夜はいまだ明けずも

猿柿のまろ葉なつかしをさなどきもちひつつむと山に摘みにし

聞きに來ことむかへし妹に谷川の河鹿は鳴かず妹は來つるに

曼珠沙華ひたくれなるに咲きたればいやさぶしかも故里の野は  
天地の神を乞<sup>こひ</sup>禱<sup>の</sup>みうつたへに押せば動きぬ千引の石も

年來恩顧を蒙りたる井上前藏相突如凶刃に斃る

亡き人を悲しむひとらたづねきてかへりゆかねば家に溢るも

位牌子の吾三歳にして又母を失ひ形見といふもの何一つなかりけるに、昭和九年ふと伯母に宛てたる母の文を得ければ

亡き母の文のなかなる讀み難き文字もよみえたり眞名子ぞわれは

元 旦

いや日けに國の力の伸びまさるゆゆしき御代の春にあへるかも

歸 郷

ちちのみの父のすぐれしはたらきをまねく年經てあふぐたふとさ  
いにしへを語りあへればいにしへの顔にぞかへる老いたる友も

むらぎもの心の底ゆうれしみてひたにしをどる生蕃を愛づ

中野政成

爆發椿事

横しぶく火の粉の痛さ友が手を引けば腕のみ手に引かれきぬ  
手足なき友を抱きてかけにかくそのあとさきに立てる火柱

「後のこと頼む」と言ひて息こゝろきれし友の屍に火はうつりけり

この部屋は女工なりしか赤き帯火にくすぶりて引き出されけり  
この首は誰が首ならむ一人一人きけど答へずそのせつなさに

中野政成

人々のこころづかひに掌てを合せ弟しづかに死をまちてをり(弟の臨終)

中野善二郎

桑摘むと吾子連れて來し山畑に郭公の聲は手にとるごとし

打續く冷害不作のためわが村人は櫛の實(したみ)にて生命を  
つなぎ居る者多し

食ぶるもの食べつくしたる人々のかなしき噂村にひろがる  
雪解の山のくろ土あさりつつけもの如く生きなむ今は  
炭賣りて求めし米のいささかを母は焚きたり子らのためにと  
木の實食み生きてはあれど鳥のごと心あかるくなり得ぬか人は

中野嘉一

牧場事務所の歌

大椎のうつすら黄なる叢花にはや蜂がゐて明るき夜明け  
吹井戸の水溢れをりうす赤き生姜一束浸されてゐて

磯山かげの漁油搾り場は草ぶかく小さい起く重機れんが傾いてゐる

脳水腫の小人の顔面さみしげなり壁に對ひゐてすこし笑ひぬ

人知れぬさみしさを覺ゆ窓に置きし人間の肋骨に日がさしてゐる(解剖室)

中野 近利

立ち掩ふ木肌に苔の着く見れば尾嶺路は北に下りつつをり(善知鳥峠)

頭づの上に雷ひびき來て雲くらき穂高山の方は雨荒るるらし

寝つづけてさみしき母はこの日頃語る用なき人戀ひわたる

中野 二三郎

黒姫ははしき山かも裾長に裾はひきたり青襪なして(黒姫山)

あかときのしばらくの間を晴れにけり遠くかほそき淺間のけぶり(苗場山頂)



中野 久雄

目の前を雲かげ退けば冬の日のひろき日向となりし芝原

中野 順子

霜解けてむらさきにほふ春の泥煙の影が流れつつあり

中野 葭子

夜ふけてまはれる月は蚊帳なかの眠れる母をまともに照らす

夜半さめて團扇をつかふ母みればとほくはかなきもののごとしも

中野 正巳

雪あかりほのけき夜半の甲板に飛沫しぶきに濡れし銃ぬぐふなり(艦上夜勤)

うしろより月出でたればわが艦かんのゆくての水は空にけぶらふ(航海)

雪しろき山をそがひに咲きそろふ遅山櫻枝おそおもげなり(五月の信濃路)

停車場を出づれば遠き交叉路に吹きちらされてゐる雪が見ゆ

木立ふかくかくれし鴨かときたちて落葉ふみくる音のかそけさ(明治神宮内苑)

富士山五合目山小屋にて

呼吸いそぎあらく夜なかの小屋の戸に立ちし人より早く霧吹き入りぬ

中野 信衛

赤松の針葉の先にひびき來て霜晴冴ゆる谷川の水

いく日和つづくぬくみに雪消えて桑の素莖のみづ枝だちつつ

こがらしは孟宗竹を吹きぬけて端山はなまにしろき月をあげたる

大雪に一村こもる静かさの底より藁を叩くおとする

上海事變に

何時にても召集に應ずる準備ありと君が覺悟の眉根のうごき

中野 照雄

冬の樹のたち静かなり青澱の水に映ろふ枝のこまかさ

矢神山

雪降れどただに明るむ落葉松からまつの梢を透きて日の在處ありと見ゆ

百舌鳥もずのこゑ澄み透りくる眼下の谷のまほらを埋めて雪降る

中野 貞夫

紀伊日の御前燈臺行

海よりの夕づく日光ひかりふみにけり御前神社の參道の上に

中畑 信雄

山ぐには子らが仕事に刈りて來し雑木の束の背戸に堆つまるる

中林 文治

護摩壇山は紀和國境に聳ゆる名峯なり 二首

霧白し遙かに點滅するは生駒山航空標識燈ならむそれとしみれば  
陽は入りて山は即ち暮れにけりはたはたと暗く風力計はめぐる

ほめき立つ氷塊の中に生鮎の肌青々し凍み徹りつつ

氷塊に壓おさされつつある生鮎のほのと朱あかさす肉しの張りはや

立ちかへり高氣壓蒸す厄日過ぎ咲き耐へて久し庭の雞頭

中原八重子

雪ふめば音をたてつつなつかしも幼な心に觸るる思ひす

はしけやしあどけなきこと言へる子の瞳になごみゆく心かも

中原佐彌子

出産後發病重態となり遂に離別さる

ひとことのうらみもいはでこのままに去らば弱しと人は嘲けらむ  
病みなれておもふことなし寝つつ見る山の姿はなごやかに今日も

中原 蘭子

宿ちかく山うるし葉の紅葉して家も木むらも燃ゆるかに見ゆ(八甲田山城ヶ倉)  
春潮のうねりゆたけき岸に近く二羽あひつれて泳ぎ來る鷗(樺太にて)

中原 孝雄

若水をわが汲み上ぐる井の底にひびきて水のしたたる音す  
木瓜はけの芽の赤きに降りて今朝の雨しみじみぬくしぬれて歩まむ  
ひとしきり花を散らしてゆれるしが櫻しづもる夕べの庭に  
ごみ捨てに來てしばらくは竹林たけのこに和むなごむ日ざしを親しみてをり

中原 寅一

暮れかかる往還に立ち遠つ田のうすき野焼の煙見て居り

中原 紫 山

うしろから顔よせて來る牛かなし宵月細き山峽の道

酒飲めば神になるらしものほしきおもひはるかになりてうれしき  
鳥けものなになるともこの世にしあらむかぎりを酒は飲むべし  
峽奥の我が家の前を通る人まれにはありて正月らしき

酒の香に十三州もうるほへと頂に立ちわが息吹くなり(鹿野山)  
酔へる足千鳥にふみてひく牛の車は堀の中にうごかず

たちどまる牛を叱れば我が家なりしどけなく我が酔ひてしまひし  
稗拔くと田に立つ妻の頬に映え黄金色なす稻のみのりや  
うづ高き落葉の下にこもりたる地熱はすでに春のにほひす

中原 勇 夫

運轉臺より流れきたりし蜻蛉せみれいの窓にはじかれあまた死にたり(北九州鐵道)

大根の花のまぶしき畑中に雀をねらひ猫のよりゆく

大根の花照りむせる道を來て喉ののどの渴きしきりにおぼゆ

天の原夕陽かぎろひまなしたの香具山暮れぬ畝傍山もいまは(金剛登山)

川なして流るる雨の谿みちに咲きつづきたるげんのしようこの花(山科音羽山)

中原 綾 子

人はみな塔を讚へて地にひそむその礎を思へるは無し

かにかくに命知らずの物好きがもてあそぶなる獅子のたて髪

媚びながらあなどることを許さじと思へる薔薇の美しきとげ

かずかずの抜くべからざる悲しみを礎として築くわが城

先驅者の駒のひづめのころよき響を待てるたましひの耳

理不盡の筈しもとの下もとに黙もだせるもわが名を惜しむ心なるべし

あぢきなき冷たき眼もてかこまれて誰か心の衰へざらん

いまよりはよしや過つ日ありとも罪はみづから負はじとぞ思ふ

おなじ世にあれど見がたき人ありて天の河のみしるき夜半かな

人ごころ山河とともに移りゆくものにしあらば安けからまし(旅三首)

暮れてゆく山に残りの雪ありてあはれと見ゆる里のともしび

わが思ふひとりの人の旅行きて墓場のごとく寂し東京

君が行く汽車のひびきの夜もすがら枕に通ふ心地こそすれ

大君のみ狩の庭に立つときもひとりの人を忘れたまふな

世の人の畏き道は知らねどもこれもまことの一筋の道



おのづから神に通へるものありて私ごともこと遂げにけむ

中平十詩夫

父母の世過ぎの辛さ知らざらむ吾子わがこらよく食ひよく肥りたり

春浅き波うちぎはに流れよるわかめ拾ふとわがぬれにけり(須磨)

中藤幸一

雨だれの立樋たてきにしてなる音のさぶしさをきく不寢番ふしんぱんわれは(兵營生活)

中村三郎

川端に牛と馬とがつながれて牛と馬とが風に吹かるる

若葉かげまだ人馴れぬ牝の山羊のおどおどするを撫でてゐるなり

とほり雨晴れてむれ飛ぶ蜻蛉羽の光も輕しわが窓の邊に

遠つ瀬の音をさやけみ下り鮎あない群れて下るけふのよき日に

裏山に登りて見れば西明寺ゆふべの鐘を撞くところなり

枕してきけば遠きは里川の近きは山のたぎつ瀬の音

牡丹雪しばし明るく降りしきり小學校の鬨の聲きこゆ

米櫃に米が一ぱいつまりゐて升ますの音せぬけふは豊けく

誘 惑 その一

まさしくぞ我身を卷けるただむきのかよわ細手をほどきかねつも

天そそる松にからみて燃ゆる火のうぜんかづら毒ありといふ

しんしんと木々のしづもる眞晝どき女人の肌の匂ひこそすれ

誘 惑 その二

たちばなの木がくりをとめまたまなす泪を惜しめ春たけにけり

あせばみしところに遠く聞くものかさつきの原の大砲の音

阜月野の火薬庫の屋根の避雷針空を刺したりぷらちな光  
火のごとき言葉を私の吐き捨ててそこに悲しきをみなを見たり

病床吟

鏡なす一閑張につむ塵の一つ見え二つ見えあまた見えにけり  
うつそ身の血を吐きしとはおもほえずあまりにすめる秋のあを空  
眼ひらけば空にほのけき雲ありきまた眼ひらけばはやなかりけり  
ながさきの古き港の市人はぜに勘定をせぬものぞ母よ  
心ややつかれて晝はなまぐさきほたるのかごに水くれにけり  
さわやかに流れて来てはひるがへり風にい向ふ蜻蛉みづつの群は  
ぬばたまの夜ふけの山をひそかにもはなれし月は赤くさびをり  
肺の臓破れてここだ血を吐けばうろたへて飲む膠の汁を

麥の畑白菜の畑のそここにいまだ錆びたれ冬木の姿

一日だにいのち延べよと言ふ友の手紙に巻きて金封じたり

磴石もぬれて清けむゆきかひの足駄の音をたのしみきけり

中村 孝 一

顯微鏡のぞき疲れてあぐる眼に厳しく沁みぬ炎天の青

毒藥の粉はかりつつわが神經の冴ゆるおぼえて眞冬なりけり

熱帶魚かそか閃めく玻璃瓶に映りて市街のいろ沈みゐし

中村 耕 三

よき藥世に出づる日もあらむかとはかなき事をたのみて暮す(病床にて)

中村 小 春

寝ねがての秋の長夜に獨り聞く鼠落しに鼠落ちし音

中 村 浩

住みうさを言ひつつも山になれにけり今日も兎を副食そくに食ひたり

父と母と大きい屋敷に住みふりてひと日一日をわび給ひけむ

人病みてけながくなりぬ今朝もかも山越の風に雪降りまじる

山すそのはるばる見えて谷ひろし家群にぎはふ村多く見ゆ

谷の奥に夕づく雲の影見えてしづけき一日暮れにいたれり

山の雪おほかた消えし陽のけぶり夕山ひだのいくつも見ゆる

かたくいてて菜の葉ほろほろ折るるなり六日夜明けて寒に入りたる

壁にあたる日あし著しるくなりてなほ寒し谷はひたすら晴れとほるなり

地に響く音をはるばるに聞きて居りそがひの山に木を落すなり

風の後ひそけさあまるひと時は遠山なりをひたすらに聞く

風の音遠くなりつつ雪と思ふ夕方はやく山あれにけり

雨のたまる音あたたかき夜のくだち顔のほてるにねがたくて居り

陶物すゑもの焼く窯處かまどの煙くゆるなりをりしも渡る山風の音

雪空の曇りて光る火の煙窯場ほのぼの冷えて來にけり

曇りつつ落ちつく空や冷え著し晝早く窯の火を落すなり

午ひる近き相撲場まの賑ひ力士等も見る人の如く人にまじれる

建御名方神の居給ふ御社は山の樹あれて明るかりけり

中 村 公 彦

雪解霽けぶらふ峽をいゆくときつぐみの聲は身にひびきたり

われに似ず勝氣なるゆゑ人しれず泣くいもうとを一夜ひとよおもへり

中 村 青 穂

薬包紙の折鶴一つ枕邊に吾がはし妻の呼吸たえにけり

中村 練 彌

奥入瀬の谿ふかければ天霧らふ雲はときじくに雨をこぼせり

中村 政 雄

堀のなき庭にしあれば大甕をいくつも据ゑて蓮うゑにけり

昨日妻が活けしつぼみの杜若かきつばたひらききりたりひとひのうち

錢湯のかへり道なる妻と子のよき顔色にゆきあひにけり

急カーブ廻る電車の壓力をいちじるく身に感じたるなり

つるみたるままにとまりし赤蜻蛉腹がしづかに息づきてをり

中村 芳 子

朝あらしほのかに桐の香にたてばいはでぞわれのたる思ひなり

思ひ捨てんものと思はじかたくなの心の奥をきはめゆかまし  
わすれてもわれは願はじたまゆらにうつろふものを心とはしる  
とるにたらぬこの感情もある時はわが世をおほふ雲とひろがる  
垣根ごし交はす言葉も教へあるいみじき人を隣りとし住む  
隣り住みて十年の知己にまさるべき人ある世なり何をなげかむ

中 村 憲 吉

關東大震火災

み空かぜ夜に入るかぜは吹きつげど都のたよりもたらす聲なし  
ただならぬ都にかあらむ天あめにかよふ無線電話も言ことかよはなく  
大きみの國のうれひの夜に入れり都のたより遂にきこえず  
みんなみのグアーム島より呼ばしめし海底線も伊豆に斷きれをり



月ヶ瀬

更くるまで雨戸をあけて月にむかふ旅のやどりの軒のしら梅  
月ヶ瀬川瀬音しづみて暗くなるは桃香野へ照りて月移るらむ

燕 岳

朝づく日とほく峯上を照らし來て我がかげふかく谷に落ちむとす  
山のうへはほがらに晴れし朝となり天のはらより風吹ききたる

梅の尾寺

夕づきて川べにたかき梅の尾寺黄葉の谷に靄かかりたる  
こころさへ夕べはむなし梅の尾の黄葉の谷に牛の鳴くこゑ  
梅の尾を高尾へかへる日の暮れは清瀧川の音のさやけさ  
夕かげの紅葉のなかは音のする川ありてそこに靄のなづさふ

阿波の海に潮立ちそめぬ打ちいでて淡路島を見れば磯もしら波  
 紀の海へ潮の落ちゆく刻ならし大毛の島の磯あらふ波  
 磯に出て鳴門を見ればうごきくる青海ばらや白波のとぶ  
 波立ちて鳴門をいづる春しほのひろがりとほき海となりぬる  
 迫門山の小松にさやぐ風出でて潮のながれのはやくなる音  
 鳴門の瀬上の海はひろびろし波立ちて潮の高くながれ來  
 天にひびく渦の鳴門と戀ひしかどただ海なかの川にしありけり  
 淡路の伊賀利山にもひびけやも鳴門の潮のおとの大きさ  
 潮の飛びいよいよ早し阿波の濱や淡路の阿萬も波ぞひびける  
 鳴門より戻りてわたる撫養のうみ潮のながれは北へかはりぬ

山したの迫門せとにきこゆる春潮はるなみの川瀬のごとき音はかなしき

梅林の鶴三首

竹むらより老梅林らうばいりんに吹きこゆる風はさむけれ花の遅るる

梅の園いまだ咲かねば枝がちて木の間はさむし枯芝のいろ

春さむき梅の疎林そりんをゆく鶴のたかくあゆみて枝をくぐらず

春嵐芽吹かぬ山に吹きとよみ遠近とちに樹のきしりゆく音

山峽は若葉しづまれ今年またひとつとところに啼くほととぎす

たまさかに家居いける今日はゆく春の草茶くさちやをのみて靜に居らむ

月よみの圓まどかなる見ればとことにはあめに天にかかりてひとり照るらし

月の出の夜々におくれて照りきたる軒の芭蕉に露しとどなる

稻原いなばらの早稻穂わせにしろく照る月は夜ごとに明あかし山の峽かたにも

小山田を刈るひと見れば時じくの粟をぞひろふ稻のなかより  
川の音は向うにすれど霧ふかく下りし岸田にいね刈りそめし  
朝闌けて峽の稻田は日の照れど川かみの山に霧ぞのこれる  
そこばくの稻刈られゆく田を見れば山よりすぐに鳥下りたつ

しばし五日市に住みて 二首

旅にして今宵住みつく家のうら枯蓮田に時雨降りいづ

夜半すぎてふたたび窓の明るむは月蝕のやみて照りそむるらむ

五月雨は日暮にやみてこの堀の干瀉の尻に水鶏なくなり

海邊にも水鶏のなきて日の暮はあはれなりけり梅雨に入る頃  
音たてて今日もしばしば刈小田に時雨ぞいたるうらの山より  
ふる雨に山へ去ぬらむ夕がらす田ごとの稻城こえ越えてとぶ

しぐれぐも往來ふみれば多幸太の峯のもみぢに松まじりたる

四月十一日齋藤兄見訪 二首

この宵を海に音なく似ノ島に水氣をふふむ月上りけり

あづまよりはるか來給ひし君と居てこの三日間は實にみじかし

逝く春は牡丹に寒し蒼しろくやうやく苞の解けしこのごろ

散るときも牡丹の花は美しき一日のうちに重りて散る

背戸庭は常のゆふべも掃くつちに蟲ぞ鳴くなる鶏頭のした

人ゆかぬ庭のすみより鶏頭の立ちて朽ちしを抜きて捨てしむ

満月は暮るる空より須叟に出てむかひの山を照りてあかるし

中村作太郎

世のこのこちたき時はしら鳥となりて飛びにし人をしぞ思ふ

曉の星のもとなる空の色われさへ消えむこちするかな

中村 其冬

冬かなし魚をあさりて青鷺やけうとく瘦せしうしろかげ見す

冬かなし幾青鷺は涉りつつ寂しき背をば見するなりけり

鷺のこゑ晝なか空に透りくるひろ野の草生枯れ枯れにして

しみいづる水に地層はぬれてをりかなしき心堪へて歩める

中村 正爾

春さむき御料田の遠にしろじろと小學校の肋木が見ゆ

春晝や路に吹かるる新聞紙の光かへして山は閑けさ

朝あけの蚊帳吹きとほす風ありて裸身の我の腹ややに冷ゆ

月の光ふけしづみつつ水のごとし下谷こめて青くけむらふ

河内平野

夏は闌けぬ晝の青田にちかちかと廻る風車が弾く日の光

芝の原おほにかけゆく鶴ふたつひようひようとかろし地を離れつつ

秋篠川

薬師寺へわがまひのぼる晝の野や秋篠川といふをわたりつ

水上競技

スタートの號笛ホツスルすがし夏の夜のブルの面にひようと響きぬ

スタート臺に選手並み立ちしづかなり八百米自由型始まらむとす今

志摩海女

日の光あかるくとほす晝潮のさなかに海女あまは潜りゆきにけり

横須賀郊外

要塞砲を伏せてこもらふ磯山は松さはに植ゑてしみ鳴く松蟬  
岬山の崖の眞上にひとつ在る探照燈は白し晝のしづけさ

神津島

海の風ただち吹きとほす島の宿二階は涼し驟雨ちかづきぬ

夏祭

夕照りの町幅せまく揉みぬきて神輿の渦のなかなか進まぬ

九十九里の濱邊

雨あとの砂丘とほく駈けゆきし馬の足跡のただにひとすぢに

父の墓處一首

枇杷の花しろくこまかく咲きにけりわりなしよ年の暮もちかづきぬ  
み冬づく池の淺處にうちしづむ石龜の甲のいろの寒けさ



水底にしづむ朽葉の上ゆくと龜はひそけし濁りをたてず  
池の面ゆのびて見廻はず龜の子が首根はながし水に濡れつつ  
呀えかへる冬の夜空のちぎれ雲片あかる見れば遅き月の出  
起きいでて冬の夜ふけに呑む水のただちとほりて腹わたに沁む  
雪の原結ひめかぐろき枯桑の列竝つらなみとほくうちけぶりつつ  
午すぎの薄陽とおもふ雪の上に桑の細枝のさしかはす影  
雪の上に映りてながき電柱のむらさきふむ影のさむけさ  
わが部屋のまうへあたりへに唸りをる凧はおそらくわが童このものか  
さびしさは夢の中なる我が習性まのおのづ現實うつと變らぬものを

中 村 要

はずみ持つ尾鰭の曲たわみさと解きて巧みや鯉の眞下向き來る

中村孝助

子のごとく民思ふとの大御歌うたひまつれば涙こぼるる

想ひ見よ安の河原に神々は集ひて自由に語り給へる

三十歳四十歳で恩給とるに七十過ぎても百姓してゐる

中村雅江

ひざの上に立ち上る吾子の足力この頃とみに加はりにけり

中村歌子

味噌糍かづねやや熱もてり小夜更けの室むろにしたしもよ糍の匂ひ

庭先に大釜を据ゑひもすがら味噌豆を焚く昨日も今日も

汗垂りてこころけだるくゐるときに梅賣のこゑ厨くしやにきこゆ

振分けて牛が背負ひくる青草は匂ひたつかも朝けの道に

夕風は疾風はやちとなりて黒松の幹にうちあたる薔薇の蒼

中村葉之介

冬ふかくこもりて命にぶりけむ雲見れど何の愁ななひも湧かず

一月二十五日自殺の前に詠める歌

ここにして何の悔などありぬべき死ににゆく身は我れひとりなる

これの世にかくもかなしきことのはて己が命を今絶たむとす

十年あまり身にまつはりし初枝あはれ汝なが面影をひめて死なむとす

中村辰行

心地よくくさめの出づる朝けかも此頃胸の固かたまるらしき(病みて)

大君の讃へたまひし立山の大きみ姿見れど飽かぬかも

中村美穂

盲生郊外教授

町中は見ると人多ししかすがに盲の子等の手を引き歩めり

東京聾啞學校

もの言へぬ子供にまじりてまりなげつつ遊ぶさ庭に風吹きにけり

東京盲學校

晝すぎてやや暖かし盲どち教室を出でて庭に遊ぶも

彦根盲學校に就職

これの世に命たもちてうらさびし盲の子等にも教ふるも

春の野に盲の子等をつれ來りたんぼぼの花さぐらせにけり

これの世に目の見えぬ子らあつまりて學ぶことどもあはれなるかも

神戸に轉任して

これの世に生れ來てかなしもの言へぬ子等を集めて文字學ばせぬ

聾生の發音教授 一首

日毎日毎に言葉なれくる啞の子等吾が顔見ればもの言ひにけり  
み冬ふけ日の照る庭に啞の子ら繩とびをして遊びるにけり  
南の吹く頃となりやうやくに啞の子供の凍傷癒えぬ

啞の子誤解を受けて警察にひかる 一首

梅雨けぶる道は小暗し啞の子の通譯せむと警察に行くも  
妻と吾がいさかひたれば啞の子等まばたきもせず見てゐたりけり

宮津に軍艦入港 一首

いくさぶね見つつよろこぶ啞の子等手をふりかはし告げあひにけり  
覺えうとき啞の子供等教へつつすべなき時に吾れは笑ひぬ

中村郷二

葉をまきて冬菜はかたくなり  
にけり餘寒のみぞれ音たたき過ぐ  
母が焚く火のいきほひの立ちにけり  
聽きて靜に眠らむとすも

吾病臥久しきに妻また病みて遽に先立たれぬ

この朝の飯のかたきは言はず  
あらむ言はずしあれば涙落ちにけり

中村土筆

刈りほしし稻かたよするいとまなみ  
時雨のあめにぬらしけるかも  
冬枯れの桑の秀はつ枝を吹きゆすり  
夕べは寒し山おろしの風

中村孝草

朝寒の庭の立樹に冬鳥の來あそぶ  
見えて閑かなる部屋(窪田空穂先生宅)  
詩人にてありし人はも時すぎて  
株式記事を書き給ふなり(有本芳水氏に)

浅山の谷間の村に雨はふりひと日きこゆる麥搗きの唄(志摩紀行)

中村 柊花

野に出づれば野は春の風山にすればただに松風の音ばかりなる  
寒けれど春吹く風にこもりゐるゆたけきひびき身にひびくかな  
つくづくひと日は永し松風の聲聞けて山に春日みつれば

眼とちよ常に光に消されゐる命あらはに見えてくる故

寂しさは果しれず身をひたせども心は光るその寂しさに

おきさかる盛りの炭のはなやげるたのしきいろを今朝は見にけり

やはらかくかけたる灰のかげにしておきさかる炭火美しく見ゆ

あはつけくかぎろひおこる炭の火のあかくかがやくいろ澄みにけり

放ちやりし螢はとびて曇り夜の庭木がくれにすがりつつ光る

曇夜の月のあかりのうすうすと青田をひたしむれ鳴く蛙

ひとしきり近間の蛙なき競ひはたとやみぬれば遠田の蛙

眼を瞑<sup>と</sup>ぢて暑さにをれば狂ひ啼くふたつの鳶のこゑみだれ聞ゆ

照りとほる夏のひかりに浮く塵のありともみえず啼く鳶のこゑ

繁りたる竹のはやしの小ぐらきに射しては消ゆる夏の葉もれ日

己れいまはたらくことを疑はずおもしろとおもふ働くことを

くもりなき心さながらに働きて日を送るほかの何かあるべき

霜ふみて入りきし山のひるたけて日向はほそき陽炎<sup>かげろふ</sup>の立つ

榑木の舟長坂すべり岩の鼻越えてなほすべるはるか坂を

突きおとす榑木の舟のすべりよく煙をあげて落ちゆくあはれ

節高きおゆび眺めて田つくりの年経ぬるわれをおもふなりけり



稻の穂むらしぬぎてみのる稗の實のこぼれやすかる秋となりにし  
うす日てる秋野の穂田に置く露のひと日こぼれず夕さりにけり  
くぐまりて草刈るわれのかすけさは何にたぐへむ秋の眞ひる野  
降りやすき長月空のあやふさは草刈るわれを寂しからする  
霜ふくむ小鳥のなく音ほそければ朝は身にしむ山の静けさ

中 村 祐 世

病床にて

朝々の寢覺めの床にせまりゆくわれの命を思ひはかなむ  
苦しみに今日も過ぎたり我いのちまた果しらぬ明日にいむかふ  
ひたすらにいのち生きむと希ふさへむなしきものと今はしりつも

中 村 文 夫

昏れてなほとよもす山の松風にさびしきこころ寄りてゆくなり

病床四年の春

吾が門かどの噴井のほとり春早き水のながれに草生おひむとす

年毎に身に沁むものかさ庭べの木草の茂り臥して見て居り

中村 渥美

厨べの障子に薄日さしてをりこほろぎ一つ笊の菜に鳴く

中村 千代子

年越さむ今日め女童わらべは髪結ひて稚をこなながらに面はゆげなる

中村 十鏡

こもり水草間にひかり揺れるたる胡桃くるみの木下昏れゆきにけり

雲ほそく動かぬ空のさ青さは成層圏も見ゆるがごとし

田の畦をくる人等みな裸足にて牡丹咲く畑のそば通り過ぐ  
刈りをへて稲田にはかに冬づくや奥羽連山に雪見えわたる  
ふるさとにわづかある田のこの年の小作の米もあきらめてをり  
しらみつつ朝はつめたき子の死顔向きかへてやり言ふすべなきを

中村 清一

櫟原いっほらの草の素枯れを踏み來しが晝の籠馬いんどは土になほ鳴く

中村 満洲子

罪ならば罪にも生きむ今にしてあきらめらるるひとにはあらず  
亡き父の表札はまだそのままに女ばかりの住み籠るなる

月明き夜ごろとなれば長病のわが胸に灯のともるおもひす

中村 君子

藍ふかき大輪の朝顔は鉢のまま蚊帳の外より夫つよに見しむる

中村 英 男

朝そばえ接骨木にほとこの實のくれなるのぬるる間も無く霽れゆかむとす(比叡山)

中村 徳 之 助

松葉杖つきて街ゆく吾が姿みにくきものと人見るらむか  
つき減りて短くなりし松葉杖身をかがませて歩めり吾は

地方裁判所より脚部不具の故を以て法定推定家督相續人たる  
ことを廢除する旨の宣告を受く二首

むらぎものこころ亂れを忘れんと背戸の草生を踏みにじりたり  
男なれば聲をしあげて泣かねども心のうちはくやしきろかも  
脇杖に觸れて潰れし蟻一つあはれなるかなその蟻ひとつ  
米倉の傍に置かれし荷車の上に眞白く雪積りたり

衰へて草生を這ひゆく螳螂かまきりのさまをぞ見つる脇杖つゑをとどめて

中村徳重郎

今朝開き露さへおかぬ芭蕉葉のおほにゆれをりこの朝風に  
落ち散れるさいかちの實に音立てて夕木枯は吹き過ぐるかも  
何事のかかはりもなく群山の高きが上を雲流れ行く

道しるべ安永五年若者中と刻みありその若者らを思ひつつ歩む

中村溪月

つつましくより添ひゆけば枯穂ふむしろき足袋さへいつくしきもの

中村利男

青檜に圍まるる中に空地ありてか黒き土に菜を播きにけり

中村利男

行幸もま近になればおのづからはずむところに稻こきいそぐ

鱗粉のきららの光り大揚羽あくこともなく花に吸ひつく

中村源一郎

庭一面の苔のぬれいろみて居たりこころに沁みて淨らかなるもの(京都吾寺)

いにしへの新羅しらぎのみやこ址荒れて土の脹れはおほかたは古墳(朝鮮慶州)

荷をつけて馬ゆく道のみり田の穂波あかるし夕ぐれの風

くれちかき街道を吹くほこり風子をよぶ母のこゑとほりつつ

中村 星湖

外遊吟

アラビヤのアデンの町の裏山の毛無し岩山見れば暑しも

マルセイユ、ノートルダム・の石段のわきに咲きたるコクリコの花  
コクリコの眞紅の色は目に残れまた見るべしや地中海の青  
巴里に來て下宿の部屋をきめる時わが選びしは東向きの部屋  
エツフェルの塔の高きを見つつあれば燕飛ぶなりさ青の空に  
白樺の木立しみに目にうつる南ウラルの六月みんづきの朝  
なが旅のシベリヤの果てにわが見しはふる郷人とかきつばたの花

ふる郷にて

なつかしき峽の雪かなわれ遠く離はなりてこれを見ざる久しき  
ふる郷やふるき軒端に梅さけばありしなごらの父戀しけれ  
子をかばふ狸の顔をかいまみて暫しわがあれば鶯啼くも

中 村 建 仁

いち早く畦を塗りたり並ぶ田の光れる畦は我が田なるかも

中村清五郎

大洲よりあかぎれ薬をもち歸り母に盡しし聖いままなし(中江藤樹先生)  
書院の庭の隈なる大藤のしげりて道を暗くなしたり(藤樹書院)

中村水耕

嚴寒の夜渡船によりて淀川を渡る

船の向きに水騒ぎたりややありて船の一人が鵜ほえにやといふ  
篋に吹きとよもせる風の音この船の上にさむざむきこゆ

川守が葦を焚く火に面よせてまさぐり渡す渡船わたせしの錢を

土手の上に行き逢ひし人さむざむしものにくるまりて提燈とせしさげたる

吉野柏木村の鐘乳洞、不動の岩屋



辛うじて腹這ひゆくやうつし身の腹にこたへて岩の冷たさ  
足もとに氣を配り行けばうなじ打つ雫の冷えは脊を走るなり

中 村 靜 榮

鉢の梅咲きつくしけむ夕やみの座敷の冷えに匂ひ溜れる

ともし灯に水すきとほる秋の夜の金魚は指にしたひよりくる

中 村 廣 香

やうやくに代搔き終へし田の畔に牛追ひあげて煙草くゆらす

中 本 た か 子

獄中の花見

生きのびて獄へ來ればこの春に罪人達と花を見るかな

中 本 立 子

酒造はじまる

ペリカンの嘴にも似たる洗米機圓き筒より米こぼしつ  
酒倉の奥の方より聞え來るもと摺り唄に晝靜かなり

香はしき匂ひの今ぞ身を包む倉にうむいは上りたるかも

中 森 明

うづ高く裾を重ねし山の間汽車入りゆけば雲わき出づる

中 屋 照

和やかに陽ざしあたる縁側に土によごれし蕪菁ほしてあり

中 安 瓚 藏

モーターのどよもせるなかにわれはゐて人間の判斷性をかなしみにけり  
光ゆき音響がよぎる空間に乾ける風が今日も吹きゐる

雑沓のなかのひとりかもつ薔薇の紅はげし眼に離れゆく  
みひらきし瞳孔のおくにぐんぐんとくれなるの花開きつつ来る

中山 哲子

桑の實のうれてこぼるる畑の道くちびるそめて子等のいで来る  
木の間よりほのけき光こぼれ来て山は靜かに星の夜となる(甲武信嶽)

中山 みつ子

忍冬の匂へる部屋につかれたる心よ今は安く眠らむ

中山 後郎

良寛を

わが庵にあをき慈姑くわゐやもやし獨活どくわつ布施物せもつ届く春となりたり  
椶なすの芽や摘みつつ去年こぞも一昨年ごとしも老が名残と思ひたりける

ひと粒もおろそかならず竹の皮に握飯むすびはいたも粘りつきたる  
ここにして打見わたせばおのが住む國上がみの山は低きまろ山  
春霞ひばり鳴く野にころぶせば老が手足も伸ぶらく思ほゆ

菜種咲く畑の細道趨つきし昨日の兒等が呼びつつ來るま

墨染のわが古りごろも國上野がみの兒らがもつれて破れなむとす

草の戸をいたちむじなのぞくともかにかく歸る庵いほはありけり  
暮れはてぬうちに歸らむいほりには宵焚く柴も干して置きたり

中山 枯風

この園や夕くらがりの親しきはふたりに匂ふ沈丁の花

中山 あい子

花か實かいづれ色なき無花果いちじくのわれにも似しと思ひさびしむ

眼に立ちて菊の蓄もふくらみぬ逢ひたき人を待つ夜ごろなり  
庭すみに伸びしささげの蔓一すぢ日もすがらにし風にゆらるる  
しろがねの光を敷きて一なだり海にかたむく穂すすきのをか  
さわやかに吹くは朝風みもすその流に來よる波のこまかさ  
めでたしと人のたたへし黒髪もただに束ねて年ふりにけり  
逢ひまつる日の近づけばおのづからときめく心をとめのごとし  
さりげなきそのみ言葉の端にだにふふみ餘れるみこころを汲む  
思ひうちに満ちてある日は世の常のさいはひごとくに心引かれず

中山 禮 治

皇室博物館の屋根に高く高く人見えて透りくるなり石を鑽る音

息つめて微かにふるふ太刀の尖相寄るとみしがひたと動かず  
勝ちたりとまさしく知りてしかすがに涙溢れてとめどなしいまは

兵士

踏み荒れて寒き埃たつ土の上に兵馳せ來りひたひたと伏しぬ  
うち伏すとただち凍れる土を削り機關銃脚架きやくかしかと据ゑにけり  
肩にくる間なき反動はこらへつつこの銃身に生き物を感じず  
灼熱の機關銃いまは狂ほへる獸物けだもののごとしひしとささふる

二二六事件 二首

疑はずあとべつきくる歩調あしびみのそろひしはまこと寂しかりけむ(その若き將校を)  
雪の上におのづからそろふ靴の音いまは疑はず従ひ行くなり  
夏空に音とどろかす編隊機の雲をはづれんとして一機まづ光る

中山 藤 樹

屋敷木をもるる日光ひかりも暑くなりて土より蟬の子は生なれにけり  
うす霜に畑の秋草うら枯れて土にこまかき實をこぼしたり

中山 闌 秋

天ぎらふ雲のかかれば雨といふ尾鈴の山は日和ひより見る山

中山 三 郎

野にいでて仕事しをればときどきを通る汽車にて時刻をば知る  
くれかかる野に麥を焼く煙見ゆときどき赤きほのほあがりて  
照りつよき田に草とりて上りたる夕べは口の苦くねばつく  
その職の大工つがせず氣樂なる農夫に我をなせし父はも

中山 久 吉

きはだちて直すなるものはうつしよにいつも貧しと人はいふなり

中山 雅吉

あひよればころいつしかきぞの日の夢にしかへるおどろきをする  
寄りがたき白玉のごとおもはれしきみかたはらにありてなげかふ  
月よみの光もむなしわかるると涙あふれて見るものもなく

しみじみと雨降りそそぐかへりみち母まちたまふ家に灯の見ゆ  
眼に見えて霧ながれ入りわが部屋にうづまくなかに立てりけるかも  
病みあがりいまだやせたる父のかほうれしげに笑ふ夜のまとるに  
夕空にうなりさみしき風一つすみきはまりてはるかなるかも

ものかげにきたりて坐るそのかげをまさに見たればころゆらぐを  
夏木立しげりにしげりきみが家しづかなるかなかへりみすれば



とりし手をあだなるひとにまかさむとおもはれねども夢ならなくに  
ともしびのあかるき家をいでてきて今はたへがたく泣きにけるかな  
青野原かへりきたれば白き花さきつらなれり月の下びに

いつかしき夜天にかかる月かげをながめてあればこころ和みぬ  
うつし世にふたたび戀ひじさみしさのきはまりぬともひとを思はじ

中 井 貞 子

あらし近づく草生のやみに生きのこり秋の螢は光放てり

中 井 コ ッ フ

微風だにあらぬみ空に咲き反りておのれゆり居る木蓮の花  
學童は手をふところに入れて居り四月と云ふに山のつめたさ

夜となれば庭の虎杖灯いたどりに青し闇の中より浮きあがりつつ

水槽の硝子のこけをすりのけて清すがしくなれり魚光りつつ

野分のあとさせる日光ひかげのなごやかさ疊かさに散れる木の葉を拾ふ

啼き居ると思ひて聽けば啼きて居る蛸たこの聲のはるかなること

小止みなく降りつむ雪は物の上へに高まり盡きておのれくづるる

さしなみの隣の犬のなく聲のしみつくごとし雪の日の暮

大雪に山の食はむもの埋れけむ柄長いむれて庭に來啼ける

吾孫をいつくしみつつ思ふなり吾子おこははげしく育て來たりし

中井 ともよ

子を連れ飛行機にて東京より大阪へ 一首

眞白にぞ雪をかぶれるアルプスを目の前にして我機かたむく

孫や子を送りて歸る途すがら寂しくなりて吾はいそぎぬ

生おひたちし吾あ子こ等ら六人相寄りて吾をとりまく今日のたのしさ  
我乳房ふふみし子かと思ふまでおほきくなれり見上げて思ふ

中井繁次郎

山の雨いつかふり來ぬ山松の下枝しの揺れをみつつ木をきる  
北空はすこしあかるみ夕ちかしおし靜まれる椿の木立

中尾明義

蟲媒をひたすらたのむ白百合の太き雌蕊めいに憎にく惡をを感ず  
橋脚を低くしづめて夕潮の河幅ひろくおし上りくる(大淀川口)

中尾肇

ひたつちにたまらぬ程に降る雪は馬糞ばふんに白く残りたるかも

中尾忠一

草原に足投げ出して寝ころべり野蟲に頬をあゆませながら

中尾 邦子

つつましく今日をすどして母と子の思ふ事なき夕餉なりけり

中尾 義信

父のみに分る片言子は言ひて吾が枕べに恙問ふかも

おとなしく獨り遊びの吾子あはれ繪を見てゐるも本さかしまに

中岡 綾子

庭にいでて夕顔の花を見つつるしがふと争ひの原因に思ひいたりぬ

祖父のしとねの上に泳へをりし泪はあふれ落ちにけるかも(祖父逝く)

仲川 久之丞

宿<sup>とま</sup>り込みて炭焼くころは晝となく夜となく山に鳴く時鳥<sup>ときとび</sup>

百姓のひまひまに焼きし炭賣りて正月の支度ととのへにけり

門川の井堰に藁の圍ひして冬がまへせし家のしたしさ(高島郡安曇村)

蒼ながら活けし牡丹の咲き出でて三體の位置くるひたりけり

仲川 友民

幼子は夫の抱きて従へるそのひと妻よたぬしかるべし

雪のうへに降りゐたりける雨止みて西の方より光射し來ぬ

仲郷 三郎

新しき年を迎へて思ふことなるもならぬもわれはたのしむ

石楠山めぐる山々の起伏をゆたかに見する春かすみかも

松山を深く入り來て息つけりしめらひ深き新芽の匂ひ

水やりてこころ足らへり對ひ見る鉢の萬年みと青の太き葉の張り  
群山を天に浮かせて朝靄の底にしづけし山形の町は

木 版

彫刀を青砥にのせてゆつたりと朝とき居れば心足り來も

石 山

石山の石しづもりてしぐれ雨ふり濡らしゆく朝を來にけり

赤 穂 行

高取の峠越え來て展けたる潮路の風ぎは冬寂びて見ゆ

昭和五年九月父を白晝葬る

父を焼くけむりは晴れしなかぞらをうす黄に染めてあはれなるかも

双軒庵賣立鑑賞、

下手物のよさを認めし古への人のこころの親しくもあるか

川崎に母を訪ふ 一首

晝すぎの障子明りにちんまりと母は坐りて待ちておはしき  
つねの日はつねのつとめに時過ぎてむなくあれど悔なしわれは

仲田林平

粃を挽く米の脂かなめらかにむしろの上をすべりたりけり  
唄ひつつはげましあひて粃摺のるねむりふせぐ妻と夜更を

長倉智恵雄

大菩薩峠を奥多摩より甲斐に越ゆ

宿驛路影ならびつつランプ賣とわれと立ちゆくこの朝あけを

長坂佐治夫

夏すでに日中は澱む若葉照りうらがなしかも遠き潮の香

ひる磯の砂に照り充つ日を見ればすべなき思ひ絶ちがたく居り

長崎津矢子

秩父嶺に雪消ゆのこるときくさへに旅ゆく夫つよをおもひ暮しつ

濱裏の池はにごりて群立てる藺草あひが間に鯉こいの子よりぬ

さまざまに葉櫻の影ゆらぎぬし亞鉛とたんの塀へいに夕日衰ふ

長澤美津

この夏の折々の汗しみにけむ針さしの針みなさびてあり

長澤巖

落葉木はここにとぎれて雪かづく火打嶽見ゆ妙高も見ゆ

落葉木の森に粗朶切り父とわが呼び合ふ聲は溪にこだます



とりいれも半ば終れりはだ寒き今朝國境は三度目の雪

長澤 勉 男

曉近きこの高山の偃松はひまろの秀明はあかりしろく雨降りしきる

見のかぎり山なる國や靄ひろく沈むひくどに人は住むらし

長嶋 實

待ちわびて出づれば月の光澄めり人影もなき驛前廣場

事ありて人を憎む

これの世に生くる限りは憎しみの心の總て汝れにかくべし  
あきらめの心抑へてうつそ身の果てむ日迄は憎まむとする  
十一月八日となればしかすがに憎しみの心切なかりけり

長瀬 耿

久しぶりに街をはなれて

わが汽車へ遠く手をふる兒ら居りて窓一ぱいに麥のいろ青し

長 田 竹 雄

梅雨晴れて庭木のそよぎこころよし夕べ明るき鷹取山見ゆ

長 田 幹 彦

斑鳩いかるがの丹塗の寺は晝しづか菜の花の黄に紫の山

宗達が胡粉の寂びを描きたる鴛鴦そしどりよりぞ夜は寒みゆく

砂山は風に暮れたり無電所のアンテナ悲し雲を截る音

幻の十方世界はろばろとただ果てもなし冬の夜の月

落ち髪の毛にしみじみと怨まるる茶の花白き夕月夜かな

鳴の聲笠に落葉のささやけば木曾の山々雪白くみゆ

無動寺の谷のしじまに雲湧きてかそけくゆらぐ法の燈  
亡き母の白き指をば思ふかな火鉢の縁に冴ゆる寒けさ  
紫陽花や安居あんじょにのぼる尼僧等の白き帽子ぼうしに大鐘鳴るも  
鞠唄まげうたに雪すこし降り娘らのもの言はぬ顔たそがれにけり

長田良太郎

夕照りのおとろへてゆく光りのなか櫻は赤く嫩葉もちたり  
萩もはや見るに遅れぬかみな月洞雲山に登り來ぬれば

長竹五秋

天あめの戸ゆ立ち來る春は蒼雲あそくもに光どよもし浮きただよへり  
春立つと天あめの日渡るみんなみの國はろかなる空ゆ來らしも

長塚節

蒼雲のそぐへを見れば立ち渡る春はまどかにいや遙かなり

小夜深よふけにさきて散るとふ稗草ひそのひそやかにして秋さりぬらむ

植草つゑくさののこぎり草くさの茂り葉のいやこまやかに渡る秋かも

目にも見えずわたらふ秋は栗の木くりのなりたる毬いけのつばらつばらに

外とに立てば衣えうるほふうべしこそ夜空は水の滴こるが如ごと

芋いもがらを壁かべに吊つせば秋の日のかげり又さしこまやかに射す

こほろぎははかなき蟲むしか柸ひびのはなが散りても驚おどきぬべし

紅べにの二十日にじゅうにち大根だいこんは綿わたのごとなかむなにして秋行かむとす

濃霧の歌

群山の尾おぬれに秀ひでし相馬嶺さうまのねゆいつ湧わきいでし天あまつ霧きりかも

ゆゆしくも見ゆる霧きりかも倒たふに相馬さうまが嶽たけゆ揺りおろし來ぬ

ひさかたの天あまつ狹霧さびりを吐き落す相馬が嶽は恐ろしく見ゆ  
おもしろき天つ霧かも東の間に山の尾ぬれを大和田にせり  
秋草のにほへる野邊をみなそこと天つ狹霧はおり沈めたり

乗鞍岳を憶ふ

落葉松からまつの溪に鷓鴣もず鳴く淺山ゆ見し乗鞍は天あまにはるかなりき  
鷓のこゑ透りてひびく秋の空にとがりて白き乗鞍を見し  
我が攀ぢし草の低山木を絶えて乗鞍岳をつばらかにせり  
乗鞍はさやけく白しにどりたるなべてが空に只一つのみ

病中雜詠

生きも死にも天あまのまにまにと平らけく思ひたりしは常の時なりき  
かくのみに心はいたく思へれや目ざめて見れば汗あえにけり

我が病いえなばうれし癒えて去なばいづべの方にあが人を待たむ  
ゆくりなく拗切りてみつる蠶豆の青臭くして懐しきかも

鏡の如く

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり  
曳き入れて栗毛繫げどわかぬまで櫟林はいろづきにけり  
薬壘さがしもてれば行く春のしどろに草の花活けにけり  
窓の外は薨ばかりのわびしきに苦菜ほうけて春行かむとす  
梧桐の夏をすがしみをりをりは疊の上にねまく欲りすも  
ひたすらに病癒えなとおもへども悲しきときは飯減りにけり  
すこやかにありける人は心強し病みつつあれば我は泣きけり  
垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

厨くなるながしのもとに二つ居て蛙かはづ鳴く夜を蚊帳釣りにけり

いくたびか雨にもいでて毒つむ母がおよびは爪つそ紅べにをせり

草いちご洗ひもてれば紅解けて皿の底には水たまりけり

脱ぎすてて臀しりのあたりがふくだみしちぢみの單衣ひとへひとり疊みぬ

ちまたには蚤とり粉など賣りありく淺夜をはやく蚊帳吊らせけり

低く吊る蚊帳のつり手の二隅ふたすみは我がつりかへぬよひよひ毎に

ただ一つ松の木この間に白きものわれを涼しと膝抱き居り

松かげの蚊帳釣草つりぐさにころぶしていささか痒き足のばしけり

水打てば青鬼灯あそははの袋にもしたたりぬらむたそがれにけり

朝まだき涼しき程の朝顔は藍など濃くてあれなとぞおもふ

松の木の疎らこぼるる暑き日に草みな硬く秋づきにけり

白銀しろがねの鍬くわ打つごととききりぎりす幾いく夜よはへなば涼すずしかるらむ

霧島は馬の蹄にたててゆく埃あしのなかに遠とほぞきにけり

松の葉を吹き込むかぜの涼すずしきに咽なげびてわれはさめにけらしも

とこしへに慰なぐさもる人もあらなくに枕まくらに潮のおらぶ夜は憂うれし

蝕むじばみてほほづき赤き草むらに朝は嗽うがひの水すてにけり

此のごろは淺あさ蜩り淺あさ蜩りと呼ぶ聲もすずしく朝の嗽うがひせりけり

天霧あまぎりらふ吹田すゐ茨木いば雨しぶき津の國遠く暮れにけるかも

播磨はりま野は朝あしたすがしき朝霧の松のうへなる白鷺しろさぎの城

長野 勝 廣

癩を病みて

櫻花咲きて散りぬと人の言へ互えかへる日のうち續くなり



紫雲英花香の愛しさにありありと盲の我は春を思へり

久々に雀の聲を聞きとめて手探れば窓の明け放ちあり

長野 英樹

青樹の實色づく見れば故郷の山に係蹄掛けし頃想ひいづ

長野 眞知子

紅かなめめぐらす家並出はづれて目にさやかなり大根の花

木々てらす光鋭し身をめぐる五月のいぶき我を疲れしむ

長野 芳江

亡き父がいつも坐りぬし膳の位置を眺めてあれば涙ながれきぬ

このまひる門前に佇ちてうら寂し弟名前の表札も古びぬ

冬枯れし丘に立つ白きアパートより夕ひとときを人等出できつ

枯れ枯れし丘のへになほ日のありて暫し人等の去らずかあらむ  
わがためと摘みきて母があらひたまふ**藪**草とくしるくにほひくるかな  
弱き身をただ**勞**りてこの幾とせをみないたはのわざにもうとく過ぎにき

長 光 起

三月の雪は積らず向う鳥の白き建物に夕陽さしをり

長 山 藤 二

夜更けて桑かけ急ぐ隣家の灯はあかあかと我庭に照る

長 和 義 雄

病むわれに逆ふこともなき父は多くの子らを亡なくなしにけり  
眠り薬效きしはしばし暗がりに眼の覺めたるは何か果敢なき

長 井 亭 二

産業道路春の陽ざしのかざろひてわだちのあとの黒く光れる

長井宮造

雪深き高山肌に夕日射しあらあらしくぞ見えにけるかも

長尾千紙

澤の田に咲けるあやめは花ながら田の下肥したどえにふみ込まれけり

馬小舎の軒の乾菜を雪風の揉みあふる音の寒き日の暮れ

天てんまどの雪かきたれば今宵しも月さしにけり水がめの上へに

長尾圖南

朝のつゆいまだ乾かぬ山かげの落葉の上の栗のつぶら實

長尾定正

苗代に種まき終へて靜心今宵うからと焼米を祝はぐ

朝山は露しとどなり作業衣の腰まで濡れて草刈る我は

長岡 外史

久かたの天つ星をも大君のみいつのもとにおくときは來し(飛行機)

長岡 とみ子

ぬりたての壁にかきたる吾子が文字のびやかなれや叱りかねつも  
壁一重へだてて聞けば吾子が聲二人かたみによく似たりけり  
啼くときは他目よそめいとはず聲あげてひたすらに啼く吾子のかなしも  
歩みそめし吾子に靴をばはかせけり足さだまらず我にそひくる

長男死す二首

死亡室兒がなきがらを運び入れ冷たき床に一人坐りぬ

半眼の兒が死顔よ見つむれば瞬くごとし燈火のもと

抱きてやれば今も喜べ兒が脊丈はやわが肩に届かんとする

歸郷

白髮の舅姑すこやけくゐろりかこみて火を焚き給ふ

亡母

いえまさぬみ病なりと知らざりし苦き藥を強ひまつりけり

永石三男

菓子を蒸す湯氣よ眠むたし春の日は職場の窓もち曇りつつ(生業)

照れば鳴き曇ればひそむ松蟬の鳴きそろふときし山は閑ひそけし

晝すぎの光寂しき山の上鴉の聲のくわうとひびきぬ

時雨降る窓より見えて明るけれ海の向うの陽の當る山

窓あけて寒くはあらぬこの夕べ刈田はひろく靄にしづみぬ

春近し港内監視所の時計塔塗りかへられて白く空に立つ  
港内監視所の時計は午前十時なり空青く晴れて群れ翔ぶ鷗  
航空母艦加賀巨大なり船體の向うゆく汽船いまだ出で來ず

筑後柳河町

屋根の上に草の生まひたる閑しづけさもうたがはず住めりここの村人  
立花邸春蟬のこゑ閑かなり陽の照る川をへだててきこゆ  
糊ごはき浴衣涼しく身に着けて夏淺き夜の蚊帳に入るなり

梅雨の頃 五首

夕はいま暑きさかりなりしみじみと陽に照りてゐる向日葵の花  
白雲莊池にあふるる水の音とのとよとよと澄みて良き月夜なり  
夏祭の夜空をすぐる通り雨花火は散りて雨に映りぬ

時のゆき寂しくもあるか砂濱の日向を歩む我が小さき影

普請すと夕照る屋根に上りたりかなかなの聲の遠く寂しき

あわただしきこの大都市のこの下に更に人のゐる地下街を思ふ（大阪）

肥前有田町附近

この丘の夕風寒しすすき穂のなびけば見ゆる牟田六兵衛の墓

星明り寒きこの夜を白じろと陶器干したるそちこちの屋根

晝はいま闌けてかがやく村の道麥打の聲のほうほうと遠し

冬の歌

手洗の水舐むる猫の舌の音たちて止みたりこの寒の夜を

日野街道の寒き曇りや間をおきて遠田にあがる鍬の刃の光り

大工小舎の朝の凜こむさよひゆうと削りまたひゆうと削る鉋のひびき

街の上の冬空うすく明りしが陽は洩れずして暮れてしまひぬ  
吹き降りの嵐きこゆる夜の部屋にみ佛の灯の赤くしづけさ  
ふたたびはかへらぬ今の現まつなり日向に曳ける君とわが影

婚約成る

張りかへて障子は白しこの部屋に匂ひ鮮あたらしく來る妻を想ふ

永海 眞規 夫

ひとすぢに瀬響せなさやけしここになりして細溪川のきはまりにけり

永澤 實 則

月の夜の山を登れば遙にも鰯釣すゐめる舟海の上に黒し

永島 榮 子

ひたぶるの思郷の心極まりて琉球女りゅうまわれのまなこ熱きを



五欲失せしふりのおだしさ古き世の翁が舞や袖もたゆたに(琉球老人躰)

永瀬 翠明

もろ枝に雪をささへて神山の杉の大樹のしづもりぞよき

山の背にこもりひびかふ松籟の日ねもすなれや寒極まりぬ

梅雨ぐもり動くともなし野茨の花はあかるく切崖の上に

道の邊の蕎麥のこぼれ實花つけて鬱々と梅雨のくもり深しも

梅雨ぐもり雨となりたり下宿屋の早き夕餉を汗たらし食ふ

うつそみの深きなげきの極まれば朝蟬のこゑは沁みて寂しく

下枝よりもみづる櫛のくれなるの融けて寒けき朝川の色

永瀬 英一

庭の木にさす日は今日も曇りつつしろじろと柿の花ざかりなり

朝空にうごかぬ雲のひかりさへとみに明るく春たちにけり  
やまざくら咲くほどの花はみな咲きて曇り日の山は明るかりけり  
雨となる野の明るさや晝ながら蛙のこゑは啼き揃ひたり

永 田 英 子

秋になればわれを伴なひ東北の旅に出でむと地圖ひろげ給ふ

永 田 稔

大西洋を南下し、ブラジルに移住地建設の準備をなす

海の上にもろく大きな朝虹の間に見ゆるブラジルの岡

数年を経て新移住地アリアンサを訪ぬ

これの世に未だあらざるうまし國を建てようかららやまと國人  
やまと人の新墾にびの村つづけかかしアンデスの山アマゾンの邊へに

永田玉樹

病臥三年初めて起立す

よろめきつ今し立ちたる吾を抱き支へましつ泣き給ふ母

昭和十一年二月二十六日

夜<sub>レ</sub>をおそく歸りて街のさま告ぐる父は帽子の雪を拂はず

永田憲一

雲の上に影を落して天<sub>あま</sub>ゆくやわがものとしばし大空をしつ(機上詠)

永田寛定

桃山御陵參拜

明治のおほき帝のみささぎに雨かかるをば見つつぬかづく

南米より歐羅巴に渡る

赤道を越えかへせどもわが船は日本に行かず月夜々あかし

イスパニヤのジプシイ族はヒターノと呼ばれて各地に別部落  
を作り犬豚と共に穴居す

蜜柑樹ナランホの花かをり散る山畑に遊べるがかなしヒターノの子ら

永田 視紀子

忙ぜはしなく味噌の仕込みに終りたり日の暮さむく風のいできつ

焼米のふるまひ受けぬややおそき筍掘りて持たせかへすも

牛ぐるま一つひつそりおかれたり月夜あかりの村の家の庭

永田 巖松

逃げまはりし吾子おこ背戸のべに追ひつめられ母の手拭に顔拭かれゐる

永田 露子

弟の病久し

女子のわれは悲しもすこやけき身も父母の頼りとならず

永田英子

故郷より両親たづねたまふ

子が家に寝たまふ父の高いびき夫と笑ましく聞きつつ居るも

永田九萬三

湘南に病を養ひつつ

嘗ての同僚の名の幾つか載せられし學會演題の通知來たりぬ

永田忠雄

おらんだびとぼるとがるびとの通ひけむ出島の宵の石疊道をわれ(長崎の印象)

永田茂

時じくの雷はためけり柚子の葉の硬きにあたる雹のおとかも

掃立てしばかりの毛蠶けとがひたぶるに桑はみければいのち思ほゆ  
かざおもて啼き澁る蟬のむきむきに聞きわけられてよき日和かも  
法師蟬ひとつまぎれぬ聲きけば夏も終りとなりにけるかも

おもむろに屋根よしづるる雪のおとひとり目醒めて聞くはひそけし  
うば玉の闇夜ながらに降り積る雪の深さはひとり思はむ  
をちかたの山にうするる日のひかり夕さる頃を田草かきつつ  
腰あげてふたたたびは見つかぎろひの夕さりきたる青葉山なみ

永 戸 繁 夫

明け方のふるさとの家寂かにて門邊に甘き栗の花匂ふ

永 戸 秀

夕立すぎ小石の出でし道端に野菜積まれて夜市始まる

永野 晴 耕

海波のとどろによるやこの街の家並やなみひそけく霧のただよふ(大原海岸)  
砲の音今日もおもおもひびき居り日すがら低き冬しぐれ空

永野 光子

紙箱に子らが入れたるこほろぎは夜更けて部屋のすみになきいづ  
かかへ來し柴にまじれる松が枝はまだなまなましく葉に重みあり  
湯氣たちて荒磯にそそぐ湯のながれしろくにごりて潮とわかる(白濱温泉)

永原 いね子

移り住みて寂しけれども朝々の空の蒼さをひたすらに見む  
北大營の赤土原に照る日光ひかり夕さむくして物思はしむ

黄塵は空によどめり自動車くるまより見るたそがれの小さき街の灯

病弱のため職を辭す 一首

永松 絹枝

鍋の中に豆はふつつ煮ゆれども別れし子等はわすれかねつる  
もみほしも吾が日課ぞとひろ庭によせて又ほす秋晴今日を

永見 玖磨

眞夜中を行きとどまらぬ歩みなり馬蹄ひづめにかけし石は火華す(行軍)  
わが耳をいまは疑はず渡津海わたつみの最中もなかにありて啼き澄む雲雀

永山 壽美

母が焚く松の枯葉の香にたちて家居ひそけき山の朝あけ

永井 隆

鐵條網破壊信號を待ち壕がらに伏す吾をめぐりて雪つもるおと



騎兵集團のあげゆきし砂塵しづまりし野のうへ遠く夕づきにけり

桑の間の雪に残れる足痕は菜を食ひに來し兎なるべし

岬山をめぐればみゆる香燒かつやき島菜じまの花咲けり海の際きはまで

杉村の中にかよへる瀧路の落葉は露に濡れて音せず

永井京子

秋晴れの今日を客なしリーグ戦の放送ききつつ髪すきてをり

しめきりし部屋一めんにかき餅の干して間なきがあまく匂へり

永井哉

試験管の冷たさに觸れつつ父上ののらせし縁談に思ひは行くも(實習)

安らかに家兎の鼓動は續くなりメスを當てむと吾れは思ふに

手も足も動かずとても母上が生きおはさばとことごとに思ふ

永井ふさ子

冬枯るる園ににほひし紅べに合あ歡むをわがひとりなる袂たもとに入れぬ

一ひとく劃くわとほりて來れば熟うみおちし棋くわ檯たいは草くさのなかににほひす(植物園)

冷やびやと曉あかとに水を呑みにしが心徹りて君に寄りなむ

深谿ふかきに幾つ激ちのあふ音は寄りどころなく吾に聞こゆる。

永井久子

故もなく双手に持ちし石二つ打ちあはせつつ音をさびしむ

永井才次

どの山にも雪積みたれど殊に目立ちて雪白ゆきしろき山は韓かん國こくヶ岳たけ

永井静夫

まなかひの疎林そりんに秋の陽はのびて馬曳うまひききて人の下りゆく見ゆ

永井亮惟

さ程にも生活たつきやすしとおもはれぬ家より笑ふ聲おこり來ぬ(途上)

永井正司

水底みなそこの青藻のゆらぎ見ゆるまであかるく澄める秋の川かも

水井月草路

薄氷うすこほり張りし門田に照りたまる月の光のひびくがごとし

永井定一

この照らす日月の下に今はしもあらぬ生命となりし君かも(友の死)

灘中卓治

右向きに魚をゑがきて送り來し吾兒わがこのひだりききはなほらぬらしき

灘尾研

濤ナギの音時に聞えて暖き庭はまばらに松の葉落ちぬ(暹子にて)

夏目 公孫樹舎

長濱に寒明けの雨降りつぎて濁れる波の崩るるが見ゆ

直 木 裕 二

大學に學び居りたる頃思へば心怖れず我がふるまひき

雪解水つめたく浸める靴をはき明日ひと日なる旅をつづくる

雪深き野を歩み來て篋の幹の青さはひびくかと思ふ

直 塚 淳

神饌田田植

畦きりてすなはち水を引きにけり明日は植ゑなむこの水田に

畦きればひたに流れ入る山水の冷たさは徹るわが双脚に

三瀬山に遊ぶ

いただきの竹叢の秀はさゆらぎてなだり明るき秋の草山

佐世保軍港所見

うちよせて光れる波はくろぐろし重油の匂ひ漂ひにけり  
秋の日のひかり波間に澄み透り泳ぐ魚の背あざやかに見ゆ

肥前武雄圓應寺 一首

かけひの水さらさら落ちて晝深し案内する老僧の強き足どり  
櫛の實をついばみ止めて高枝の一羽の小禽せび嘴ぬぐひ居り  
樓門の藁の上にはたらける人の姿は空に浮きて見ゆ

退 職

學校に行く子等を見れば職やめてこもれる朝はややに寂しき

ききわけて父と居る子に咲き残る朝顔の花摘みてやるかも

直本晴有

賣りだめの錢をかぞふる老母やたたみに近く顔を寄せつつ

奥津城の大き墓石に祖々は富み足りしあとをとどめ給へり(展墓)

生江芳泉

水漬田の水の面に残る夕明りおとろへゆくは幽けかりけり(かそ)

隣部屋の夜更けて疊掃く音のねもごろなるに聞き親しみぬ

野の面を吹き渡りくる風の香にかそかなれども野火の匂ひす

朝日光疊にふかくさし入りてわが磨る墨のよく匂ふなり(あさひか)

うづ潮の暗くなりたる沖つべに卷垂りて低き夕雲のいろ

並木秋人

夜は深し勿忘草の空いろのしたたるばかりねたましきかも

さゆらぐは野百合の花か西日さす片山蔭に吾は疲れをり

庭木瓜のなごりの花に聲あるは脚長蜂の巢所オビ選みか（目黒驪山莊）

壁にかけし草刈鎌の切味のよろしからんとおもひつつ眠る（歸省）

岩山のくえどの草藪のあけび蔓花どきすぎてたくましきかも（木曾行脚）

春も彼岸に近き野山の色だちを薄肥ウツひきて父おはすらむ（望郷）

並木 功 夫

木の芽風あかるき朝や窓よ見るみなとは解氷つぐる旗立つ

南風強き海沿村や軍鶏二つ破れ垣の邊に逆毛たてをり

並木 午 吉

おとなしくむすびと水を貰ふ群二列にうごく秋風のなか

並木 茂樹

あかつきの雲白々と近く飛ぶ木立のもとに草たばねおく  
うら戸より涼しき風の吹き来ればぬれ桑の葉をほし擴げたり  
冬ながら暖かき夜は門の田の靄を照らして月傾ぶきぬ

並木 治郎

重湯の中に飯粒すこし浮び居り久々に見るこれの飯粒  
張合なき妻の返辭に話すことふと止めて夕刊に瞳めを落し居り

並木 凡平

裏庭の若葉にそそぐやはらかな日ぐれの雨にひとり酒酌む  
別荘の人斬り騒ぎを兒までいふ冬はけはしい空の色まで



貫ひ湯の曇り硝子に日まはりのかすかにゆれてうつる月明

並原 欣人

小さき足の足音すぐる氣配だに聞くは寒さの身にひびくなり

妻妾を一つ家に寝かす男ありて指を噛まれし縋帯を見す

南角 清

襖ごし我が名を呼びて足どりのおぼつかなくもにぐる幼児

南條 逸夫

いたづらに心せかれてよみ終へぬふみをしまひて更衣室を出づ

南原 繁

春とおもふ陽はやはらかに射しゐつつ時雨ふり來ぬ小松が上に

わが<sup>つ</sup>點けし火のほの中に燃ゆるもの<sup>ひとよ</sup>一生と契りし妻のいのちはや(妻死す)

南部友也

白髪ぬくと頭まさぐる吾兒が指こそばゆけれど堪へ居り父は  
筍を吾がほる藪に妻も來て山椒の芽をつみつみ話す

南部松若丸

ガラス戸にのぼりし蛙腹みせて雨ひやびやし七日つづける  
擬寶珠の瑞葉ひろごる日はぬくし地蜂もいでてしづかなる庭  
海に出て見る浦山のふか緑ひびかふ蟬のこゑしづかなり

病床閑吟二首

夕まけて霽れあがりたる空ひろしひとむら雲にのこり陽にほふ  
起き直る目につきてあはれ臥し趾の蒲團のくぼみに菓子こぼれゐつ  
荒草のした土に徹る日のひかりおのづから至る秋のしづけさ

今日の日も吹き暮るるならむ枕べの障子にうつる淡き木のかげ  
心こほしく落葉の岡を來にければ冬日のあたる池あらはなり

被服廠趾慰靈堂前にて

この原にうち重りて焼けにけむ人おそれつつ土を踏みたり

故郷の家に歸る

怠りの悔いおほくして年は經ぬ老いらくの父に告げがたきかも  
庭石に照れる冬日やたらちねはこの静けさに老いましにけり

金澤文庫遊行

思ひみる代の興亡はさもあらばあれ谷戸の穗波に照れる日しづか

小机城趾

善き悪しき事に關らず興亡は勢といふことの何ぞあはれなる

南部多摩吉

かたまりて咲きたる赤のつつじには近づきがたきするどさのあり

梅雨空に風吹き出でて若竹の葉末の露を地にふり落す

遠いゆく子を見送りに來し驛の大き時計に時間を合はす

何氣なく言ひ放ちたる言の葉にいとしき妻をさびしがらせぬ

からだ弱く生なまれ來しわれは控へ目にこの世の中を生くべかりけり

行川物外

一人居のさびしき日かな庭に見る八ツ手の花と黒猫の瞳と

滑川豊次

斷ちがたき心

遠ざかる希ひはもとな言ひおこすままたに返しの文も書きつつ

ひとりの親しき友にすぎずと自らに言ひきかせゐて慰めがたし  
遠びとに寄する情こころもありなれてときに紛るるは寂しかりけり

箱根ホテルにて

湖うみにむくグリルの窓は開きてあり注ぎしビールの靜かに泡だつ

檜 崎 正 男

自轉車に荷物を積みて朝出づ妻ありし日とかはることなし

夜時雨にぬれて荷物を持ちかへりぬ明日は注文をすべて納めむ

家にして聞けばひそけき夜半時雨ぬれしマントを柱に吊るす

山道に佇たちいこふとき後れても來るかと思ふ世に亡きものを

陽のあたる谷にちりゆく櫻花しづかにもあるか佇ちいこひ見つ

まどひゐし心さだまれば朝あ光かりの小竹こたけわたりゐる風のさびしさ

快活に語り食ひ居る人見ればわが妻かなし若くみまかりぬ

青芝のひろき御苑に午ちかき光は照りてはや暑からず

芝苑に瀬をなし光<sup>て</sup>れる水邊には下りたく思ひたりしがいそぎぬ

秋になりてしたしく思ふ夾竹桃の花は梢にすくなくなりつ

成 島 ふ み

大寒に入りて續きし寒さなり遂に二人の子を病ましめぬ

成 田 功

幾日つづきし日和くづれて笹叢の青きを濡らす雨となりたり

暑き日の暮れては庭の繁り葉にしむばかりなる入日の光

國土の北のはて遠き馬市に寄りたる馬ぞ千頭を越ゆ(馬市放送)

成 田 小 五 郎

輕油のほひただよふ倉の中に或る自殺者の心理を思ふ

故里に住みにし頃は母上もうら若くして吾を叱りけり

夜更けてひとり倉庫に入らむとす醋酸アミールの匂ひきびしき

成 田 憲 三

溼へあげし藻草菱草夕照りのほとぼりふくみ夜徑にほふ

鱈安し鱈安しとふおらび聲雪ふれる宵にきくはわびしき(冬)

太くたくましきわだち二すぢ兵器廠の門内にぢかに續けり

しきりにも軍用自動車街中をとどろき來るにも馴れてうたがはぬ

日の出前の舗道かけ來てかけ過ぎし騎馬一隊のあふりによるめく

滿洲放牧の豚の毛皮や内地の犬猪猿の毛皮を本州北端の弘前  
では大道で商つてゐる。それらは農家の人々にとつて冬期間  
の生活必需品である

秋時化のつづく巷に言あらくけだものの皮は商はれ居り

雪白き門べに焚火もやしつづつ親子らしきが鷄とじを殺ふとせる

成瀬 大味

我が自動車牡鹿半島の峠路の下りゐる雲の上を走りゆく

成宮 悌一

一錢もわが金ならぬこの金にこの執着を持ちて働く

成井 宥憲

鎌倉建長寺僧房に修業中臘八大接心(坐禪修業)の折に

木板もくばんのこだま絶ゆれば寮れう々の燭しよくつぎつぎに消えてゆくなり

丹塚 もりえ

ひらきゆくすたいるぶつくの新らしき匂ひよ秋の朝のこころに

起重機のゆふべしづかな街のはてちひさく美しく富士山が見える



丹羽 俊彦

軍艦は西に和船は帆を巻きて東に走る早鞆の瀬戸

草枯れて寒き色する由布嶽と毛を刈られたる羊の群と

丹羽 安喜子

たよりなき心のごとく夕ぐれの靄にただよふコスモスの花

病中病後

明日の日を言はず昨日をまた追はず病みて祈るは唯に今のみ

いついかに死なんも惜しむ心なし恵まれし世を経たる我れゆゑ

紀南遊記

岩の壁わづかに我れを支へたり一尺まへは荒潮の海

水難の歌

子に逢はで水に死なんは悲しけれ家崩るとも生きてあたまし  
あらはにも月のみ清し津浪來て去りたるのちの破れたる壁  
津浪來てやがて去りつる今宵より秋寒けれど著んものもなし  
わがごとく命のありてあはれにも津浪のあとに芽を立つる薔薇

伊豆遊草 二首

わがつたふ伊豆の山々梅香る谷かげの道日あたりの道

伊豆の春山の香りの暖かしよしや天城に雲閉づるとも

一度は凡てを言ひて泣かまほし薔薇の散るごと身の破るとも

豪 雨

山崩えて心をのくわが前に白きつばなの穂の動くかな

二千尺崩えておちたる山はだににじめる血かと思ゆる夕映

白 樺

山山はいま波となり四方よりよするが如し高原の道  
夕日いま沈まんとしてかがやきぬ霧が峰より尺ほどの上  
なだらかに淺間の煙大空の夕映雲に混りゆくかな  
ふり返る四阿山あつみややまを霧まけば奪はれしほど寂しかりけり

初 秋

秋風や河原の蓬なよらかに月を乗せつつ白くそよげる

山 莊 に て

色づける山の草にも紅葉にも倦みけん鳥の空よりぞ鳴く  
駒草の花凡下には交らはず星のまぢかき高山に咲く  
紫の霧のひまより紅葉見ゆ秋の末なる武庫の頂

丹 生 徹

刈跡に束ね立てたる新藁をしとど濡らして時雨晴れたり

夕陽映つるこの砂濱の藻の上に魚を並べて人数へ居り

丹 生 隆 吉

うすら寒く夕べ昏れにけりおのづから巢につくかみ鶏も相よりにつつ

仁 昌 寺 與 七

新しき世帯道具も何時となく買ひととのへて室の明るさ

二 宮 赤 山

倉のある家居もあれど山谿に生きて貧しき村を見て過ぐ(下呂行)

二 宮 清 子

母が手に抱けば心安らぐか子はさわがしき夜をよく眠る(出水)

階上に物書く夫の舌打の大きく聞ゆ更けにけらしも

二宮 冬鳥

熊本より南ははじめて旅ゆくに松風といふ驛小川といふ村

二宮 碩

大正八年米騒動下獄

君はいい國事犯だから君はいいと若き泥棒が言ひにけるかも

出るまでに日曜が十九へん有ると云ふ七號は同じ初犯の男

西 徳 重

乗りすてし乗合馬車は川べりの松の並木のみちかへりゆく

英彦山より避暑五十餘日にて歸る

かへりきてにはかにさびし下心ひそむおもひのあらはとなりぬ

山海關行

雨雲のはれて蒼める空高し長城線を汽車にてすぐる

長城はここより起り山を越え遠く蒙古の砂漠につづく

防備隊に加はりて一首

掃匪に疲れし晝下り胡麻の花しきりに散れる徑を過ぎたり  
たそがれの靄に包まれ我が向ふ奉天城は地平に低し

西内瀧三郎

朝月は眉よりほそし合歡の花咲ける山路となりけるかな  
秋の日は水にすみいり隈をなし流れ疾ければ其くま崩る

西内三榮

紀の國へ青一線をひき伸のして秋のうしほのみちたらふ海

花もてる京菜をゆでて洗ひつつかなしきことをふと思ひいづ

西 垣 青 穹

堰かれつつ鳴門を出づるひき潮の 一列白き落差の波立ち(鳴門觀潮)

西 垣 靜 芳

池水の濁りに照らふ陽の光り冬寂びて眼にいよよ寒けし

西 角 桂 花

母 逝 く 二 首

葬り路の時雨のあとのしめり土凍みて間なきを踏みつつぞゆく

一月七日夕べ凍てたる土掘らせ埋めまゐらす母のむくろを

移植せる鉢の春蘭莖立のをさなきを眼にとめてすがしむ

野路來れば雜草まじり蓬生のみどり香に立つ雨あたたかし  
若葉山日の射しあかるひと時を耳にあつまる春蟬のこゑ

吉野山一首

竹むらにさやぎしづまらぬ風はあれどこの松山の松はしづけき  
合歡の花揺るる涼しさ見てをれば君が言ふことのひとへにやさし

西川百子

大正七八年のころ 三首

粥に水を増せば足らむといふ如き温情主義に唾して來よ  
友はみな資産階級の靴の紐を解かまく去れり冷笑頬に上る  
食べさせて貰へば不足はいへぬものかと唯一言洩らせし妻のことば  
美しき絲切り齒なり笑むごとにそれが優しくわれを誘ひき



みはるかす湖うみのあなたに君ありと大比叡おほひみにたちて戀ひ渡るかな

同棲十年の妻を喪ふ

亡きあとの蒲團たためばそのしたゆ我れのズボンの敷かれしがいつ

いそいそと十とせのむかし京に來し姿目に見ゆ柩出づといふに

妻よ妻よ夜も日も汝なれを呼ぶ聲はありのすさびにつらかりし聲

あまたたび妻を叱りて妻の身のその生きの身に針はたてしぞ

妻はあはれ泣かせて足らず詫びさせてなほ足らざりしわれを裁かず

亡き妻がわれにと縫ひしこの夜着の綿暖かにいねられずけり

汝を生みし出雲の國へ汝が白骨はねを抱きて歸る日となりにけり(百ヶ日の法要)

ふるさとの姉に贈るとて形見の品をとりいでつつ

亡き妻は桔梗をこのみ衣に染め帯に染めにき桔梗よあはれ

山霧や七十尋のくろがねの鎖ゆゆしく濡れるたりけり

斷崖きりぎしの雪姫草も木もわれも壓し伏せて吹く石槌山いしづちのかぜ

西川 峽 水

境内の若葉を透きてもるる日に銅像の馬の鼻光りをり

村しぐれ過ぎゆきしかば岬山の嶺呂はふたたび夕明りせり

西川 卓

日のかげりはやき峽はさまの山川は涼しき靄を道に吹きあぐ

山の影水田に映り四方明るく田植あがりの村ひそかなり

老いしもの死にたる後は血族の寄り合ふことも稀となるべし

秋づきし陽ざしとおもふ庭松の一葉一葉のこまかき光

西川 義方

供奉鞍馬山行啓歌

茜さす夕日の光きぬがさに後の宮は國見しますも

奉仕大正天皇歌 二首

生きの身の命ささげて我等醫師夜の更ちをとのる仕ふる

とりまつる御脈よわし八百萬神を祈りて注射奉る

生きの身のこの我命堪へまくはあまりに大きなげきなりけり

殯宮祇候歌

もだ深きもがりの宮にみともしの御光白し小夜のくだちを

召したまふ御聲いつか聞かむ白妙のあらきの宮はもだ深うして

ぼんべいの古りにし都風を高み夏の雲落つ我立つ石に  
石に問ふ今我立てるここにしていにしへの戀を躡きやせし

瑞西ミュツレン

鳴神の音に聞きつる少女嶽の氷河を今しまさめにぞ見る

獨逸ケルン市

まうら淋し臘の灯に見る古への暗渠の壁の落書の文字

ワイマールのゲーテ別墅

君が凭りし石の机は七葉樹の木の茂り静けきに微かに光れり

維納市議事堂前

遠つ國びやなの市の濱楸花さく時にわがあひにけり

シエキスピア舊居

君生れし家のせと庭桑の木の大樹の下枝シツネ浅う染めたる

ウオータールー古戰場

旅人われ見つつ久しも風凍るいくさの跡のしるしの石を

瑞典ストツクホルム

帆柱は林のごとし入海の岸に山なす白樺の薪

巴里

藍色のよそひつけたる一隊の兵士にあひぬぼら散る道

水上争覇詠歌

牧野牧野牧野と呼ばふ激勵の聲の嵐を突きてりいどす

西川 仁之進

嶺ねの空は晴れてきらめく星明りここのみにふるしぐれなるらし

渡り鳥枯野の空のこがらしに木の葉のごとく落ちてゆくかな

朝かぜは木草の露をはらひつつ秋たつらしき山の晴れかも

いづくにか月を含める雲明り頬にこそばゆく觸るる雪かも

政黨の分解作用はじまりぬ今朝は涼しき梅雨ばれの空

西川喜久代

闇の中のするどくなりし神経にふれたる影は大きなる猫

西木茂子

麥ごやし甘き匂に日の和み畑の晝げ濟ましたりけり

西澤昱道

夜を深みかたく坐れる膝の冷えうら山渡る風を聴きゐつ

黙ふかき部屋の障子にふるる音さくら落葉と知りてわが居り

庭畑に鳴きてひさしき麥熟らし母の夜業よまべも終へにけらしも（麥熟らしは麥秋の宵を鳴く鳥）

桑野原根刈りせられて村ひろし遠山裾の白壁も見ゆ

西澤 常子

はたはたと布振る如き黍の葉は月の光に蒼白く照る

西澤 麗葉

棕櫚の花こぼるる土の干割れつつ今年も梅雨は降らずもあるか

西島 元甫

鴉來ていと大股に歩をはこぶ原の草地の水たまりかな

何ものか目には見えねど嚴かに裁くものあり神なるやこれ

西島 はつね

はなびらをすでに閉ぢたるしやくやくの色のしづけさ暮れゆく庭に

明日あたり開ききるべきしやくやくのましろき花にふふむ陽の色  
開ききらぬばらの花芯はほのかなるかげをたたみてあくまで白し

保姆のうたへる

われに手をひかるることのさばかりにたのしきものかかくもあらせふ  
子等を率<sup>も</sup>て歸る畦みちうららなり小さき影が地面にもつるる  
うしろより吾をおどろかすと忍びよる子らのけはひに息ひそめをり

西島ゆき子

みんなみの日ざし明るきなだりには麥の芽萌えて寒明け近し

西島喜代之助

國境いや遠にひろに大み旗かがやく御代にあひにけるかも

天の下八十國<sup>そくに</sup>はあれ畏きや日出づる國の御民らわれは



大君は神にしませばみいのちの限りも知らにたのみまつりし  
かかる日のありとあらずときのふまで知らざりし日にあひにけるかも

水雷艇舞鶴進水式 一首

船臺をゆるらにみふねすべるときおもはずわれも手を拍ちにけり

十月の海もせに並べる軍艦の舷腹あらふ波のしづけさ(観艦式)

朝づく日まさごを踏ます玉杵にかさなり落ちぬ緋牡丹の花

日あたりのいそに敷き並なめ魚乾せりうしろの山は雑木のみみぢ

朝風に竿の太竿たわませてますら男の子の鰹釣る見ゆ(鳥羽)

紀の海や夕日に向きてかの岬これの島はも片光りせり

酒ほがひ高らにうたへのちの世はとも角にもたのしきわが世(五十自賀)

西島貞子

復活祭すぎてひそけきキタイスカヤ桃の蕾を乙女ひさげり(ハビルン)

西田幾多郎

亡ぼしし人も亡びて谷々に残る歴史の物哀れなる

落葉しく此古墓をありし日にとはの住家と思ひきや君(頼朝の墓)

鎌倉は町にしあれど鳥の音も深山さびたる松のむら立

天地の分れし時ゆよどみなくゆらぐ海原見れど飽かぬかも

打ちわたす大海原に夕日入り漕ぎ行く舟は見るにさやけし

幼子の笑は似たり春風の渡らふ野邊の草のそよぎに

垢つきて假名附多き教科書も貴きものと筐にをさめぬ

うつし世は思ふことのみ多くして今年の夏も半過ぎ行く

赤きもの赤しと言はであげつらひ五十路あまりの年をへにけり  
わが心深き底あり喜びも憂の波もとどかじと思ふ

かにかくに思ひし事の跡絶えてただ春の日ぞ親しまれける

春の雨しくしく降りてけふ一日そこはかとなく物思ひせし

外國とくごの青葉の下に圓居まどしてギリシヤの酒を君飲むらんか

無花果いちじくはおほぢの君の庭の木とおもへど若し生まひや代れる

みすずかる信濃の國ゆ移し植ゑし庭の白樺枝のびにけり

夕されば庭の蟲の音聲冴えて夜風すずしき頃ともなりぬ

かくてのみ今年もくれぬこん年もかくてやあらんせむ術もなし

うらさぶる長雨はれて垣の根に萌えづる花の色のさやけさ

でで蟲の身は瘦せこけて肩書の殻のみなるを負へる我はも

足冷えていのねられぬに秋雨の雨の音繁しさびしき夜かな

この頃の心よわさよ丈夫ますらをと思ひし我も老いにけるかな

夜ふけまで又マルクスを論じたりマルクスゆゑにいねがてにする

このあたり庵いほりしますと音無の川邊の路をたどり入りにき

松山の日影うつろふさ庭べは晝靜なり人なきがごと

人は人吾は吾なりとにかくに吾行く道を吾は行くなり

大空の晴れし朝は七里濱雲のそきへに富士のねを見る

小夜ふけてとはに赫かかく星みれば千代の昔もきぞとし覺ゆ

西 田 嵐 翠

四人の子みな死なしめて夫婦ぎりとなりはてし日も今ははるけし

十年ぶりに子のなきもとの夫婦ぎりとなりてわびしく夜を寢にける

つれ添ひて十年は経しか四人の子みな死なしめてふたり飯食ふ  
弱くとも病みつづくともいのち死なであればよけむを死にし子らはも  
齡老いて恩給ぐらしせむことの安けさをひそかにおそれぬしなり  
雨蛙うごくともせねよく見れば活潑に喉を波うたせをり

妻あらぬ厨あかるく陽のさして井戸のまはりのたたき乾きぬ(留守居)  
食へど飽かぬ醜しとの毒魚河豚ふぐの味やいにしへ人もいのち賭けにき

西田重雄

死傷者の統計書ける掲示板あやしみ過ぐる人の少き(足尾鑛山)

西田春水

うす日さし朝の机に瓶ながら影をおとせる白菊の花

さゆらぎのいまだも残る地に立ちて動く電柱目守まもりゐにけり(奥丹震災)

柳條溝

「この屍手を觸るるもの銃殺す」黄ばめる草のうへの立札

張作霖氏爆死す 一首

皇姑屯夜明けの汽車にくだけしはかの督軍の悪夢なりけん  
野の中の戦士の墓に花ならで冬供へたり枯れ葉ひと束

三年経て今日汽車に見る拉哈ハハの野の驛を圍むは賊ならで花  
郭公も旅順の山にきくときはあはれの過ぎて起る憎しみ

ほの白く旅順の入江光る見ゆ爾靈の山の霧雨の底、  
飛び出でて位置定まれる機の下にはや神戸見ゆ須磨明石見ゆ  
我が乗れるエヤアポケットト百尺を落ちて忽ち淡路よく見ゆ

滿洲里にて

國境のしるしの石を踏みながらふと我がいのち輕しと思ふ  
木立みな菌きのことなりて機はたの下の興安嶺をまろく埋むる、

沙漠の上を飛行機にて飛ぶ 五首

機はたの下の曹達はうの上に包はまろし此の荒野にも命ありけり

新京にあたらしき世のある如きときめきをもて我が移り行く

機はたのもとの霧の裂け目に青く見ゆ千丈の谷その底の畑

峰々が霧のうへよりもたげたる頭を避けて我れの機はたの飛ぶ

南北に水を分てる老圖山川の初めを機はたより見て飛ぶ

隙間なく大佛殿の壁に置く蓮臺ありて御佛の無し(熱河承德)

佈ふ達だ拉ら廟ぼ一百六十六段の石のきざはし朱の障を立つ

朝陽の鳳凰山に草青し其れを機上に見て更に飛ぶ(熱河朝陽鎮)

飛行機を降り壺蘆島に魚を釣る雲より絲を垂るる心地に

北の野は海の荒きに異らず波形をしぬ土の起き伏し

松花江大きくゆるく吉林を廻れり我が機揺れて今着く

夕立の雲を左右に機の避くる前に光るは黒龍の江

西比利亞も滿洲の野も機に青し黒龍江を白くはさみて

瓊瑋にて

江東の六十四屯失ひし條約のあと松風ぞ吹く

黒龍江畔奇克特にてオロチヨン族の協領の家を訪ぬ

協領の幼き娘否むなり錢有るゆゑに錢を受けじと

沙金をば黒龍江に拾ふより汝アを見て嬉し協領の子よ



軍艦にて黒龍江を下る

大江に沿へる點<sup>よみちか</sup>硝いにしへの萬里の城のたぐひならんか  
甲板に座して夜更けの大嶺に對へば我れも愁人となる

察哈爾行 二首

長城の山を越ゆれば察哈爾の荒き曠野に馬蘭花咲く  
ここに來て猛き人等と交はれば我れも沙漠を越えんとぞ思ふ  
草枯れて沙平らなる野のなかに白河あるらし舟の帆の見ゆ  
寒き日にたんぽぽの花一つ咲き先づ行く者の苦しみを知る  
この小さく汚き木の實十ばかり賣りても人の生き得るものか  
一天のみどり大地の雪のなか汽車の煙の隠れがもなし  
野の中の丹塗りの祠いと小さしすこし離れて桃の花咲く

城内のきたなき町の盡くるころ廟門ありて飛ぶ柳絮かな

野の草の黄なるあひだに光るなり支那の娘の紅きかんざし

子等寝ねて寂しき卓に栗の皮むくこと久し妻と在りつつ

西田龍四郎

冬支度の防寒靴カイトンキ買ひ歸り來る石油山に雪降り出でぬ(露領北樺太)

西田はる美

若芽吹く庭の木立の朝の雨寝おきごころは靜かなりけり

西田夢花

今はかも最後の努力か負け牛のいきほひ立ちて角振り立つる(闘牛)

西田豊子

もの言へば涙こぼるるおもひなりまじろぎ難く對ひつつゐて

あきらめの心にきざす安けさは身にしくしくとひろがりてゆく

西塚 幸一

山 行

高山植物地帯なるらし枯羊齒かれしだの月照る谷へ點々とつづけり  
隣人起きゐるらしも小夜更をスキ―修理の釘打つ音す

西出 茶鳩

舟の人吾ごとに言かけてくだりたり川べの藪こに竹切り居れば  
吾が肩にふれてこぼるる桑の木の新芽を惜しむ肥配りつつ  
夕風にまじりて遠くきこゆるは村の桶屋が輪をしむる音  
夜なきする雞とを叱ると起きいでし妻が明るき月夜と言ふも  
ひぐらしの遠音きこえて夕づけば妻も日笠をぬぎて草とる

稻田路くるは吾が子か重たげにひるげの包さげてゐる見ゆ

家妻を夕餉仕度にかへらせてうすき陽かげに拾ふ落穂を

米賣りて受取る金ゆ利に利つけこやしのかりを差引かれたり

西野 嘉壽夫

鶴わたる阿久根の町は夏ぐもの天草灘にむきてしづけし

西野 京子

夕寒くくらき刈田に火を焚きてゐ残る人のはなしごゑきこゆ

西原 重敏

熔鑪爐夜半吟 (熔鑪を湯といふ習慣なり)

なべのなかによどみ冷えゆく湯はしもよくらきほのほのあをあと發つなま

湯だめよりまあかくなべにうつさるる音なだれたり生なまの湯の音

傾きしおほき爐口をいづる湯のつちに滴雫りひかり散りぼふ  
爐口ふくほのほのたちのすみにけりかね煮あがりて光牙え返る  
いろあかき餘燼鉞に煮たてゐて蒸氣あげにけり一つ飯盒

壓搾風の音絶えにけりと見るまでに化銅期あがりし爐はうごきをり  
つぎつぎに鑄型めぐれりまかがよふ銅のひかりに疲れたり眼は  
わだなかの島に鑛爐はふかれゐて火かげあかりの灣をてらせり

西 廣 みどり

新病舎に植木を運ぶ職人は健康なる汗かきてゐにけり  
すらすらと書きおろしたる妹の手紙讀みつつ姿うかび來

西 堀 重 信

日向なだ鵜戸の岬の大巖にひねもす遊ぶ海鳥のむれ

西牧莊十郎

そのかみの戦火に焼けし兵糧米の炭となれるがいまだ残れる(大島城址)  
そのかみの伊能先生の手になれる地圖に向ひて聲をつつしむ(佐原町にて)  
はるばると奥信濃路に來りけり五つの山の雪のさやけさ

西見貫一

菜殻焼く火よりも赤し彼の入日町の火の見も炎に燃ゆる

西村一平

與謝野寛先生を悼みて一首

わが心寂しきままに祈るかな師を尊ぶ子妻に授かれ  
亡き父の櫛をば使ふうれしさよ髪五分伸びよ一寸伸びよ  
わが妻と親の決めたる君の來て時計を合はす局の窓口

藤いろの霞を被く石狩の五月の山にうぐひすの啼く

縁にゐて月を愛づれば厨より母が皮剝く露かをりきぬ

老アイヌ、シプスケ死ぬる噂きて石狩青き初秋に入る

山鴉實を突くごとに黍の葉の枯れたるが鳴る朝霧の中

むら山を尺も出でねど十勝岳望めば威ありよき城のごと

アカシヤの花の散るかな男らが壁の泥練る青き木蔭に

若き僧ふところ手して鐘を打つ二月の樓に照り返す雪

西村 淨子

夜まではかへらぬはずの子がこゑによく似しこゑの外をいま通る

西村 直次

彼岸花あかく咲きたる山蔭に父を葬りの火はもえにけり

西村俊夫

たそがれにもものこゑなき深山の炭竈の口われはとざしぬ  
こぼるともなくこぼれゐる稻の花晝ふけて風東風ひがしとなれり  
秋たけてわがこころねの荒すまむらし蝮の生皮剥ぎてけるかも  
たまたまに日和となれば糶乾すと雞は雞舎に追ひ入れにけり

西村 醉香

歡びは束の間にこそあるべけれ戀よりほかのことは知らねど  
くれなるの牡丹一片地に墜ちぬわれらが戀の謎のごとくに  
この道はやがてわれらの墮ちてゆく苦しき道と知りたまはずや  
やさごころもてばおもひもとけぬらむさびしき人の影も消ゆらむ  
相も見ず水のごとくに流れゆく日こそ月こそうらさびしけれ



さだめなき戀の遍路にゆきくれて身は悄然と秋風を聴く  
歎けとて空もしぐれの雲閉ざす涙に濡れて君をおくる日

鎌倉にひとりさびしく棲むといふわが思ひ妻人に知らゆな

みづあさぎさやかに朝の海晴れてころあかるし君來る日は

一日二日見ぬ間に山のさくら花さき揃ひたり春をのどかに

極樂寺の山の櫻は咲きにけりけさあたかく降る雨にぬれて

失はれゆく人の心のはかなさよ山のさくらは散りもあへぬに

百人ももの人の情にかへがたき一人の君とおもひしものを

晝かけてかかりし雲のいまは晴れて夜空にうすく富士の山見ゆ

蘆の間にとほくさびしきよしきりの聲はしづかに聴くべかりけり

紀の國の秋のはじめの海の色夕月よりもしづかなる色

白帆みな風を孕みて傾けり入日の海のあかるきなかに

君がためわがためせめてこの一日さびしきことは思はずてあれ

芒穂の穂先みだして片靡く河原は白き秋風のなか

武藏野の草をなびかせ吹く風のなかに夕日の富士は明るし

西村金二郎

雀ども朝より何を騒げるやしきりに松の雪こぼしをり

雨氣去らぬ重苦しきやわが門かどを蟬を鳴かして通る子のあり

二人なる立居ひそけき家のうち障子にひびくこほろぎの聲

西村賢

春日射す川瀬を見れば片よりて砂いさごの上に浅く流れぬ

牙々と月照る空をさへぎりて檜の木暗く庭に陰しぬ

軒近く垂れし糸瓜(ちま)をとりかけて日かげあらはの部屋ぞ冬めく  
夕づく日海の干潟にあかるくて遊ぶ白鷺は遠く見えをり  
唯ひとつおくれし鷺が飛びてより俄かに暗し沖の干潟は

西村 正人

落葉松かまつまの小暗き谷を出でし眼にさやかに光る養魚池の水  
打連れて背戸田にあそぶ白鷄にいまだもさむき春の雨なり  
浚渫船も掘り止めにける暮方は湖面に鴨の黒く浮く見ゆ(青草湖)

西村 吉之

裏畑に今朝いささかの雪積みて葱の青きが身にしみにけり

西村 勝子

命をば懸けてわが倚るこの柱ゆるぐ日あらば哀れならまし

大空の星の終りは知らざれど人は地上にうらぶれて果つ  
人もまた木草のやうに春の來て芽の吹きたらばをかしまし  
一群の薄のわきに保護者めき電柱の立つ野の景色かな

奔流よ流ることのよしあしはすでに思はぬ激しさにある  
くづをれて落ちん刹那は噴上げの水よりさらに哀れなるらん

西村 光 弘

たかむらの風はさやかに見ゆれども峽深くして靜かなるかも  
藤なみの房ながければ子らが手に垂り穗のなかばむしられにけり  
一本の蘭に遊べばわがこころくさぐさの思ひ空しきに似つ

吾れ不知火海中の孤島大島に生れ松籟と波の音を聞きて育てり

しづしづと夕やけ雲は流れたり地に照り映えものつちのあかるさ

小夜更けて潮ひくならむ泊船はておねの向をかへつつ月の下びに

つまぐれの花を搗きつつ子とをれば島をめぐりて雨ふりいでぬ

流木に海鳥しろくとまりゐてあかときの海しづかなりけり

走り風そこにおよべば帆かけ船かたむきてまた起きかへる見ゆ

窓下の海藻うみくさの間に黒鯛まのあそべる見れば海ぬくむらし

先きなるが海藻うみくさめぐれば次ぎ次ぎにみなめぐるなり黒鯛の群

三勇士に題す

上海のいくさまぬるしと思ふ時この死ざまは胸すきにけり

昭和七年熊本第六師團滿洲に出動するを送る

もののふの肥後の赤禪あかぜんひきしぼり打立うちたてたす日にあひにけるかも

寒風に身をいとほしみさばへなす土匪のともがらはこぶしもてつぶせ

きさらぎの二十六日の朝雪に吠ゆる野犬の聲ききにけり

血のたぎつ輩をここに到らしめし時世のなげきなしと言はめやも

事をあげしはわたくしごとと言はねども腹かつさばき死せざるはあはれ

阿蘇山一首

大阿蘇のなぞへの風にまむかひて放牧の馬はせのぼる見ゆ

咲きさかる菜種子畑はかげろひのほのぼのとして寺の塔は見ゆ

西村 愛子

ひと夜の間寒さ至りぬベランダに忘れぬし植木みな凍らしぬ(寒氣襲來)

西村 寛治

童らが夕暮の街に聲あげてかけゆきにけり我を追ひ越して

西村 徳藏

馬鈴薯の花しろくひかりゐるならむ雨ふる丘の月夜あかりに  
うつくしく店の草花いきづきあひ花花が花にかげおとしゐる  
無帽にて青草の野にねてをればなんとといふ深い空のかたむき

西村 眞琴

支那山西にて土穴の村に泊り

穴居して人の世こひし陽炎かげろふのもゆる日つづく屋根の土肌

朝鮮石窟庵

つづらをりこごしき岩路のぼり来て露ふる石窟びつのみ佛をあふぐ

蒙古の旅に

渡り來し蒙古駱駝の鞍白うたまれる砂に指をふれみし

母を憶ふ。七ヶ年外遊しスピスのアルプスにのぼりて母子草

を見いでたれば

あるぷすの山にもさくや母子草いたるくまぐまなつかしき世ぞ

老母八十三歳の掌形に記す 一首

このみ手にわれらは育ちこのみ手が支へましける家のくらしを  
水底の小石のみゆるせせらぎに梅花藻の花さゆれてさくも

日高路やつるうめもどき手にぎれるアイヌに遭へり山は雪ふる

西村 修 一

雪溪を吹きあぐる風に山頂をおほへる雲はうづまき動く

西村 孝

繼宮明仁親王殿下御降誕奉祝歌

生まれましぬ日嗣の皇子ときくからにこころをどりて起ちあがりたり



篝火の灯たかかげ沍てつく夜半過ぎをはやひと詣づ砂利を踏む音

篝火の灯かげにみれば道のくま踏みのこされし霜ふかく冴ゆ

春はまだ島風さむき廻廊をめぐりてよする春潮の照り(嚴島)

大利根のここにひらけて洋々たり河心かぶにあがる波のかがやき(水郷)

あけはなつ朝の座敷をさやさやと山上の霧は吹きぬけにけり(武州子の権現)

むか岸にあかる一樹は朴だんばならし溪風そよぐその廣き葉に(奥入瀬川)

むらさめは湖心に外れてふれるらしさやげる波のうちけぶり見ゆ(十和田湖)

西村富士夫

雪ふるとしばしさやぎし人ごゑの絶えたる頃に積りそめたる

救世軍の一隊の列どかどかと過ぐわれは茶を飲みて出でし鋪道に

七夕祭

七夕たなばたの紙のはららになるなべに天の河原はみえそめにけり  
夜に入りて晴れて來にけり七夕の竹の眞上に天の河みゆ

父の日二首

父君が逝きませし日とゆくりなく朝の教室に思ひ出でたり  
家にあらば母がここだの思ひ出もきくべき宵を寄宿舎にあり  
子供等がはしりあそびしなぎさ邊は夕みちしほのみちひたしたり

西村多津子

からからに乾きし傘を疊みつつ韭の白花をわがみて居りぬ  
雨の日の夕ぐれさむき厨べに葱の白きを切りそろへ居り

西村陽吉

さいなまれ齒をむきだして啼く猿のかなしきまでにこころよき面<sup>め</sup>  
ひるがほの悲しく咲ける野に來たり町のどよみの耳をはなれず  
九官鳥の怖れず高くものを言ふそのごとく我のものを言はまし  
汽車がふと停りし驛のま夜なかのあたり一めんの蟲の聲かな  
とんぼ來て葭の葉ずゑに羽を落すこの寂寥になほ居らんとす  
雨あしのしぶく歩廊を濡れながら荷を押してゆく驛夫は若し  
丘の邊の青樹のなかにまじりたる一重ざくらの夢にかも似る  
びしと打つ駄馬の背なかの鞭の音われの心をうちたるごとし  
八月のあつい東京に居残つてはたらく仲間よ路ばたの人よ  
踏切に夕日をあびて燃えあがる一團は工場をかへる人達

ゆふ風の寒いホームに電車待つて大きな望みはずつかり捨てる  
仔の糞うんちをぺろりとなめて事も無い親犬の瞳の母らしい静かさ  
三十五年生きてきたのに何萬年生きてきたかのやうに思ふ日  
行かねばならぬ私の道が置かれてあるその道をけさも安らかに行く

西 本 郷 榮

とまりたる黍の長穂のゆらゆらにゆるるにまかせ身をおく雀  
家うちまであかるくなりて夕空に虹は大きくかかりたるかな  
あかあかと夕陽さし入る厨くぬちふとあげし妻の顔のあかるさ  
いたづらをする兒の側を通りぬけ犬はひそかに抱かれに来る

西 本 桃 葩

手の甲にかぼそくなきて秋の蚊のとまらんとするところかなしも

ひらひらと遠退きて行く紋白蝶高き校舎の屋根越しにけり

西 本 清 樹

五年ぶりにて内地にかへる

ふるさとの廣き吾家はいづくにか父母の聲ありてたのしき

皇太子御誕生

雪深き山路を越えて來る人の日の丸の旗ふるはなつかし

西 山 徳 次 郎

眞夏日の照りのきびしき山原に開ききりたる桔梗の花

四方の山にも湖の上にも雪つもりこの國へのしらじらと寒し(諏訪湖)

赤道の眞下をいまか行かす君つつがなからむかにひ妻の君も(住友男夫妻渡歐)

庭瀧の波折のすゑに睡蓮の白きが咲けるあした清しも(洛東住友邸)

山原の朝のひかりに照らさるるなべてのものたふとかりける(山中湖)

山みちに轍のあとの深き見てここに働ける人の上をおもふ(芹生峠)

笹の葉のたもてる露は白雲の一夜ひとよしづみてゐたるにやあらむ(安房峠)

雪溪の底つ岩根の水音を晴れたる山の風とおもひき(針ノ木峠)

年老いし山人ひとり雪溪に憩へる吾を追ひ越し行きぬ

西 山 三 艸

ききすまし静かと思ふ木がらしの夜をふかくこの尾根をとよもす

西 尾 節 子

ひたぶるに夜半に思ひし事は皆朝あしたになればとりとめもなし

西 尾 鏘 太 郎

屋びさしの古びも旅のあはれなり川せばまりてゆく水の音(別所温泉)

峠一つ越えて越後の山脈やまなみのそそる寂しさに眞むかひにけり

西尾 準 一

木曾川の向ふの木曾の往還を荷馬車ゆくなり音たてながら

春冷の身にしむ頃を山にゐてしみじみとみる夕山ざくら

西岡 富美

この秋の實彈射撃わが家のガラス障子をゆりてひびかふ

西岡 徳藏

曇りつつ今日も暮るるか砂濱はさかりを過ぎしはまなすの花(蘭島テント村)

錦織 暢三

年の瀬や露天商人のたたき賣る算盤そろばん一つ買ひてもどりぬ

日光寺 憲雄

妻を湯にやりてわびしきひとりみにぎんなんの實をあぶりてぞ食ふ  
みづからの肱を枕にみ佛の釋迦はやすけく涅槃ねはんしませり

新田英太郎

吾わが妹もへ子がぬぎすて行きし白足袋の自づと足のふくらみもてる

足守大光寺木下利玄氏のみ墓に詣づ

東京の谷中の墓地に分骨のありと刻める碑文を読みぬ

一年生になりし長男を疫痢にて失ふ

朝々を學校に行く子はあらず寢すぎ勝なる吾家となりぬ

着物の襟さちんと合す子なりけり墓への落葉掃きつつ思ふ

新田貫一

散りたまる落葉あつめて焚く朝の空吹き晴れて寒に入りたり



裏藪に陽はありながら夕ぐるるときの間寒く風吹きどよむ

新田 春子

のがれ來し會津の町に食堂ひらき友はいくらかの金蓄へぬ

新田 寛

弟の養狐園を訪ぬ

から松の若木のはやし果て知らに黄ばみ明りて狐啼くきこゆ  
弟がつくれる畑か玉巻かぬキヤベツ幾畝霜に傷める

檻の外に木の實こぼるる眞晝すぎ狐ものうく居ねぶりてをり  
灯ともさば窓掛早や引け山の鳥玻璃戸したたか打ちて死ぬるに  
この山に來ゐる小雀さ夜ふけてさへづりやまず月照るらしも

天の川見ゆる星空をいただきてい行くに寒き海うみなかの風

海豹島

岩のうへにロツペンの卵ころがれり岩菊の葉の風に動かず

知床半島 二首

海氷るみ冬を近み散りぼへる苫屋苫屋の薪高く積む

舊カシ教徒エヒモフが牧場マキははろばろに草枯れて川大きくめぐる

風のいろはそことしもなけれ臥りゐる駒の目先に揺るる草の穂

いつしかに夕べとなりて若駒の脾ひばらを襲ふ蟆ま子出でにけり

厚氷いつしか解けてこの見ゆる海うみの面碧くなりにけるかも

たたなづくえぞ松山はかすみたれ夕づく空あそにひばり鳴きつつ

くれなるの裳裾濡らしてをとめらは八目鰻やっめを捕るとここにつどへる

時じくに降れる雪かもこの里のほの青みたる道芝のうへに

六月の光流らふこの海や沖しらじらに流水うかぶ

えぞ石楠花しらじら咲けり海霧罩むる岡びの朝のいまだ寒きに

秋の蟲はやも來鳴ける庭隅にほそぼそ伸びて咲けるからし菜

あしびきの山の獵夫は銃負ひて我が行く朝の汽車に入り來つ

からふとの冬にこもると天井の板のつぎ目に紙張りにけり

凍てつつも照る日ぬくとし雪のうへに捨てし俵に雀來てをり

凍てひかる玻璃戸とぎしてこの街や夕べを早く人の往來絶ゆ

干潟地の岩礁の蔭ゆ道化者蛸の坊主のすたこらと出づ

新田 正子

おもちやとは何かかなしき言葉なりおもちやおもちやとつぶやきてみる

新倉 双葉

賣られゆく馬に人參食はせつつ父は黙もだしてしばらく居るも

新坂 教子

輪轉機の響轟く工場に來て心足り居る男等に觸れつ

新里 貞

ねむの花ほのかなる夕べ月見坂に友と語りて月の出を待つ

新津 亨

こころより妻の妊りよろこべぬわが貧しさはいはでやみにき

み柩に移すと抱く兄上の屍かばねのにほひ眼に沁みにけり

唇くちかみてこらへゐしかど女らの咽び泣くねにさそはれにけり(葬式)

世のかぎり悔い思ふらむこの兄につひに酬ゆることのなかりし

黎明の淺間の噴煙山ぎはの明るき空に末崩れみゆ

苔枯れし尾根の平岩燄ゆる陽をよぎる蜥蜴の彩におどろく

母死す。急電に接し夜行にて歸郷せるも間に合はず臨終に

一時間ほど遅れぬ

眼ざむれば眼尻に涙たまりぬ亡母に添寝の夜は曉ちかし

カア過ぎしあとの導輪の空まはり軌道に照る陽夏めきて蒸す(筑波山)

奥多摩溪谷にて

岩かげに淀み渦まく青水沫かそけく見居れば息たまりくる

昇仙峽の秋

風隠の山ふところ曲り入れば草紅葉照り汗ばみにけり

長女澄子猩紅熱にて入院

許されて薬の風呂に入りたりと顔をほてらし子は喜べる

新野 貴美子

もちの葉の光かき散らす風強し遊ぶ子のこゑしばらく絶えつ

新堀 貞子

つぎつぎに小さくなりゆく向日葵のかたむくさまも秋めきにけり

新村 みよ子

ふとしたる言の端にもいさかひの氣先を見する女と言ふもの

雨に濡れ雨に打たれて咲く花のダリヤは紅し雲流れゆく

ゆく雲は南をさしてゆきにけり思ひさだめし日のごとくにも

新村 隆男

麥煽る唐箕の先の土ほこりいきほひづけば日が落ちてゆく

新居 滋子

親も子もわが意を通すおしづよさ恥づべき母とおのれ悔いつつ

新居 格

道といふ道はローマに通ずればドン・キホーテよでたらめに行け  
落椿黒き土にも艶えんなりと戀こひざめの日の旅に知るわれ

白根山うすむらさきの色なればわれの葉卷のけむりをば見る(中禪寺湖畔)  
たそがれに陰影かげを交へて暮れてゆくわがころにも似たり冬の日  
わが胸の沼を泳げる白鳥は銀座に行けばタバコをも吸ふ  
現には白紙びやくしの如きさびしさも夢には赤きひなげしの花

贄田 登志美

病む夫をみとりて

にんじんの甘きにほひの指にしむスーヅつくりのいく日も續く

葦塚直四郎

雪折れの樟の大木の下くぐり兒らは掃除の水くみに來ぬ

一筋の路あるままに夕空の細く明るし雜木山みち

額田さかえ

物干しにしまひ忘れし白足袋に雪のかかりて寒き朝かも

貫名實

螢らの放つにほひのさみしさよ晨あしたの籠に霧を吹くとき

布川彦二

裏堀は日ざし明るくなりけり障子の外の水棹の音(北新堀河岸)

沼崎徳受



沖つ邊は霧深からししきりにも信號入り來ラヂオコンパスに(鮭ヶ崎燈臺)

沼田 三之助

文撰機モ、ダイブやがて進まば文撰工この半數にて事足るといふ

沼中 早太郎

淡路島のはるか沖より進み來る旗艦長門見ゆ陸奥と列びて(觀艦式)

凧たこぎふかき港をいまは發たつならむエムプレスルシア號の汽笛鳴り渡る

曉あけの齋庭さいていに燃えつぐ湯立火の顯たち明るくて芝垣を照らす(諏訪神社湯立神事)

月はいま傾くらしも隣り家の木の影伸びて庭に來にけり

根岸 貞吉

寺庭に百日紅の咲く見れば此處に遊び育ちし頃をしぞ思ふ

根岸 清一

草食<sup>く</sup>めば草のみどりがうつりたる口動かすがかはゆき仔牛  
親牛仔牛ならびつつゆく足並がいつか揃ひて駈けりつつあり  
鶯をきかすと吾子<sup>わこ</sup>を抱きゆく芽ぶきあかるき檜林みち

白木蓮の花瓣を透ける日の光うすき影おくその蕊<sup>つぼみ</sup>の上に  
桑伐りつくして村は明るし朝<sup>あした</sup>よりりゆうりゆうと響く脱穀機の音

昭和九年四月三日全國小學校教員宮城前廣場に御親閲を受く

春雨の霧らふ玉座にあなかしこわが大君は立たせたまへる  
玉座はるかに舉手したまへる大君のおん手套の白きを拜す

奥 秩 父

尾根遠くここにひきたる索道の樹海に光<sup>て</sup>りつつたるみゆたけし

根 岸 春 江

タイプの音もベルのひびきもいきいきと朝の事務室の仕事が始まる  
自分のキイも負けずにひびけゆるやかに呼吸深く吸ひパンと打ち出す  
誤植もなく仕事終へた日機械にもおじぎして静かに埃をはらふ

根 津 興

燃えさかる焚火まもり居て吾と夫は山の家居の静かさを語る

根 本 四 士 男

幼ごころ懐しみつつ銀の尾の茅花を噛めばほろ冷たきも

捫 垣 青 花

庭さきの松の秀ずゑの雪落す小鳥のふりの寒きあかつき

この朝けあらしの中のくさむらに鳴くこほろぎをききにけるかも

冬山のいただきに朝の陽は射して山裾に多き青松のいろ

野一色 美穂子

とつくにの濃き酒いだしくみ交す一と群もあり秋の夜の汽車(上越へ)

野石 祐昌

夕明り未だのこれる海中(わか)の杭を移りて鴉啼きたり

野入 英樹

夕寒き駕洛王陵にひとり聽く鶺鴒の聲はあはれなるかも

太柱たす竝みたつ堂の埃くさし清正ここに兵を泊めしか(慶州にて)

秋風嶺わが越えくれば野茨の花しろきかな夕日のなかに

野枝 稔

暮れてなほ残る谷間の水音のほとほとわれをさびしがらしむ

野 北 正 激

樞道の棧木朽ちたる山坂の春は淋しき赤土の色

此のあたり芽に出づるもの大方は吹き出でぬらし山の明るさ

一谷にこめて煙らふ陽の光岩山の上に見ればかなしき

何といふことは無けれど稗草のそよぎに見つつ足らふ貧しさ

此の日頃とみに秋めき驟雨すら氣遠に空を明りつつ過ぐ

目に廣き裏の空地の眞冬なりかんかと響き杭を打つ音

野 口 徳 次

海<sup>うみ</sup>なかの岩にあたりてくだけ散る潮のしぶきは天に打ちあぐ(伊豆堂ヶ島)

野 口 曉

病みて樽前山麓の故郷にかへる

樽前の斑雪明き午後の日を街の病院より歸り來われは

野口立歩

晝たけて庭あたたかしかたかたと糶摺馬はまはりまはれる

野口勇輝夫

移り來て蒔きたる種子の草々の穂に咲きぬべき秋は來向ふ(大森の新居)

着古びし吾のオーバーを兄は着て夜ふけし驛に待ちて居にけり(ふるさと)

紀伊の國長峰山の月光(つきかげ)に若くて逝きし母をなげかふ(妻の母を)

このわたり夏の草花盛り過ぎ埃かぶれりま熊野の道(熊野路)

窓下につづける沼は葦しげり鶉のゐて鳴く日ごとと夜ごとに(砂町にて)

野口美萍

冬の陽はここにささねど鹽鮭を漬けたるままに水は澄めるも

野口 青眉

あけがたの光はすでに水にありわが船はゆくその水の上を(霞ヶ浦)

雲一つ去りゆきしかば山かひの青空をまたゆくものもなし

溪の水青み流るる瀬の中のあらはなる石に雪は積みつつ

水上に築あるらしき灯の明り見つつ月夜の橋越えてゆく

語るべく妻のあらねばおりたちてゆふべの庭の青葉見てをり(妻歿後)

雨強く降りきて雲をちらしたりあらはれて大き瀧のひとすぢ

谷の雲うごききたりて前山をおほへる中に鶯きこゆ

いつの間に降りやみにけむ月の夜の曇れる中に木々の雪見ゆ

吹きしまく風日に絶えず庭池のこぼりの上も塵置きにけり

おのづから流るるみちをつくりつつゆきげの水のゆくはかなしも

山ふかく來にけるものかわが汽車の窓近く雲のゆき過ぐるなり

岐れたる河の一つのみなかみの秋ふかき村に道通ふ見ゆ

ふる雨になべてわびしき眺なり田のくろごとの曼珠沙華の花

舞ひおりし鷗の群のいづべにかかれて廣き秋の利根川

ぽつぽつとわらやにともる灯の見えて月夜ながらの雪降れるなり

野 下 未 到

生蕃守の歌

生きの身の生くるたづきと生蕃しこを守る山の巡查となりたりわれは

山脈やまはまぶしく光りけぶらへり我が入る山はいづちべならむ

臺車とらの上に夕づくかげとなりにけり谷にどよもす風の寂しさ

鬼萱のひかりなびかふ山平に生蕃しこ住む家のまばらにあるも



たたなはる生蕃の山々やここにして思へば遠くわが來つるかも  
ま夏日の暑さざかりを谿川にひとりつかりて鰈捕るわれは  
谿川の石をおこして鰈を捕り夕べには煮て飯食すわれは

幾山河けぶらふすゑはみえねどもわが戀ふ町のありと思はむ  
馬武督まぶとくの蕃地にやがて雪の降る頃とはなりぬおもほゆるかも

野 坂 瀧 雄

心をば潜ひそめてわれの居る時し妻は厨に子らは外べに

野 崎 宣 重

吉 野 山

啼き交す鳥の聲のあはれなり曇り日の尾より峰よりきこゆ

六 甲 山

松の芯の尖にとまりてうぐひすの鳴ける姿のあらはなるかも  
溪あひにひとすぢ白く道ありて折々人の下りゆく見ゆ

野 咲 俊 二

裾 野 原

ここに於て路はつきたり山原の山毛櫨の木群に鳥さわぎつつ  
晴れゆけば富士に定まる笠雲あり昏れてのちの空の眞青さ

山の番小屋にひと夜を明す

山人のおそき夕餉にまじりつつこのどかさは淋しきものを

船原温泉へ

むつましく人は住みゐむ夕煙たゆたふむらを見て過ぎにけり  
くぬぎ原とどく陽かげは眞日ながら下草むらは冷えてゐにけり

野澤久須夫

着ぶくれて人はゆきけりこの朝の寒さに堪へて畦ぬるわれは  
田歸りの目にしたしもよ宵庭に咲くどくだみのうす花明り  
なりはひの暮しの足たしに鶏飼とりはむねがひをもちて幾年は經へし  
藁そぐる柿の大木の下かげは涼しかりけりふきとほすかぜ

野澤島子

毒ガスを防ぐ方法すべなど語りをり母と二人のおそき朝餉あけに(日曜)  
湯治すと湯場所にはをれ親不幸してゐるごとく落付かぬなり(登別温泉)

野澤輝武

爐をかこみ宵の粉雪のさやけきをいひつつ熱き飯を食ひ居り

野澤曉鐘

山の霧に濡れつつ咲ける花あやめ濃きむらさきは滴るごとし（赤城山）

朝あけて馬の蹄の音すなりしばらくにして兵あらはれぬ

刑務所の堅き圍ひに騎馬兵の蹄の音はこだまをかへす

野澤治子

何鳥か榎かみの梢かみにきて啼くをひそかにきけば蒿雀あせじなりける

野澤柿葦

水底にとほる日のかげ蓴菜じゆんさいのとろとろとして冬を生きをり

大正天皇御大葬 一首

いでまして還ります日ひの遂すいになき大御別れの夜となりにけり

とりよろふ青垣山のはてなれや白ひげ嶽は雲の間に見ゆ

木枯に吹き曝されて月ひとつ渡らふ空は果てもなきかな

八千尺の高根の雪にさしきたる雲路のあかり明けにけるらし  
春やまだいづくるとしもなき雪の更級こえて行く旅路なり  
春や立つ佛足石に一二寸陽のかげろふのもえて居りつつ  
みんなみの大門のせとの青潮にかますこのぼる春は來にけり  
美しく毒を粧へる斑猫のあはれにあそぶ日の照る庭に  
雲切れて洩るる薄陽の銀鼠に水上霞む大川の春

曇る日の苦竹の藪に楚々として寂しき冬の鳥かくれたり  
沈鬱のみけんに深くきざまれし皺さへかなしミケランジエロは  
兒なくして寂しきくらしあゆみ寄る命二つの際みゆるかな  
河上の日のあたる山かげる山寂かにふかむ秋と思へり  
雲とちて夜は世を隔つ結界の寂しさふかし槇の樹霏

煌らかに霜氣の月の照りそひて遠笠岳の雪ひかりをり

野 島 右 喜

稻扱ぎの人多く出でし村の徑知ると知らぬと聲かけてゆく(歸省)

野 尻 壽 臣

くだりくる荷舟よりものを言ふこゑの月の夜にしてあはれなりけり(水郷行)

野 末 桃 古

大牡丹の花ちりおつる静かさよしめりをもてる庭石の上

野 瀬 市 郎

わが庭に植ゑて三年となりにけり今年は咲ける山さくら花

野 添 美 登 志

鹽分を断ちつつありて癖のごとく夢にも食ひ衰へにけり

薯蕷さといもの葉のもろく散る朝々や寂けしと思ふ霜解くるさまの

野田 一郎

外遊吟

鐘は鳴るドウオモの寺の鐘は鳴るミラノの朝の休らひの日に(イタリにて)  
夕さりて見しはほのかの河なりし明けゆく空にライン流るる(マインツにて)

野田 まさる

うづ高く履歴書積める卓に倚り思ひ上がれる身を省みぬ

野田 正

悼中村憲吉先生 一首

病床びとこの煩わづらひ思おもひて文ふみさへもつつしみたるにあはれいまさぬ

冬空のしまし青澄み暮れゆくを目にはろばろと見つつわびしき

冬霜のきびしき朝やわが庭の冬青の太木のつぶら實いくつ  
北滿の地圖をし見つつ汝が行かむ牡丹江のあり處とめて寂しき(弟出征)

野田俊一

赤き錢一つ握りて走りゆくわが子幼し秋風の中

野田孝之

デスマスクを取る

死面取る部屋は蒸れをり片寄せしばらの花びら疊に散りぬ

デスマスクの石膏の割れ繼ぎをれば部屋に畫餉の香りが漂ふ

畫室にて

桃二つ薄きうぶ毛のほのかなり我が描きつつ心ときめく

うぶ毛立つ柔肌深き桃の實は丸味ゆたかにゑがきみるべし



果に添へて朱盆に置きし桃の葉の一つ二つも描かむとする

日夜彫刻に勵みをれば 五首

大寒だいかんに入りし夜寒や鑿ののみ研ぎて青砥の色の身に徹るなり

鑿の音さむぎむ響く部屋のうち大き木片打ち重なりぬ

大鑿の切れ込みよろしこの朝あさけ面おもて定まり心勇みぬ

鑿打ちの槌の握りのねばりくれば大き木片壁に跳ね飛ぶ

子の像に土は置きつつ吾が指の放ち難きなり愛かこしその姿

ガラス越しに庭を見てゐる子の頬ほの麻疹はしかの跡あとに若葉照りたる

野 田 東 湖

おもおもと地響立てて本堂の屋根の雪おちぬ夜更けの庭に

夕暮の月ほのめけばみ佛の慈悲心に似て涙流るる

ともすれば吾に逆らふ人のあり或夜ひそかに淋しと思ふ

野田三美子

師を待ちて

さわやかに秋風吹けばおもかげの間なく時なく君ぞ待たるる

鹿兒島磯風景樓にて婦人會春季慰安會あり

たをやかに手並そろへて人舞へば海の光の裾にみだるる

第二艦隊入港

あさがすみさつまの海にくろがねのいくさぶね来て錨を下ろす  
飛行機は秋青空の隈もなき光をしろくとどろかし來る

野田安樹

始めて臺灣に渡り高雄へ赴任する汽車途上

故郷出でて遠くも來しか回歸線の標柱を汽車の窓に見て過ぐ

臺灣蕃地率<sup>す</sup>芒<sup>ぼん</sup>公學校に宿す

相思樹の葉もれ月影しづかなり生蕃踊終へし庭面の

野中久米兒

ここにしもわが同胞<sup>ほと</sup>の熱き血はにじみてぞ居む野花見につつ(南滿洲の旅)

野中憲吾

霧のひまはるけき谷の底ひよりほのかに川の瀬鳴りきこゆる

野波春枝

わが家の門につづける苗代田苗青みくる雨となりたり

野々下仁

吾が町に工場誘致の説起り古本屋我もいたくきほへり

植ゑて我が樂しまむ時は思はねどこれの蘭譜は見のあかぬかも  
摺り大根からきに汗し飯を食ひ健やけきことが只有難し

野原水嶺

阿寒の星鳥

阿寒山のみねのあさ日に嘴むけてけぎげと鳴くその星がらす  
あけぼのの萌ゆる木の香にひなどりのただよふばかりこゑを鳴きあふ

十勝の開墾地帯

集れば冬のすさびのあら酒を飲みむさぼりて農に生き居り  
空の青さに消えてゆきたる三僚機おもへばいまも翔りゆくらむ  
あら草の濃き香をたわめ十勝原あさあらし吹く夏はいたりぬ  
夜は夜とて霜に燠しをたきあげてひるみもあらず農のころは(連年の霜害に)

故郷

落人おちうどの宇喜多うきだを祖おやにもつといふわが家はいまも藪やぶをめぐらす  
ふぶけ吹雪ふぶけやまず求めてゆくものなげきにそはむ冬とおもふに

野林 敏 秋

雨後のややに冷えたる風入りて籠かごの蠶かいは片寄りにけり  
雪ゆきなきの眞晝まひる静しずけく薪山まきやまに木を割る音ねの四方よっぺにこだます  
一日いちにちの點呼てんこ受うくるにさへ暑あつし滿洲まんしゅうにつとむる友ともし偲しのばゆ

野溝 義 男

山小屋やまごやのめぐりに動く人ひとのかげ霧きりにうつりて暮くれれゆきにけり(駒ヶ岳登山)

野村 完 六

見みはるかす吉備きびつ野原ののは千町田ちぢょうでんの垂穂たれほゆたけく海うみにつづけり

旅に見る喜撰が岳はいただきを飛べるからすもながめられつつ  
見はるかす因幡伯耆の山並に夕せまりつつ雨來るらし(奈義登山)  
月あかり黒澤ねろの山燒のすでにひろがりて果てしもあらず  
神奈備や青葉があひをゆく水のとこなめにしてたぎち流るる  
青山の流せる水をいくたびかわたりつつ聞く夏のうぐひす  
ひとところ日照り明れる大奈義のまうへあまねき雪もよひ空  
さしいりてあかきはよけれこの月に明くるあしたの霜をおそれつ

野村 光 鳴

露ふかき朝の畑道すがしがし卵抱きて草にゐる蜘蛛

眼もはろに魯桑ろそはしげれど繭安にかひこを飼はぬ村のしづけさ  
畑茄子にうるし光のつや出でて梅雨明日和さだまりにけり

野村 水雄

眼の下に起き伏しつづく山の際本際ゆ四万十川は日に照りて見ゆ  
海を往くころはさびしはるかなる古人の旅も思ほゆ

野村 直子

仰臥十四年

はり越しにさし入る冬日あたたかき衾の蠅を易くとらへつ  
春鳥のほがらほがらに鳴くきけば寢返り一度うちたきものを  
十年ぶりに病ひの床を起きし時吾れには夫つまも子もなかりけり

野村 清

庭雪の消えぬいく日や風吹きて檜ののこり葉をまたしげく落す  
吹きあつる風に眞向まむかひひて鶴てふづるのたじろぎもせぬするどき眉宇まなざし

築山のうしろ廻る道あかるし紫陽花のはなのあらしなりける(芝濱離宮址)

おほに蒸して今日も逸れゐる梅雨ぐもり高壓線の弛みおのづからに見ゆ

照りつつ蒸す雲のおもみに堪へがたし傘提げて通る議事堂の前を

曇天にナチスの赤旗垂れさがれり獨逸大使館前にバスを待つわれは

河岸通埃立ちつつ晝深しふと現れて乞食はゐる

冬の田は凍みつつ蒼む雪の上に稻莖ならび皆さむき影

魚らはそれぞれの生きのひそけさよ海の断面をおもふことありき

くろき貨車置き去られゐる構内にひとり來ておもふ憊れあるなり

船名旗色あざやけし冬晴れて一望の港のひかり眼に沁む

吹き入れて風すずしさよガソリンカーは青葉のなかの單線を行きぬ(多摩線)

白き柵いよいよとほく目には見ゆその圓周を走る馬おもふ(東京競馬場二首)



湧きやまぬたのしき感情は夏のものなりみどりの芝生に身體を投げる  
竹煮草葉のうへにくろき葉のかげあり朝すでにして照りのはげしき  
戻りはやき冬空さむしふり向きて銅像大村益次郎の眉太き見つ  
夜半に覺めて寒く聞くものか縁側に鼠あそぶらしぞろと尾を引く  
夢を見つつ明けにし朝のたよりなさ水ながす音をききてはかなむ  
鋪道に灯のかげさむくながれゐしが黒き水のごとく雨をおもひぬ

野 村 節 子

つれづれの話はつひに亡き父のことに及びて母ともだせり

野 村 穢 也

やややに高まりゆきて松の風山<sup>ひとやま</sup>全山のひびきとはなる

不用意に人に言ひたる言の葉を今も悔いをり年へし今も

野村歩

瀬となれば溪谷たににひびかふ水の上ぶなの繁葉の緑おし照る（奥入瀬溪谷）  
雨ながら明るく暮るる茅山の茅は芽ぶけりところどころに

野村鳴淑

娘むすめをうりて足らず草の根木皮きばだすら食むとふ國の年の寒さを（津輕凶作に）  
葉を閉ぢてねむる夜ごとの花合歡はなあむぎの家ゐの夏もふけにけるらし  
朝ぎりはほのかに紙の濡れいろを水藻の草に漉すきながしたる

みちたらふおもひやいかに日に向きて孔雀の翼はねのあやをひろぐる  
野村陸水

繭の値は下押しつづけ村人のおのづからなる言ことのあらびし

山羊のいきあかとき闇にかそかなりかぎす灯ひにたつ乾し草のほひ

四十雀群れてしばしば落つる山冬至の日かげおとろへにけり

收穫とりのいれの乏しき村に小作米のさわぎおこりて秋更けむとす

吹雪ふぶく夜を板谷峠を越す汽車の汽笛さびしく臥床ふしどにきこゆ

雪はれし空にうごける夜の雲の凍らむとする湖うみにうつれり

ひとすぢの櫓みち青く照らしたる月かたぶきて山は寂けし

野村 蓉子

土くさき出水の街をあゆみ來て夾竹桃に咲く花を見つ

野村 肇

草山の起き臥し遠くつづくかぎり開墾の火は燃えてゆくらむ

野村 作太郎

病む妻の氣分よろしき枕べに尋常二年の子は本を讀む

野村綱男

磯山の岩のはざまに老いさびて生ふる蘇鐵に荒波は寄す

たくましき龍舌蘭の葉の青に消えつつかかる春の淡雪

嵐めく春のまひるの遠雷に亂れて舞へるさくら花かな

野村泰三

芋粥のふつつ煮ゆる音聞きつ泥足洗ふ夕なりけり

夕飯の箸とる指に雑草の匂ひしみじみ親しかりけり

野本サダ

夫渡歐の日近し

一切の外出をたちて旅に行く夫つまにかしづくあけくれ早き

乃木邸

將軍夫妻瘞血えいけつの地と石にあり冬木の枇杷のかげくらきところ

西郷隆盛の書翰を或る人より贈られて

戊辰の役に死にたる人に面目なしと書ける隆盛の字の太きかも

野本 三郎

つれ添ひて知りつくしたる安けさに妻はあるらしこのあけくれを

野本 多霞夫

雨ふふむあしたの池の水明りあやめの花の色しづかなり

ねもごろになすびの苗を植ゑつけて夕べしばしの吾が静ごころ

枇杷暗く軒端の霜に咲きて居り鹽をきかせて冬菜漬け込む

野元 純彦

朝晴の海をこころよく走りゐる船のマストの旗なびきたり

鋤き上げし花壇の土を歩みゐる猫のからだのしなやかな伸び  
咲き足りて重げにたゆむ純白の牡丹にくまなき光のふかさ  
静かな重味を持ちて母家の大なる藁葺屋根は安らかに据る  
赤き絨毯をしけるケビンの卓上の花瓶一杯にゆたかなる菊  
照明燈の光のなかに城隍廟の琉璃瓦青みをおびてうき出づる深夜  
磨硝子の外にとまりたるキリギリスのすきてみゆる色は軟かな光帯ぶ  
陶すまものの蒼龍の胴にかけし釉薬てらてらと光る生の緑色  
眞すぐをみつむる少女の眼の青み清純に澄みてかすかにかげあり  
雨ふりそそぐ崖のすすきの枯莖をしをらせてとまる夜明の雀  
冷蔵庫よりとり出す皿の白陶の冷たくありて黒き鮎を並ぶ

鹿兒島海濱院にて

我が病ひを見舞ひはるばる來てくれし身重の母に寢て向ひたり  
氣をつけて板橋わたれ夕潮のみち隱さはんその板橋を(母の歸るに)  
痰の血のいまだやまねばひとり寢るこの夜を怖る暮ることさへ  
欲しきものかひてたべよと錢くれしひとりの伯母を我が忘れぬし  
訪ねきておほくかたらぬ學友のころし深しさびしけれども  
この濱に寢てさびしけれ朱き欒ぼんの實照りて明るき月夜となれり

退院後

ここにして必ず癒えん朝あさな朝あさな落葉をはくも箒をもちて

野呂凡平

草かきの長柄に止まるやまとんぼ昨日も今日も我に遊べり

埜中正也

討 匪 行

一日の戦終へて歸るさにかりがねききぬ昏れかかる空

三年兵を送る

四方やまの話はすぐに今日發ちし満期除隊の兵に落ちゆく

能 勢 房 子

靜かなるわれの心と唯だ告げん内の涙は永く秘めつつ  
わがこころ嵐の後の海に似ておほかた安し今は歎かじ

能 重 眞 太 郎

大いなるうねり乗り越え乗り越えて發動機船つき進みゆく

岩間ゆくせせらぎは谷の紅き葉の一つ一つをふるはせにけり



能美 千秋

菱の花白くかぼそく咲きてゐる大堀の面に夕かげのびぬ

老母とひとつの蚊帳に臥りゐて高き寢息を聞くはたぬしき

能村 潔

わたつみを見のはるかにも光り消ゆる物あり澳おぼのそのの暗さに

枯葦はの秀はをゆく風の暫時いままは水に落ちつつ光るかそけさ

登里 有三

どす黒きこぼれ油に照る眞陽のきらぎらと暑し鐵工場の間

この朝の霜深からし門の邊に淺蜷なみをからと量りゐる音

顯微鏡下鐵の微粒は銀色ぎんと黝くろのうつしき層となりて明りぬ

咲き明る花の下びに押並おしならめて何かものめく迷彩塗装カモフラージュの戦車

戦車いまカーブするらし展望窓より見る菜種畑の黄なる廻轉(公試運行)

重油爐に鐵はあかあかと爛れゐて鐵工場暗し夕迫りつつ

熔接工場夕さり來ればしきりたつ鐵の火花の目にいさぎよし

熔接の蒼き焰に吹かれゐてどろりと白し鐵の耀き

迷ひ入りて玻璃窓にいらち飛ぶ白蝶とかかはりもあらず機械とどろく

わがおもひ侘しきことにあるときもミールングマシン鐵を噛みゐる

則 莊 司

二階なる我呼ぶ妻の口眞似て片言交り吾子も呼びゐる

法 月 俊 郎

ゆくりなく奈良にきつれば嫩草の山焼く夜とて人群れて居り

相聞居の主歌行脚に出でしに留守居して

寒き室に心ばかりの豆を撒きおのれひろひて床のべにけり

乗松 正二

切りつめても給料日まで保たざる財布の錢をかぞへみるかも

羽方 輝治

作業なりて工廠長の振りあぐる槌にわが目はそそがれて居り

生れし子に湯をつかはせて室むろのうち落ちつきければ戸を明けにけり

羽田 猪市

桃の花既に咲きぬと兒等は言へど出でて見む日のいつと知らえず

せせらぎの音を聞きつつ朝床あさどに杳かなることを思ひるにけり

羽田 野繁子

み佛となり給ひたる我が父のみ顔やさしくなりてきませり

羽根淵 僊一郎

夕光ゆふかけに若葉磯山汐しほぎきは遠くけぶれり春蟬はるせみの聲

羽野磨 洒夫

憶 亡 母 二首

たらちねの母が在さぬ部屋に行き何すとはなく吾は立ちゐき

うからどちなづさひて行く葬道あふち棟むねの花の散りやまぬかも

就職せし誰彼のこと語り居て臥處ふしどに父は寢に行きにけり

職を罷めし伯父の何氣なく言ひ居れど金のことにて苦しむらしき

羽 場 筍 三

庭隈は伐り残したる白樺も柏もありて雨ふりそそぐ(八ヶ岳山麓 笹原温泉)

槇山をこゆれば低き牧草帯みづけるあたり草萌えて見ゆ(立科山麓)

羽原立夫

通り過ぎしカフエの入口につこりと禮せし女給は教へ子なりき

羽山富得

かずならぬわが身をおもふ人のゐて朝の鏡を拭けばうれしも

波多江友吉

小作米未納のいひわけに行くことの氣まづさを思へり朝床にゐて  
晝はひるの取り入れせはしうから等と月あかき夜を出でて稻刈る

波多野土芝

夜ふくるまで北洋材を積み取りぬ筏の環の觸るる音（露領權太西岸）互ゆ

波多野幸彦

雪山に友よぶ聲のこだましてひそけかりけり山の大きいさ

波多野 傳八郎

秋の日は障子に明るし母上は部屋に蒲團の綿つくりします

波多野 眞一

この夜さり聽けばきこゆる田蛙のまだ幼くてくくみ鳴く聲  
さねさし相模野に降る時雨の雨山のはたては片明りせり

波場 直矩

家事にかまけて居ればちさの花いつしか散りぬ垣の内側うちどに  
夜のしぐれ目覺めて聽けばわが庭の落葉に降りて山に移りぬ  
生垣のきばちすの花日に多し秋菜播く日もすでに過ぎつつ

芳賀 日出男

風止みし今日の夕べに近山は雪か降るらし雲沈みたり

黒濁りしつつ流るる渾河の水にふるさとのごとし子等の遊べる  
野の上に淡々ともる部落過ぎて我が汽車は遠く曲りゆくらし  
冬の夜の凍れる土に物音の絶ゆるさびしさを姉は語れり

飯香ノ浦海岸

入江なし冬あたたかき濱の村甘藷をあまた砂にかこひぬ

土 師 龍 吉

潮道を水は溢れて浸しゆく鹽田に降る春雨あらし

海霧<sup>ガ</sup>罩むる海より降りて春雨は岬山道に音立てにけり

影暗き島のそびらにのぼり來て夜潮に照りぬ<sup>いさよひ</sup>十六夜月は<sup>づき</sup>(輦)

馬目櫂のしたたる若芽潮に照る島の浦わに舟つきにけり(仙醉島)

昏みゆく宮居をひたす潮みればこの島山になかくあそびし(宮島)

葉山耕三郎

暮の雪しろじろと降り厩より見てゐし馬の顔も昏みぬ

立ち枯れの黍の穂先に秋雨のけぶる信濃をわが行きにけり(旅)

テロリストらを取調べし夜に

金ペンを夜ふけひそかに拭ひをりテロリストらの怒りかなしみ

長谷川・如是閑

福泉正義氏が木片集の歌に和へて

雪の國越のま杉の香に酔ひてうたふ大工の歌の香ぐはし

柀目つむ杉の赤味を切る味を歌に歌ふよ大工なれこそ

珠



崑崙に珠たづねんかあめりかのくろんだいくに黄金ほらんか  
崑崙に珠はあれども珠みがくわぎを知らねば珠無きに如かず

狼が狐きつねに語らく汝みづかがもてる寶の珠をわれにおこせかし

狼に狐答ふらくこの珠はわが珠にあらず神の美玉ぞ

狼はふたたびのらくその珠をわれに賜たまふべくその神に申せ

かへり來て狐の申さく神のらくこの珠ゆめな狼にやりそ

狼は怒りてのらく狐をたべてその珠とらん狼ぞわれは

かしこみて狐の申さくいつまでか生きん命ぞいざとりて喰へ

たゆたひて狼問ふらく汝をとりてわれし喰らへば吾を怨むか

あざけみて狐答ふらく空蟬の命をすててなじか怨まん

狼は牙かみならしいざとらん狐の命と狐のその珠

ひとりごち狐の申さくわが友の大虎小虎もた黙もたにあらんや  
いぶかしみ狼問ふらくなが友の大虎小虎吾をいかにする  
をたけびて狐はさけびぬ我友の大虎小虎汝をとりて喰はん  
をのきて狼申さく汝をたうべ汝の珠とると吾は言はなく  
又なす狼の牙はなめらなる狐の舌に得もしかずけり

長谷川 源 司

室の灯のさす庭石にひとときやしぶきをあぐる夜の雨見つ  
湯氣こむる染場にをりてあぶら蟬ひたなく外の日のひかり見つ  
霜どけてぬかるむ庭に粗筵ぢかに敷きたりその泥の上に  
青淵にさしとほる日はみなぞこの青き巖を照らしいだせり  
むらさきの藤波のはな咲きさかる光の中に飛ぶ蜂おほし

けふ一日に割りたる薪が堆うづたかきわが庭のべの寒く暮れゆく

長谷川 信子

しらがぬく吾み子が柔な手のこそばゆさ思ふことなく夕をわがゐる

長谷川 抱星

颱風のをさまりし庭いちめんに狸々木の花ちらばへり

厦門に住みし日の歌

寝につくと鏡に向ひ耳輪はづす支那のをみなと在るが娛しさ

長谷川 静逸

静かなる風に菊の香漂ひて十一月の空定まりぬ

長谷川 吉司

結界の日向にわづか畑ありて秋あをあをと葱鉾たてり(光徳寺)

しろじろとしぶく激湍たぎちに灯ともふりて築見まはりし人もどり來る（最上川）

長谷川 銀作

銀山かみやまの生野のやまの春たけて草はのびたり赤土原（生野銀山）

芝原にあふむけにねて空を見たりかかるいとまのかつてなかりし

田の道をかへりゆく友のうしろでのいつまでも見ゆ月の明りに

ものものしく印刷機械動くなかに整然と働けりインテリ囚（小菅刑務所）

敵堡壘の側近くまで掘り進めし坑道作業を思へば泣かゆ（旅順東鷄冠山北堡壘）

雨雲のおほへるなかに月のかげ息づくがごとくあきらかに見ゆ

冬の日の光なごめるわが部屋に置きて見る壺の一つ一つのかげ

日の暮のかげしづみゆく部屋のうちならべし壺にもものいふなかれ

日の暮のあかりうすれてゆくなかに李朝の壺のかげはみだれず

したしき義兄なりしかど一たびも義兄とはよばず師としおそれき(牧水の墓前)

長谷川 ゆりえ

弱き子にんにく食はせ家人みな申し合せて臭きをいはず

箆笥の引手を一つ二つとかぞへつつ子の算術がはじまりにけり

眼を病みてなにも出来ねば氣まかせに削りにくくなりし鯉節を削る

凶作の後の山形へ歸省して

どの家にも子供ばかりがふえてゐて拂下げ米のまづきを食べをり

とり入れし馬鈴薯山と積まれたる納屋に入り來て何かゆたけし

田の草をとりゐしひとり立ちあがり入陽まともうけて小さき

働きて働きて日々にすこやけき母上の手はかたく大きかり

牛を見に吾子はつれられいでゆけり裏の畑に牛のこゑきこゆ

長谷川 精作

海ぎはの丘はことごとたがやせりいまは冬べの麥うすく見ゆ

驛を出て日暮の濱にもとへばこのくに人の言のしたじも

雪の田に鴉い下りて餌をほれり消ゆべくもあらずこのふかき雪は

その一羽つと飛びたてばのこる一羽みがまへて居り雪の上の鴉

朝戸出に見たりしままの兒らの靴けふはいちにち外とにいでぬらし

長谷川 建三

飛行機を見たるついでに窓の障子とはあけておきけりよき日和なる

長谷川 千振

昭和八年滿洲熱河戰に郷土都城聯隊出動

廿日月冴ゆるホームに押し寄せし人らも兵もたかぶりてゐつ

長谷川 茂夫

大湧谷にて

ここにして噴き出づる湯は焼石の晒れしが上を音立てて流る

十國峠

大空の青と相溶け伊豆の海初島を空に浮かせたりけり

初めて窪田先生を御訪ねして

つつしみて仰ぐみ顔を先生は笑ひとなして見返し給ひぬ

保險會社

外務員至らぬ地なく月々の契約書こそおびただしけれ

林金塗ウライ等といふ蕃人もわれよりや富む契約多き

嫁ぐとて辭めゆきし子等如何ならむ生活せるやと時に思ふも(女事務員)

長谷川 央

久しぶりに來しこの家の庭先の馬屋を見れば馬のゐるかも(隣村の從姉を訪ふ)

長谷川 さと

草むらに夜さむしみいる秋の暮たまたまなけりひくきこほろぎ  
つはものら今朝いでたてりふるさとの冬草の上におく霜ふみて

長谷川 潔

天づたふ日の傾きに海面うみづらはひたすら汐の流れゆきける

長谷川 鈴

いくばくもあらぬ命をサルピヤのしづかにかあかし此の夕庭に  
金粉をまいて靜かな月夜なりぬれた若葉がおしだまり居る  
泥色の汚き蛾ぞと見て居しにべつとりと吾が頬にとまりぬ



長谷川 可村

生きのびてさて何ほどのこともなし髭そりおとし孫とゐるなり  
よきことを耳にはさみてまかりしが考へてみて詮なかりけり  
名ある人はた金もてる人々を親しきが如くこやつも言ふかな  
日のさせる紅葉なるにぞ歸らむと思ひながらになほも見てをり(瑞寶寺)  
なししことなさざりしこと悔いもすれせめてもの今をなげかじとする

長谷川 暎二郎

次の間の電燈の光さしおよび枕べに立つ湯氣が目に見ゆ(病中)

山仕事折々

松山は日の光さへまばらにて下土の濕りひと日かわかず  
蔓草のからめるままに素枯れたるおどろが下のせせらぎの音

冬ながら峽田は水のぬくからむ暮ちかくまで烏あそべり  
背負ひたる落葉の籠は重からむおくるる妻をかへり見にけり

霞ヶ浦湖岸土浦 二首

この朝時雨降りすぎ洲にあげし白き川砂うはじめりせり  
夕されば出島の鼻にともる灯のまたたき早し風立つらむか  
土用明の日癖の雨か晝すぎて茗荷畑に音たてて過ぐ

長谷川 半兒

蛇一つ羽音微かに渡りゆく百日紅のあかき夕暮  
秋の風白々と吹き電柱の眞直ぐに續く見れば淋しも

長谷川 草一

足引の國<sup>く</sup>上の山の松風の音を寂びしみ住みたまひけむ

山藤の花紫に垂り咲けり溪の水みぎは際に仰ぎ飽かなく

吐山 芳子

飛行機の唸をあげて宙返る見ずにゐがたし朝も夕も(航空隊開隊)

馬場 俊吉

日は澄みてもものあきらけき街なかを兵士ら汗たれて過ぎにけるかも

馬場 秀雄

昭和十一年二月事件

國をあげて一つ心になりぬべき秋こそきぬれ世はただならず

國をおもふとごころこりてはやりたつ兵らをさとす言のかしこさ

雲 仙嶽

啼きてゐし深山鴉は飛びゆきて躑躅の群落に日は翳るなり

山若葉ひかりかがよふ眞下には朝より迫門せきもんの波あれて居り  
夜なべ終へてたまにそひ寝ぬる妻が肌の冷えをかなしむ夜ごろとなりぬ  
もだしつづ妻が桑切るさ夜ふかし妻には妻のさみしさあらむ

馬場 恒 吾

柿の木の葉は落ちつくし眞赤なる實のみ残りて冬は静けし

馬場 静 浪

水上生活者の歌

潮すでにそこるを見れば橋杭の青きぬめりに月傾ぶきぬ(そこるは干潮)  
舷燈の橋の間くぐる水あかり出潮の闇にうつろひにけり  
月のもと落す潮のうづまきつづなほ橋臺に寄るとするなり

月はまだ落つるに間ありさす潮のこの大潮の流れゆたけき

筈ひまにからむ青海苔にすら光あり四月なかばの大潮のひる

落潮おとしほの目に立ちて早し埋立や護岸の杭の青苔のひかり

橋の間の夕上げ汐の渦ふかしとろくかぐろく満ちにけるかな

東風こちつよく夜潮揺れさす上總滯月のひかりも彼岸ひに近し（上總滯は深川と石川島の間の滯）

鯨ひまつりの舟あつまれる沖すぎていよいよ潮はま青あざとなれり

河岸船の高荷の苫に降る雪のいまはましろくつもりつつ見ゆ

朝光あけかげに霧ふりかかる港ぐち夜曳の筏ながと見ゆ（夜曳は夜の曳船）

沖風の西にかはりて風ぎにけり今日の日和も定まりぬらむ

棧橋にかかれる汽船かふねの脚たかしまきおろす荷の霧にぬれたる

沖かけて時雨もよひの雲低し帆走る船の曲まがりつつ見ゆ（曲るは迂回）

東風吹けば低くおほへる雲ふかし潮にさきだちて雨ふりきたる  
夜に入りて東風たかくなれり曳上げの舳おほきく浪にゆれつつ  
夜を荒ぶ東の風に月いでてあかあかと思ゆる潮の高うねり

風の日は富士近く見ゆ船にありて雪の寒さを思ひつつある

潮垂み水の面をすべる海苔舟に朝の風ぎのいろさしにけり(潮の垂みは満)

船脚ふかき汽船燈臺をすぐるあり信號の旗すでに掲げぬ

夜を下る傳馬にかあらし舵の音の岸にひびきていま橋の下を

晝そこり南風つめたく吹くなべにをりふしは潮のひかりさびしき

馬場 汐 人

早春桶狭間 二首

とどろきて過ぎ行きにける汽車のけむり枯野がなかにしばし残りぬ

麥青き丘畑ひくく鶺鴒は波うつがごとく飛びつつぞ鳴く

くたびれて歩む山峽みちなかく水田に闌けし陽がうつりをり

山ちかくかこめる町の空せまくほの明るくて雨そそぎ來る(木曾福島)

たちまちに暮れはてて黝く山せまる倶知安と云ふ驛にひびく汽罐の音(北地)

川下の雲にうするる夕茜河原さむざむ砂つづきたり(長母寺殘照)

盆興行の活動巡業の旗たちて海に沿ひたるささやけき町(北海道隔目)

安曇野あづみのの遠の山嶺に朝ぐものうごきそめつつ照らふもみぢ葉

川上より寒き風吹く梓川の川瀬のなかにあがる白波

馬場謙一郎

大正十五年三月二十五日夜島木赤彦先生御危篤の報に接し  
信濃に赴く

新室にんむろの木の香はしるし小夜くだち心寂しく炭をつぐなり

土浦より潮來に舟遊

湖<sup>みづうみ</sup>を吹く風寒く立ち枯れし眞菰はなべて水に漬<sup>つ</sup>くなり

筑波山登行

朝の曇り雨となりつつ土浦より汽車の揺れ激しく私線に入り行く  
山の雨一時激し檜櫓のみみづるもあり松多きなかに

寶珠山 雪枝

月に供へし薄の影と梨の影部屋一ぱいに長く伸びたる(九月十五夜)

坊 英五郎

日立鑛山地下二千尺

太古より陽<sup>ひかげ</sup>光いたらぬ地底なり二本のレールにぶくひかれる  
迎りゆく坑道ややにせばまりて發破をかけし音ぞこもらふ



坑内をいづれば朝の光なり眩めく瞳をば上下にうごかす

小諸懐古園にて

浅間嶺のなだりひろごるはてにして小諸の城のあとどころここは  
いにしへはいにしへながら夢もちて人は生きしか城もつくりて

某紙上にて曾て教を受けし美濃部博士のその後と題する寫眞  
ありしをみて

野の花の倒れたるをばみ手もちて起しゐたまふおん姿かも

野の草の一つにさへもあたたかき老いの心はよせたまふにや

萩倉 ちさゑ

翁ぐさはしろくほほけて高原のさざりまじりの風に吹かるる  
紅色の莖やはらかきいたどりも折りそへてもつわらびの中に  
霧の中に雨あし見えて大きな石もしづかにぬれてゐるなり

白きてふ二つもつれてくだりゆくさぎりつめたき籠坂峠  
秋の陽に背をてらされて草中のこの一筋のみちは遠しも

萩原 四志

滿洲事變直後の長春

國境のゆゆしさならむ騎兵等の一夜を寝ねず移動しゆくは

萩原 英太郎

年賀式ゆかへりてすわる机の前障子にうごく日光ひかげしづけき

蚊帳のなかに放ちし螢ま夜なかに眼ざめし時も光りゐにけり

向う田に代かく馬のひとつゐて雨あし白くうつりくるみゆ

外風呂の暗きにひとりひたりつつ秋ふかむ夜の風ききにけり

宵ふけてとなり家の客かへるらし降りしきる雪を言ふこゑきこゆ

萩原 大助

ささやかな二階でも借りてやり直さうかその言葉も女の答へにならず

萩原 もと

ひとり居てあたふた暮す冬の間の仕事はかどらず日のたちゆけり  
はかどらぬ仕事に夜々をふかしつつ暮のきびしきさむさにあふも  
ぬれそぼち稻刈りびとら歸りくる夕べを何もせず吾が居り

萩原 功

夕あかり暮れしづみゆくときながし炭窯口に空仰ぎるつ

五月雨のしぶく峽田を鋤かして追ふ馬もわれもしとどに濡れつ

明け切らぬ門田にふかき靄のなかと折苗をすすぐ音する

ほの暗き青田の涯に傾ける十日の月はあかくにぞれり

日にけに寒さに向ふこの朝は西より晴れて風いづるらし  
日短かくなりて忙しきこの日頃糶の乾きが悪くなりたり

萩原長

堤防に砂利運搬の荷車の並べるなかをくぐりて下る

萩原菊世

日だまりに竹をみがける爺一人花のさかりをひとかげもなく  
くろかみのひとすぢをだに惜しみにきいつかはあはむ日もありぬべし  
ただに待ちて命細りぬこの春は花みることもつらしと思ふ

萩原貞雄

國遠く來たりけるかもセイロンの朝の渚に立網を見る(セイロン)

朝月夜水田に白く動けるは丹頂鶴あしたつづならし未だ飛ばなく(印度縦断)

城砦の木門にのこる露西亞文字もはろに來たりし旅人なるらむ(ハイデルベルヒ)  
熱風のさなかにありて見はるかす大アトラスの雪の遠山(モロツコ)

萩原眞都子

ほのかに樹脂のにほひのたちこめて水の面にみしるし松の花粉は

萩原君子

柿の落葉濡るがに晝の時雨降り牡鷄しづかにふくらみてゐる

みちのくの秋草の中に封切りし父が便りは言短かけれ

裸木の枝間枝間の張りみれば心おどろく去年こぞのごとくに

夜の闇に思ひつづけて歩み居しが既に久しきせせらぎの音

萩原芳

つぎつぎに走り走りてゆく雲の山のうしろに行きとどまるか

家族離れ離れに住むことありて

物置の箱をしづかにかたづくる貧しき母となりましにけり

萩原 静子

傘もてどささずかたらふひとびとは山の雨さへたのしむならし  
きりぎしのそこひに湧きし霧見れば壯さかんなるかも荒磯に似たり

萩原 榮次

妻を悼む

千人はくすし我が手にいやしたり一人の命すくふすべなき  
南極にペンギン鳥とをるとき寂しさ來るいかにすべけむ

父を憶ふ

歸り來て門をくぐるやしはぶきを三つ四つするが癖なりし父

木剪きばさみの音を聞かざるこの日頃父なき庭のうらさびしけれ

薄 葦 穂

山時雨庭にくる日のかさなりて鶏頭あかしくさむらのなか

瀬の音の遠のき聞ゆさやさやに更くる霜夜は晴れゆくらむか

白 駒 白 夢

相 聞 二 首

向き合へる机の下につつましく揃へし妹が足を見にけり

かかはりなき世間話をするさへにうつむきやすき人のまみかも

あはあはと夕日さしたる港の町帆柱うごく屋根の向うに(大阪安治川)

夕暮はすでに涼しも今年竹そよぎやはらかに音立つるなり

朝々の霜深くしてみぞそばは花咲くままに素枯れなむとす

箱崎 正雄

行合川淀める水は葦に觸れてしばし遠長く水脈光りをり

間 鷺 郎

秋蠶飼ふ桑の梢の浅みどりここかしこ摘むその浅みどり

橋 形 定子

濱松の木の間ゆ見え來る朝の海に發動機船は水脈ひきて速し

橋 口 次夫

石炭のなだれ豊けし晝ながら赤き火の燃ゆここは鞍山

橋 口 三喜

木の芽霏われの心はいはけなく小鳥の聲にくすぐられをり



一つある頬の黒子はくごのほふほど牡丹雪ふる日のくれの窓

橋 口 信 吉

父逝く。臨終に間に合はず

呼吸絶ゆる父がわづかに手をのべて胸のあたりを指ざしむしとふ

橋 口 ア ヤ

業成りて歸り來たまふ兄上の白服すがし夜の停車場

橋 口 正

東朝鮮灣の一角に在る西湖津燈臺附近

海ぞこに潜かづき入りたる海女あまの足白く短し海草のゆれ

咸鏡南道咸州郡の山奥に在る歸州寺に詣づ

ほのぼのとさ霧こめたる朝庭に太く鋭しつるの一聲

橋田東聲

夕かげにおのれ揺れゐる羊齒シズメの葉のひそやかにして山は暮れにけり

父逝く

ふるさとの青山に月は照らせれどわがなき父にまたあはめやも

葉山の濱にて

相模の海しら浪のたちのかなしきはひとりいゆきて見ればなるべし

平福百穂畫伯より鴨の繪を贈られたるにうれしくてよめるうた

すめらぎの大内山をわたる風耳を澄ませば松ふくきこゆ

ふるさとの森の家なる兄におくる歌

立てかけて壁に干したる胡麻の實のおのれはじけて散る頃ならむ  
ふるさとの兄をおもへば眞竹藪裏山にしてさやげるきこゆ

元旦試作

端坐して耳をすませばものの音かそかにどよみ年立つらしも  
硝子戸にかげさす庭の裸木の揺れこまかなり朝の目ざめに

洗足池

ささ濁るさつきのいづみ草を浸しほのかなるかも林の中に

病弟看護のため歸國の途神戸より乗船

ゆふ空に片照る雲のあゆみ遅く帆をおろしたる帆柱多し

鶏を飼ふ

垣つくる手元をぐらし裏屋地の雑木のひまに月いでんとす  
見にくれば寄りかたまりてねる鶏の含み音さむし月のあかりに

手賀沼

舟ひとつくもれる沼を風早へ人わたしをり近き葦の音（風早は對岸の村名）

赤城山茶木畑峠

幽かに鳥の音ぞする木々のもみぢ日に下照りて山のあかるさ

病みて

寝返れば縁えんのかま櫃こにかぎられてあゆめる鶏とさかのみ見みゆ

小夜床にひとり目ざめておもひ遠し籠かごに寝る鳥の羽根つつく音

印旛沼の歌

眼にとめてみればまぢかき揚雲雀羽たたき啼なけり空のくもり  
に  
草笛を吹きつつおもふこの沼いづみのにごれる波なみはいたくさぶしも

鹽原の歌

いまはれし雨のなごりは前畑の牛蒡ごぼうの花に滴りて明るし

しづかなる朝の目ざめに甘露木の花にほはせてわたる風あり

春來る

夕川の井堰をおとす水の音よみがへるおもひわれにありけり

新秋

鶏頭のまだいとけなき葉の紅あかを妻といたはるゆふべの庭に

遠き樹にひぐらしのこゑ啼きそろひゆふべとなれば母のこひしき

光照寺良寛和尚得道の寺なり

門に立ちて靴につめたき敷いしたみ石道松葉の降るに眼をとめにけり

きこゆるは鴨鳥ならむ庫裡の屋根に雨のとほるを見つつひそけき

中尊寺金色堂 一首

み佛の金泥きんぬいさへ古りていにしへにさかえしものはみなほろびたり

おのづから吹きおこる風をさびしめり松の林に歩み入りつつ

前橋行

株毎にたばねられたる桑の木のかげあたたかし乾ける土に

長塚節の墓に詣づ

村の家の障子明るく灯をとほし藪かげ寒きゆふべ來にけり

竹やぶに荒畑つづく起伏のさびしき國に君はうまれし

春あらし

檜林をひたもみに揉む風吹きて日中ちちゅうの日かげいたくわびしも

この年も母の日ちかし庭の上に椎の瑞枝みぎえの秀ひき立つ見れば

大和薬師寺にて

これの世にかかるたふとき佛つくりいにしへ人は名さへとどめず

みほとけは生きてのこりておはせども人はほろびてはるかになりぬ

唐招提寺

松風は吹きゐたりけり門前の松かさ多き松をわすれず

檜尾御陵

谷かげの參道いまはたそがれて御陵守みよさきもりは山をくだれり

遠くにて鴉なきしが冬の日はや暮れ落ちて音ひとつせぬ

長崎追想

何といふうつけさぞこれは丸山の晝の廓を歩きつつおもふ

身邊雜詠

けさ吹くは野分なるらし庭の萩むざんに押され直らずにある

障子入れて淺宵あさよの灯しみじみと夏のすぎたる寂しさにをり

子をひとりもらはなと心におもひつつ子をもたぬ妻になほ言はずる

橋田木犀子

萩焼の陶兵衛翁がつくりたるをかしき急須見ればたぬしき

橋爪丘の人

頭下げし子供を見れば吾が兒なり登校の朝のこのつつましき

橋爪啓

安らかに眠れる吾子の面輪には亡き吾が兄の佛ありぬ

橋本關雪

中尊寺にて

普陀洛や立木ながらに刻まれし御佛なれば手にも觸るべし

あな尊と手にもふるべき御佛はうつし身ながら地に立たせたり



扶餘にてよめる 三首

百濟くだらなるもの賣りをのこみちのへにうづくまり居てみな冠かむりせり  
みはるかす百濟國はらはろはろと稻穂のはては白雲にして  
王陵の丘のべちかく夕されば黍の葉かげにきぎすなくなり  
親は木に桑つみあれば子は下に桑の實食くもひ犬と遊べり

橋 本 敏 夫

宮 島

白帆ふたつ港出でしが光りつつかそけき虹の尾にまぎれたり  
潮騒しほさわに朝間さびしき虹の尾は島峯を逸それて沖にかかりつ

明治神宮御苑 一首

み苑そのふ生の晝もけ深き樹の茂り齊墩果の垂實の青くけぶらふ

鯖雲が大きく垂るる港口遠くかすみて入り來る船あり

しみじみと牡丹を嗅げば眼尻まなびりの小皺かさに觸れてかゆき香の立つ

牡丹花にかそけき風の籠りつつ花びらの陰影かげのそよめき明るし

吾妻山

落葉松かからまつにさがる松蘿まがせのあざやけき色に凝して眼はまたたかず

明治神宮

しだり尾を曳きてひそけき雄雉おとぎす子や落葉の斑雪はだれしばしあされる

代々木の原

土煙り渦巻きあがる原のはて戦車隊の列の向かへむとす

海上

揉み上げて湍なぎち渦巻く舳への波のとどろき寒し背筋に應こたふ

横濱に續く神奈川の灯の列の闇におぼめき次第に遠し  
曉の海のとよみはまだ暗し棧橋の燈を搖りつつぞ寄る

橋 本 政 一

長田附近

大樟の國有林の木下道日の照りて樟の香ひみちたり

三柱神社二首

葉ざくらの並木の風やそぞろかに宮庭したし子と歩むなり

この宮の池の水際みぎはのあやめ草花いまだ稚わかし風に向きつつ

夕くらき門庭さきに遊ぶ子に言あやしつつ通る人あり

姉弟むつみ遊べり歸り來しふるさとの家の門庭さきに

母亡くて育ちし甥やもの欲ほりて泣きつつは寄るその祖母おばははに

常臥<sup>とふ</sup>しの母のなぐさに送りにしラジオは良しと言ひたまひたり

兄の死

釣り好きの兄にてありけり釣の竿土間の暗きにかけしままなる

H・K君を悼む

肩並<sup>な</sup>めてあるきし町をひとり來てつひにさぶしく歩をかへしたり

橋本俊男

船宿の前川べりのよせ舟にうすら日のさす冬さりにけり

浦安の町にこしかどあてどなし人ゆきかへば足早めたり

今日ひと日言葉かはさずふさぎたる妻の眼のひきしまりけり

幼子をつれたる妻がかへりおそしあるまじきことをおもひめぐらす

橋本愛愁

晝食すと岩間に柴を焚く煙青山の上になづさひゆくも

橋本 徳 壽

薩哈連の西海岸にいでにけり大陸は見えず山ひくみかも(薩哈連島)

蒼浪の天に寄りあふ海遠くわがつくりたる船はゆきけむ(なりはひ)

遠き人みな歸りぬるこの家に吾と吾が妻と向ひすわりぬ(母逝く)

機關の音ととのへば太虚に心むなしく人あらむかも(夜間飛行)

船底に音にたてて泣く河豚の聲腹をたたけばまた泣きにけり(吉備の海にて)

きたみなみ臺灣島を縦に貫く長き往還はここより起る(臺北橋)

あかねさす晝のひかりに籠にゐる佛法僧といふ鳥を見し(鳥類展覽會にて)

みちのくの飯森峠を羅紗負ひて異國人の徒歩越えむとす(飯森峠)

遠く來てひとりめざむる朝はよし千島に向ふ窓あけはなつ(根室にて)

戦は彼岸にやまぬわたなかにあかあかと日のおちいるを見き(上海事變の  
當時臺灣)

川波の光きびしきひるながらすでに秋うごく葦原のいろ(常陸にて二首)

波の音たかしといひし人さりてひとりききつつ高しと思ひぬ

うつしみのおどろきにすでになれなれて語りつつあたる人を焼く火に(三陸津波地にて)

わざはひはおこりてすぎぬ日の照れる越喜來(こきらい)の海の波うつくしき

校庭に底魚(そらうま)どものなきがらは無慙(むぜん)に照れり蹴かへしにけり

黒潮に山ぬきたちしわびしさを解(はら)にうつりわれはあふぎぬ(八丈島にて二首)

海底電線の海よりあがりくる岩に白き小屋立てり見にゆかんとす

外濠の藻草簇生ふる水の面につゆのはれまの日はみなぎりぬ(梅雨)

七階六階五階四階とくだりきて何も買はずに地階までくだる(百貨店)

吹雪にたちすくみたるわがまへに亂れとぶ鴉かづかぎりなき(羽後象湯)

海中（根室にて二首）に雪原ひろしひかりつつ流れうつろふ日暮るる海を

氷の原に鴉二三羽くだりゐてああと鳴きたりにはかにさびし

きびしかりし暑き夕べにおとろへて落ちたる蠅をおそふ蜘蛛あり（夏）

山の宿にやうやくにしてはたきたる大蟲（おほあぶ）の命死ぬるまで見ぬ（霧島山二首）

山上の熊笹原に降る雨はわれをぬらしつついたくさわだつ

よどみなく流るる水の水ながら影はゆらめき川底に見ゆ（若狭國南川三首）

川のなかに石とがりたりかたはらにまばらに葦の立ち枯れしはや

ひとときに久須夜（くすず）ヶ嶽（たけ）を雲くだりわが葦原に雨あらあらし

わが心ややに衰ふ春すぎて切りても切りても地を割る竹の芽（春庭）

莊嚴に海に光はい照りつつ山よりくだる雲のかげはやし（日向國都井岬三首）

あをあをとさびしき海をあてありてはしりゆくならんかの商船は

天ゆきて日はとどまらね山上にをさなき馬とわれはあそべり

橋 本 清

更けゆくにつれて身に沁む寒さなり隣りの話聲そのまま聞ゆ

橋 本 正

山守の貧しき業に住みなれて父とくらせば心安けし

橋 本 康 以

永劫えいごうの時の流れに立つことを筑紫次郎の水もをしふる

十字架の墓處はかどまはれば涯しなき天草灘の青く光れる

橋 本 哲 夫

染釜に浸せる布のくれなるのあぎやかなれや陽はとほりつつ(染工場)

うづたかく積みかさねたる白絹のかげにもきこゆ夜半のこほろぎ(絹しらべ居れば)



橋本清太郎

妻逝く

みひらきし妻の眸め近く顔よせてわが今生こんじやうのこと言はむとす  
冬風ぎの海あをあをし亡骸なきがらをまもりてかへるわが眸には見ゆ  
門松の繁葉のみどりかくのごと照りてしづけき日に死なしめし(一周忌近く)

橋本明子

二十年住みける家はひび割れし柱の中に蟲居りて鳴けり  
開き行く花の重みにそりながの芍薬の莖あらはに傾く  
夕庭に煙上りて青松葉のじりじりと火になり行くは見ゆ  
米搗きて屋群離るる一つ家この山口に靜けかりけり

橋本白潮

初めて松前丸にて津輕海峡を渡る

灰白く雪の積りし陸地見ゆ夜のまだ明けぬ海のかなたに  
どの店も赤き林檎をならべたり青森の街の冬のたそがれ

橋本威子

輪になりて人等踊ればおのづからふしには出でておけさおもしろ

橋本文彦

つかれつつわれは寝つくにねもやらず馬みとるらしき母の咳すも  
今朝をとくわがめざむれば下の田に稻刈るらしき人のしはぶき

橋本かつ子

春浅く霞む入江の日おもてにほのぼのとして浮かぶ岬山

魚の睡るあはれは觀たり玻璃槽の底ひに溶けあふ光の微けさ

水壓の微動は思ひ花ひらくいそぎんちやくの生のかなしさ

青あをと海底地圖の隈どれる相模の灘の地勢はけはし

夕べなほ微光のこれる空あひの海に浮びて遠し島山

昏れ深く迫りて澱む松の間や人に寄りたき冷えをはかなむ

枇杷の葉に消ゆる冬日のしづかなり日の暮れかけて風の出でつつ

花枇杷や霜に焼けつつ赤寂びて埃づくものをたもちゐるなり

昏れてゆくさ庭は風の音もなし靜かなるかも木々の姿の

橋 本 淺 夫

シエストフの選集買はむと行きし店に太閤記をばしぼし立讀む

山査子の實をもぎながら行くほどにやうやく山の姿あきらか(金州大和尚山行)

橋 本 太 吉

御民われかしこきみ世にうまれあひて今日の幸あり大御餐（御大典）にはべる

橋 本 重 治

馬方が腰にさげゆく提灯のゆらりと揺れて道まがるらし（霜夜）

橋 本 英 子

吾がたたむ夫（つま）の衣（ころも）は宵にすゑし伊吹もぐさの香りするなり

何の木の盛りなるらむ故郷（ふるさと）の椎の花咲く森によく似し

春さればなだれの如く渡り来る苦力（ククリイ）の群を今日も我が見つ

曼珠沙華鉢植（まんじゆしゃげ）にしてひさぎ居りもゆるばかりに花二つ咲けり

橋 本 滋

水兵の今宵来るを子供等のたぬしみ待ちて夕餉（ゆふげ）せぬかも（水兵宿泊）

伊勢内宮

つつしみて吾はありけり神杉の暗くしづけき下びゆきつつ  
杉叢の暗き奥べにま清しき白衣の人の入りてゆくみゆ

蓮 澤 黎 香

僧となりてここに十年持ち古りて珠も緒房も黒しこの念珠  
夕ぐれの山にし摘めば柔莖の蕨にのこる日の濫みかも

村人となじみ交ることもなく死せし山窩のささやけき墓地

秋の川の水澄みたれば子家鴨の足搔き可愛く黄に透きてみゆ  
日ぐらしの啼く夕山路山の子が徳利かかへてひつそり通る

蓮 野 忠 一

幼きより見おぼえのある古蚊帳を今年も吊りて事たらむとす  
暑くるしき一日の勤めを終へしゆふべ梅干を食ふは儚かりけり

秦 和 夫

病間雜詠

朝光<sup>あさかけ</sup>にひかるまさ木の鏡葉にたまたま白き蝶のよる見ゆ

さくさくと稻刈る音のともしさよきのふは背戸の田けふは門の田

つつがもつ嘆きも古りぬ厨<sup>く</sup>べに山椒<sup>さんしょう</sup>の實を選りつつおもふ

うつくしき月夜と人の來て言へり見に出られねばおもひめぐらす(冬至)

父 病 む

大きからだの父の寢がへり援くると吾れ跨ぎたり父のからだを

秦 俊 子

法隆寺と明日香

夢殿の秘佛のみかほ懷中電燈のまろき光のなかにをがみぬ

たちばなの島のみ宮は山近みせばくしあれど深くととのふ

秦 龍 生

可也の山よぎりし雲の日を覆ふや即ち翳り芭蕉葉に雨

秦 野 美 徳

今日もかも山峽やまはだの田に弟は泥にまみれて馬叱り居り

幡 島 浩

澤庵の重りにのせる石呉れて隣の人に移りゆきぬる

幡 野 七 郎

郊外の畑を埋めて新しき家建つみればひとはゆたけし

畑 節 子

くま櫛のもろ葉さや風やまぬ日を伏せ家きよめて迎へ奉りぬ  
櫛の木に蟬鳴きしきる庭の扉にかしこきかもよ宮入らせ給ふ  
つつましくゐやまひたれて夫と吾が出迎へ奉る宮のたふとさ  
おほ宮の御前畏み賤の女が心愼しみ御食奉る

召すままに井筒の水の眞清水をおそれかしこみ吾が汲み奉る

畑 中 金 吉

傾きて月も凍てたる光なり伊那の谷原霜ぎらひつつ

朝あらし雨後の一山草晴れてわだかまりなき雲のゐずまひ

日は照れど何かさびしも獨り居の板家庇に柿の花散る

栗の花たわわに咲けり山ぎはの屋根に石おく梅雨晴れの家

夏草にかくれて葛の花も咲けなど山住みの身を佗ぶるべき



朝ひばり鳴き立つ谷の濃がすみにひとすぢたぎつ天龍の水

畑 中 康 夫

血を喀きし心静まり氣がつけば庭にすいとが二つ鳴くこゑ

夕雲の移ろふ色もやうやくに春となり行く心ゆらぐも

日を零す青葉の蔭に男ゐてなまなまと蛇を殺してゐたり

時鳥啼きし浅夜をすがすがと青葉たたきて雨過ぎゆけり

畑 中 南 余 子

時雨くるけはひしるけし焚く藁の灰はしづかに寄りかたまりつ

ダムの水たぎち落ちゆく音ならしきくら木立に夕べひびける

畠 山 兼 人

書讀めば書に腹たち畑つくれば畑に腹たつ此の頃のわれ

八田 勝一

土用螢の保つ光はほのかなり今宵の風に吹かれながらに

戸隠登山

草深野眼にはあかるく動けども日中の風は音たてぬかも  
高山の雲の中にも憩ひつつ願りみらるる身はさみしけれ

歸省

さ庭邊にさ筵敷きてまどかなる月夜に秋蠶あきこのまぶしつくろふ

服部 躬治

須賀川吟 (大正十三年—十四年)

瀧川の瀬の音高鳴り一山の木立ぞすくむ雪襲ふらし  
朝雪の片づまりなる袋町人さまざまのなりはひに起く

尋ばかり雪の澤水とろみいでて晝ものふかき谷杉の森

おしこりて雪の屋根むら暮れにけり見よ夕映のあかがねかはら  
ごみごみと雪ふりかさむ眞中よりたえずふき井の水ほとばしる

物かげの雪は雪とぞ明りける夜は大方の月夜とおもふに

むかつをの一つ松さびし雪空にきり入りて立てるその一つ松

片搔きに雪をかきたる空庭を隣にもてりさぶしくもあるか

裏戸口の樽草ばうき桶たらひ下駄のかたしに暮れせまる雪

しづかなる寢覺よろこびおきてみれば月しらしらと雪のあけてあり

冬山のまばら雑木の枯林雪ふれどふれどむぎとして立つ

雪の日を日たけて起きて門づけの人に物やるはたさびしかり

小鳥きて干葉こそめかし去りにけり雪されしたる家の西おもて

まくだりに雪ふりくだる山川のたぎつ河内は夕とどろくも  
しめやかに雪ふる夜なりとなり人話に來たりいまだ歸らず  
われこの頃天つ罪國つ罪を犯さねばのびてむさくるし髮の毛と爪と  
どぶどろのひかたまりたるわれめよりふらめきいでつひるがほの花

文章世界より (明治四十二年)

ふりむきて見れば七人<sup>ナナヒトリ</sup>うづくまり中の一人が低くもの言ふ  
すげなくも小石残り芥火のすぶすぶ燃えて滅<sup>メ</sup>り消えしあと  
遠々しうすれゆくもの何なるや額<sup>ヌカ</sup>はかそけき唇<sup>クチ</sup>の氣<sup>ケ</sup>するに  
かたじけな古き祖先ののこしものぬすみごころを白晝にえつ  
女<sup>メナ</sup>てふこちあやなくなりにけり親はをしへずやるかたのなき  
ゆきなれし道のかよひにながながとおほよそごとを思ひしよはた

其頃の歌

黒々と見ゆる杉村ふたところ目路はるばるし春の雲湧く  
もそもそと粟飯はみて榾火消し暗き鼠を叱りだき寝る

あまびこ (明治三十七年—三十八年)

大なるさびしものをつつみもちうちいでて波と泣かぬ日もなき  
朽舟や干藻や蠣の捨殻や早砂原なくきりぎりす

はるかなりや史にわが戀の蹟絶えぬ雷と氷雨のその日といはむ  
君ゆゑに手内天地あたたかうにほはしものの含るらしき

手枕とわれと相泣くさびしさの燈火にふるふ蟋蟀月夜

傷ましう久なるものや岩が根に波億劫のひびきを止めず

千世に一人情ゆゆしく意濃くつよくやさしき人あるがごと

おしなべて低きちひさき野の草のうへはただちに大天オホアメの原  
春の月なげの光のほらほらに櫻千人チヨリが舞ひ出でましか  
春の日のかぎろひゆるる丸柱マロバシラキ浮彫ホリ蛇ヘビのはしりて草へ  
大オホイなるものよとさしも一莖ヒトヅキの莠ヘゲサは草の名に負ひけらし  
君まさばその白駒に賂マヒせむの草の七束ナナツカ八束ヤツカになりぬ  
男ヲの人のわれにより來コばうつくしき紫鸞シランの翼ハネの陰にかくれむ  
木枯の吹き高まりの聲のうちにはほののき沈シヅくものをし聞きつ

迦具土 (明治三十四年以前)

今はさは君にまかせむ君ゆゑに若き命のおきどころなき  
一すぢの小道の末は畑に入りて菜の花一里マイル當麻寺ダイマにまで

富士百首の中 (明治三十一年八月二十一日登錄時)

わが心今ぞたらへる家に在りてよそに仰ぎし天雲の上に  
夕づく日とすれば葦にかぎろひてしぐるる中を君が船行く  
「火危し」やや遠のきておぼろ夜の月靜なり縫殿ヌヒドの陣

明治三十三年八月安房の海邊に滞れるほど

凝り成せる豊旗雲の凝りあへぬすこしヒマの間に富士の遠山

新墾ニホウの村の中道いつの朝もわがせまづ着く草鞋の跡

葉櫻の蔭去りあへず物おもへばそそや何とも知らぬ音あり

雨霽れし青葉若葉の葉ゆらぎに根無し筑波のかつ見ゆる哉

松青しわが世のかぎり青からむ青かれ風の吹きにふくとも

道のべの檜の大樹を離れたる鳥のゆくへは伏して見るべし（靈山に登りける時）

子を思ふ心ひたすらによどみなしわづらひ多く年はとれども  
妻が生けし臘梅の花の黄なる色に心惹かれつつ年越えにけり  
年々にいとしがりつつ老眼の靨黠としてふたり老いゆく  
勞働と痴夢とはかなき慰とただぐるぐると渦巻き渦巻く

どの人もわれを靜かにあらしめず心にまでは踏み入らねども  
中空にかかる月よりさびしけれ指に支へし小さき杯

蛙鳴く無益のやうに蛙鳴くただ大いなる無益のやうに

くれなるの帆を張る小舟一つ見えて春たしかなる瀬戸の内海  
何となくくだものの香のなつかしき五月に入りて空の晴れたる

この雨を何といふべき喜びを叩きつけつつどしや降る雨を

ひと雨のやがて霽れんを惜しみつつ窓よりのぞくここかしこの顔



夜の蠅手と手を擦りて何事か考へるしが飛び去りにけり

木立より秋の風吹く武藏野の露に隣れるわが小家かな

よく聴けば雨降れるなり降れる音のあるかなきかなり秋の夜の雨  
樋の底にかなしき音を運びつつ果てしもあらぬ秋の夜の雨

武藏野に風の立てればなよなよと抜け毛の如し落葉林は

ガラス越し烙鐵らくてつを撃つ樋の下火花散る見て冬の街行く

澄まし汗の湯氣の中よりほのめくは芹の香ならん朝の雪見る

坪内逍遙先生

髭生えし教へ子あまた先生をとり圍みつつ柿を食うべぬ(追憶)

急電により、日高只一、河竹繁俊兩教授とわたくしと先生の病床  
に近づき、「シエークスピヤ研究案」に關する遺命を聴く

先生は枯木のごとくゐたまへり涙を堪へて見ざるを得ざりし

御柩をかきまゐらせば手にひびく生きのさながら重たき先生  
衆議院が舉りつつしみ捧げたる弔詞何せんこの先生に

服部 榮 一

夕飯がすめば父の手弟の手みな並びたり火鉢のうへに  
癒えがたき病いできてふるさとに歸り來しとは母しらざらむ

吾が家の疊の上にぬぎすてし袴をたたむ老いしはは親

ひそひそと父母の聲きこゆこの夜更子が病みしことを歎きあへるらし

晝の月あらはれてゐるさみしさよ月に向ひて茅かやを飛ばす(天草)

春の雪降ることはげし鶏はとんとおと立て縁に上れり

家のなか通して見ゆる裏畑は麥よく茂り雨のしづけさ

燕の子生れて啼けるうつばりのその下に居て何か樂しき

時たまに下さし覗く子つばめはこのごろ人を恐れぬらしも  
赤とんぼ石に噛みつき動かぬに日向雨明るく降りこぼれたり  
つぎつぎに鶏舎より出でし鶏は喉鳴らしつつ日に向きて歩む  
をちこちに伐り残されし若竹の青肌寂し陽があたるなり  
竹伐りしうらやぶの陽の明るさよ向ひの家に軍鶏飼へる見ゆ  
冷えびえとやぶの冬日にさらされてまだあたらしき竹の伐口  
夕近き竹やぶの秀のなびかひに揺られゆられてゐる風のあり  
ひたむきに傾き下りし尾なし風ふたたびのぼる竹のかげより  
夕近く位置さだまりし風一つうらやぶの空にぼつちりと居る  
いけがきの杉の新芽の露こぼし露こぼしつ馬の居る見ゆ  
しんしんと高圧電線通りたりそよぎかがやく檜の秀のうへ

露草のつめたきに立ちおのが乳をしぼらせてゐる牛しづかなり  
冬深く歸り來りてうらさみし村には枯れし柿の木ばかり(歸省)

略血のうた 二首

春寒き残雪のうへに赤あかと血を吐きにけりあたたかき血を  
來べきもの來れると思ふ安けさにわが吐きし血をみてゐたりけり  
ただ一人眼をさましゐるくらやみに電燈の笠が揺れてゐるなり  
ひとのものならぬ身體をよくせむと日向さみしく裸になるも(日光浴)  
赤電球まひるともれる暗室に愛かましきひとの像焼きてゐつ

病院生活

看護婦らおほかた變りたよりなしこの病院にまたはいるなり  
ひそやかに地震なみ揺りにけりこの夜更眼ざめてゐたることをさびしむ

うす青きうがひの曇に歪みたる十月の朝の空がうつれる

包み置きてかたちゆがみし中折の帽子をかぶり退院するも

ふたたびは見るこゝとあらぬふるさとの家のすがたを夜々夢に見つ

服部綾足

ふくる夜を時計のきざみ聞きにつつ來經ゆくわれのいのちをし思ふ

服部童村

新妻を迎へて日いまだ淺き頃二首

薪山のたをりに立てばま白なる布乾してゐる家妻の見ゆ

春山に薪わる吾を見つけしか庭邊に下りて妻の手をあぐ

老父は櫓火の灰を頭から被り給ひてひねもすしづけし

野にいでて麥ふみをるが久しかり安達太郎山の雲すでになし

春山にけふ來て禽の鳴かざるを思ひゐる時いかづちなりぬ  
早苗<sup>なほ</sup>振<sup>び</sup>の酒の肴<sup>さかな</sup>に拾<sup>ひろ</sup>ひ來<sup>き</sup>し田螺<sup>たに</sup>は井戸<sup>いど</sup>に一日漬<sup>ひ</sup>けおく

服部 忠志

瞬かぬ魚のまなこよ夏くれば水藻<sup>みづも</sup>のはなをほのぼのと見む

あさあけに白き帆船<sup>はんせん</sup>を夢みたり醒めてこほしきわがこころづま

山陰に雪はとけねど三桎<sup>みつまた</sup>の黄にほのかなる花は抽きいづ

このひろき蘇鐵園のなかに無表情なる蘇鐵ならびて晝の雲白し

服部 満

何事も悟る程にはあらねども病みてつつましき吾となりぬる(重病やや癒えて)

服部 美智子

二日月ほのかに照らす庭すみに乳を絞りて流さむとすも(離乳)

向日葵の花に近ぢかと身をよせてけおされてをりその大きな花に

服部源三郎

あるがままの在るにえ堪へず灯を消して暗のうつつに人をおもはむ

服部宗緩

かきつばた水際みぎはにそひて咲きにけりすがしき心けふはたもちつ

をりをりにしづれておつる雪ありて林泉しんまの木立の深くつづけり(金閣寺)

日のさせる松の林にところどころ咲きてひそけき山櫻の花(唐招提寺)

服部直人

この町はのりものの音遠ひびき春のくもりのあかり幽おぼなる

服部銀月

つはぶきの廣葉の照りのつやつやにこの素裕の着ごころに沁む

服部 魁 夫

窓枠が區切る都會の一夜景トーキングサインそこにまばたく

開幕のベルいまや鳴る舞臺裏花賣となる少女はまづたちぬ

初瀬 多賀子

青物市場の夕の寂しさよ灯の下に暗くならべる泥付の大根

初瀬 勇

煉瓦色の裸婦横臥が太く描かれてゐてこのアトリエの春の明るさ  
デスマスク製作る夜更けをうらがなし石膏の膚に冴ゆる燈のいろ

初井 長寛

泥のなかに口入れて遊ぶ仔豚どもあなをかしやも面あぐる見れば  
此處にして見放くる海は高まりゆきけぢもあらず空に續きぬ



初井しづ枝

苔 寺二首

苔明りほのぼのとある廣庭に老木の立ちぞ閑けかりける

苔の上になかに日當るあかるさも冬の薄日のしづかさにより

春の雪幾日消がたき曇天のふふみてしらむ光り戀ほしも

雨空に溶け合ふ際のあるとなき櫻ばなかも色匂ひつつ

色匂ふ櫻ひと木のしづもりに空廣くありて雨けむりたり

漁り舟竝びて出づる入海は夕さざれ波青き蘆むら

露霜のつめたさ見ゆれ朝月夜蕙のならばしづけかりけり

槇の立ち閑かなりけり冬日ざし秀枝にあるもときの間ならむ

霜ぐもり暗くしづもる庭の上木の葉の霜のいつか解けたる

歸りくれば吾をたづぬるわが子かもかくして吾に來るとあらぬに  
水に浮く野鴨のむれのしづかさはそのむきむきに泳ぎつつをり  
水にゐる野鴨のむれにくだりくる後の一むれ散らばりて入る

奈良にて

あらはなる草山の傾斜なだおだしかるその枯色や目をやすましむ(若草山)  
この高き廊にとどきてうつくしき櫻の蕾とかへるでの芽と(三月堂)

鳩 貝 藤 郎

夜晩く歸れば祖父は寢床より馬を賣りぬと告げて黙もだしぬ

花 木 房 子

隣家の窓ガラスより照りかへす朝の光は挿花に射す

潮騒うしなの氣どほくなりし磯山に春蟬のこゑみじかくひびく

十日月のひかり差し入る川上の小暗き方にこもる瀬の音

花田比露思

明治天皇崩御

我が大君さきくいませと國民のなべて祈りし効なかりけり

都城途上、霧島山下にて（大正二年十月）

霧島の韓國嶽に夕陽落ち天の旗雲かぎろひて來ぬ

山の上ゆ空を斜の大旗雲見る見る遠く夕焼けにけり

警報は貼られて居たり霧島や裾野は明る夕焼の雲に

茜さす雲のかぎろひ裾原の尾花の搖れはやみにけるかも

しんしんと静もり立てる杉木立杉の秀先は夕焼に立つ

ただならぬ事のあらしき惧もち仰ぐみ空は只管に赤し

故郷を今は氣づかふ旅ごころ夕焼雲にさびしくなれり  
裾原に風こそ立てれ夕焼の色褪雲は崩れ合ひにつつ

長崎途上、諫早を過ぎて（大正三年十一月）

多良が嶺に夕陽はかげりさむざむと漣すなり入江の海に  
冬枯の高嶺あかあか夕陽照るはるばるとわが來りけるかも  
鯛の浦べ回み行く汽車に一人ゐて夕陽の山を見つつさぶしも  
亞米利加にわが在りし日や嬉しくて大き御生命を讃へけらずや  
あはれなるわれかも今は生業に日毎囚はれ祈禱だにせぬ  
たまさかに生業ゆ離れば牛山の草の芽なして萌ゆるおもひか

明治神宮遷座式（大正九年十一月一日）

久方の天の御靈を乞ひ降し代々木の宮に齋ひ祀るも

あきらけき御靈は永遠に國民の慕ひ敬ふ神にします

京大學生事件にて思ひ惱みし頃詠める

茂山のすが山風にうそぶかむ一日もがもよわれは飢にけり  
或時は痛ましき思ふ或時は憎しき思ふ憎しむ悪しけむ  
度みて天に事ふることを忘れ人を相手にわれ疲れたり

大正天皇崩御（大正十五年十二月二十五日）

雪に照る月光寒し大君の御靈を今はいづくに仰がむ

今上陛下御登極朝見御儀の際、下し給ひし勅語を拜しまつりて

國持たぬ猶太人等の言擧に迷ふ子見れば悲しくて泣かゆ  
畏きや皇御國は神ながら聖の道のあきらけきものを  
悲みを堪へて御座に即かしまし宣らす御言の尊くもあるか

秋立つ

朝風のしみじみしさや久々に取り出でて讀む周濂溪の書  
澄みまさる心にうれし梧桐の葉に蕭々と降る小雨さへ  
蟪蛄はおのれ逆さに身をなしてつまぐれなるの花に久しき

大連より旅順へ、途上（昭和三年五月）

土瘠せて山も茂らぬ此國にまばらに住まふ貧しき民はや  
柳かげいささ小川に寄り集ひ何を洗ふぞもろこしの娘等  
大君の大御恵みをこの國の貧しき子らにも及ぼし給はな

長女つゆ子逝く（昭和七年八月十九日）

昏睡をつづけて吾子は靜かなり庭に鳴きつぐきりぎりすの聲  
弱りゆく息をし見れば祈りつぐ心も今はくづ折れにけり

かそかにうめきの聲をあげしかば生き返るかとわが勇みしか  
おぼろかに父よ母よと呼びにける聲は臨終いよはの聲にしありけり

（多摩御陵に参拜して（昭和八年一月四日））

夕日かげしみ射す冬のくぬぎ山しと鴉は鳴けりひそかなるかも  
御手洗みたらしの水むくむくともりあがりうが嗽ひする人皆つつましき  
ぬかつきて謹み祈る日の本の國の歩みは正しくありこそ

早春對山

春づきし夕陽の山に向ひてたまたまのこの心和なごみや

天地は言擧げせねどひそやかにいそしめるかも大きいそしみ  
予言われふ莫なごからむを欲すとつぶや呟きけむ仲尼が意こころほほゑましもよ

和歌浦にて

ひたひたと満ちし潮うしほのさざなみに觀海閣のかげ搖るるなり

國會議事堂新築成る

形骸を存すとは聞けり形骸のやうやく成らむずる國會議事堂

うちひさす都の空に天そそり立ちてさびしき國會議事堂

憲法を布かせ給ひしすめらぎの大御心に何をむくいし

真心の劣るならざらむ然れども黨を結べば黨を先さきにする

高天原に神々集つどひ議はかりけむその神々の如くならましを

二二六事件突發を聞き、内務大臣後藤文夫君に寄す

軍人のこころ政府を離れしとき大久保利通の偉大を思ふ

卒業せんとする諸生に

國歩必ずしも易しと思はず世に立ちて心も身をも健かなるべし



播磨野は朝な露霜置くならむ夜を更かし起き居風邪ひくなゆめ  
若き日は若きなやみあり劔太刀さやかに心磨くしまされり

花田 定穂

宿直室の夜は更けにけり裏藪に雪降る音のしづかに聞ゆ  
岬まはる巡航船はうねり波に赤き船脚見せつつゆくも

花摘喜久子

をみなゆる涙をさめて人々の意に任せよとむごき言の葉

花野 春風

恵まれて生くる命にありがたき初日のかげを拜がみにけり  
どんど焼く火をかこみつつ子等とゐて頬のほてりを快よく思ふ

たんぼぼは今花さかりわが行くは春たけなはの筑摩野の道

草の香によみがへりくる思ひ出やふたたびは來ぬ日ぞと思へる  
野に咲きて風に揺れつつ小菊花一羽の蝶を遊ばせてゐる

天地のこのよろこびの日を壽なぎて籬まきの菊も咲きさかりをり(御大典)

花 村 夕 風

梢より落つる雫に夕づく陽明るく映えて雷とほのけり

をりをりは霧卷き過ぐるこのあたり露をたもてる薄みじかし

花 村 桂 子

たたなはる八重群山の果にして何處の國か横たはりみゆ(燒岳頂上)

花 本 等

きび畑の中に雀の聲ありて秋の朝の風の清すがしさ

花 輪 史 城

短かきに似し年月を共に居し人等なげきて我を發たたしむ

花 岡 謙 二

緋目高の群れおよぐところ薄日射しかたへの藺草冬芽ふきにけり

水禽の足ちがきはやめてゆくところかすかに魚のとべる音すも(三寶寺池)

紫の藤の垂花短かきに降りつつ雨の明るかりけり

月明き摺上川の川床を摺りて流るる瀬の音たかし(飯坂)

少女らは暗き海よりうまれくる波のたぐひか光りつつ滑ゆ

花 岡 孝 三

ごみごみと子供らつどふ小路(こうち)には犬どもも夥おほく飼はれたりけり(露路)

花 岡 於 沙 女

ゆたけくも夕焼雲にひろごりゆくひかりのなかに入る鳶のあり

華山申四郎

生活に馴れ來し妻は恥しさをやや失ひて年くれにけり

山ふぢを田耕き歸りに持ちくれし娘の脛に泥かわきぬ

吾妹子と今宵捕へしきりぎりす味噌こしざるを伏せて寝にけり

埴きぬ子

梧桐の廣葉かがやく眞晝道ペタルをふみて郵便夫來つ

埴はる

たらちねの母はなくともおのがじしよの人なみに生ひたてよ子等(辭世)

埴原壽二

老いらくの父母を想へば遠國に我は病みつつ安からなくに

濱 一 郎

國見すと立つ岩鼻にうちたぎつ寒流迅し千島海峽(國端崎)

松ごしにひびく夜冴えの汐鳴りの蒼くしみゆく山肌の雪

濱 川 政 吉

再びは相逢ふ人にあらぬなりかりそめごとと思ひさだめぬ

濱 口 正 雄

山の秀ゆの圓みたたまれる静けさよ放牛の群が草の間に見ゆ

闇空に山の起伏のあらはれて海の向うに見ゆるかすけさ

我を張りて人に容れられずしをしをと歸り來る子の瘖せておもほゆ(長女初學年)

妻も子も病みてひとりの健やかさ腹滿つるまでもの食ひにけり

濱 口 操

夕明りしづけき山に向ひたちおのづと心なごむをおぼゆ  
若みどりしたたる如し霽れ近き雨は明るく桑の葉を打つ

濱田耕作

臺灣雜詠のうち

新高の嶺の頂き阿里山の紅檜べにひの隙に見えかくれする  
丁々と斧打つ杣そまの音やみて木だましつつも倒るる老木  
山を降り里に出で来て我が心なほ山の上に残れるを知る  
筏かつら花紫にてりはゆる南の島に我れ來つるかな

濱田千枝子

昨夜よの雨に貝洗はれて淨らなるこの蝸牛芭蕉葉を匍ふ  
百合の香を仄かに残し吾が前の花屋の車通り過ぎにけり

野分止みし朝の庭べに月草は花持ちながら靡き伏しにけり  
子が描かくを見れば目鼻のとのひて此の頃人の顔らしくなりぬ

濱 田 初 廣

鴉の群餌をあさりゐる刈田には畔に並びて曼珠沙華赤し

濱 田 逸 郎

ものほしき目をして人の見るはよし後うしろにありていふはうるさし  
つまづける石と思へどかへり見ぬ情なさけか弱き我れの心か

貧家にも古稀の母あり乏とちしなど天の恵みをいふべくもなし  
世にありて今残るものあぢきなき命の外に何ものもなし

水に似て冷たき心水に似て動く心をたのまんや我れ

憂きことの空のかなたに去りてゆくさまと思はん灰色の雲

日の本の彌生の春のめでたけれあふるるばかり櫻花咲く

濱田喜代子

ありし日に父が束ねし棕櫚なはのそのままながら山吹咲けり

濱田武雄

枯草をやきて歸れば双の手にかすかに残る煙の匂ひ

濱田秀子

貧しさはここにきはまれり明日よりは貰ひ水して米を炊ぐか(水道をとめられて)

濱田利雄

監房の廊下つめたし身にしみて手錠のひびき聞きとめにけり

濱田政二郎

日は南眩ゆく白き一すぢの河原のはてに海鳴りきこゆ



濱田盛秀

たらちねも今はひもじといひたまふこの歸り路にしろくちる花  
川青く北にながれてをりしかば峠の土になみだこぼれつ

こほしさはすももばたけの夕あるき遠きこだまによみがへるもの  
春なれば花の馬酔木あしびも咲きにけり母とはなりしそのかみの子よ  
秋されば一つの蚊帳に母と寝るかかる早寝をさびしとおもふ

濱地富美子

夫と子同時に病む事ありて一首

折々に見開く眼まなこに力なしすでにとりとめし命と思ふに

吾あを待ちてすでにねむれる末の子は母の枕を枕にならべぬ

濱中林太郎

竹煮草の葉裏吹きかへす風ありて催す梅雨の空定まらず

濱野修

智慧づきて笑ふか吾子よ汝をうむに母は生命を傾けしなり

濱野基齊

巡洋艦「鳥海」便乗 一首

蒼潮をいまかわけゆきゆるぎなし大<sup>くに</sup>き國力おもほゆるかも

音たてて笹むら焼くる火<sup>ほ</sup>群見ゆちかづく道に灰みだれたり

うつうつとわがねむく居るバスなかに紙切れ焦<sup>こ</sup>ぐる臭ひこそすれ

濱本義徹

夕燒の雲うつろへる藪田の面に水搔きいるる父と我かも

晴れながら波高くしてわが汽船は大わだなかを傾き走る

長雨のはれて明るしわが部屋の疊の上にゆるる木の影

谷底にたきつ瀬の音たかまりて夜凝りの霧のはれゆかむとす

半田良平

日本地圖に題す 四首

壁の上に日本の地圖を掲げおきて寂しき時は起ちて見にゆく

地圖の上を眼もて傳へば青山に青山並び見らく遙けき

この國をいにしへ人もよしと言ひ我も然おもふ然にあらじか

見が欲しき國多にあれど住むべくはおのれ生れし國を此を我は

水郷早春 四首

牛が鋤く出島の小田の堅土のかぐろき土は舟の上ゆ見る

一日の田爲事をへて歸りゆく農夫の舟は妻が漕ぐなり

あはあはと夕日さしたる大河を漕ぎよこぎりてわが舟泊てつ  
眼前の河岸に凝りたる朝靄の流れはじめて天明けにけり

祖國日本二首

年まねく頼みたりけるこの國をいまだも頼む吾命を賭けて  
この國をただに頼みて在り觸れば憤ることのなしと言はなくに

關東震災三首

夕さればわがる邊まで明り來る空の火照をおどろき瞻る  
生くるものつひに悲しも菘敷き麻蚊帳吊りて地の上に寝る  
直土に菘を敷きて寝ねたればちさき地震すら腹に沁むかも

晩秋二首

庭の面にさ菘敷きて干す粗の干しあまりてか路にまで干す

門先の榎の高木が落す葉の眼にはとまらね糶の上に多き

をさな子 二首

いつの日に活動寫眞俳優の名は覚えけむをさな子がいふ  
をさな子が常聞き知りていふことの面白くして夜をこもりぬ

下總銚子海岸 三首

川口にここだく泊てし舟さへも片寄る見れば大き川かも  
わが見るは壁なしつづく斷崖にうねり寄せゐる浪ばかりなり  
この浦にわづかに人の住みつきし名洗村は浪越しに見ゆ

安房清澄山 三首

向つ尾につけたる道は山奥の老川村にゆくといふなり  
草かげにわづかに見ゆる細谿をわれは頼みて山くだるなり

椎茸の苗場ちかくまで降りしとき細谿川は音に出でつる

淺間高原 四首

高原にとびとび立てる家の前中仙道は行き杳けかり

日の暮にわづかに晴れし淺間嶺の麓の宿に今宵寝むとす

古宿の家並はすぐに出はづれて道はまた行く高原の上

原なかに小學校が立ちてありここに通ふ子の家はいづらぞ

高田市外五智園分寺 三首

堂のうち耀くばかりに五體のみ佛立ちていますを仰がざらめや

北陸道すぐ裏をゆきこの寺を更にかなしきものたらしめき

暑に病みて旅ゆき疲れこの寺に筆及ばざりし芭蕉おもほゆ

荒川赤羽鐵橋附近 二首

うち仰ぐ鐵橋はとどろきはじめたり電車はいづれの線路を來るぞ  
草原の枯木をたちて行く鳥は鳶にありけり眼に残るなり

清水トンネル 四首

一萬メートル近きトンネルを進みゆく汽車に今日ありて國境を踰ゆ  
入口の光は次第に遠のきて地平をのぼる月と見れば見ゆ  
入口の光は月とまがひつつ距離の觀念をすでに失なふ  
入口の光ははじめ月のごとく次に點となり忽ちにしてなし

平野初冬 三首

群れむれて空飛びめぐる椋鳥は向き變ふる時かがやきにけり  
二方に飛び分れたる椋鳥の群の一つは槻にくだりぬ  
堤にて寫生する兒は川上の送電線塔もこめて描きける

夕づく日かくるる雲の下邊より汽車のとどろく音ぞ聞ゆる

下總三里塚御料牧場厩舎 二首

大君がもと乗りましし白馬の吹雪は老いぬここに静かに  
つややけき栗毛の馬に隣りして老ゆる吹雪を見れば静けし

伊豆遊草 二首

日金山うち越えきたり走り湯に浴みけむ君は若かりしかな  
榊葉を道のなぐさに折りもちて天城の谿を出でてゆくかな

奥武藏日原谷にて 二首

谷川の音もけ遠き山なかにめさめて聞けば鹿の鳴くこゑ  
鳴く鹿は聲惜しむがに四こゑ鳴きあかつがずして夜の更ちけり

上越谷川岳



見放<sup>み</sup>くれば廣くなりつつ流るれど利根はいま<sup>ま</sup>だも山なかの川

南アルプスにて 三首

高山<sup>たかやま</sup>のお花鳥を夜行きて罌<sup>びん</sup>にかかれるこの兎<sup>うさぎ</sup>あはれ

尾根づたふけふは行くゆく霧の中に見え來<sup>く</sup>る山を幾つか越えむ  
雷鳥<sup>らいちょう</sup>が二羽あひつれて遠ざかる石庭<sup>いしにわ</sup>のさきに霧ぞ動ける

半田 不二夫

まろまろと春山幾重かさなりて人かげもなく日のうららかさ  
春山や箱根にむかふ細道のきえゆくところ雲湧きにけり

病後初めて新宿を歩く

五年ぶりのこの街にもやや變りあり命<sup>いのち</sup>たちもちて我もありけるよ

板 東 繁

かさなりていよいよ白き花びらよ牡丹は見えぬ光を放つ  
かなはねど世に抗へり冬山の日向にをれば涙ながるる  
年長くわが思ふとはつゆしらぬ人へ短く葉書かきたり

板 東 治 之

篁の間にづれば黄ばみたる麥に日はあつし落柿舎の道  
夏山の明るき道をのぼり來て草よりひくき杉苗を見つ

坂 東 猛

晝ふかき日のさしてより汀べの水の下に水もうごきぬ(諏訪湖)  
しめ飾り庭土に小さくかげおけり夜更けてさむく戸を締めたりし  
山羊家鶏まじりてあそぶ庭の上に据ゑられてあり炭竈ふたつ  
庭つどり鳥屋にかへりし日の暮は土がまの煙しろく立ちたり

人ひとりせとり 囀籠をさげてゆきにけり櫟が芽ぶく山の平を

庭檜葉の下にまろびて白きもの霰はしばらくゆふかげ 夕光に見ゆ

夕づきてくらきかみ 河岸道なほ暑し土用鰻を人裂きてゐつ(月島河岸)

坂 内 萬

仰ぎ見る心まがなしこれやこの佐渡の島なる眞野の御陵

晚 葉 二 太 郎

炭竈を夜焚きをればひらひらと蝶一つきてもえゆきにけり

早 川 孝

濃州正眼寺

まどにさす微光はうすし接心の魚板なり出でて人を覺めしむ

師家すでにし 跣坐端然といますらし辨道の人を呼ぶ鈴のおと

山門の椎のうれ葉に風遊び法門無量寺晝過ぎ靜か

下醍醐寺

あさぼらけ上醍醐より吹きおろす濃霧ににじむ一抹の塔

勸學院

木の梢こゝろに遊ぶ蛙はへそもたず青柿の臍も羨とらしとやなく  
冬枯の味噌川奥ゆ採りて來しこの自然薯の毛脛げねの白さ

大正帝御大喪近し

玉敷の都のそらにほこり立ち赤き夕日の下べ曇れり

東京株式取引所

大株のつつじの花に日かげ遊びそば通る吾れをうらなやましむ

年輪の相おもしろき一塊の樟は何を彫らるるならむ

息ひそめてのみうちやまぬ木魚師の心あそばむ木魚のはらなか

樟の年輪かさなり渦をまく木魚の胴はいまだ塗られず

木兎<sup>ウサギ</sup>なければ夢よりさめて木魚の口しつかりとあくびかみころすらむ

奥の細道

夕風にとゆれかくゆれすすき穂の光うしなふ色のさびしさ

毛越寺一首

障子はる縁の糊皿へ日かげとどき舌切雀出でも來んとす

あさ戸出に見置けるわらび折り行くにつくるときなし此處すめば其處へ

早川 富潤

山をなす岩層はみな化石なり古代生物の圖を思はしむ

山鳴の時に澄みたつこともありて熊笹原に吹きおろす風

早川 徹

身一つに五つの病わがもちてこれの世によく生きゆくものか

早川 和男

山いくつ越えて來たりぬ湖の邊の青芝の上に靴ぬがむとす

早川 幾忠

植込に水うち撒きてやややに暗くなりゆく庭を見て居り

地下道を出でて曇れる空の下用ある人の如く行くかな

山茶花の霜やけし葉の色照りて晴れつづく日の春にちかづく

満天星の去年の花の萼あまたゆすり落せる雪にまじれり

單葉の旅客機が同じコースをば昨日と反對に轟きゆきぬ

ゆくりなく浮ぶ記憶に反射的に恥を感じることなどがあり

ふた側の線路せばまりゆくあたり杉菜がいたく刈られずにあり

展望のなき坂道のカーブより自動車があげをあげて現はる(静岡縣三島二首)

豊かなる園に遊びて我がどちの話題は富のことに關はる

雪の上に天渡る日のさす色の靜かにかげりゆくを見て居り

衢ちまたより遠く遊びて我が妻の心和なぐがに葱あがりを購かふ

些かは關はり持てることあれど電話を我は億劫おくがりぬ

早川孝吉

つつがなく年をむかへて父母に仕ふる幸を思はざらめや

早川三郎

青空をわづかに見せて白雲のいゆき走るは淋しくもあるか

早川 智子

芽ぶきたる櫛の木立ゆるがして春の嵐の時の間にやむ

電車より見ゆる山べは五月雨<sup>みだ</sup>れて深き茂りに栗の花にほふ

早川 かつ

丹念にほほづきの實をしぼりだし雨の日吾子<sup>わこ</sup>と家にあそべる

早崎 夏衛

ぬれぞらににほふ桃花<sup>たか</sup>にちかくをればかくうつくしいかなしみをしる  
窓を透く黄薔薇<sup>スラプニール</sup>の花家畜らは築牆<sup>ついで</sup>の霖雨<sup>あめ</sup>をあるいてかへりぬ

七階からのぞけば逆さのにんげんがしみじみきたない生きものであり  
ひつそりと碧空<sup>そら</sup>のしづくにぬれながらたんねんに白い手紙を封する  
夏の朝<sup>あした</sup>の感情がひたとせまりくるトマトある庭に牛乳<sup>ちち</sup>がくばられる



白ばらをぬけくる朝の風ばかりきよらかにこの白痴をつつむ  
枝上しじやうから鹽のごと白い光彩がふりこぼれきてわが子香かたはし

早竹兵士郎

ゆゆしくもうねりかたむく大浪の底ひに荒し羽搏く鷗（紋別海岸）

早水城春

竹林の奥昏くしてふふみそめし一樹の梅の花寒げなる

晩秋妙義行

妙義嶺の裾の檜原の木下みち芝草あか明く陽に照らされぬ

まかなひの岩いは秀はゆき交ふ白雲の動きを見つつしづ心なし

おほかたの岩山低木落葉して残るかへでの色あざやけき

わが攀たづる荒岩山の影長く溪こえてむかふの山に及べり

岩づたふ鎖の音は低けれど冴えてひびけり山の空氣に

父 死す

ちちのみの父を焼きたる焔のいろはかへり來てなほ眼にぞ残れる

友瀧上耕太郎君の家山崩れのため埋没し妻子五人枕を並べて  
慘死し己は重傷を負ひて僅に生命を助かりぬ

一夜さにいのち死なさむと思はめや枕を並べ妻子らと寢し

陸軍特別大演習陪觀

草がくれ隠る兵かも朝霧にひびきて近し輕機關銃の音

教員奉拜式に列して

仰ぎみる玉の御影はいやさやに健けく在せり畏かれども

信州上林温泉

ここにしてかへりみすれば安代や澁の温泉は眼の下に見ゆ

並みよろふ五百重青山みわたしの國の高處に溫泉は涌きにけり  
見放くれば幾重起き伏す青山のそぎへは雲にまじはりにけり

林 圭 子

春の夜の空の下びに人の家あかりあかるく靜もりてゐる

廣き庭わたりて春の風來たりわが衿元に快く冷ゆ

ペルシヤ猫縁の日向にうづくまり座には戰の話はずめる

眼を上げて見るにまぼしき春の空雀の聲の行く行く聞ゆ

その聲を忘れてありし蟋蟀のかすかに鳴けりもの思ふ時に

照りつくる暑さと思へ街のなかものあらはなり秋づくらむか

俎板に物きざむ音さくさくと厨にきこえ秋の日涼しき

竹垣にからむ朝顔くれなるの一つあかるし涼しき雨に

空渡り青桐ゆすり夕風のほそぼそとしも涼しく寄り来る

ひやひやと渡り来る風草の葉の夕べのみどり吹き揺りにけり

垣越えて飛ばむとしたる白き蝶また舞ひ下りぬ朝露の庭に

くもりたる空に向ひて雛芥子のしづかに紅し一莖の花

秋の日の空の白雲うごき來と見るに消えゆく青空のはてに

暑き日のひと日の暮や夕顔の涼しく咲きて我のつかれぬ

傾きて松の葉にさす夕日かけ細葉の揺れの目につきにけり

さし込める秋日の強くさぼす物皆ふくふくと綿ふくらます

夕ぐれのくらき厨の板の間に束ねて白き秋の蕪かも

野菜物小蕪の球の眞白くもなめらになりて秋冷えむとす

隣り人樂しくあるらしいふ言の末は笑ひとつもくづるる

流れ早き川の板橋犬と犬渡りてゆきぬ山深き方へ

首たてて遊ぶ家鴨の眞白さのさむざむと見ゆ山裾の淵に

燭の火のまたたき止まぬ光見ればものうべなはす父とぞ思ふ

弟の咳せきく聲の父に似るとなつかしみきけばそれかときこゆ

うす紅きばらのかをりのほのけさや嗅ぐにまぎれて消ゆるが如し

青桐の老いたるみどり風にさわぎ二百二十日の空くもりたり

氣ぜはしくたち居をすれば嬉しかり何ぞよきことあるが如くに

白菖蒲花の涼しく開き切りいよよ眞白し傾く日光ひかげに

林 宏 一

病中一家離散す

永く病めば苦しきものか住みつきしこの我が家も遂に賣りにけり

庭先の夾竹桃の花なゆる眞晝を高く熱出でにけり

花甕の鶏頭の色古りにけりさがらぬ熱の幾日續くも

さ夜更と思ふ家内のひそやけさ獨りめさめて寢汗をふくも

わが父も眠らぬならん夜の更けを二階に聞ゆしはぶきの聲

おのづから昂たかぶる心黙もだしゐて青葉のゆらぎ見てゐたりけり

日もすがらただに黙して臥これども寂しき時は妻を呼びけり

林 三 郎

玉川の迅き流れに遊ぶ子らはあなうら白く見せて泳げる

林 晴 三

物皆が我にそむきてゆくごとき病みし日暮の心さびしさ

なにかよき仕事見つけて働けと心さけびぬ暖かき日に

林 霞 江

四時ちかきうすくらがり往診の馬櫓の迎へは鈴ならし來ぬ(權太にて)

林 孝

秋風のわたる空をしゆくごとく己があゆみの地につかぬかな

林 甕 臣

白櫓のわか葉のみづ枝風見えてあした涼しき庭の面かな

あたたかに雨ふる見えて葉櫻のみづ枝うごかし南風みなみ吹くなり

土壁の揺れ落つる音に夢さめて野分吹く夜の月を見るかな

ほつもりの日なたしたしくなりにけりにはかに寒し秋風の空

雨やまぬ西窓まれにけふもあけて咲き散る栗の花を見るかな

かへる鳴く野川向ひのすず菜畠おほかた花になりけるかな

馬くるま大路ひまなく行きちがふ音にもしるし花のさかりは  
あしびきの山どりの尾の長月の後の今宵の月のさやけさ

天の原ふりさけ見ればぬばたまの夜わたる月に雁ぞ鳴くなる  
枯れ枝の梢に高く山鳩の呆れ聲寒し冬の夕ぐれ

雲あしのはやくも冬の日はおちてかぐろき里に時雨ふるなり  
わぎも子が寝くたれ髪のかき曇りなほ夜を残し時雨ふるなり  
しみじみと肌身にふれて寒けきは風まじり降るみぞれなりけり  
むら千鳥とぶや磯浪高ければ立ちかさなりて空に鳴くなり

高木兼寛博士を悼む

大きくすし高木博士の力にも任せぬものはその命なり

林 太郎



朝まだき妻のもの干す音聞ゆ今日も一日晴れよ大空

林 翠

北支の地また亂ると聞くからに發ちゆく部隊は氣負ひて居らむ(郷土部隊渡滿)

林 吉之助

いささかは君をはなれし心もてわれに狎れたる君を見るかな

さらさらとこの夜の風に飛ぶ砂の音つづくなり月夜松原

林 幹人

あらがねの地をかきおこしかきならし百姓われやいのちいちづなり

林 茂則

白壁の落日の反射まぶしけれ茗荷花咲く庭に下りたつ

林 道夫

朝霜に晴れて畠のひろびろと外山とやまにひびく汽車の山彦

岩しろく暮れそめ来る山の雨大谷観音おはしましたり

みぞれ降り家は小暗きひもすがらめざしを干して冬を越さうぞ  
澤一瀬ひかり夕づく夏あらし柳の絮わたを吹きちらしつつ

月こよひ落のひろ葉にはらはらとこらへし雨をおとし來にけり

雨霽るる空のみどりに苗代の生えぎは青くうつるしたしさ

あをやかに暮れて軒端に濕める灯の若葉の闇に馬を洗へる

柿若葉梅雨のくりやにまな板の音明るくて母わかかりし

丸の内晝の驟雨の雲のなかに電燈しろくともりゐにけり

硝子戸に芝生のつゆののぼりをりあげがたあをきかなかなの聲

幅ひろき場末のみちを聲あげて泣きゆく兒あり雲の峰立つ

妻死兒を分婉す

一こゑも世にはとどめぬ魂ながら深夜の雪に耳をすましきく

林 茂 人

山くらき軒端の雨に吾が腕の鳥肌寒く蓑をぬぎたり

朝雨や心わりなき悲しみにふて寝もすべし大根の花

水を出て大蛙一つ眼を開きぬはばかりもなく飯食ふ吾れは

生きてゆく身のかなしさかむきむきの憂へに居りて兒をなしにけり

林 惠 喜 子

登り來し山のいただき吹きゆすり過ぎゆく風は樹氷散らしつ(雪の雲仙登山)

林 美 那 子

海峽はここにせまりて河の如し流るる潮を遡る帆船ふね

林 成 子

ありとあるものの事象に天地の理法の缺くる一點もなし

満堂の固唾をのむや壇上に聲ありひそにそよぐ白髯(アクセシオンフィールド教授)  
くだりくる水の傾斜を見てゐつつ容易ならざる思ひに到る

つきつめし心は夏の旱天にころがりいづる雷を涼しむ

來し方もさしてゆくてもしらじらとただ尾花なるいちめんの秋

古こ九く谷たにのかの大皿たいしんに描きありし青草の青のしみて眼まなこにあり  
きのふけふ空の青さをおもふにも拭かばやわれの朝の鏡を

林 大

いかるが  
鶴つるに て

ひたすらに我はをろがまな卯月照る日はもの皆を被ひてありけり

飛鳥にて

うらうらと照れる春日にいしずゑの石さへなごみかぎろひたつも

深大寺にて

古森は千年しげれり萬世に泉は流る佛とはに坐せ

釋迦文尼は悟りにいます眞清水はひびきたてをり千年古森

蹉跎岬

あしずりの岬のつばきつらなめて花なる時にあはなくも惜し

南の岬の宵に仰ぎ見る星の大いさや魂ゆるるごとし

燧岳に登る

山千山なみふすをちに指向ふ白根がたけに雲動く見ゆ

林 宏 亮

なくだけが精いつばいの秋蟲のいのちにふれてわがなりにけり

林 澄 雄

甘利山吟行

山路のたをりに咲けるつぼすみれ紫ふかく影もつあはれ  
吹きあぐる風冷え冷えと夕づきて山を這ひゆく霧はてもなし

法師温泉行

吾こころ祈るに似たり雪晴れの谷川岳にま向ひ立てば

商人低唱

商人が歌を好むとあざけりし友にも馴れて歌よむ吾は

林 宣 男

洛北光悦寺茶室

ここに居てすでに時ひさし四方の山巒をふかめて昏れ入らむとす

南出雲湯村温泉に宿りて

岩に觸りきほひ流るる谷川の急湍（ひんげせ）の音は雨にまぎれず

林 光 子

父が吸ふ煙草を買ひに手を引いてあそびあそびの子の歩みなり

わがために流したまひし十字架の血潮を信ず今は素直に

日暮里や田端や崖の土さへもありしながらの東京に來ぬ（東京に轉住）

花咲けばそよろと風に乗りて來む小さき魂をおもひやりつつ（亡見）

林 梧 一

潮に洗はるる音さむざむし幾ところ眞珠養殖のいかだ流れつつ（志摩國波切海岸）

林 松之輔

瘡の強き我の爲にと亡き母が植ゑし雪の下に白き花咲けり

林 千 穎

炭層にカツターいましあてられつ崩るる炭の音をさびしむ(筑豊炭田風景)

林 丕 沙子

夕日滿つる引いな佐はさ細江えの入つ海船一つ來る光となりて

綴ぢ糸がつくる窪みのあえかさよ紅匂ふ吾あ子こが新床

林 掬 泉

五月雨の濡れとほりたる苔の上に沙羅の白花おち溜りつつ

やぶ蔭のゆふうす暗き門廂釘をさぐりて提灯吊るも(西福寺歌會)

この朝の庭山吹は閑しずかなるかぜの揺るとき散りこぼれけり

神庭はゆふべ梅の葉ちりゐたり夏な越この祓はらひ昨日過ぎにし(糺ノ森)



山吹は疊のうへに散りにけり歩み初めたる吾子わがこに拾ひろはす

林 みち子

こともなく今日もひとひを過したる感謝の心に夕餉ゆづ食しをり

林 富美子

から梅雨の暑き日でりを厭いとひつつ草野の徑みちを葛西かさいへ向ふ

林 冷子

英國東洋艦隊ドーセットンシャイア號に招かれて

高角砲艷あざこまやかにみがかれて吾が手にさへもかろく動ける

林 和夫

子等未だ見えざる朝の教室けうしつに來て若葉わがは明るき窓明けにけり

林 武夫

磯表いざよふ月のうらやすし夜風ひさしく鴨はさやげる

晝磯ははじろの鳥のたむろしてほとりの徑を往くひともなし

掌てに撫とればすなはち白し白魚の曉の光に子を孕なみをり

林 理 友

日ならずして辜丸摘出手術受けんとすさばさばとして愁へなきに似たり  
蝕まれし辜丸は切るに惜しからね張り失せて生存の敗者とならむかと怖れし  
雄鷄が鳥冠とさか垂れ呆とけへなへたと寄り行くを雌にも嗤はれむかと

退 院

しづまれるわが家に寝ぬると興奮たかぶれる思ひにふとも手を握とり合ひぬ  
夜の床に手は握とり合へど離居さかりの後を満さむころにあらず

松酒は臭ひと共に呑み込みつつ夜冷えの室にうつそみいとしも

林 龍 一

起きぬけにはく庭下駄の冷えしるし霜ふかき朝の林泉しづに降りたつ

林 田 實

堪へがてぬかなしみいだき霜おける青菜畑を見つつよぎれり

ものなべてわれにはむかふ心地して雪氣にくもる空を仰げり

原 三 郎

高原の松にかかれる葛の花散り居る路をわが下りけり

晝の陽の温みほのかにのこり居る枯草丘にしぬびあひたり

水際の濡れの砂地を行くほどのさびしきこころ人に知らゆな

朝の風さやかに鳴りてすずかけの熟れし實ここだ揺れ居るが見ゆ

あさまだき船に寄り來るセイロンの鴉は風に羽ばたきにけり  
大海のふかどに沈むアフリカの眞日の大きき眞日の大きき  
久方の天にそびゆる雪の山ユングフラウとけふ知りにけり  
對岸の陸をチエツクと教へくるるわきて瞳の青き少女は  
わが天幕めぐりて咲ける月見草つゆ置きにけり星空の下に  
夕かけて雨はあがりリラの花ほのかに白く地に落つる見ゆ  
竹藪を切りて市場を建てて居り郊外に人のかく集まひ寄る  
夜の雞のさみしく鳴けり死にたまふ母のかたへに子は寝ねにけり  
大利根の奥處に來れば雪原を流るる瀬の音澄み極まれり  
はるかなる粘土の原の日の光かほの明るく滿つる春となりたり  
降りつづく雨を窓邊に見やりつつ比色試験に眼は疲れたり(研究室)

人工太陽燈のオゾンの匂つよき室にねずみの體重友は測り居り

原 美 登

寒さなどみて温突燃えずしづかなる今宵は更けて雪となるべし  
かささが晝をなきつつ裸木に巢づくる見れば春となりにし

原 正 邦

秋づける山ふところの棚田には晩稻おぐ青しも霽れ行く霧に  
雪解水とどろくきけば昏るるまであまねかりにし光をおもふ  
ひねもすを山壁の雪さらしたる藏王の谿ゆ湧きたつ夕雲

原 一 雄

峠こえてさらに雪ふかき山畑見ゆ沼田につくは日暮れにかあらむ  
白々と乾ける大き築べんが見ゆ雪のこりて水の乏しき河原に

くらき石疊いしだまみに所在なく靴をならしつつ待ちをり雪におくれし汽車を

清水越

曼珠沙華あかあか崖に咲きぬしはとんねるのなかを過ぎつつおもふ  
赤城嶺のうしろにかよふ道ほそく赤き馬ひとつのぼりゆく見ゆ

原 常 雄

鶴見山の高原に天幕露營をなす

汗ふきて息いそひ見さくる山々の秀峯なつねあかるく秋の日照れり  
高原の夜の目にしるし見渡せばおのおのもの幕舎ともせり

相 聞

おちつきてゐんと思へどしのび待つ心にふれて木々のそよぐを  
髪かみの毛につきたる松の枯葉をばぬきてやりつつかなしさまさる

水郷日田 一首

みなかみに下りる沈める底霧のうごととすれや朝たけにつつ  
かしこしや日の大皇子はさし出づる光りの如く生ひたたせ給ふ  
たまさかに歸り來れるわれにむかひわが家の馬のいななきかくる

波野高原

かぎりなき青草原の起き伏しに間なくし雲の影ぞ移ろふ  
かまつかの葉の紅の眼にぞ沁むあかるき秋の陽のひかりかな

山國川のほとりに住みて

秋冷えてあけがた深き霧の上に耶馬岩山の秀ぞ浮びたる  
山かはの鮎下らむか秋とみにさむき今宵の雨にぞ思ふ

山かひに子らを教へて男の子わが名は立たずとも悔あらめやも

深耶馬溪

峽小田にけさ靄だちて降る雨の冬としもなきあたたかさなり

原 眞 弓

久度山の峰の上霧合ひてあはあはし朝日の中にあたたかく見ゆ(丹波山中)

支那絹の朱いろ深きかげぶすまたのしきごとくなりて眠りぬ(牛莊山海關秋夜)

眼さむれば大王院の屋根にそそぐかたきみぞれの音のきこゆる(高野山)

原 都 久 雄

ざはざはと羽一面をこきざみにふるはして孔雀の大きく近よる

原 久 子

夕化粧かがみの中にほほゑまし妻とふ我を見出でけるかも



麓邊の小松がくれに孔子廟の白壁が見ゆいにしへしぬばゆ

原 正 俊

空わたる白き霧雲たちまちに此高山の嶺にひろごりつ(金剛山)

家の外は風すさみ行く夜の更けを母に歌かく火桶に寄りて

原 菊 枝

緋のカンナた顯ち明りつつ午高し婢はしたが軍鶏しやうを追ひつめ行けり

梳とかしたつ髪との乾きの素直さを肩にすべらせしとばしありたり

良夜あたらよは心素直にあり經つつ白堊のつぼを拭ひて居りし

衣縫へど心そぐはず此の部屋はサルビヤが映えて緋の玻璃戸なり

濕りつつ匂ふいばらの色愛し春蟬の聲耳に透りぬ

木がくりに濡れて羽ばたく水鳥の瞬間たなゆら白う雨けぶりた顯つ

原 芳 文

灯の下にますかして見る蠶この肌の光り艶だつ上あがり簇り近しも

るろりべに仕事始の繩なふに東の窓のほのぼの明け來く（正月二日）

偽装たんくひた走り去り遠のきて雪ばれの空に啼くひばりあり（松本にて）

原 勝

風おちし夕を寒みつはぶきにひととき明かる冬の日のいろ

炭焼きの煙はとほく吹きながれこの苗代の芽をふきにけり

原 知 一

藏 王 山

月照れる峠につづく草山は萱むらすぐる風音やまざ

峠路に古びし村は月照りて屋根に伸びたる草そよぎをり

朝餉して友のすてたる梅干の核たねは山川の水にしづみぬ

入 院

卒業證書見つつおもへば血を喀きて論文かきしもあはあはしかり

原 夢 二

梅雨に入る日ぐせの曇り氣にしつつ麥刈り急ぐ老いし吾が母

原 剛

豫約せし古義の五巻も著きにけりやまひはいえず春日かなしも

臨終數日前の作 四首

眞夜中に涙ながして目ざめたり父母のことおもひ居しかな

長病みの床にこやせば心よわく御姿をおもひて涙を流す(藤田先生を思ふ)

雲と山川と草木と男女をとこをんなそれをつつみて青空はある

わが死なんそのあしたには太陽よことに明るくわが部屋照せ

ひろびろし川原の土堤の青草にすわりて心たひらぎにけり

朝日いまさし初めにけり母の背もダリアの花もかがやかんとす

原 口 喜 美 子

北米合衆國ブライアークリフといへる勝景の山谿に宿りて

どどどどと大屋根の雪なだれ落ちあと静かなる朝日のゆらめき  
忘れ果ててあり經し人を春されば木の芽のごとも思ひ出でたり

原 澤 英

この雪がねゆきとならむ山住みの冬の久しさ思はれにけり

霜柱ふめばくだくる寂しさを心に持ちてい行き歸りつ

眞晝間を寂しと思へば蟬の聲聞かずなりけりいつよりならむ

原田 静子

夕餉すみ孫連れて來し萬歲橋に十五夜の月あかく上りぬ

原田 石水

春淺きけふも終日風吹きて土いちじるく白く乾けり

原田 士朗

こほろぎの聲のかそけさ颱風の近づきたりとラヂオは報しほす

ひらひらと棹のエプロンまひおちぬ庭つづきなる菜の花の上に

ひたぶるに旅をしぞおもふ山の上に眞晝の雲の湧き立つ見れば

さえざえと鶏頭の葉のしづれゐる夕べの井戸に足を洗へる

原田 村雀

若くして再び嫁ぎ行く姉に今宵は飯をつけて貰ひぬ

伯父の家繼ぐべくなりし弟に唯に向ひて今宵飯食ふ

原 田 春 乃

斷髮嘆誦

みだれがみ嘆く日なけむ男さび斷ちにし髪のかかぐべくなく  
縮たげばぬれ縮かねば長きをみなわが黒髪をこそ今は戀ひしめ

獨居頌

女子アパートの鐵製欄干に夕顔の蔓まきつけてたのしかるらし  
わがむかふ鏡のなかに瓶のばら咲き照りゐたりうしろを見せて  
開きつつすこしうつむく花びらは花びらのうへに翳おきてあはれ  
アパートのコンクリートを歩む雀の子足さだまらず風に吹かるる  
おのおのが身の長たけにそふ影ひきて子どもらあそぶ春の芝生に

健康にて働ける日は女といふ意識はあらずむしろ安けし  
朝の目覺めにたまたまわれのおもふこと職務にあらず女の幸は何か  
窓ちかくベツトを置けば月光にぬれて夜すがら眠りけらしも  
ひとり思ひ獨りさばきて事足らふわが明けくれよ亂さずあらむ

不 忍 池

明けそめる靄の絶えまより搖れ出づるはちすの花は尺にあまれり

妙 義 山

むかうはるか大砲岩に這ひ上る人影は寒き空にうごけり

房 州 白 濱

夜の海をつらぬき照らす燈臺の光芒のはてに月出でむとす

女 性

みごもれる友と眞面にむかひゐてしだいに何か落ちつきがたし

昭和十一年度勸業債券賣出前夜

あらむしろ御所ちかき舗道に敷き寝して蟻のごと民ら債券を待つ

三河島汚水處分場

秋の陽は照りきはまれりひろびろと沈澱池に湛ふる汚水うごかぬ  
水吐きて残りし泥をためおける汚泥槽に早や臭ふものなし

老 母

夫と子に根かたむけて呆けし母くちもとに飯をつけてもの食む

原 田 信

歳くるる八ヶ高嶺よ險しかる心こらへて來にし年なり

一徹に人を憎しむことすらも己が心を鍛へあげゆく



春たつと宵なまぬるし尼寺へ提灯一つのぼりゆく見ゆ

バス登る峠の峰に湧く雲の夏めく見ればはるけきおもひす

二番草搔きし田水に夕月の涼しくすみて土用近けれ

酒作る唄殷々ともりゐる大き屋棟のうへの三日月

原田重雄

片山の雪残りゐてきはやかに蓼科山の谷深く見ゆ

原田さつき

峽に入りて徐行はじめし自動車より見下す沼の青きしづもり

原田光男

春となる朝の光を揺りたてて鶯鳴けりひんがしの窓

病妻を郷里に歸して獨居す

物音のなべてこほしき獨り居の夜の柱に釘をうちつつ

原 田 實

晴れすぎてさびしき山や松風の音たちくれどすぐ空に消ゆ

原 田 徹 夫

賣られゆく娘のことなど今日も亦出で居り新聞の片隅に小さく(函作地)

原 田 彦 治

日暮まで峽田植ゑをる人ありて降りつゝのる雨山にけぶらふ

竹林の中より寺の鐘きこえわれしづかなる歩みをつづく

東 北 三 首

白雲は鳥海山に退そき行きて光すみたる國に眼ざめぬ

暑き日の暮れしづまれる野のはてに藏むす王わうの山か光たもてる

山の嶺に消え残る雪白々と見えつつ谷はやうやく深し

丈ひくき藺草のたぐひ霜枯れて水しみ出づる原も越えにき

夕かげに葦むら白く素枯れ立ち光れる湖つみがそのさきに見ゆ

兄の手紙の文意おほかた知れて居り机に置きていまだ披かず

原 田 福 壽

人皆がわれに面をそむける如く淋しく今日も日暮れぬ

原 田 謙 次

ただ一人雪を待ちつつ酌む酒の涙に似ると誰にか言はむ

原 田 二 郎

富士の嶺の高嶺のみ雪いよよ白く猶高かれと降りつもるらむ

もも年に此身はみたず三千とせの後に残さむわがこころざし  
みはるかす秩父甲斐がねあらた代の年たつ朝の色のさやけさ  
後の世のためにとおもふまごころをうけさせたまへ天地の神

原 田 得 三

一晚おき二晩おきに立つ風呂にしみじみひたる冬となりけり

原 田 清

灯をあとに夜の渚を歸るところ天の川白く海にかかれり(鎌倉)

七月の小石川臺地に赤き屋根の木隠れつつもほの光る見ゆ

縁深き小石川臺地のいただきは空につづきて靜かなるかも

原 田 爲 一

夜に入りて庭の糶がら燃ゆるらし明障子に火立はだちしるけく

原田 勝美

松山のひるのひそけさ松かさを一つ落して山鳥たつも

原田 しづゑ

雨あとの静けき朝はおのづから兒等の心も落着くらしも(朝の歌室)

原田 恒

監房に縊れ死にしとふ若者の腕にほりたる刺青いれずみは見き

原田 憲雄

世の人に交はり難きわが性さがは貧しさのみによらざりにけり

忘れむと思ふ女のみまみなどもいつしか忘れうら安くある

原田 進

目にみえて松の花粉はたちにつけり人の氣配の無き家の晝

首垂れて牛が草食むほとりよりおのづから沼にみち開けたり（赤嶺三首）  
山水をひきて落すや落水に蘭の根の朱の透きてみゆるも  
ラヂオが傳ふる鎌倉五山の除夜の鐘これの霜夜の土に響かふ

榛澤せい子

嶺岡のいく山なだりおしひらけ一山かがやく新芽のひかり  
つばくらめ今か來むかふ田の畔のつばなほほけて風にそよげる  
甲斐なきを時になげかふ女手に代搔牛はさばきつかれつ  
天の川つばらにたかく稻妻のさばしる夜さをはや冷ゆるなり

榛原絮一郎

哀 隣

ただ二人あひたかれどもすべ知らに嘆きふかしも家にかへりて

かきくらし空に煙はたちこめてあな息づかし人を思へば

船よ見るむかふの家の避雷針照りて眞白き雲の中にあり

わが心寄するものなし照りみつる光にゆれて輝く海原

今のわれをいかにせよとか紅の日の入り方の島の上の雲

船の舳へにくだけて白き夕浪のうねり高まればまさる思ひか

心なほたのむと知りてわが悔し思ひすてたる女と思ふに

青葭を折ればにほひの青臭し蛙釣りをばこしらへにけり

ゆふぐれの道に上りて鳴く蛙あなうつつなし頬ふくらせて

月魂つきたまのうつりて明き早苗田に動くあまは鳴き居る蛙

はるばると青田さやかに日は照れり去りにし人を憎むべからず

追憶

つつしみも今日は忘れてたまたまに歸りし我に聲立てし妹や  
かるた取りに今宵來ませと言ひに來て少女の如く顔はそめしか

ある夜

あめわたる月仰ぎつつおのづから歩みはやまる會ひに行く夜は  
くきやかに地上におとす藏の蔭暗きにしぬび妹待つ我は  
月影のさやけき庭をしのび來る妹が姿はあきらかに見ゆ

又

家人に忍びて妹が開くる戸の開けにくきかなやくるるが鳴りて  
如何かも事はなるらむかくれ居る二人の方に近づく提灯  
かくれつつ胸やすからず耳もとに妹が吐く息まつぶさなるも



又

外套の裏の甲斐絹かひきぬのするる音こころはばかり妹待つ我は

足音のたつをはばかり足袋はだし濡土ふみて妹は來れり

かねてよりかもがもせむと思へりしこころあやなくただに抱けり

時の間のあやふさすぎてわが心やすしとすれどはたやさびしき(以上)

野を越えていましが村の近く見ゆひたにあひたし今すぐに行きて

をみな子のいのち清らになりぬべし眞日深くして空澄むこの頃

思ひ出づるふるさと人の面わさへおぼろなるまで時たちけり

別れたる人を思へば炭つぐと陶の火鉢に涙落ちたり

伊豆の國新島にありける頃、近くの森蔭にほのかなる花の咲く  
を、何ぞと問へば野生のあぢさゐなりけり

見る人もなくてしほみし紫陽花のはかなき故にかれがたくしぬ

しめり風山より吹けば青萱のゆれて亂れてわが心苦し

榛原しの子

杉丸太削る斧の音ひびくなり河を隔てて明るき對岸

榛原仁保布

弟は北越に視察に赴ける歸途直江津の濱にて海水浴をなし  
不慮の死を遂ぐ

桑畑の桑の繁みにかくろひてなげかふ父をさびしと思ひぬ

夜半になく雁の啼く音は弟の生けりし時にきけるが如し

張間禧一

おびただしく松露をとりし跡ありて無量寺につづく濱はさみしき

張本義道

ひとすぢに大工がけづるかな層長く清しく風に泳ぐも

春木 紫煙

大吹雪ほのほとなりて貧寒の山全山をなめつくしゆく

春田 阿京

梅雨ながら一日晴れにけり日あたりに干し並べたる玉葱匂ふ

春成 やす子

一人ひとの人をひそかに争いひしはかなきことも今は懐かし

あの山も彼の山もわが登りしと小高き丘に來てみはるかす

春山 鶴子

あしたより降る春雪は牡丹の芽うちぬらしつつもらざりけり  
床の上にひとりすわりてさびしけれこよひの月かげ疊を照らす  
寢てきけば高木にうたふ鳥の聲すがしき春となりにけるかも

こもりゐのころいぶせみこの夕べ草間の道にいでて來にけり  
春もはや暮れてゆくらし道のへに榎の花の散りしくみれば



# 作者略歴

## な の 部

**那佳山 貞**

本名邊。二十九歳。横須賀市中里に生れ、銚子市今宮三軒町ヒゲタ合宿内に現住。ヒゲタ

醬油會社員。昭和十年七月國民文學社に入社し、植松壽樹氏の指導を受け現在に至る。

**那賀壽美子**

本姓中。三十四歳。福岡縣築上郡下城井村に

生れ、福岡市荒戸町一一〇に現住。教員。二十歳頃より時々作歌を試み、三十歳アララギに入り現在に至る。

**那須 祐三**

二十八歳。長野縣上伊那郡中箕輪村木ノ下に

生れ、東京市小石川區西古川町二に現住。翻譯著述業。十六歳より作歌、廿五歳「相聞寺歌集」を限定出版す。歌誌に關係するを好まざりしも昭和十二年「花房」誌友となる。

**名木 勇**

二十五歳。東京市麻布區宮村町に生れ、淺草

區小島町二ノ八ノ二に現住。蒔繪師。昭和八

年日本短歌詠草欄より短歌鑑賞に入會し今日に至る。

**名倉 信光**

二十九歳。神奈川縣高座郡六會村に生れ、同

郡藤澤町に現住。農業、雜誌記者等を経て現在新聞記者。少年時代「心の花」其他に投稿せし以外取り立てて言ふべき作歌經歷なし。

**名倉 清作**

三十六歳。神奈川縣高座郡六會村円行に生れ

同地に現住。農業。「心の花」「詩歌」に學ぶ。本名篤子。昭和十一年六月六日、津市八幡町

西浦にて死亡。行年三十。昭和三年「國民文學」に入り、昭和八年より草の實社に入る。

**名越那珂次郎**

五十五歳。水戸市に生れ、京城府仁義町一〇

七に現住。京城帝大豫科教授。佐佐木信綱氏に師事し、昭和四年歌集「高麗野」を出版す。

**名取 由子**

二十六歳。栃木縣安蘇郡植野村大字植野に生

れ、東京市向島區寺島町二ノ一二八に現住。高女卒業後しばらく「水鏡」の社友となる。

**名雲 理輝**

明治三十九年、千葉縣銚子市に生れ、同地に

現住。銚子市役所書記。十九歳頃より二十四歳迄作歌、後中絶し最近また志す。

**名和 盛子**

明治三十七年一月、徳富蘇峰の五女として、

東京市赤坂區青山南町六丁目に生れ、同市大森區山王一ノ二八三三徳富方に現住。大正七年十五歳にして竹柏會に入り、佐佐木博士に師事し、昭和六年歌集「白椿」を出す。現在は一路會員を兼ね、山下陸奥氏にも指導を受く。

**納谷 歌子**

二十四歳。兵庫縣西宮市久保町七七に生れ、

同地に現住。十歳より父の指導を受け、兵庫縣立第一神戸高女在學中大井廣氏に師事す。「六甲」創刊當初より之により現在に至る。

**奈良 兵亮**

三十九歳。青森市に生れ、同市山田町五丁目

に現住。會社員。十九歳より作歌、二十八歳函館にて海峽詩社を經營す。二十八歳「吾妹」同人、三十三歳「青虹」同人。函館大火後歸郷、深淵莊短歌會を組織す。目下中央の關係結社なし。

**奈良 峯子**

三十二歳。北海道渡島

町五丁目に現住。二十七歳より作歌、心の花に六ヶ月投稿、函館大火後青森に轉住、夫の

深淵莊歌會の一員となり作歌をつづく。

### 奈良井新也

二十八歳。長野縣東筑摩郡宗賀村洗馬二七〇

〇に生れ、同地に現住。郵便局員。昭和八年一月、潮音社入社、現在に至る。

### 南木貫之

三十五歳。兵庫縣に生れ、神戸市須磨區村雨

町六ノ二に現住。神戸市電氣局庶務課勤務。慶應大學法學部在學中「三田歌抄」に發表し又「香蘭」に出詠、現在業務の餘暇時折作歌するに過ぎず。

### 南岐蘇山人

本名原和海、四十八歳。長野縣木曾大桑村野尻

に生れ、同縣木曾福島町向城に現住。小學教員。大正十二年頃より作歌、大正十五年七月アララギ會員となり、十屋文明氏の選考うけ現在に至る。

### 南波佐間源治

二十四歳。千葉縣印旛郡彌富村坂戸に生れ、

同地に現住。農業。昭和五年小學校卒業後作歌、南絃二の筆名にて諸歌誌に投稿す。昭和十二年二月「土筆」社友となり今日に至る。

### 内藤米雄

三十歳。北海道茅部郡尾札部村に生る。漁業。

二十歳頃より作歌、アララギに入會し今日に

### 内藤新三

明治三十四年、山梨縣韮崎町に生る。十七歳

の時同町役場に奉職し現在に至る。十八九歳の頃、明星派の短歌を耽讀、後、アララギ派の歌風を知り、昭和四年より中村美穂氏主宰の「みつがき」同人。

### 内藤 丈叟

本名弘次。二十八歳。新潟縣北蒲原郡神山村

泉に生れ、同縣新發田町に現住。教員。作歌經歷といふほどのものなし。

### 内藤 晴野

舊姓木佐。明治二十九年十月二十日、島根縣

簸川郡平田町に生れ、大正七年内藤喬に嫁す。大正九年アララギ短歌會に入る。大正十三年六月十四日死去。行年二十九。

### 内藤 千乃

明治三十年十一月二十八日、東京府調布町に

生れ、東京市世田谷區鳥山町五四〇に現住。歌集「みつがけろひ」の著者。

### 内藤 進

二十二歳。東京市麴町區富土見町一ノ七ノ一

三に生れ、同市荒川區尾久町六ノ二四三西浦再次郎方に現住。職業なし。昭和十一年春より作歌、水麴に入社して一年間指導を受く。現在「創作」社友。

### 内藤 ふゆ子

舊姓岡本。明治三十四年十月三十日、鳥取縣

米子市中町に生れ、鹿兒島市上荒田町一九一に現住。昭和三年内藤喬に嫁す。同七年アララギ短歌會に入る。

### 内藤 はる子

四十四歳。伊賀上野に生れ、大阪市天王寺區

細玉谷町一〇四に現住。昭和五年俳句より短歌に轉向、各種婦人雜誌に投稿、池田源太氏に指導を受く。

### 内藤 鶴

明治四十二年三月三十日、千葉縣牛久町に生

れ、横濱市神奈川區神奈川通五ノ一五三に現住。官吏。二十歳の頃より短歌に志し、後、詩作に轉ず。

### 内藤 博

明治三十六年八月二十六日、兵庫縣加東郡福

田村に生る。昭和二年より作歌、同四年雜誌「伊吹」に關係す。昭和六年ボトナム短歌會に入り、昭和十一年三月九日死去。享年三十三。遺稿集「秋風嶺」あり。

### 内藤 杜美

本名とみ。二十八歳。米澤市新町四丁目に生

れ、石巻市大手町に現住。昭和八年六月草堂創刊號より入社、今日に至る。

### 内藤 道直

三十二歳。米澤市館山

に生れ、石巻市大手町に現住。石巻中學校教諭。昭和五年五月、霸王樹に入社、同八年六月草堂に加盟、現在に及ぶ。

### 中 勸助

五十四歳。東京に生れ

同市赤坂區表町二ノ一三に現住。著述業。著書に銀の匙、提婆達多、

沼のほとり、犬、菩提樹の蔭、しづかな流、母の死、街路樹、琅玕、機の手、海にうかばん等あり。

**中江忠一郎** 二十五歳。滋賀縣滋賀郡坂本村に生れ、同地に現住。農業。昭和十一年三月香蘭の近江支社に入社し今日に至る。

**中江間人麻呂** 京都府間人町に生れ、三十七歳にて歿す。畫工。大正十年頃より「あけび」に歌を發表す。

**中垣五郎** 明治四十三年二月、熊本縣に生れ、東京市杉並區高圓寺二ノ四〇四に現住。昭和六年三月東京高師卒業、大分縣臼杵中學校教諭。昭和十一年東京文理大入學。昭和三年アララギに入會し土屋文明氏に師事して今日に至る。

**中川晴雄** 本名純英。明治四十三年十月、佐世保市泉町に生れ、佐賀市水ヶ江町花房小路に現住。鍼灸按摩マツサージ業。昭和五年秋より作歌、中島哀浪氏の指導を受く。ひのくに、帯木等に出詠す。

**中川一政** 明治二十六年二月、東京市本郷區に生れ、同市杉並區水福町四〇四に現住。畫家、春陽會會員。錦城中學在學中若山牧水氏の批評を受け「創作」に投稿す。後、詩に轉じ詩集「見なれざる人」の著あり。作畫の傍時々作歌あり。

隨筆集「美術の眺め」「武藏野日記」「美術方寸」「庭の眺め」等に收録す。

**中川伊津子** 本名宮本好子。二十三歳。徳島縣撫養町に生る。三重縣一志郡中川村小學校に勤務。昭和九年より著藻に入社、現在に及ぶ。

**中川正太郎** 三十二歳。京都府船井郡富本村水所に現住。農業。大正十三年創作社に入社、現在に至る。

**中川源太夫** 滋賀縣高島郡百瀬村大字知内に生れ、同地に現住。農。大正十年六月短歌研究會に入會。昭和十一年九月二十七日、東京市大森區田園調布二ノ八三八に歿。享年二十四。昭和十一年國學院大學國學部卒業。昭和五年四月頃アララギに入會、竹尾忠吉氏に師事す。

**中川正壽** 昭和十一年九月二十七日、東京市大森區田園調布二ノ八三八に歿。享年二十四。昭和十一年國學院大學國學部卒業。昭和五年四月頃アララギに入會、竹尾忠吉氏に師事す。

**中川美登理** 三十五歳。廣島縣三原市須波町に現住。始め水麩に、昭和十年十二月アララギ入會。

**中川虹光** 本名善久。越中富山の人。昭和四年一月十三日歿す。行年三十五。運送會社に勤務す。潮音社々友。

**中川澄子** 二十八歳。山口縣豐浦郡勝山村大字楠乃に生る。

れ、東京市杉並區荻窪一ノ四五に現住。昭和十年藤川忠治氏主宰の「歌と評論」に入社、今日に至る。

**中川化生** 本名敬毅。四十四歳。秋田縣仙北郡大曲町に生れ、秋田市下米町一丁目に現住。秋田魁新報「學藝部主任。前期「詩歌」時代の前田夕暮氏に師事、後「アララギ」にて島木赤彦氏に師事す。

**中川薰** 三十三歳。山口縣豐浦郡川中村大字熊野に生れ、東京市杉並區荻窪一ノ四五に現住。會計検査院副検査官。昭和十年藤川忠治氏主宰の「歌と評論」に入社、今日に至る。

**中川龍一** 明治三十八年二月二十三日、長崎縣南高來郡西有家町に生れ、佐世保市勝富町一一〇に現住。小學校教員。大正十二年頃より作歌、昭和二年「自然」に加盟、昭和四年「國民文學」に轉ず。昭和八年「香蘭」に加入し昭和十年「多磨」に移り現在に至る。

**中川浅子** 本名アサ。四十七歳。京都府南桑田郡本梅村に生れ、大阪府泉北郡高石町南に現住。青年學校教員。昭和九年より作歌、現在水麩社友。

**中川杏果** 本名覺治。四十九歳。佐渡に生れ、新潟縣長岡市中千手町二二八に現住。新聞記者。明治



四十年頃始めて與謝野晶子氏の新詩社に入り次で前田夕暮氏の白日社、若山牧水氏の創作社に入り、菊池知勇氏のぬぼり創刊と共に同人となり現在に及ぶ。

**中川 彦典** 本名彦次郎。四十一歳。京都市に生れ、同市上京區今出川通大宮東入に現住。新聞記者。同志と「京都文藝」誌を刊行すること五年、後與謝野晶子氏に師事三年、明星に寄稿。大阪毎日新聞所屬京都歌會の同人約三年、歌誌「京しぐれ」を主宰行約五年。現在街道社友。

**中川 武** 三十一歳。大分市生石町に生れ、同市王子町南通に現住。教員。多磨會會員。北原白秋氏に師事し、永年の病床生活に詩、童謡をつくり、短歌に及ぶ。詩集「嚴冬」の著あり。

**中川 曙舟** 明治三十一年十一月十六日、千葉縣香取郡小御門村名古屋に生る。會社員。作歌經歷といふほどのものなし。

**中河 與一** 明治三十年二月岡山縣谷區祖師ヶ谷二丁目に現住。早大英文科に遊ぶ。舊「文藝春秋」同人。「凍る舞踏場」「恐ろしき私」「海路歷程」「蕨たき花」「ゴルフ」「愛戀無限」等數多の小説集の外に「形式主義藝術論」「偶然と文學」「萬葉、ギリシヤ」等の評論集あり。

**中河 幹子** 明治三十年七月三十日香川縣坂出町に生れ、東京市世田ヶ谷區祖師ヶ谷二ノ一三三三に現住。女子英學塾卒業。中河與一に嫁す。大正十一年より女流短歌雜誌「ごぎやち」を主宰し今日に至る。著書に「イバニエス傑作集」「新らしい短歌の理論」等あり。

**中越 一梅** 本名吉一。明治三十七年七月九日、高知縣高岡郡橋原村越知面に生れ、同地に現住。農業。昭和四年頃より作歌すれど歌歴といふほどのものなし。

**中込 松彌** 三十歳。山梨縣中巨摩郡西野村池之端に生れ、同地に現住。教員。昭和六年より心の花の誌友となる。

**中込 純次** 三十五歳。山梨縣南巨摩郡増穂村青柳二二〇二に生れ、東京市世田ヶ谷區深澤町四ノ一〇五に現住。文化學院教授。最初アララギ風の作歌を試みしがやがて明星派の作風となる。

**中里 政一** 二十五歳。相模國高座郡大澤村大島に生れ、東京市大森區馬込小學校に現住。小學校訓導。

**中澤 一良** 明治三十四年三月二十五日、長野縣南安曇郡豊科町に生れ、松本市征矢野五〇二五ノ一に現住。産業組合事務員。二十歳頃より故川崎

社外氏に師事し、國民文學誌友となる。現在は何れの雜誌にも關係せず。

**中澤 豊三郎** 四十一歳。群馬縣山田郡大間々町に生れ、同地に現住。郵便局員。十七歳「心の花」に投書、以後作歌斷續。三十六歳昭和八年より復活「草炎」の同人となる。

**中澤 笛聲** 本名生。四十一歳。長野縣上高井郡高甫村字野邊に生る。農業。作歌經歷といふほどのものなし。

**中澤 尚** 明治三十五年九月十四日、長野縣更級郡眞島村六三〇に生れ、同縣北佐久郡小諸町乙四一に現住。小學校教員。昭和二年頃よりアララギを購讀するに於て作歌經歷といふほどのものなし。

**中澤 功** 長野縣北佐久郡三井村安原に生る。銀行員。學生時代より短歌に興味を持ち、大正十五年アララギ會會員となり、昭和十一年二月歿。行年三十一。

**中澤 松枝** 本姓堀田。二十四歳。東京市杉並區馬橋一ノ一四に現住。十四歳頃より作歌すれど師につきたる事なし。

**中澤 金一郎** 明治四十年六月、新潟縣五浦原郡峯岡村に生

れ、門司市元清瀧町二丁目木下方に現住。門司市大阪毎日新聞社西部總局に勤務。昭和六年東京商大卒業。高商時代文藝部員として作歌、大分新聞歌壇選者若山牧水、高商教授福光正次兩氏の教を受く。

### 中澤庭柯

明治十四年五月九日、兵庫縣丹波國水上郡幸

世村伊佐口に生れ、同地に現住。農。大正四年頃より主として「しほさる」後「あけび」によりて歌を発表す。昭和三四年頃歌誌「比牟呂」を主宰す。歌集「籬山集」あり。

### 中鹽清之助

大正二年三月十七日、富山市西公文名町一〇

に生れ、福井市佐佳枝上町四一石附方に現住。市立實科高女教諭。昭和十年國學院大學國文科卒業。昭和五年五月、釋道空氏中心の鳥船社に入り、今日に至る。

### 中島哀浪

本名秀連。五十六歳。佐賀縣佐賀郡久保泉村

大字川久保に生れ、佐賀市西正丹小路二九に現住。中等學校教員。大正二年前田夕暮氏主宰の白日社に入り「詩歌」同人として今日に至る。尙ほ昭和三年七月「ひのくに」を復活主宰す。

### 中島彦治郎

明治三十八年五月十九日、群馬縣吾妻郡君島

村大字岩下に生れ、東京市淀橋區柏木五ノ九五に現住。理容館經營。昭和八年一月綜合

詩歌會に入會、同十年退會。昭和十年一月子規庵歌會に入會、柴田宵曲氏に師事して現在に及ぶ。

### 中島貞子

明治三十七年十月十三日、東京府下豊多摩郡

代々木村一八五に生れ、東京市澁谷區代々木山谷町一九六に現住。大正十一年潮音社に入社、現在に至る。

### 中島冬子

二十四歳。熊本縣松本

谷區松瀨町七に現住。近年柳原輝子氏主宰の「ことたま」會に入る。

### 中島花楠

本名大助。東京市に生

れ、同市四谷區左門町九八に現住。ダイヤモンド社經濟マガジン編輯部員。大正六年頃より若山牧水氏に師事、創作社に入社、今日に至る。

### 中島恒子

大正三年四月東京市牛

込區南町に生れ、昭和十年五月小石川區高田老松町に病歿。享年二十二。川村女學院在學中田尻彌七氏の指導により作歌。遺稿集「香草」(昭和十一年五月)あり。

### 中島治太郎

三十三歳。八王子市南

町一七に生れ、東京市京橋區築地三ノ四小宮方に現住。魚問屋(東京魚市場油嘉商店)。初め「とねりこ」に據り、のち若林牧春氏、大熊長次郎氏等と「果

物」を經營、大正十五年古泉千櫻氏に師事。その後橋本徳壽氏等と共に「青垣」を起し今日に至る。

### 中島眞佐子

二十八歳。熊本市に生

れ、長野市西長野二二に現住。與謝野晶子氏に學ぶ。昭和十二年二月歌集「火上燬よ」を出版。

### 中島暉人

本名丙惠。三十三歳。

愛媛縣溫泉郡新濱村字新刈屋五六三に生れ、岡山市上ノ町東裏たち花内に現住。料理人。作歌經歷といふほどのものなし。

### 中島誠

明治四十四年三月十三

日、長野縣飯田市に生れ、東京市板橋區練馬南町二ノ三六二八に現住。會社員。慶應經濟學部出身。昭和六年潮音入社、太田水穂氏に師事し今日に至る。なほ「三田短歌」に在籍せし事あり。

### 中島咲子

四十四歳。東京に生れ

同市大森區北千束六七四に現住。大正十二年四月より故若山牧水氏に、續いて喜志子氏に師事して現在に至る。

### 中島太隈

三十九歳。長野縣南佐

久郡南相木村に生れ、埼玉縣大里郡深谷町諏訪倉庫深谷支店内に現住。會社従業員。水廻り人を経て今日に至る。

### 中島秀夫

明治三十七年七月十三

日、和歌山縣御坊町に

生れ、同地に現住。元銀行員、現在無盡會社社員。大正十一年頃より作歌「詩歌時代」「日光」に投稿、二誌廢刊後該雜誌に投稿す。昭和三年「國民文學」に入社、窪田空穂氏、谷鼎氏の選歌を受け現在に及ぶ。

**中島 房雄** 三十一歳。埼玉縣北埼玉郡大越村に生れ、同地に現住。足袋商。昭和三年八月橄欖社に入社、現在に及ぶ。

**中島光三郎** 明治三十九年二月二十日、東京市麴町區紀尾井町三に生る。銀行員。昭和三年霸王樹社に入り、臼井大翼、飯田莫哀氏等の指導をうく。十九歳病を得、多年に亙る闘病生活後昭和十一年九月十二日、東京市世田ヶ谷區下高井戸町一ノ一五〇に逝く。享年三十一。

**中島千代子** 舊姓野尻。明治二十四年十月十四日、豐後國竹田町近戸に生れ、長野市西長野二二に現住。大正十年より與謝野寛、晶子兩氏に師事して今日に至る。昭和十年七月歌集「草にしき」を出版す。

**中島 耕一** 三十六歳。秋田縣鹿角郡花輪町五一に生れ、秋田市大町一丁目秋田魁新報社方に現住。新聞記者。廿歳頃「創作」社友、廿四歳頃「詩歌」社友、廿八九歳頃「國民文學」社友たり。

**中島 保藏** 四十歳。山梨縣中巨摩郡御影村に生れ、東京市中野區新井町四六八に現住。東京中央郵便局員。水廻、勁草を経て現在何れの社にも屬せず。

**中島 眞珠** 本名廣猪。明治三十七年十一月二十七日、高知縣高岡郡與津村に生れ、同郡浦ノ内村に現住。教員。アララギ會員として齋藤茂吉氏に師事す。

**中島 若菜** 大正七年一月二日熊本に生れ、東京市澁谷區松濤町七に現住。昭和十年より「ことたま」會員となり、柳原白蓮氏に學び現在に至る。

**中島 勝** 鹿兒島市上荒田町二〇七〇に生れ、昭和五年八月二十三日歿す。國學院大學生。大正十五年十一月より「草笛」「水廻」「さざり」「青虹」等に據る。

**中島 義佐** 三十五歳。熊本縣阿蘇郡黒川村坊中に生れ、佐世保市福田町一九八に現住。海軍官吏。昭和十年初頭香蘭を退き、北原白秋氏の多磨により現在に至る。

**中島 清子** 二十六歳。和歌山市北仲間町二に生れ、大連市楠町五二に現住。昭和七年(一)「やう社」入社、今日に至る。

**中島 恒雄** 二十九歳。大分縣中津市に生れ、天津日本租界吉野街二ノ七に現住。醫師、天津日本共立醫院耳鼻咽喉科勤務。昭和五年九大醫學部在學中より作歌、アララギに入會、現在に至る。

**中島 重龍** 大正元年十一月群馬縣利根郡水上村に生れ、東京市深川區千田町一五ノ一に現住。鑛物業。歌は於保多學村氏に師事す。

**中島 旦成** 三十五歳。肥後國阿蘇登山口坊中町に生れ、佐世保市熊野町七九中村方に現住。官吏。昭和九年香蘭を退き、昭和十年多磨に入會、北原白秋氏に師事し現在に至る。

**中島 海鷗** 本名宗一。四十九歳。長崎市枕島町に生れ、佐賀縣西松浦郡有田町白川八八八に現住。神道教師。昭和九年八月より詩歌研究雲泥社の校外生。

**中島 梢雲** 本名頼重。四十一歳。島根縣美濃郡豊田村大字安富に生れ、同地に現住。銀行員。昭和五年四月アララギ會員となり、中村憲吉氏の選を受く。氏の歿後は土屋文明氏の選を受けて今日に至る。なほ昭和六年歌誌「いぶき」に加せると同八年十二月退く。

**中島 皋二** 本名恒次。三十六歳。群馬縣碓氷郡原市町二

四二四に生れ、同地に現住。吳服商。アララギ會員。

**中嶋喜美恵** 大正二年兵庫縣山崎町に生れ、同地に現住。

山崎高女、明石女師を経て、山崎小學校に奉職。高女在學中より安田青風氏の指導を受け今日に至る。昭和五年「青波」に入り、昭和十年「水麴」に入社す。

**中嶋又喜** 明治四十二年三月三日熊本縣菊池郡隈府町に生れ、臺北市新榮町二〇六に現住。會社員。大正十三年霸王樹に入社、現在に至る。

**中嶋醇子** 二十一歳。名古屋に生れ、兵庫縣武庫郡住吉村畔倉に現住。十四歳より作歌、心の花に登載されるれど未だ會員たらず。

**中舍清二** 本名五二。三十二歳。福井縣大野郡村岡村瀧波二九〇一八に生れ、同郡勝山町下長淵一〇ノ一に現住。機業職工。大正十五年病床にありて作歌をはじめ、大阪時事歌壇に投稿す。昭和三年十一月あけびに入社、花田比露恵氏に添削を受け、同志と短歌誌火明を發行す。昭和五年四月木苺創刊に参加し今日に至る。

**中砂寛二** 三十八歳。長崎市小會根町に生れ、東京市大森區池上德持町四五八に現住。建築技師。大正五年頃より作歌、昭和十年六月多磨短歌會

に入り北原白秋氏に師事して現在に及ぶ。

**中瀬喜信** 大正三年三月三十一日北海道札幌市に生れ、和歌山縣西牟婁郡鮎川村二五五〇に現住。職業無し。昭和十年和歌山縣立農事試験場助手勤務、翌十一年病氣退職。昭和十一年二月「いぶき」に入社、香川頼彦氏に師事。

**中曾根白史** 群馬縣碓氷市並榎町三二四に現住。公吏。大正十年頃より作歌、昭和二年頃作品を「水麴」に發表、岩谷莫哀氏に師事。中原綾子氏の「いつかし」同人たりしことあり。昭和九年群馬歌話會を組織し會報を發行。昭和十二年一月「落葉集」を出版。

**中園松二** 二十六歳。福岡縣八女同地に現住。和紙抄造業。昭和八年三月「創作」に入社、現在に至る。

**中園退助** 本名泰。福岡縣三潁郡三潁村高三潁に生れ、昭和十年八月死去。享年二十七。福岡師範卒業後肺結核療養生活中福岡日々新聞に投稿す。

**中田勝正** 三十四歳。岡山縣兒島郡福田村呼松に生れ、兵庫縣城崎郡豐岡町西本に現住。豐岡商業學校教諭。大正十五年一月より二年間ボトナム

會員たり。昭和三年より「蒼穹」に作品を發表す。現在蒼穹社同人。

**中田精二郎** 本名誠次郎。明治四十年水戸市に生る。水戸局庶務課に勤務。市之澤百太郎の筆名を以て歌誌「立春」の同人たりしことあり。現在アララギ會員。

**中田三郎** 二十九歳。長崎市に生れ、同市愛宕町八二六に現住。會社員。昭和十二年五月多磨短歌會入會。

**中田清次** 明治三十八年五月、兵庫縣加古郡野口村北野新田に生れ、同地に現住。農業。「短歌雜誌」を経て昭和二年五月「國民文學」に入り、松村英一氏の選を受け今日に至る。

**中田忠次** 明治四十二年一月東京淺草に生れ、東京市澁谷區曙ヶ谷本町三ノ五七六に現住。會社員。最初白日社に入り昭和三年「新興歌人聯盟」結成と同時に参加し「無産者歌人聯盟」より「プロレタリア歌人同盟」に行を共にせるも昭和七年日本歌人協の前身「短歌作品」に入る。

**中武茂八郎** 三十二歳。宮崎縣兒湯郡上穂北村に生れ、同地に現住。昭和二年アララギに入會。

**中谷照尾** 本名道雄。明治二十年和歌山市に生れ、東京

市世田谷區松原町一ノ三九に現住。職業無し。大正七年「水麴」社友となり尾上柴舟、石井直三郎、岩谷莫哀諸氏の指導を受けて今日に至る。

**中谷 秀**

島根縣那賀郡渡津村に生れ、東京市世田谷區

北澤五ノ八四七に現住。前島取縣知事、現在出雲電氣株式會社事務取締役。中學卒業前後より作歌、爾來折に觸れ事に當りて斯道を樂しむ。

**中谷 ゆり**

二十四歳。長野縣南安曇郡三田村四六〇口號に生れ、東京市小石川區大塚町三五女高師第一寄宿舎に現住。學生。作歌經歷といふほどのものなし。

**中津 賢吉**

明治四十二年一月、埼玉縣秩父郡中川村大字上田野に生れ、同縣秩父町上野町七六五に現住。會社員。昭和四年頃白日社に入社前田夕暮氏に師事す。「詩歌」自由律に轉向したる爲退社、淺山綠村氏等と歌誌「高天」を發行。「短歌草原」の同人たりしことあり。昭和六年四月「歌と觀照」創刊に際し同社に入社、岡山勲氏に師事す。

**中津川 空郎**

本名太郎。明治三十五年十一月十三日、靜岡縣磐田郡中泉町に生れ、同地に現住。砂糖商。大正八年五月國民文學社に入り、松村英一氏

に師事し今日に至る。これより前大正七年三月同志と共に歌誌「地に伸びる」を發刊し昭和七年三月廢刊す。

**中塚 千里**

明治四十三年長野縣下伊那郡市田村に生れ、同地に現住。嘗て農業に従ひ現在は教職に在り。二十一歳の頃より作歌を始むるも特定の結社に入らず。

**中西 草笛**

本名柳。明治三十五年福岡に生れ、東京市世田谷區代田二ノ九〇一に現住。東京府立第一高女、自由學園に學ぶ。二十一歳夏中西種之に嫁し三十二歳の夏夫に死別す。上野松坂屋に勤務。少女時代より作歌、スバルを経て昭和九年創作社に入り今日に及ぶ。

**中西 爲義**

三十五歳。高知縣安藝郡室戸町に生れ、兵庫縣赤穂郡那波町那波に現住。造船所社員。作歌日淺く、現在「水麴」に籍をおく。

**中西 未生**

本名新八。三十四歳。古屋市南區野立町海道畔二〇二〇に現住。折箱材料商店員。大正十二年「短歌」會員となり、昭和十二年一月同誌を退き「創作」に入り、今日に至る。

**中西 節子**

本名京子。二十七歳。京都市下立賣小川東入に生れ、東京市澁谷區景丘町五四に現住。昭

和十一年四月よりアララギ會員。

**中西 稻影**

本名稻治。五十三歳。岡山縣鴨方町に現住。早稻田大學に學び、三越編輯部を振出しに幾度か新聞雜誌に關係し、また教職に就きし事あり。特に師承なく又所屬なし。

**中西 幾代**

二十八歳。岡山縣淺口郡鴨方町に現住。槻の木會同人。

**中西 はつ子**

三十九歳。大阪市に生れ、東京市本郷區天神町二ノ一〇に現住。店員。十四五歳より作歌、大正十三年より創作社友となり引續き今日に及ぶ。

**中西 悟堂**

四十四歳。金澤市に生子堂町七七に現住。寺院住職たりしことあり。歌集「唱名」、詩集「山岳詩集」他五卷。評釋詩讀本五卷、傳記二卷、隨筆集「藥家と花」、自然科學書「龜鳥と生活する」、動物の生態寫眞「野鳥と共に」、「昆蟲讀本」等の著あり。「日本野鳥の會」主幹として本邦野鳥の保護並に研究事業に當り、月刊機關誌「野鳥」を主宰す。

**中西 月華**

本名忠吉。六十六歳。千葉縣山武郡片貝町三八に生れ、同地に現住。藥劑師。青年時代俳句に志し、のち作歌を試む。根岸短歌會

雜誌アカクモに投稿。

中西 松琴

本名常盤彦。明治元年京都平野に生る。畫師。

十四歳頃歌を祖父に學び後小出琴氏に師事、明治二十七年吟風社創設中央諸大家と提携し歌誌朝日櫻刊行、同三十二年電會設置、東都電會と呼應、落合直文、服部躬治久保猪之吉氏等と提携、いなづま紫苑發行。大正五年電會を洛陽詩社と改稱、同六年歌誌洛陽創刊、昭和五年に及ぶ。昭和七年京都一乗寺の寓居に歿す。遺稿集「中西松琴集」あり。

中根 貞彦 町に生れ、西宮市名次町九に現住。三和銀行頭取。中學時代より作歌すれど師なし。

中野 政成 東京市板橋區板橋に現住。

中野 政成

明治三十九年越後小千谷町在に生れ、東京市王子區下十條一四九四に現住。陸軍造兵廠研究所に奉職。十三歳より作歌、十七歳墳土に發表、現在ことたま社同人。

中野 善二郎 岩手縣下閉伊郡有藝村下有藝に生れ、同地に現住。農業。二十歳の頃より作歌、中央及び地方の歌誌に投書研究す。一時創作社に入りし事あり。現在「武都紀」會員。

中野 善二郎

中野 嘉一 三十二歳。愛知縣碧海郡高岡村に生れ、東京市澁橋區下落合三ノ一五〇一に現住。醫師。

中野 嘉一

夙に前田夕暮氏に師事し、現在「詩歌」同人たり。尙最近は新短歌運動に關係し新短歌に關する論著一二あり。

中野 近利

明治三十八年松本市豊田町一五三七に生れ、同地に現住。製絲業。大正十二年國民文學社に入社、半田良平氏に師事し來れり。

中野 二三郎

明治二十九年六月三日新潟縣中浦原郡村松町に入り、更に珊瑚礁にも加入す。後、糸魚川中學校に奉職中相馬御風氏の木蔭會同人となり又霸王樹にも數年關係したるが、現在は「短歌」同人にして御風氏の指導をも受く。

中野 久雄

三十八歳。三重縣阿山市杉並區高團寺三ノ二二九に現住。會社員。昭和八年二月アララギに入會、同九年十月岡麓氏に師事し今日に至る。

中野 順子

四十歳。奈良市高御門町に生れ、兵庫縣武庫郡本庄村青木五五一に現住。昭和十年より北原白秋氏之多磨短歌會々員となり作歌をつづ

中野 茂子

不明。

中野 正巳

三十一歳。福岡縣糸島郡一貫山村大字松園二五二に生れ、東京市蒲田區下九子町二二九九寮内に現住。工場事務員。十八歳頃より作歌、二十一歳中島良浪氏に指導を受く。「ひのくに」同人。

中野 信衛

明治三十六年九月十五日、長野縣北佐久郡大里村字西原三三七に生れ、同地に現住。農業。大正十一年一月より信毎歌壇に投稿、大正十二年五月より潮音社に入社、今日に及ぶ。

中野 照雄

明治四十年群馬縣北甘樂郡富岡町七日市に生れ、昭和十年一月陽チラスにて死去。教員。昭和二年頃より作歌、昭和六年四月「歌と觀照」に入社。

中野 貞夫

二十八歳。和歌山縣有田郡廣村に生れ、和歌山縣湯淺町南道に現住。小學校訓導。昭和九年三月青垣會員となり現在に至る。

中野 信雄

二十六歳。山口縣佐波郡堀に現住。小學校教員。

中野 文治

昭和四年より並木秋人氏に師事。現在に及ぶ。二十歳。和歌山縣有田郡五村に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和八年香蘭入社。同

十年退社して「多磨」に入會。

中原八重子

二十二歳。福島縣會津若松市大町に生れ、旭

川市一條通五丁目右八號に現住。事務員。昭和十一年六月創作社社友となり、若山喜志子氏の指導を受けて今日に至る。

中原佐彌子

岡山縣淺口郡連島町鶴新田に生る。長じて若

林秀吉に嫁ぎしも病氣のため離縁となり實家に歸り、昭和八年六月一日歿す。年二十四。昭和四年五月蒼穹社に入り、岡野直七郎氏の指導を受く。

中原蘭子

本名せき子。函館市に生れ、樺太眞岡郡蘭泊

に現住。昭和七年十一月頃より作歌、創作に投稿、一年程にて作歌中止。

中原孝雄

三十一歳。千葉縣君津郡中村大鷲に生れ、同

郡波岡村大久保に現住。農業。昭和六年水廻社に入り今日に至る。

中原寅一

二十五歳。防府市大字田島一〇四五に生れ、

同地に現住。職工。十九歳八幡に日方創刊されるや之に加はる。二十二歳水廻に入り今日に至る。

中原紫山

本名保治。明治三十一年十二月十二日、千葉

縣君津郡波岡村大久保に生れ、同地に現住。

農業。大正七年四月水廻入社、今日に至る。

中原勇夫

三十二歳。佐賀縣佐賀郡嘉瀬村に生れ、京都

市下鴨宮崎町七〇に現住。教員。佐賀高校時代より中島哀浪氏の指導を受けて作歌、現在地上及び島木同人。歌集「木賊」あり。

中原綾子

本姓小野。明治三十一年二月十七日、父の任

地長崎市に生れ、東京市澁橋區下落合三ノ一七九四に現住。歌は年少の頃より母の手引にて獨學、二十歳の頃與謝野晶子氏の門に入り、ほどなく第一歌集「眞珠貝」を上梓、第二期明星同人たり。後ち歌誌「いづかし」を創刊、主宰して今日に及ぶ。著書に歌集「眞珠貝」「深淵」みをつくし」の外、詩集「惡魔の貞操」及戯曲若干あり。

中平十詩夫

本名壽雄。四十歳。和歌山縣西牟婁郡上芳養

村に生れ、神戸市灘區福住通七ノ六に現住。シャツ製造業。大正八年より新聞雜誌等に投書、大正十二年歌誌「涙痕」創刊、十誌にて降刊、昭和六年國民文學社に入り今日に至る。

中藤幸一

二十六歳。京都府北粟田郡富島村大字原に生

れ、同地に現住。農業兼柚人。十九歳より作歌、一時並木秋人氏の「短歌祭」に誌友たり。現在歌誌に關係なし。

中村三郎

末の郎子、阿部淳等の筆名を用ひし事あり。

明治二十四年三月二十八日、長崎市壷屋町に生れ、大正十一年四月十八日、同市伊良林町の寓居に逝く。夙に尾上柴舟氏、與謝野鐵幹氏等に認められ、大正六年若山牧水氏の門に入り創作誌上に活躍す。「歌集中村三郎集」あり。

中村孝一

二十九歳。東京市下谷區に生れ、同區長者町

二ノ一二に現住。醫師。昭和九年歌と評論一に加はり現在に至る。

中村耕三

本名義光。明治三十三年九月九日、甲府市連

雀町三五に生れ、大正十三年八月二十三日、甲府市工町中村義教方に永眠。行年二十五。吳服商。「泰山木」同人。晩年は植松壽樹氏に師事す。著書に「中村耕三遺詠集」あり。

中村小春

四十歳。山梨縣東山梨郡松里村に生れ、同縣

東八代郡相興村に現住。元小學校教員、現在農業。作歌經歷といふほどのものなし。

中村浩

三十五歳。石川縣鹿島郡七尾町に生れ、長野

縣上伊那郡赤穂村に現住。教員。國學院大學豫科在學中より釋道空氏に師事し、鳥船社同人として今日に至る。

中村公彦

二十七歳。佐賀市に生

れ、久留米市西町北鞍

打九四五に現住。銀行員。昭和六年夏より大朝、福日短歌欄及日本短歌に投稿、昭和八年一月アララギ入會、同年末退會、同九年六月より短歌鑑賞同人。

**中村 青穂**

本名猛。三十六歳。愛媛縣喜多郡内子町に生

れ、同地に現住。理髮師。地方同人雜誌に發表後「國歌」の社友となり、半年後辭して「霸王樹」入社、なほ「にぎたつ」草の葉、「あをくも」等に關係し、また友人と「愛媛歌人」を發行せしことあり。

**中村 練彌**

本名敬彌。明治三十九年十一月二十日、新潟

縣東蒲原郡津川町に生れ、横濱市神奈川區金子町一〇八に現住。無職。河野慎吾氏主宰「とねりこ」を経て同社解散後「三田短歌」同人となる。

**中村 政雄**

四十歳。福岡縣三潞郡三又村鐘ヶ江に生れ、

東京市豊島區雜司ヶ谷町二ノ四四二に現住。日本女子大教授。十九歳頃より作歌、始め「中央文學」短歌雜誌」等に投稿し、翌年春頃より「創作」に入社し、爾來若山牧水氏の指導を受け、今日尙ほ創作社々友たり。

**中村 芳子**

本姓岡村。四十六歳。京都府熊野郡下佐濃村

に生れ、東京市小石川區茗荷谷町五二に現住。大正九年十一月潮音社入社、太田水穂氏に師

事して今日に至る。

**中村 憲吉**

明治二十二年一月二十

五日、廣島縣双三郡布野村に生る。大正四年東京帝國大學法科大學卒業。同十一年より十五年迄大阪毎日新聞社員たり。後歸村して家業を繼ぐ。昭和九年五月五日病みて尾道に歿す。伊藤左千夫氏に師事し、アララギ發刊以來其の編輯同人として盡せり。歌集「馬鈴薯の花」「秋泉集」「しがらみ」「輕雷集」「輕雷集以後」等。全著作は集めて「中村憲吉全集」(四卷)に在り。

**中村 作太郎**

明治三十年秋田縣由利郡象瀧町に生れ、同町

濱之町に現住。鑛産販賣業。第二期明星時代より與謝野寛、與謝野晶子兩氏の指導を受く。二月、愛知縣中島郡朝日村に生れ、一宮市古久見通四、高橋信二方に現住。會社員、名古屋高商在學中より作歌、太田水穂氏に私淑、昭和十年四月潮音社に入社。

**中村 其冬**

本名七郎。大正四年十

**中村 正爾**

明治三十年六月一日、新潟市東中通一ノ二〇

〇に生れ、東京市中野區天神町一五に現住。アルス編輯部員。大正五六年頃より作歌、同十一年北原白秋氏の門に入り今日に及び、作品は「日光」「近代風景」「歌と評論」短歌民族」及び「多磨」等に發表す。

**中村 要**

大正四年六月十六日、福岡縣三潞郡大川町櫻

津三八一に生れ、同地に現住。養蠶業。中學卒業後作歌、短歌研究に投稿、のち北原白秋氏の門に入り、現在多磨會會員。

**中村 孝助**

三十八歳。千葉縣千葉郡譽田村十文字區に生

れ、同地に現住。農業。大正四年より作歌、歌集「土の歌」「野良に戦ふ」「日本は歌ふ」等のほか詩集「乳房」民謡集「農民小唄」あり。

**中村 雅江**

明治四十三年四月九日

兵庫縣宍粟郡山崎町本町に生れ、同縣揖保郡龍野町中霞城町三二に現住。高女時代より安田青風氏の指導にて作歌、卒業後山崎歌話會に入る。後昭和七年水響社社員となる。

**中村 歌子**

本姓橋本。二十九歳。

東京市世田ヶ谷區上馬町三ノ九五三に生れ、同區弦巻町一ノ三に現住。昭和五年三月より今井邦子氏に師事す。

**中村 葉之介**

東京市下谷に生れ、昭和九年一月二十五日、

二十三歳にして谷中墓地にて自殺。家具製作。昭和三年八月、大脇月甫氏主宰の「青虹」に入社し作歌を始め。

**中村 辰行**

富山縣に生れ、昭和八年四月蒼穹入社。二十



二歳にして逝く。

中村 美穂

本名時次郎。明治二十八年十二月十一日、山梨縣東山梨郡松里村藤木一八一七に生れ、同地に現住。盲及聾啞學校教員。大正五年一月より作歌、同年九月アララギ入會、島木赤彦氏に師事す。昭和三年一月「みつがき」を創刊主宰して今日に至る。歌集「佛顔」「日方」あり。

中村 郷二

本名久。長崎縣東彼杵郡三浦村に生る。「香蘭」に所屬して十餘年。昭和十二年一月二十六日病歿。行年三十三。

中村 土筆

本名篤。三十七歳。長野縣に生れ、同縣南安曇郡瀧村上長尾區に現住。農業。大正十四年より昭和二年頃まで「國民文學」に投稿、主として半田良平氏の選を受く。後、京都の籌本社に入社す。病氣のため退社、作歌中止す。

中村 孝草

本名秋雄。二十九歳。愛知縣岩倉町北口に生

れ、東京市淀橋區上落合一ノ四四〇に現住。圖案家。昭和三年、尾上柴舟氏主宰「水穂」に加盟、今日に至る。

中村 柘花

本名端。五十一歳。長野縣埴科郡東條村に生

れ、同地に現住。農業。二十歳頃より作歌、

初め太田水穂氏に師事し、後、若山牧水氏に師事、昭和三年氏の歿後、引續き創作社友たり。

中村 祐世

大正五年四月二十二日福岡市に生れ、昭和八年九月二十二日死亡。享年十八。大正十四年春頃より作歌、昭和四年三月頃より同人雜誌「滯」を主宰す。東京日日新聞及び婦人公論、令女界、婦人畫報、短歌雜誌、短歌研究等の諸雜誌に投稿す。

中村 文夫

二十六歳。靜岡縣濱名郡和地村和地一・二に生れ、同地に現住。無職、病氣療養中。「武都紀」準同人。

中村 渥美

三十三歳。長野縣南安曇郡有明村六一五三に生れ、同地に現住。農業。初め獨習、大正十三年四月、青山榛三郎氏主宰山河社に入社、昭和十一年十二月同社解消まで在社、同十二年一月太田水穂氏主宰潮音社に入社、現在に至る。

中村 千代子

二十二歳。和歌山市廣瀬通町三ノ五に生れ、

同地に現住。和歌山紡織株式會社勤務。昭和十一年一月「いぶき」入社、爾來香山頼彦氏の指導を受けつつ現在に至る。

中村 十鏡

本名英夫。三十四歳。山形縣最上郡東小國村

大字本城に生れ、東京市小石川區大塚坂下町

四〇に現住。著述業。北原白秋氏主宰の「多磨」會員。

中村 清一

三十二歳。滋賀縣高島郡饗庭村大字饗庭に生

れ、同地に現住。村吏員。昭和四年水穂入社、昭和五年十月丹草二、鎌田良平氏等と雜誌「白鳥」を發刊。昭和六年一月いぶき創刊と同時に入社、翌七年水穂を退き短歌同人となる。昭和九年水穂に復歸、それ迄の筆名中里喜代詩を本名に改む。高島歌話會主宰。

中村 滿洲子

本名益子。明治三十四年五月二十五日、東京市本郷區森川町一に生れ、同市牛込區若松町九四に現住。大正十一年末より若山牧水氏主宰の「創作」に入り今日に至る。

中村 君子

四十歳。新潟市に生れ

丁目に現住。昭和八年より「武都紀」に入會、今日に至る。

中村 英男

明治三十四年九月十四日大阪市に生れ、同市

住吉區北田邊町一九四に現住。伊藤忠商事株式會社員。昭和五年春「水穂」社友となり今日に及ぶ。

中村 徳之助

霞水と號せしことあり。明治二十九年一月十九日、三重縣四日市市濱町一三〇番屋敷に生れ、同町一九六五ノ七に現住。大正四年三

月創作社社友となりしも、同社潮音に合併と共に潮音社友となり程なく退社す。大正五年八月アララギ(當時根岸短歌會)に入會し今日に至る。齋藤茂吉氏に師事す。なほ名古屋短歌會創立當時より同人たりしも昭和十年退會す。昭和九年一月歌集「埋木」を出版。

### 中村徳重郎

宮城縣栗原郡高清水町に生れ、東京市板橋區練馬仲町六ノ五一六五に現住。辯護士。明治二十八年二高在學中

高平眞藤翁、海上胤平翁の添削を受く。その後一時中絶、大正六年より佐佐木信綱博士の門に入り、今日に至る。昭和三年歌集「泉」を出版す。

### 中村溪月

本名米藏。明治四十四年八月二十五日、滋賀縣彦根市平田町一〇〇五に生れ、同地に現住。農業。昭和三年十八歳頃より作歌、香蘭詩社に入社。後、杉浦翠子氏の「短歌至上主義」に加盟し今日に及ぶ。

### 中村利男

明治三十一年五月十四日、山口縣豊浦郡豊西村大字室津に生れ、東京市豊島區池袋二ノ九五に現住。學校教師。昭和三年四月アララギ入會、現在に至る。

### 中村利男

三十五歳。鹿兒島縣薩摩郡下甌村西山に生れ同縣始良郡國分町に現住。大正九年以降師範

在學中より作歌、昭和五年四月太田水穂氏の「潮音」に入社、今日に至る。

### 中村源一郎

明治四十年名古屋市西區上園町三ノ一〇に生れ、同地に現住。雜貨製造貿易。故石井直三郎氏に師事し、名古屋高商在學中より歌を始め。昭和三年「水鏡」に入社、現在に至る。歌集「夕顔」あり。

### 中村星湖

本名將爲。明治十七年二月十一日、山梨縣南都留郡河口村一〇八〇に生れ、東京市杉並區井荻二ノ二三に現住。甲府中學在學時代より歌を作り「中學世界」などに投書、早稻田大學英文科卒業後、雜誌「早稻田文學」記者及小説作家として歌より遠ざかり、大正四年春、神奈川縣下生麥に移住せし頃より再び歌に心を審す。

### 中村建仁

明治三十六年六月四日石川縣石川郡石川村上安田ル三九に生れ、同地に現住。農。十七八歳の頃より作歌す。

### 中村清五郎

三十八歳。滋賀縣高島郡安曇村大字五番領に生れ、同地に現住。療術行爲。昭和十年五月より「自然」に入社し現在に至る。

### 中村水耕

三十三歳。京都市下京區四ツ塚町に生れ、同地に現住。吏員。昭和二年より作歌、昭和五

年六月尾上篤二郎氏主宰の「青海原」に入社、同六年十月同誌の「自然」に合流するに及び「自然」同人となり今日に至る。

### 中村薺榮

三十二歳。京都市に生れ、同市堺町御池下ルに現住。學生時代より作歌、東京時事歌壇にて永年故若山牧水氏の選を受けし事あり。昭和十一年末國民文學に入社す。

### 中村廣香

明治二十六年三月十日三重縣三重郡桶村に生れ、同地に現住。桶村收入役。大正九年竹柏會に入り、傍ら新聞雜誌に投稿す。

### 中本たか子

三十六歳。山口縣豊浦郡角嶋村に生れ、東京市牛込區喜久井町三四寺田方に現住。文藝創作(主として小説)を業とす。十七八歳頃より趣味として作歌するのみ。

### 中本立子

本名立。明治三十五年二月三日、山口縣美禰郡共和村九七八に生れ、同地に現住。酒造業。大正十二年四月白梅詩社社友となる。昭和四年八月地上社の社友となり現在に及ぶ。

### 中森明

二十七歳。廣島縣吳市宮原通三丁目に生れ、大阪市住吉區昭和町中一丁目現住。府立今宮中學校教諭。六年前學生時代より作歌、現在ことだま社同人。

**中屋 照** 十九歳。愛媛縣温泉郡粟井村に生れ、高知縣

吾川郡池川町に現住。商業。高知縣立佐川高女三年の時より作歌、佐佐木信綱氏主宰「心の花」に投稿して今日に及ぶ。

**中安 瓊藏** 二十四歳。東京市本所區緑町に生れ、同區菊

川一ノ三に現住。出版社アルス勤務。昭和十年九月多磨短歌會に入會、今日に至る。

**中山 哲子** 明治三十八年六月十四日、山梨縣西八代郡築

村に生れ、横濱市神奈川區澤渡一三に現住。作歌經歷といふほどのものなし。

**中山 みつ子** 明治四十四年十月三十日、茨城縣眞壁郡大寶

村大字大寶五七四に生れ、同五八五に現住。昭和十年三月齋藤慎吾氏主宰「山柿」入會、同十一年三月退會。

**中山 後郎** 明治二十四年十二月新

潟市に生れ、同市東町通九に現住。醫師。明治三十八年新潟深雪會小金花作氏に師事、明治三十九年より内藤鑑

作氏に師事、郷里にて蛇苺、伶人、砂丘、路人、濤聲等の短歌雜誌を發行、中央にては抒情詩、歌と評論の同人たり。昭和六年新潟歌人協會を創設「はだれ」を主宰、最近別に北越短歌評論を獨刊す。

**中山 枯風** 本名忠治郎。二十二歳。東京市に生れ、同市日

本橋區堀留町二、松原方に現住。織物問屋店員。昭和十年四月杜鵑花に入社現在に至る。

**中山 あい子** 本名神田いを。明治

三十年十二月十七日、長野縣下高井郡日野村字更科に生れ、横濱市磯子區磯子町廣地二〇四に現住。小學校教員。太田水穂氏に師事、潮音の同人。

**中山 禮治** 明治四十五年新潟縣小

千谷町に生れ、東京市世田谷區北澤三ノ九七四清風館方に現住。豫備歩兵少尉、現在國學院大學學生。昭和十一年十一月北原白秋氏の門に參じ、爾來「多磨」會員として現在に至る。

**中山 藤樹** 三十一歳。京都市東山

區山科小山北林町一四に生れ、同地に現住。農業。短歌草原、青垣、寶相花等を経て、現在自然詩社同人。

**中山 関秋** 本名貫次。明治四十四

年十月十四日、宮崎縣東諸縣郡本庄町十日町に生れ、同縣南那珂郡市木村に現住。小學校教員。師範在學中より作歌、校友會誌、新聞雜誌等に投稿せしことあり。

**中山 三郎** 大正三年三月三日、福

井縣大飯郡和田村和田に生れ、同地に現住。農業。昭和八年創作社

入社、現在に及ぶ。

**中山 久吉** 五十四歳。静岡縣小笠

郡大淵村に生れ、愛知縣勝川町に現住。中等教員。高師在學中より作歌すれど中絶、昭和十一年より再び作歌。

**中山 雅吉** 明治二十七年東京市に

在學中大正九年十一月湖南に歿す。行年二十七。高校時代「ササヤキ」「棕櫚の花」鹿兒島新聞等に發表、又「生命の樹」を編輯、大正六年三月同志「珊瑚礁」創刊。歌集一流轉あり。

**中井 貞子** 二十歳。兵庫縣明石郡

神出村上北古に生れ、同地に現住。明石高女四年生の時同校の教諭奥村さき氏の教をうけ初めて作歌、氏の編輯する歌誌「青波」に入り今日に至る。

**中井 コツフ** 本名謙吉。五十八歳。

字保田に生れ、同縣宇和島市大榎通に現住。醫師。明治三十一年より作歌、今日に至る。

**中井 ともよ** 五十二歳。宇和島市丸

之内に生る。大正十二年より作歌を初め今日に至る。

**中井 繁次郎** 明治四十三年三月二十

八日、岡山縣吉田郡神庭村吉見一〇四二に生れ、同地に現住。農業。十三歳より作歌、文章俱樂部等に於て金子薫

國氏の選をうく。昭和八年八月より野村完六氏の指導を乞ひ今日に至る。

**中尾 明義** 三十歳。鹿兒島縣贈那郡財部町南保に生れ、

同地に現住。元小學校訓導現在病臥中。二十歳頃より作歌、昭和九年潮音社友となり現在に至る。また鹿兒島市發行の山茶花社友。

**中尾 肇** 三十三歳。和歌山縣那賀郡田中村大字西井阪

一四七に生れ、福岡市中下濱町二ノ三五に現住。教師。大正十五年より、神宮皇學館學生中心の「五更」會員となり、作歌をはじめ。後一時中絶。昭和八年より日比野道男氏主宰の「曼陀羅」に屬し今日に及ぶ。

**中尾 忠一** 三十歳。兵庫縣養父郡八鹿町小佐に生れ、同

町九鹿一〇四ノ五に現住。八鹿町信用組合事務員。昭和八年十月迄、柳瀬留治氏主宰の短歌草原社に關係せしのみにて、現在何れの會にも關係なし。

**中尾 邦子** 高知縣安藝郡西分字長谷に生れ、朝鮮平壤東

町一七に現住。作歌經歷といふ程のものなし。明治二十七年九月四日

**中尾 義信** 大阪府に生れ、同府北河内郡院院村大字中振に現住。官吏。大正八年八月「霸王樹」創刊に際し入社、大正十二年二月大阪にて「水松樹」を發刊せし事あり。

昭和四年頃一時「詩歌」同人たりし事ありしも、其後「自然」同人となり現在に至る。

**中岡 綾子** 二十九歳。京都市中京區西ノ京職司町六三に

生れ、同區西ノ京圓町一ノ一酒井方に現住。昭和七年一月尾山篤二郎氏主宰「自然」に入り今日に至る。

**仲川 久之丞** 明治三十八年、滋賀縣津原に生れ、大津市膳所本町六二四に現住。

初め農業及び製炭業、現在會社員。大正十二年竹柏會入會。石樟子亦氏の指導を受けしも、數年間結社關係を斷ち、一昨年より「自然」に入社、今日に至る。

**仲川 友民** 本名中川友三郎。三十六歳。名古屋市中區正

木町に生る。銀行員。アララギ會員として岡麓氏に師事す。

**仲郷 三郎** 本名中里榮三郎。明治三十年十二月十四日、

神奈川縣藤澤町に生れ、神戸市須磨區稻葉町四ノ五に現住。増田製粉所勤務。繪島浪夫其他の筆名にて「新潮」「秀才文壇」等に投稿。後「珊瑚礁」「霸王樹」同人を経て目下「博物」同人。

**仲田 林平** 明治四十年五月一日、千葉縣千葉郡更科村富

田に生れ、同地に現住。農。小學時代仲田紫

泉氏に師事、其の後中止。昭和五年吉植庄亮氏、伊藤公平氏に師事し楳嶺に屬す。

**長倉智恵雄** 二十九歳。静岡市宮ヶ崎町二五に生れ、同地

に現住。雜貨小賣商。一路同人、昭和三年以來山下陸奥氏の指導を受く。

**長坂佐治夫** 大正三十年十月二十四日

高棚に生れ、横濱市中區櫻木町一ノ一横濱興産館家具部に現住。家具店員。少年の頃より歌に親しみ、在郷當時は「水鏡」「不二」「香蘭」などに關係したるも、昭和八年就職と同時に歌を忘れ現在に至る。

**長崎津矢子** 本名艶子。明治四十四年高知縣香美郡野市町

田村家に生れ、高知市天神町七〇に現住。昭和六年秋地方歌誌「短歌藝術」に入會。同八年九月同誌を脱退して「アララギ」に入會、土屋文明氏の指導を受けて今日に至る。

**長澤 美津** 明治三十八年十一月十四日金澤市に生れ、東

京市杉並區上荻窪二ノ二七一に現住。大正十五年三月日本女子大國文科卒業後、古泉千樞氏につく。爾來青垣會員として現在に至る。著書に「沱靑」「垂水影」あり。

**長澤 巖** 二十六歳。新潟縣中頸城郡板倉村南中島に生

れ、同地に現住。農業。郷里の有恒學舎在學

中より作歌、現に創作社友、青澤同人たり。

**長澤 迪男** 二十八歳。北海道小川郡東旭川村に生れ、同

常呂郡置戸村に現住。自由労働。昭和元年より作歌、宇都野研氏の指導を受けしが、後敵壇社友となり、吉植庄亮氏の指導のもとに今日に至る。

**長嶋 實** 三十七歳。神奈川県中郡比々多村三之宮に生

れ、同縣愛甲郡厚木町に現住。教員。大正十二年小泉三三氏主宰のポトナムに入社、今日に至る。

**長瀬 耿** 本名豊三。二十七歳。長野縣下伊那郡飯田町

に生れ、東京市牛込區富久町一八一に現住。商人。昭和九年より楠田敏郎氏に師事し、その主宰する「短歌月刊」の同人。

**長田 竹雄** 三十一歳。兵庫縣揖保郡余部村上余部に生れ

神戸市須磨區外濱町五ノ一四番屋敷一〇に現住。教員。小學校六年より始め、姫路師範を出て現在神戸の山下不味子氏に師事す。

**長田 幹彦** 明治二十年三月一日、東京市麴町區九段に生

れ、同市四谷區東信濃町一〇に現住。小説作家。明治四十二年與謝野寛、晶子兩氏の新社に入れど作歌せず。後年餘技として少々制作。

**長田 良太郎** 四十七歳。大分縣南海郡郡川原木村に生れ、

同地に現住。大正五年頃より作歌、大正七年五月國民文學社に入社、松村英一氏に師事して今日に至る。

**長竹 五秋** 四十九歳。千葉縣香取郡本大須賀村吉岡に生

れ、東京市中野區沼袋町四五二に現住。中等教員。少年の頃「生活と藝術」創作」に親しみ、やがて藤枝雅之翁に師事、中等教員となりては作歌より遠ざかる。

**長塚 節** 明治十二年四月三日、茨城縣結城郡岡田村に

生る。明治三十三年正岡子規氏に見え根岸短歌會同人となる。子規歿後伊藤左千夫氏と共に馬酔木を刊行し、又ホトトギス等に寫生文小説の作を多く發表し、その長篇小説「土」は遍く人の知る所なり。大正四年二月八日福岡に歿す。長塚節歌集は歿後刊行せられたり。猶全著作は「長塚節全集」(六卷)に在り。

**長野 勝廣** 三十二歳。熊本縣鹿本郡植木町に生れ、岡山

縣長島愛生園内に現住。十五六歳の時癩を病む。二十三歳にして盲目となり二十六歳療養所に入る。三十歳の時、内田守人氏の指導を受く。

**長野 英樹** 四十一歳。高知縣土佐郡土佐山村富澤に生れ

札幌市北三條西二ノ一に現住。商業。二十三歳より作歌、昭和二年窪田空穂氏編輯の「白鷺」に入社、同四年「勁草」と改題、宇都野研氏に師事し今日に至る。

**長野 眞知子** 本名ちま子。大津市清水町一五に現住。昭和十年歌誌「いぶき」入社、現在に至る。

**長野 芳江** 二十六歳。滿洲國安東縣に生れ、東京市世田

谷區代田二ノ九一六に現住。昭和九年一月アラギ會員となり今日に至る。

**長光 光起** 二十九歳。廣島縣豐田郡瀬戸田町向上寺に生

れ、同寺に現住。向上寺住職兼瀬戸田高女國語科教諭。昭和十年八月、アララギ會員となり現在に至る。

**長山 藤二** 二十九歳。茨城縣東茨城郡澤山村大字上阿野

澤に生れ、栃木縣那須郡七合村大字興野に現住。專賣局官吏。野口青盾氏に師事し、現在「下野短歌」に關係す。

**長和 義雄** 明治三十五年頃山口縣玖珂郡師木野村に生る

中學卒業後聞もなく師を病み、大正十三年頃より「短歌雜誌」に投書を初め、松村英一氏の指導を受く。大正十五年及昭和二年頃の「日光」古泉千壘氏選歌にも投稿、後、「國民文學」に據る。昭和九年八月福岡縣津屋崎海

岸の療舎に逝く。

**長井 亨二** 明治十七年八月二十一日、東京市神田區中猿樂町一七に生れ、大阪府豊能郡南豊島村大字穂積二二五一ノ一に現住。商會社員。某歌誌に時々投稿しつゝありしが最近短歌研究其他に據る。

**長井 宮造** 明治四十四年三月十四日、新潟縣北蒲原郡鴻沼村大字桑ノ口に生れ、京都市右京區太秦井戸ヶ尻町諸橋要方に現住。染工場事務員。昭和六年頃より釋道空氏に師事す。

**長尾 千紙** 本名長治。三十歳。新潟縣佐渡郡羽茂村に生れ、同地に現住。農業。昭和五年藤川忠治氏の「歌と評論」の誌友となり現在に及ぶ。

**長尾 圖南** 三十五歳。鳥取縣日野郡根雨町に生れ、同縣米子市車尾に現住。鳥取新報米子支局員。大正十二年二月「創作」に入社、昭和八年六月退社、昭和二年六月「ぬはり」に入社、昭和五年九月退社。

**長尾 定正** 三十四歳。岡山縣苫田郡神庭村に生れ、同郡田邑村に現住。産業技術員。大正十年より作歌、大正十五年「水麴」に入社せしも一年にして退社、以後美作短歌會に據る。

**長岡 外史** 陸軍中將。安政二年五月山口縣に生る。幼時日本外史を暗んじ藩公より「外史」の名を賜る。長じて黎明期の陸軍に投じ夙に陸軍大學(第一期)を卒業、日清戰役には大島混成旅團參謀、日露戰役には大本營參謀次長として山縣元帥を助け謀を帷幄の中に廻らす。戰後中將に進み各地師團長を歴任し、大正四年豫備隊となるや我邦航空界の不振を憂ひ、其死に至る迄約二十年間盡瘁す。昭和八年四月二十一日危篤の報天聽に達するや航空界の功勞を嘉せられ特に旭日大授章を賜る。行年七十八。

**長岡とみ子** 本名浦城フミ。四十九歳。奈良市三條通りに生れ、東京市小石川區竹早町七九に現住。高女教諭。尾上柴舟氏に師事し水麴社同人たり。後出でて友人等と女流短歌誌「草の實」を創め今日に至る。

**永石 三男** 三十五歳。佐賀縣杵島郡福富村に生れ、佐世保市金比良町二四五に現住。佐世保海軍建築部記録員。大正九年より作歌、「とねりこ」「敵艦「香蘭」の同人たりしことあり。現在北原白秋氏に師事し「多磨」會員たり。

**永海 眞規夫** 本名一正。二十七歳。島根縣礪波郡五箇村苗代田に生れ、同縣知夫郡知夫村に現住。小學校教員。昭和十年創作社に入社して今日に至る。

る。

**永澤 實則** 岩手縣東磐井郡松川村に生れ、東京市本郷區

動坂町一〇九加藤方に現住。元小學校青年學校教員、現在東洋大學生。昭和八年三月頃より作歌、昭和九年一月自然詩社に加入、今日に至る。

**永島 榮子** 三十七歳。沖繩縣首里市當藏町に生れ、東京市豊島區西巢鴨町二ノ二一〇七に現住。昭和九年より細井魚袋氏に師事、今日に至る。現在同氏主宰「眞人」同人。

**永瀬 翠明** 本名盛時。明治四十二年十一月島根縣簸川郡稗原村大字稗原に生れ、同地に現住。産業組合書記。昭和四年頃より作歌、「生きて行く道」歌壇に投稿、昭和七年「水麴」に入社して今日に至る。昭和八年十月、歌集「綠蔭集」を出版す。

**永瀬 英一** 三十八歳。栃木縣に生れ、東京市澁谷區代々木富ヶ谷町に現住。藥劑師。橋田東聲氏の「潮王樹」同人。後、前田夕暮氏の「詩歌」に屬し、現在は作歌の發表を中斷。歌集「明るい呼吸」あり。

**永田 英子** 三十四歳。東京市淺草區に生れ、同市中野區沼袋町七五に現住。別に師にはつかず結婚前

より作歌す。

**永田 稠** 明治十四年長野縣諏訪郡豊平村に生れ、東京

市板橋區小竹町二六四一に現住。財團法人日本力行會長。著書に南米一巡、兩米再巡、兩米三巡、新渡航法、移住地の建設、農村人口と移殖民、海外立志傳、日本植民讀本、在外子弟教育論、海外發展主義の小學教育、滿洲に於ける移住地の建設、等あり。

**永田 玉樹** 本名環。二十七歳。廣島縣に生れ、東京市大森區馬込町東三ノ八一五に現住。職業無し。作歌經歷といふほどのものなし。

**永田 憲一** 明治三十六年三月三十一日生。伊勢一身田に育ち、兵庫縣武庫郡濱甲子園に現住。國民文學同人。歌集「かこさか集」あり。

**永田 寛定** 明治十八年一月東京牛込に生れ、淀橋區下落合三ノ一三六〇に現住。東京外國語學校教授。明治三十四年創刊當時の「明星」に投稿。三十八年頃「山彦」に投稿。他に歌壇の經歷を有せず。イスパニヤ文學の紹介及び翻譯において數種の著述あり。

**永田 視紀子** 本名絢子。二十七歳。神奈川縣高座郡海老名村に生れ、川崎市日吉町夢見ヶ崎に現住。「香蘭」に所屬すること七年餘。

より作歌す。

**永田 巖松** 三十五歳。熊本市下通町五七に生れ、大阪府豊中市新免九三一に現住。會社員。十六歳頃より作歌、一時中絶、昭和十一年「地上」入社、現在他に杉野朴氏等と歌誌「あらくさ」を發行。

**永田 露子** 二十九歳。廣島縣豊田郡高根島村に生れ、東京市大森區馬込町東三ノ八一五に現住。昭和六年十月今井邦子氏指導の柵の葉歌話會に入會、現在同氏の明日香會員なり。

**永田 英子** 三十四歳。大阪市東區今橋五丁目に生れ、神奈川縣鎌倉町佐介ヶ谷六〇一に現住。昭和十二年三月清水千代氏主幹「どうたん」に入る。

**永田 九萬三** 三十六歳。札幌市に生れ、東京市淀橋區下落合二ノ六五八に現住。醫師。昭和四年より勁草に據る。

**永田 忠雄** 明治四十二年八月三十日、福岡縣浮羽郡福富村大字福益に生れ、同地に現住。村社熊野神社社掌。昭和十年四月より作歌、同時に短歌草原社に入社、今日に至る。

**永田 茂** 明治四十二年六月二十日、京都府加佐郡西大浦村字平四三七に生れ、同地に現住。農業。昭和五年頃より作歌、昭和七年一月より日比

野道男氏の「曼陀羅」に入社、今日に及ぶ。なほ現在「土筆」の準同人たり。

**永戸 繁夫** 三十二歳。新潟縣長岡市に生れ、東京市王子區稻付町五ノ八八七に現住。會社員。十九歳より作歌す。

**永戸 秀** 本名秀夫。三十九歳。大阪市西區西九條に生れ、富山縣西礪波郡松澤村字小神に現住。製紙會社員。

**永野 晴耕** 本名與政。二十五歳。千葉縣夷隅郡古澤村榎澤一〇一二に生れ、同地に現住。職業無し。昭和十年十二月潮音社に入社、今日に至る。

**永野 光子** 明治三十六年三月、大阪府堺市新在家町に生れ、同府泉北郡高石町南一〇二五に現住。昭和六年七月水響に入社、今日に至る。

**永原いね子** 明治三十二年四月二十日、靜岡縣駿東郡沼津に生れ、大連市晴明臺七ノ六に現住。昭和三年滿洲短歌會創立と共に入會、合萌同人。また生田蝶介氏の吾妹に指導を受く。

**永松 絹枝** 二十九歳。熊本縣菊池郡泗水村大字豊水に生れ、同地に現住。小學校教師。昭和九年末創作に加入、今日に至る。

より作歌す。

**永見 玖磨** 本名利能。二十八歳。福岡縣大牟田市三川町

五丁目に生れ、同地に現住。機械組立工。十八歳頃より作歌、敬禮に入會、しばらくにして退き、多磨發刊されるや直ちに入會し現在に至る。

**永山 壽美** 不明。

**永井 隆** 不明。

**永井 京子** 五十歳。兵庫縣宍粟郡千種村に現住。吳服雜

貨商。十四年前死去せる夫の生前舊派和歌を學びしもその後中絶、昭和十一年春山崎歌話會に入會し再び作歌、現在に及ぶ。

**永井 哉** 本名かな。三十三歳。京都府何鹿郡物部村字

新庄小字水上二七に生れ、京都市伏見區京町北七ノ二〇に現住。小學校教員。昭和十年九月山柿會加盟、今日に至る。

**永井 ふさ子** 明治四十二年松山市に

生れ、同市一番町に現住。昭和八年アララギに入會、以來齋藤茂吉氏の選を受け現在に及ぶ。

**永井 久子** 明治三十四年七月十五日、新潟縣南蒲原郡長

澤村に生れ、同郡大崎村に現住。大正十四年金子薰園氏主幹「光」に入社、昭和七年末よ

り新短歌にかはる。

**永井 才次** 明治四十三年三月一日宮崎縣西諸縣郡高原町

に生れ、同地に現住。十五六歳頃より作歌、昭和三年創作に入社し今日に至る。

**永井 靜夫** 本名勝治。三十三歳。大阪市北區與力町三丁

目に生れ、群馬縣吾妻郡草津町栗生樂泉園に現住。昭和九年八月いぶき社に入社、今日に至る。

**永井 亮惟** 三十歳。石川縣羽咋郡羽咋町サ四七に生れ、

同地に現住。農業。昭和五年三月青虹社に入社、翌六年三月休社。昭和十年三月青虹社に再入社、同月青垣社に入社す。

**永井 正司** 四十九歳。新潟縣東頸城郡松代村に生れ、同

縣中魚沼郡十日町に現住。十日町高女校長。昭和十二年四月二十二歳。千葉縣安房郡田原村池田に現住。

**永井 月草路** 表具師。アララギ等にて學ぶ。

**永井 定一** 三十九歳。岐阜縣武儀郡南武藝村に生れ、同

地に現住。ナイフ製造。大正九年十一月より作歌、心の花、國歌、國民文學、アララギ、詩歌(前)、吾妹、創作、等に出詠、大正十五年六月常春に入社、昭和八年二月まで在社、其間地方誌を數回編輯發行す。昭和九年より結

社に關係を持たず。

**灘中 卓治** 三十二歳。兵庫縣印南郡伊保村に生れ、神戸

市兵庫區會下山町三ノ九六に現住。銀行員。昭和八年一月よりアララギに入會、現在に至る。

**灘尾 研** 三十五歳。廣島縣佐伯郡大柿町大字大原一六

八に生れ、栃木縣那須郡大田原町六六に現住。教員。二十二歳の夏頃より獨り作りて今日に至る。

**夏目公孫樹舍** 本名五郎兵衛。明治十八年七月二十八日生。

千葉縣君津郡湊町湊七に現住。農業兼醬油醸造。二十歳頃より作歌すれど師につかず。

**直木 裕二** 本名博。三十七歳。神戸郡住吉村繩手下一六七〇に現住。阪神急行電鐵會社員。昭和元年アララギ會員となり今日に至る。

**直塚 淳** 四十三歳。佐賀市に生れ、同市與賀町一七〇

に現住。小學校に奉職。中學卒業前後より作歌、その頃より中島哀浪氏と相識り、現在は主に「ひのくに」に發表す。別に最初白日社の前田夕暮氏に師事し「詩歌」同人、後「水鏡」に轉じ、又「あしかひ」「珊瑚礁」に出詠せし事あり。



**直本 晴有**

三十八歳。千葉縣匝瑳郡八日市場町に生れ、

同地に現住。十六歳頃父を眞似て作歌、その後句作に勵みしが再び作歌に戻り、心の花、國民文學、アララギ等に入會、昭和二年吉植庄亮氏の激瀆に入り今日に及ぶ。

**生江 芳泉**

本名良康。二十六歳。福島縣河沼郡廣瀨村に

生れ、仙臺市北材木町七一、三浦方に現住。官吏。昭和六年激瀆に入社、現在に及ぶ。

**並木 秋人**

四十六歳。福島縣に生れ、横濱市中區間門二

ノ二四二南騒居に現住。著述業。前田夕暮氏古泉千樞氏に師事し「詩歌」「アララギ」「霸王樹」に作品發表、大正十年七月「常春」を創刊、「ひこばえ」「短歌日本」「短歌祭」等を主宰せしことあり。現に「朝日子」を主宰す。「菓葉の卵」「聰明」「現代短歌表現辭典」「短歌新辭典」等の著書あり。

**並木 功夫**

大正四年八月二十五日東京に生れ、關東州普

蘭店南山街一、林方に現住。會社員。幼少より作歌すれど一定の師なく「ぬはり」を経て昭和八年一月前住地横濱に於て同志と共に歌誌「やますげ」を創刊、後「短歌論攷」と改題、昭和十一年四月迄主宰編輯、同年五月渡滿と共に同誌を休刊、多磨短歌會に入會し現在に至る。

**並木 午吉**

本名小柳錦柳。明治二十五年三月十九日東京

京橋に生れ、同市京橋區京橋二ノ六ノ九小柳方に現住。洋傘商。松村英一氏に就きて歌を識り、小柳江村と號し、明治四十三年若山牧水氏の「創作」創刊に參じ、大正六年迄在社、以後現代語短歌を研究、大正十一年西出朝風氏の純正詩社同人となり今日に至る。

**並木 茂樹**

二十三歳。千葉郡香取郡中村南和田に生れ、

同地に現住。農業。昭和六年アララギ入會、岡麓氏の指導を受け現在に至る。

**並木 治郎**

昭和十年郷里長野縣野澤町に歿す。銀行員。

短歌研究會に入り金子薰園氏に師事す。

**並木 凡平**

本名篠原三郎。四十八歳。札幌市北四西一一

に生れ、小樽市奥澤町三ノ一旭臺に現住。小樽新聞社會部長。昭和元年新短歌協會會員となり「藝術と自由」に作品發表。昭和二年十二月より「新短歌時代」を主宰、同六年廢刊。その後「青空」(青山ゆき路編輯)を監修。著書に「落葉燒く山」「路傍に咲く花」「赤土の丘」あり。

**並原 欣人**

二十七歳。愛知縣瀬戸市に生れ、同市西榮町

三〇六に現住。陶磁器卸商。一時名古屋短歌會に入會せしことあるも、現在は現實短歌同

人。田口白汀氏に師事す。

**南 角 清**

明治四十二年七月十日三重縣阿山郡山田村に

生れ、同縣四日市市八幡町に現住。四日市高女教諭。昭和三年五更會員となり今日に至る。なほ昭和六年鳥人會員となり、廢刊後一時霸王樹に入會せし事あり。

**南 條 逸夫**

本名濱野熊一郎。大正三年二月五日生。京都

府加佐郡由良村八一三に現住。昭和七年頃より新聞文藝誌に投稿、昭和十年十月京都舞鶴あすなろ社同人となり今日に至る。

**南 原 繁**

明治二十二年九月五日香川縣大川郡相生村に

生れ、東京市淀橋區下落合二ノ七〇二に現住。東京帝國大學教授。晩學にして獨習、近年はアララギの先達に就いて履修す。

**南 部 友也**

山口縣小月町に生れ、昭和十一年三月歿す。

醫師。短歌研究會に入り、金子薰園氏に師事す。

**南部 松若丸**

明治三十六年一月五日愛知縣中島郡祖父江町

字丸淵に生れ、東京市芝區高輪南町三〇に現住。大正十三年暮哲學教授村岡省吾氏より趣味を培はれ、「香蘭」發刊と同時に參加、現在に及ぶ。尙慶應在塾中は「三田歌抄」に參加せしことあり、曾て「日光」短歌民族

に屬せしことあり。

### 南部多摩吉

本名小島政吉。二十九歳。東京府南多摩郡由木村鑛水に生れ、千葉縣野田町中野臺二六八に現住。野田醬油株式會社員。作歌十年餘、細井魚袋、市山盛雄兩氏に師事、眞人同人。

### 行川物外

本名飯倉日出夫。明治二十八年八月二十一日千葉縣山武郡岡村小沼田一三一八に生れ、同郡白里町南今泉に現住。畫業。昭和十年三月以降歌誌「思索之旅」同人、現在に至る。

### 滑川豊次

三十二歳。東京市深川區平野町一ノ一二に生れ、同地に現住。株式店員。昭和二年四月水廻社に入り現在に及ぶ。

### 榎崎正男

三十九歳。大阪府堺市に生れ、同市寺地町山之口に現住。吳服商。大正十四年アララギ入會、現在岡麓氏に師事す。

### 成島ふみ

明治三十七年一月十八日、佐賀縣に生れ、滿洲國鞍山市榮町二〇に現住。昭和五年合萌に入會、今日に至る。

### 成田功

二十二歳。名古屋市南區熱田須賀町九に生れ、京都市下京區佛光寺新町西入藤井保商店方に現住。吳服店員。昭和十年秋森蔭短歌會に入會、今日に至る。

### 成田小五郎

二十六歳。青森縣東津輕郡荒川村大字上野に生れ、青森市新濱町六丁目に現住。官吏。昭和九年三月よりアララギ會員となり、結城良草果氏の指導を受けて現在に至る。

### 成田憲三

明治三十八年一月一日生。弘前市下土手町に現住。衣服商。大正八年より作歌「香蘭」創刊と共に入社、昭和三年脱退、プロ歌人同盟を経て昭和四年末、宇都野研氏の門下となる。現在「勁草」同人。

### 成瀬大味

本名雄之進。明治六年四月宮城縣栗原郡志波姫村に生れ、同縣築館町に現住。元小學教員、現在築館教會牧師。明治二十八年師範學校在學中、仙臺嶋原行雄氏に師事、昭和三年頃より同六年に亘り石樽千亦氏の添削を乞ひまた心の花に投稿せり。同七年八月潮音社友となり、新懇同人として今日に至る。

### 成宮悌一

明治二十三年十二月一日、滋賀縣愛知川に生れ、西宮市前濱町に現住。會社員。大正八年二月窪田空穂氏に就く。昭和八年二月以來樹の木誌上に發表。

### 成井宥憲

二十七歳。東京府西多摩郡熊川村に生れ、神奈川県津久井郡内郷村若柳に現住。僧侶。幼時より作歌せるも、地方同人誌に關係せしのみにて取上げて言ふべき經歷なし。

## にの部

### 丹塚もりえ

本姓永雄。明治三十六年三月二十七日、熊本市本莊町に生れ、東京市世田谷區北澤三ノ九二に現住。經濟學博士永雄策郎の妻。大正十一年より東京女高師にて尾上柴舟氏の作歌指導を受く。大正十三年水廻社入社、現在に及ぶ。詩集「夜の鏡」(昭和五年刊)あり。

### 丹羽俊彦

明治十九年三月十四日、廣島縣三原市に生れ、兵庫縣武庫郡蘆屋西新田に現住。關西信託常務取締役明治四十四年慶應義塾理財科卒業。歌は新詩社にて與謝野晶子氏に學ぶ。

### 丹羽安喜子

明治二十四年五月二十日生。兵庫縣武庫郡精道村蘆屋西新田四四二に現住。丹羽俊彦妻。東京府立第三高女卒業。大正九年より新詩社に入り與謝野晶子氏に學ぶ。昭和十一年四月歌集「蘆屋より」を出版。

### 丹生徹

嘉永元年和歌山縣有田郡石垣村中井家に生れ、大正十二年三月九日、同縣伊都郡隅田村に歿す。行年七十八。縣社隅田八幡神社社司。明治三十年頃、和歌山短歌社、紀州短歌會入會。

丹生 隆吉

明治十二年和歌山縣伊都郡天野村に生れ、昭

和六年六月九日歿。行年五十三。縣社隅田八幡神社社司。明治二十九年中學中退後東京電燈會社に奉職。大正六年頃より作歌。

仁昌寺 與七

明治三十七年十一月二十八日、若手縣二戸郡

小島谷村字篠畑七三に生れ、同縣岩手郡松尾村松尾嶺山第二合宿に現住。元函館市電運轉手、現坑内電氣機關車運轉手。大正十四年小島草歌氏主宰歌詠「牧草」同人となる。昭和四年五月「アララギ」入會。失業以來歌詠を離る。昭和八年一月自選歌小集「獨酌の酒」出版。

二宮 赤山

本名保。二十一歳。愛知縣愛知郡鳴海町字赤

松に生れ、同縣丹羽郡大山町熊野町に現住。昭和五年九月森蔭短歌會に入會、岡山利一氏に師事し今日に及ぶ。

二宮 清子

明治三十六年六月愛媛

甲府市白木町八一に現住。昭和六年六月より香蘭社女友となり、約二年間香蘭誌上にて勉強す。

二宮 冬鳥

本名秀夫。二十六歳。愛媛縣大洲町中村に生

れ、久留米市京町三ノ七六に現住。醫師。高嶺會員。

二宮 碩

本名碩三。明治二十九年七月二十九日、愛媛

縣北宇和郡吉田町に生れ、宇和島市御徒町二に現住。大正二年頃、豫州日報、南豫時事新聞に詩歌を發表し始めたるも間もなく中止、その後は折にふれて僅かに作歌するのみ。

西 德重

三十九歳。福岡縣嘉穂郡碓井村に生れ、同縣

飯塚市芳雄麻生社宅に現住。會社員。昭和九年まで約六年餘水藝社友として投稿したるこ

にしはじめ

本名葛西芳一。二十九

歳。青森縣に生れ、滿洲國撫順新屯公園新屯寮一一七號に現住。滿鐵社員、撫順炭礦勤務。昭和十年春より作歌するのみにて作歌經歷といふほどのものなし。

西内 瀧三郎

明治二十年一月十五日

生れ、同地に現住。大正九年九月水藝入社、同十二年十月退社、大正十三年五月五妹入社、現在に至る。

西内 三榮

二十五歳。德島縣板野

郡撫養町本通りに生れ同地に現住。昭和十年四月潮音に入社、今日に至る。

西垣 青穹

本名佐太郎。三十八歳。大阪市西區本通二ノ

一〇六に生れ、同地に現住。住友金屬工業製鋼所員。昭和七年より田村秋郊氏に師事し、俳句短歌雜誌「趣味」に毎月投稿して今日に至る。

西垣 靜芳

四十三歳。岐阜市中新

町六丁目に現住。米穀商。十六歳頃より作歌、創作、潮音、水藝等に籍を置きし事あり。目下ぬはり、短歌にあり。歌集「心を描く」あり。

西角 桂花

本名德太郎。五十歳。大阪府泉北郡大津町千

原に生れ、同地に現住。小學校青年學校教員。十八歳の頃、雜誌「新聲」に投稿、久しく何れの結社にも屬せざりしが、昭和二年「霸王樹」に入社、橋田東聲氏逝去の後同社を退き、昭和六年水藝社に加はりて今日に至る。現在水藝同人。歌集「青色の珠」あり。

西川 百子

本名正治郎。輝とも號

す。明治二十年一月京都市に生れ、同市西院西大丸町一二必盛堂内に現住。著述業。少年時より作歌、十六歳の春、新詩社京都支部の同人となりしも幾何もなく退き、自作の發表は概ね歌集の刊行に依る。歌集に「無産者」「刀葉林地獄」「婦女身」あり。

西川 峽水

本名喜代水。舊姓垣本。大正三年八月二十三日

愛媛縣南宇和郡東外海村字垣内六番耕地五一八に生れ、同村字深浦に現住。外海魚市場株式會社書記。昭和十年石野義一氏主幹の歌誌「くさの葉」に入會。

**西川 卓** 三十四歳。岡山縣苫田郡上加茂村大字山下に生れ、神戸市須磨區大手町四ノ一八板井方に現住。自動車運轉手。昭和八年一月歌誌「六甲」創刊と共に同誌の會員となり現在に至る。

**西川 義方** 五十九歳。和歌山市西濱に生れ、東京市本郷區彌生町二ノはノ四九に現住。醫師。大正十二年より佐佐木信綱氏に師事す。

**西川 仁之進** 三十四歳。徳島縣海部郡中木頭村字平谷に生れ、北海道空知郡富良野町富良野神社々務所に現住。神職。大正十一年小田觀澄氏の指導の下に太田水穂氏主宰「潮音」の社友となり作歌八ヶ年に及びしも、昭和四年作歌生活行詰り遂に作歌を斷念せり。

**西川 喜久代** 三十二歳。東京に生れ六四に現住。昭和十一年二月より五島美代子氏に師事、作歌を始す。

**西木 茂子** 二十五歳。埼玉縣北足立郡田間宮村に生れ、同郡吹上町大蘆に現住。農業。實科高女卒業

後藤きてより作歌、新井英三郎氏の指導を受く。

**西澤 昱道** 三十四歳。埼玉縣比企郡大河村大字青山に生れ、目下出征中。教師。國學院大學在學中、釋道空氏の指導を受け、卒業の年昭和二年、佐倉歩兵五十七聯隊在隊中「鶴」同人に加はり今日に及ぶ。

**西澤 常子** 十七歳。茨城縣水戸市長町に生れ、同縣東茨城郡下中妻村内原日本國民高校内原分校内に現住。生徒。昭和十一年七月より作歌。

**西澤 麗葉** 滋賀縣蒲生郡市邊村字布施五二六に生れ、大津市膳所中庄町三八五に現住。滋賀師範教諭。歌は藤田清氏に學ぶ。

**西島 元甫** 明治二十一年十月、山口縣豐浦郡阿川村に生れ、小樽市花園町西四ノ六に現住。新聞記者。早稻田大學政經科在學中萬朝報その他に投書、昭和七年新詩社に入る。

**西島 はつね** 本名初子。明治三十三方郡北狩野村下畑に生れ、千葉縣夷隅郡大原町新田に現住。幼稚園保母。創作社々友として故若山牧水氏、同喜志子氏に師事す。

**西島 ゆき子** 二十二歳。福井縣大野郡大野町に生れ、千葉

市富士見町一七二に現住。昭和九年十月草の實に入社、今日に至る。

**西島 喜代之助** 明治十六年大阪に生れ、大阪市住吉區田邊西之町三ノ一〇に現住。元銀行員。若かりし日より歌を愛し「心の花」に據り、佐佐木信綱氏に師事す。

**西島 貞子** 明治三十一年五月一日滋賀縣に生れ、兵庫縣西宮市川東町四七に現住。女學校時代より作歌、結婚後大連に居住、一時心の花によりしが昭和三年西田猪之輔氏等同志七人と歌誌「合萌」創刊、今日迄同誌により作品發表。昭和三年旅行歌集「蒼波」刊行、昭和十年十月處女歌集「沙金」の著あり。外に歌誌「花房」の同人。

**西田 幾多郎** 明治三年八月十日、石川縣河北郡宇ノ氣村字森に生れ、京都市左京區田中飛鳥井町三二に現住。作歌經歷といふほどのものなし。五十三歳前後家庭の不幸に遭遇し、人眞似を試みたるにすぎず。

**西田 嵐翠** 本名知一。五十一歳。吉に生れ、門司市大里原町別院通に現住。鐵道官吏。尾上柴舟氏の「新聲」の選者たりし頃投稿、次で前田夕暮氏の指導を受け、また北原白秋氏及若山牧水氏より間接に教へらる

る處少からず。初期「詩歌」、「珊瑚礁」、「霸王樹」の同人たりしことあり。現在は「あしかひ」「ひのくに」「ひかた」の同人。著書「現代機關車大觀」「機關車用語辭典」等。

**西田 重雄** 三十八歳。奈良縣丹波市町田に生れ、靜岡市大岩宮下町九二に現住。教員。二十七歳頃より本居亮一氏の指導を受けて今日に至る。

**西田 春水** 本名清次。三十八歳。京都府園部町本町に生れ、同地に現住。銀行員。會計士。十七歳頃より作歌、同人雜誌に發表す。大正十五年一月より昭和四年三月まで月刊短歌誌「小さき泉」を主宰發刊。

**西田 猪之輔** 明治二十一年伊賀の國滿洲にあり新京城後地一〇八に現住。青年の頃、與謝野寛氏に教を乞ひ新詩社に入りたるも中絶す。昭和三年滿洲短歌會を起し、雜誌「合萌」を發行し現在迄引續き之が經營に當る。此の間再び與謝野氏の門に投じ雜誌「冬柏」の同人たり。著書に「曠野」(昭和四年刊)「御空行く」(昭和十年刊)あり。

**西田 龍四郎** 本名井上龍四郎。三十五歳。山形縣に生れ、東京市京橋區新川一ノ八に現住。元會社員、現在雜貨商。北原白秋氏の指導を受け香蘭に入社。

**西田 はる美** 本名吉三郎。三十八歳。金澤市新堅町二ノ三〇に生れ、同地に現住。理容業。大正九年頃より作歌、いくばくもなくして生田蝶介氏の「吾妹」に入り一年程在籍す。

**西田 夢花** 本名龜八。三十歳。愛媛縣東宇和郡津津村に生れ、同地に現住。公吏。中學時代より作歌、昭和十年「眞樹」同人となり現在に及ぶ。

**西田 豐子** 二十六歳。鹿兒島縣日置郡阿多村麓に生れ、同地に現住。水廻社友。

**西塚 幸一** 二十四歳。八戸市鍛冶町一五菊地方に現住。商業。中學時代より稻垣浩氏の指導を受く。

**西出 茶鳩** 本名甚作。三十七歳。石川縣江沼郡動橋村字中島に生れ、同地に現住。農業。大正八年五月霸王樹入社、大正十四年一月水廻社入社。

**西野 嘉壽夫** 三十九歳。京都府加佐郡新舞鶴町朝日通六條角に生れ、神戸市灘區泉通五ノ一〇六に現住。郡是製絲社員。大阪商大在學中より作歌、同校卒業後約十年作歌中絶、昭和八年アララギ會員となり今日に至る。

**西野 京子** 京都にあり病を養ひつゝ作歌、大正七八年頃

の「創作」に發表。大正九年頃二十五六歳にて歿す。

**西原 重敏** 明治三十六年四月伊豫に生れ、松山商業卒業後、瀬戸内海嶺灘四阪島に棲みて既に十六年餘、別子銅山四阪島製鍊所社員。歌は松村英一氏の指導をうくる事十九年餘、現在國民文學同人。

**西廣みどり** 本名よし子。明治三十八年六月八日、宮城縣刈田郡福岡村鎌先に生れ、群馬縣吾妻郡草津町栗生に現住。昭和七年二月いづき入社、今日に至る。

**西堀 重信** 僧名重信。二十七歳。東京市下谷區池之端に生れ、同市大森區池上本門寺南谷に現住。僧侶。童謡作家。昭和四年より六年まで「一心の花」日本歌人」其他に據る。

**西牧 莊十郎** 三十三歳。明治三十九年十一月七日、長野縣東筑摩郡新村二五〇八に生れ、同縣上水内郡三水村倉井に現住。小學校訓導。昭和四年より昭和八年まで吉行浩の名を以てアララギ會員たり。

**西見 貫一** 五十五歳。福岡縣浮羽郡福富村大字富永一に生れ、同縣柏屋郡箱崎町三三五一に現住。元中等教員、現小學校代用教員。作歌經歷と

いふほどのものなし。

**西村 一平** 明治四十四年十二月十日金澤市に生れ、北海道石狩國下蘆別に現住。郵便局長。昭和六年與謝野寛、晶子兩氏に師事、爾來「冬柏」誌上に作品を發表、現在に至る。

**西村 淨子** 三十四歳。熊本市西唐人町三九に生れ、熊本縣八代町西本町六九に現住。書籍文具商。第一高女卒業の年より「非歌人」の同人となり、廢刊後「午前」「詩歌」等にしばらく加はる。「龍燈」創刊より同人として今日に及ぶ。

**西村 直次** 三十三歳。山形縣南村山郡柏倉門傳村に生れ同縣西置賜郡長井町境町に現住。教員。結城哀草果氏に師事。

**西村 俊夫** 二十九歳。兵庫縣出石郡神美村口小野四八一に生れ、同地に現住。農業。前田夕暮氏の詩歌に一時指導を受けし事ありしも、その自由律轉向と共に退社し、昭和八年郷土短歌俳句誌「木犀」を發行、五號にて終刊し短歌雜誌蘆矢を發行、今日に至る。

**西村 醉香** 本名久一郎。糠濱市に生れ、神奈川縣鎌倉町

大町藏屋敷八〇二に現住。出版業。「銀座社」を經營、雜誌「銀座」を發行の傍著述に従事す。小學校時代より作歌、昭和四年吉井勇氏

と「スバル」發行、廢刊後昭和六年「新珠」を主宰發行す。著書に「歌物語」歌集「愛染」あり。

**西村 金二郎** 三十歳。京都市東山區山科四宮大將軍町に生れ、同區山科安永南屋敷町三ノ四に現住。銀行員。昭和八年四月尾山篤二郎氏主宰の自然詩社に入社、今日に至る。

**西村 賢** 三十六歳。高知縣長岡郡岡豊村笠ノ川五七に生る。農業。二十三歳頃霸王樹社に在りしことあり。現在地方雜誌「短歌藝術」同人。

**西村 正人** 三十三歳。熊本縣八代郡松高村宇大島に生れ朝鮮江原道襄陽郡清川面東草に現住。會社員。十五歳頃より作歌、二十歳頃ボトナム、非歌人等に發表。昭和五年「水薺」社友となり金澤種美、故石井直三郎、尾上柴舟の諸氏の指導を受く。

**西村 吉之** 二十六歳。熊本縣球磨郡多良木町に生れ、福岡縣八女郡上妻村字津ノ江に現住。鐵道職員。短歌に親しみて約九年、其の間地方同人雜誌を轉々、昭和十一年五月創作社に入社、今日に及ぶ。

**西村 勝子** 明治三十八年八月二十日、大阪府南河内郡大伴村北大伴三五七に生れ、同地に現住。大正

十四年三月樟蔭高女高等科卒業。歌は堀口大聖氏に師事す。

**西村 光弘** 明治二十九年一月二日熊本縣八代郡松高村大島に生れ、同郡八代町西本町六九に現住。書籍文具商。石灰原石坑經營。大正三年より作歌、大正九年「非歌人」同人、昭和五年歌誌「龍燈」を創刊主宰し今日に至る。歌集「龍燈」あり。

**西村 愛子** 明治二十一年五月九日京都に生れ、京都市室町通三條上ルに現住。博多帶地間屋。大正十三年頃より杉野朴氏に指導を受く。昭和四年「地上」復活と共に入社、今日に至る。

**西村 寛治** 明治四十年三月二十四日、京都府加佐郡神崎村に生れ、長野縣西筑摩郡上松町沖田に現住。昭和二年大阪府市立高商卒業、同年大同電力株式會社に入社、今日に及ぶ。作歌經歷といふほどのものなし。

**西村 徳藏** 明治三十八年四月十五日、熊本縣玉名郡山北村西原五九五に生れ、同郡橋島小學校に現住。教員。昭和三年より作歌、「水薺」に入社、上田英夫氏の指導を受け現在に至る。

**西村 眞琴** 明治十六年三月二十六日、長野縣東筑摩郡里山邊村に生れ、大阪府豊能郡南豊嶋村穂積に

現住。廣島高師博物學科卒業、歐米に學ぶこと七年、歸朝後北海道帝大、水産教授、理學博士、昭和三年大阪毎日新聞社入社、今日に至る。大阪毎日新聞社會事業團常務理事。二十歳頃より作歌、いぶき、創作、凡人經、日本凶稿す。著書に大地のはらわた、日本凶荒史、話題の科學、科學隨想、野幌、北滿異彩、水のわくまで、其の他あり。

**西村 修一** 二十五歳。和歌山市に生れ、東京市本郷區駒込動坂町六七内田方に現住。東大農學部學生。中學二年頃より作歌す。

**西村 孝** 本名孝一。四十三歳。三重縣南牟婁郡木本町に生れ、東京市大森區上池上町三九に現住。會社員。大正七年「朱櫻」に入社、北原白秋氏に師事せしが、同誌廢刊後大正八年「とねりこ」に入る。大正十二年村野次郎氏「香蘭」を創刊するに當り入社、現在に至る。

**西村 富士夫** 二十五歳。岐阜縣山縣郡大桑村に生れ、名古屋市東區西裏町一ノ三六に現住。名古屋新聞社編輯局員。昭和四年「霸王樹」に入り、故橋田東聲氏、臼井大翼氏の教示を受く。同六年名古屋短歌會に入會、同十年退會して以後結社に關係せず。

**西村 ヒロ** 二十歳。千葉縣海上郡旭町に生れ、同地に現住。訓導。銚子高女四年生頃より宮本榮一郎氏の指導を受け、女子師範卒業前「橄欖」に入る。

**西村 多津子** 三十二歳。神奈川縣平塚市新宿一四九に生れ、同地に現住。女學校卒業後昭和三年より水町京子氏の草の實に入社、現在に至る。また昭和十一年八月遠つびとに入社、笠村尚子の雅號にて出詠中。

**西村 陽吉** 本名辰五郎。江原兼吉の次男。明治二十五年四月九日、東京市本所區東兩國に生れ、同市本郷區駒込曙町一五に現住。株式會社東雲堂社長、株式會社學習社事務取締役、日本讀書新聞社長。出版業。第一期「創作」「短歌雜誌」「生活と藝術」等を編輯し「藝術と自由」を主宰せり。著書に歌集五冊、評論集一新社會への藝術、評傳「石川啄木」等。最近は新短歌の述作を専らにす。

**西本 郷榮** 明治二十八年七月二十下庄町に生る。銀行員。大正八年佐佐木信綱氏の竹柏會に入會、石榑千亦氏の指導をうけつつ今日に至る。

**西本 桃葩** 本名米一郎。明治三十一年四月四日、愛媛縣温泉郡與居島村由良に生れ、同郡東中島村大浦に現住。小學校教員。大正六年師範在學中より作歌、新潮に投稿。昭和三年白日社に入り同六年に退き、同年より「あけび」の花田比露思氏に師事して今日に至る。「あをぐも」同人。

**西本 清樹** 明治三十四年舊六月五日、熊本市出水町字今五七二に生れ、朝鮮全羅南道光州府旭町八七に現住。官吏、建築設計。十三歳頃より作歌、投書家時代を経て大正八年八月「霸王樹」創刊と共に入社、臼井大翼氏に師事して今日に至る。

**西山 徳次郎** 四十歳。北海道に生れ、京都市南禪寺北ノ坊町一に現住。男爵住友吉左衛門家職員。大正六年十九歳より作歌、武庫短歌會在籍十餘年、昭和三年アララギ入會、現在齋藤茂吉氏門下たり。

**西山 三舛** 三十三歳。和歌山縣伊都郡富貴村筒香に生れ、同地に現住。小學校教員。金澤種美氏に學び昭和二年水郷に入社、現在に至る。

**西尾 節子** 二十七歳。福岡縣小倉市富野に生れ、同縣筑紫郡那珂村麥野に現住。福岡縣女子專門學校時代より作歌、昭和八年同校卒業と同時にアララギに入會、今日に及ぶ。

**西尾 鏞太郎** 三十六歳。東京市本郷區湯島天神町に生れ、

同市豊島區西巢鴨二ノ二三二五に現住。帝國生命社員。大正十四年二月潮音社に入社、太田水穂氏に師事す。また木権短歌社同人。

**西尾 準一** 二十五歳。岐阜縣苗木町に生れ、同地に現住。農業。「梵貝」同人たりしことあり。

**西岡 富美** 十九歳。滋賀縣栗太郎治田村大字岡に生れ、同地に現住。滋賀縣草津高女卒業後同校補習科に入り作歌をつづく。

**西岡 徳藏** 三十五歳。小樽市に生れ、同市高砂町二ノ四一に現住。小學教員。大正八年より作歌、昭和四年霸王樹に入社、目下同社同人。歌誌「このくれ」主宰。歌集「落葉林」あり。

**錦織 暢三** 明治三十六年一月二十三日、廣島縣變三郡君田村大字藤兼耕四八二ノ二に生れ、吳市内神町二〇八ノ六に現住。高等小學校訓導。師範卒業後獨学、後吳市に赴任するに及び「木権」に入社、目下同人。

**日光寺 憲雄** 本姓細井。新潟縣西頸城郡浦本村大字間脇に生れ、昭和九年一月三十四歳にて歿す。大正十二年三月豊山大學卒業前後より作歌、歸郷後相馬御風氏主宰の木蔭會に入會。歌集「愛樂」あり。

**新田 英太郎** 三十七歳。岡山縣吉備郡足守町八六二に生れ、同地に現住。官吏。大正十四年國民文學入社、植松壽樹氏の指導選歌を受けて今日に至る。また岡山の生咲義郎氏主宰の「かげとも」同人。

**新田 貫一** 二十四歳。兵庫縣赤穂郡赤穂町一一五に生れ、同地に現住。兵庫縣立赤穂高女國語教師。二松舍舎専門學校在學中より作歌、現在アララギ會員。

**新田 春子** 本名はる子。二十七歳。仙臺市に生れ、同市元寺小路二二五に現住。遞信局事務員。昭和九年アララギに入會、現在に至る。

**新田 寛** 四十五歳。岩代堰本村に生れ、權太泊町に現住。教員たること約二十年、現在大泊高女教頭。歌は十五六歳の頃より始めし、後句作に轉じ、三十歳を超えて再び作歌を始む。國民文學會員、青垣同人等を經て歌に「ポトゾル」編輯同人たり。「七部集猿蓑評釋」「近世名歌三千首新釋」「新註小學國語讀本原據集成」等の著あり。

**新田 正子** 大正三年五月二十三日、東京市日本橋區大傳馬町一ノ四に生れ、同市世田谷區玉川奥澤町一ノ四六六に現住。昭和十年より尾上柴舟氏に

師事、水壘社友となる。

**新倉 双葉** 三十四歳。東京府南多摩郡多摩村大字貝取九一に生れ、同地に現住。農業。十八歳の春より作歌、二十六歳の春より三十歳の秋迄歌誌「かりがね」を發行せしが中絶、現在に至る。

**新坂 教子** 十九歳。大阪府東成郡住吉村六七に生れ、大阪市住吉區帝塚山中三ノ七〇に現住。帝塚山學院高女生徒。女學校二年より本校文藝部に入り、それより青空社友として作歌を始め、佐澤波弦氏に師事す。昭和十一年十一月霸王樹社に入社。

**新里 貞** 明治三十六年二月六日、岩手縣雫石臨濟寺に生れ、昭和七年八月十八日宇都宮市にて歿す。享年三十一。小學校教員。東方詩人、下野短歌同人。遺稿集「木蓮」あり。

**新津 亨** 四十歳。長野縣に生れ、一三二に現住。書籍業。十六歳より作歌、文章俱樂部投書中に知り「創作」に入社、若山牧水、中村三郎兩氏の指導をうく。中村氏歿後「水壘」に入り岩谷莫良氏に學ぶ。昭和十一年上京、時事新報社編輯局勤務と同時に「ポトナム」復活に参加し、昭和六年プロレタリア歌人同盟に加入まで在社。歌人同盟解散後松川龜森氏等と歌誌「あかつき」を創刊

消後松川龜森氏等と歌誌「あかつき」を創刊



す。

### 新野貴美子

大正二年九月二十四日  
東京市芝區西久保巴町  
六五に生れ、横濱市中區福富町東通り五〇に  
現住。昭和九年嫩瀧入社、今日に至る。

### 新堀貞子

本名細野サタ。明治三十  
一年十月五日、千葉  
縣八日市場町に生れ、同縣香取郡常磐村に現  
住。大正九年頃より作歌、若山牧水氏に師事  
して創作の社友たり。

### 新村みよ子

二十八歳。長野縣上伊  
那郡朝日村上平出に生  
れ、同郡伊那富村辰野酒井方に現住。昭和三  
年十月潮音社入社、今日に至る。

### 新村隆男

明治四十四年五月二十  
日、長野縣埴科郡清野  
村三一に生れ、同地に現住。農業。昭和三年  
頃より作歌、昭和五年宮崎茂氏主宰「現代生  
活」に入社。昭和七年芥川徳郎氏主宰「短歌  
クラブ」に参加、昭和十年宮崎茂氏主宰「い  
はひば」同人となる。

### 新居滋子

明治三十三年四月一日  
京都府伏見深草に生れ  
大阪府泉北郡鳳町長承寺二四五に現住。女學  
校在學中より水町京子氏につき指導を受け、  
卒業後「水甕」の社友となる。その後水町氏  
等の「草の實」發刊に際し加り、昭和九年同  
氏の草の實脱退に従ひ、「遠つびと」創刊と共に

に之に加りて今日に至る。

### 新居格

明治二十一年三月徳島  
縣撫養町に生れ、東京  
市杉並區高圓寺三ノ三六一に現住。著述。大  
正十三年頃與謝野寛氏夫妻の歌會に出席して  
より時々歌會にて作りしのみ。

### 贅田登志美

村上朝子と云ふ。本  
名朝子。明治二十二年  
一月十七日、群馬縣群馬郡京ヶ島村大字島野  
に生る。大正十五年夏頃より作歌し、野菊同  
人なりしが昭和九年十二月より草爰に入る。

### 窪塚直四郎

三十八歳。埼玉縣大里  
郡藤澤村檜合に生れ、  
同郡中瀬村に現住。小學校教員。日日歌壇、  
婦人公論、短歌研究等に投稿、現在「ささか  
に」準同人。

## ぬの部

### 額田さかえ

三十二歳。仙臺市大町  
四丁目に生れ、同市肴  
町一三五に現住。印刷材料商。宮城縣第二高  
女在學中少女雜誌、地方新聞等に投稿す。

### 實名

明治四十四年十月五日  
静岡縣富士郡岩松村岩  
本に生れ、同地に現住。教員。昭和四年東京  
立正大學専門部に入學と同時に同學教授山上  
と泉氏に師事、續いて同氏主宰「かくのみ」

の同人となり今日に及ぶ。

### 布川彦二

明治三十五年十一月福  
井縣南條郡南日野村に  
生れ、東京市大森區堤方町一〇四に現住。都  
市計畫、區劃整理、耕地整理の技術を業務と  
す。歌は「自然」に據り、尾山篤二郎氏の指  
導を受け現在に至る。

### 沼崎徳受

明治三十八年七月十日  
岩手縣下閉伊郡織笠村  
に生れ、同地に現住。教員。昭和五年六月、  
ぬはりに社に入社、現在に至る。

### 沼田三之助

二十九歳。信州善光寺  
平に生れ、長野市七瀬  
一五二藤川ゆき方に現住。活版職。昭和十一  
年三月より宮崎茂氏主宰の「いはひば」に參  
加す。

### 沼中早太郎

明治三十三年長崎市に  
生れ、同市西中町三一  
に現住。美容術師。大正十四年文藝雜誌不知  
火同人、昭和三年七月よりあしかび、とねり  
こ、吾妹、香蘭を経て昭和七年十月歌と評論  
に入る。昭和十年八月多磨短歌會入會、現在  
に至る。

## ねの部

### 根岸貞吉

大正六年九月二日、埼  
玉縣大里郡折原村西入

に生れ、同地に現住。農業。昭和九年歌誌「舞合歡」に入り、昭和十年九月、「青垣」に入會、現在に至る。

**根岸 清一** 明治三十四年一月十七日、埼玉縣大里郡別府村大字東別府に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和三年「ささがに」同人、昭和四年「眞人」同人、細井魚袋氏に師事す。昭和七年より「ささがに」編輯の任にあたり現在に至る。歌集「牛の仔」あり。

**根岸 春江** 本姓若井。明治四十二年三月二十八日横濱に生れ、同市中區新川町一ノ二根岸方に現住。十年來タイピストとして貿易商館に勤務せしむ。目下病床にあり。作歌日淺く、文學案内、短歌評論等に作品を寄す。

**根津 與** 二十九歳。山形縣東村山郡長崎町三六五に生れ、東京市在原區戸越町一一九四に現住。昭和五年より時折アララギを購讀。

**根本 四士男** 二十八歳。茨城縣水戸市仲町五一五に生れ、同縣那珂郡中野村東石川一九八に現住。昭和六年水戸中學卒業後現住所に轉居、花卉栽培のかたはら作歌す。

**栢垣 青花** 本名銀四郎。四十六歳。岐阜縣惠那郡中津町に生れ、同地に現住。新聞記者。十七歳頃より

作歌、文章世界、秀才文壇、新潮、中央公論等の投書家時代を経て、アララギ、創作等に籍を置きし事あり。大正十四年十一月歌誌「山峽」を同志と共に創刊し、昭和五年七月廢刊す。「短歌」同人。

### の の 部

**野一色 美穂子** 大正五年十一月東京に生れ、同市赤坂區中ノ町一に現住。昭和八年山脇高女卒業。作歌經歷といふほどのものなし。

**野石 祐昌** 二十七歳。兵庫縣伊丹町に生れ、東京市蒲田區下丸子町二一に現住。無職。昭和五六年頃故中村憲吉氏選大阪朝日新聞歌壇に投稿す。

**野入 英樹** 熊本市に生れ、釜山府瀧州町七二八に現住。新聞記者。大正九年より作歌、一時創作に入社せし事あり。大正十五年渡鮮、現在在門司より發行の「ひかた」同人。

**野枝 稔** 本名吉本伸一。二十八歳。岐阜縣土岐郡土岐津町に生れ、同郡瑞浪町に現住。小學校教員。中學時代より獨り作歌、昭和十一年潮音に入り現在に及ぶ。

**野北 正激** 二十五歳。福岡縣田川郡彦山村落合に生れ、

同地に現住。小學校教員。昭和十年六月北原白秋氏主宰「多磨」に入會、今日に及ぶ。

**野口 徳次** 明治四十一年一月二十九日生。宮崎縣北諸縣郡高城町一八〇九野口武助の養子。東京市中野區本町通三ノ一六に現住。東京日新新聞記者。「花房」に據る。

**野口 曉** 明治四十三年北海道膽振國アイヌ部落白老に生れ、帶廣市東二ノ一〇伊藤方に現住。北大豫科在學中級友と歌誌「冬母」を出す。後自由律短歌に轉じ前田夕暮氏の「詩歌」に入りし事あるも一年にして脱し、現在は無所屬にて作歌も中止。

**野口 立歩** 本名武治。二十五歳。埼玉縣熊谷市伊藤合名會社内に現住。店員。十九歳頃より作歌、即興歌人會員となる。日本短歌に投稿す。

**野口 勇輝 夫** 明治三十八年十月十六日、和歌山縣有田郡八幡村字濠井五四〇に生れ、東京市城東區北砂町七ノ一七三に現住。會社員。大正十五年アララギに入會、現在に至る。

**野口 美萍** 本名長太郎。明治三十三年一月十五日、新潟縣村松町に生れ、長野市田町二一九〇に現住。明治大學法科を卒業、長野縣廳屬警部にして同縣警察部に勤務。十四五歳頃より作歌すれ

429

ど特に記すべき經歷なし。

野口青眉

本名規矩雄。明治二十六年栃木縣那須郡大田

原町に生れ、同郡七合村興野小學校住宅に現住。小學教員。大正二年土岐善麿氏の指導をうけ、大正六年創作に入り、昭和二年ぬほり社起るに及びその同人となり今日に至る。著書に「旅の手帖から」、歌集「那須野」等あり。

野下未到

本名潤。明治三十三年鹿兒島縣に生る。高等

小學校卒業後渡臺、現在臺南州地方課屬として勤務。作歌經歷といふほどのものなし。

野坂瀧雄

四十五歳。福井縣坂井郡本莊村中番に生れ、

東京市板橋區板橋町三ノ五八八に現住。教員。大正六年故若山牧水氏主宰創作社に入社、昭和三年同氏逝去と共に退社、昭和二年菊池知勇氏主宰ぬほり社入社、同人として今日に至る。

野崎宣重

本名信衛。岡山縣に生れ、昭和五年三十四歳

にて歿す。初め金子薫園氏に學びしも、大正十二年頃、若山牧水氏の創作社に入社す。

野咲俊二

本名吉田芳。大正四年一月二十六日、三重縣

名賀郡名張町柳原三三六一に生れ、東京市澁谷區金王町七三清水方に現住。國學院大學生。

昭和十年歌誌「梅檀」に入會、十二年五月脫退、現在所屬なし。

野澤久須夫

本名元村九洲夫。明治四十三年二月五日、滋

賀縣伊香郡古保利村西阿閉に生れ、同縣東淺井郡速水村大安寺野澤家に養子となる。十八歳頃より作歌、新聞雜誌の歌壇に投稿し某短歌誌にも入社せしことあるも中途退き、現在「歌と評論」に據る。

野澤島子

三十四歳。北海道に生れ、札幌市に現住。元

小學校教員。昭和九年より作歌。

野澤輝武

埼玉縣兒玉郡藤田村大字小和瀬に生る。昭和

十一年、日本大學醫學部在學中死亡。享年二十五。「萬葉集入門」の著あり。

野澤曉鐘

本名勝敏。五十四歳。茨城縣眞壁郡下館町に

生れ、宇都宮市西原町陽南に現住。東電技手。明治四十二年頃より作歌、前田夕暮氏に師事し白日社々友となる。昭和四年山河社、同五年下野短歌社、同六年二荒社、同一年ぬほり社同人。現在「ぬほり」「二荒」「青煙」「下野短歌」の四結社同人。歌集「青き花」「草光る」あり。

野澤治子

十五歳。兵庫縣明石市大藏谷狩口に生れ、同

地に現住。學生。あじろ木社友。

野澤柿茸

四十九歳。北海道小樽に生れ、兵庫縣明石市

大藏谷狩口に現住。貿易商勤務。國民文學より轉じ潮音に入社、爾來二十三年今日に至る。歌集「鐵拐」あり。

野島右喜

二十六歳。廣島縣沼隈郡金江村に生れ、同地

に現住。商業。昭和十年二月より作歌、四月霸王樹社入社、現在に至る。

野尻壽臣

本名壽朗。明治四十四年一月十日、山梨縣北

都留郡賑岡村淺利に生れ、東京市本郷區弓町二ノ三に現住。松屋淺草支店勤務。昭和二年生田蝶介氏主宰「吾妹」に入社、作歌を始む。昭和五年退社、尾山篤二郎氏主宰「自然」に入社。翌六年十月、須藤克三、山本又一郎氏等と雜誌「梅檀」を創刊。現在發行所を擔當す。

野末桃古

本名貞次。三十五歳。靜岡縣濱名郡小野口村

小松に生れ、濱松市外貫布禰三三一に現住。美術家。昭和九年生田蝶介氏主宰「吾妹」に十ヶ月、昭和十年窪田空穂氏主宰「國民文學」に六ヶ月、入社せしことあり。現在ほ殆ど作歌なし。

野瀬市郎

三十八歳。東京市に生れ、同市葛飾區新宿町

一丁目に現住。著述業。師なし。大正十二年

一月「劫火」、昭和五年一月「落葉木」出版。歌誌「短歌祭」「野菊」等に作品を發表せしことあり。

**野添美登志**

本名豊添己敏。三十四歳。熊本縣葦北郡津奈

木村大字津奈木に生れ、熊本縣菊池郡合志村九州療養所に現住。昭和三年十月「短歌雜誌」にて作歌を始む。一時中止、昭和十年七月アララギに入り現在に至る。

**野田一郎**

福岡縣山門郡柳河町大字北長柄町五に生れ、昭和十一年六月十七日逝去。享年五十二。京都市立堀川高等女學校長。作歌經歷不明。

**野田まさる**

本名勝。三十四歳。滋賀縣高島郡朽木村岩瀬に生れ、關東州大連市桃源臺一三四に現住。大連赤十字病院調劑員。中學、專門學校時代諸新聞雜誌に投稿す。

**野田**

三十三歳。福岡縣大牟田市に生れ、大阪市住

吉區西田邊町三〇に現住。會社員。昭和七年秋より作歌、一時短歌研究に投稿せしも昭和九年一月アララギに入會、中村憲吉、齋藤茂吉兩氏の選を受け現在に至る。

**野田俊一**

本名第三。三十二歳。山梨縣中巨摩郡櫛村に生れ、東京市荒川區町屋一ノ五七四石田方に現住。職工。二十歳頃より作歌、全くの獨學。

**野田孝之**

明治三十四年六月、東京市神田區に生れ、同市麴町區下六番町四〇に現住。美術家（彫刻繪畫）。昭和九年七月、岡山巖氏主宰「歌と觀照」に投稿し、翌年五月「多磨」創刊されるや之に加盟し、北原白秋氏に師事して現在に至る。

**野田東湖**

明治十九年九月十一日山梨縣中巨摩郡常永村河西に生れ、千葉縣夷隅郡東總元驛大圓院に現住。僧侶。大正元年以來山上、泉氏に師事す。同氏の「かくのみ」同人たりし事あり。

**野田三美子**

本姓池畑。三十四歳。鹿兒島縣嚙嗚郡月野村に生れ、鹿兒島市西田町四二に現住。大正十二年一月潮音に入社、今日に至る。なほ潮音の流を汲む「山茶花」の社友。

**野田安樹**

本名鹿雄。明治十二年二月二十三日、佐賀縣小城郡小城町に生れ、臺北市建成町四ノ二七に現住。佐賀縣小學校校長、都視學、高女校長、縣視學をへて大正十二年十月渡臺、高雄州澎湖廳等の視學たり。現在無職。歌は昭和八年より「相思樹」に、同十一年より「ひのくに」社友となり作品を發表し今日に及ぶ。

**野中久米兒**

本名久米次。明治四十二年四月二十日、熊本縣鹿本郡稻田村大字庄五七〇に生れ、滿洲國

鞍山南大宮通協和寮に現住。滿鐵社員。昭和五年龍燈入社、上田英夫氏選の九州歌壇其他に關係す。

**野中憲吾**

熊本縣に生れ、大正五年二十二歳位にて歿。中西悟堂氏等と同期の抒情詩社同人。内藤鑑策氏門。

**野波春枝**

三十九歳。高知縣高岡郡佐川町に生れ、高知市中須賀中ノ丁に現住。實業女學校助教諭。昭和八年郷土歌誌「短歌藝術」に入る。

**野々下仁**

三十二歳。大分縣佐伯町上堅田に生れ、同町京丁に現住。古本商。作歌經歷といふほどのものなし。

**野原水嶺**

本名輝一。三十八歳。岐阜縣揖斐郡小島村に生れ、北海道十勝國古舞に現住。青年學校長。少年の頃より作歌、二十五歳「潮音」に入社し今日に至る。

**野林敏秋**

二十八歳。岐阜縣吉城郡上寶村藏柱三一三に生れ、同地に現住。農業。昭和九年より作歌、諸雜誌に投稿す。

**野溝義男**

四十六歳。長野縣上伊那郡伊那町に現住。小學校教員。作歌經歷といふほどのものなし。

**野村 完六** 五十二歳。廣島縣豊田郡名荷村に生れ、岡山

縣津山市北町に現住。高等女學校教諭。大正三年水廻に入社、現在同社同人たり。大正十二年歌集「山彦」刊行。

**野村 光鳴** 本名平一。三十五歳。石川縣能美郡板津村字

野田乙九〇に現住。工業。昭和元年頃より作歌、同五年霸王樹入社、同年五月退社。昭和九年葦附入社、現在に至る。

**野村 水雄** 二十九歳。明治四十三年九月、高知縣幡多郡

田ノ口村に生れ、田ノ口村第一尋常小學校教員。中學時代より作歌、斷續しつつ現在に及ぶ。冬木健氏主宰短歌創生社同人。

**野村 直子** 本名しげ子。埼玉縣南埼玉郡越ヶ谷町新石町

三丁目新井家に生る。同町四五八〇に現住。十四年の病苦仰臥孤獨に堪へつつ俳句及び作歌に志す。昭和四五年頃より國民文學に出詠。昭和五年杜鵑花、梵貝、曠野の同人として發表、昭和九年頃より病ひ重りて十二年三月迄休詠、現在は杜鵑花に發表す。

**野村 清** 明治四十年、東京市芝

小石川區白山御殿町一二七に現住。會社員。「素皮」「三田短歌」同人たりしことあり。北原白秋氏に師事し、現在「多磨」會員。

**野村 節子** 東京市巢鴨町に生れ、昭和七年八月十八日、

埼玉縣南埼玉郡越ヶ谷町新石町三ノ四五八〇に歿す。行年十九。高女在學中より作歌、昭和五年六月より七年七月迄梵貝及び曠野に入社、曠野には純子として發表。遺稿集「姫紫苑」あり。

**野村 穢也** 三十六歳。山口縣長府

に生れ、仁川府山根町一五に現住。朝鮮銀行仁川支店勤務。大正十一年以來歌誌「眞人」により作歌、今日に至る。

**野村 歩** 大正二年東京に生れ、

六八七に現住。作歌四年、國民文學社友。同市豊島區巢鴨七ノ一

**野村 鳴淑** 本名賢司。三十八歳。青森縣弘前市に生れ、

同市大字富田字櫻林町四ノ六に現住。會社員。大正八年潮音に入社、今日に至る。

**野村 睦水** 本名阿部睦水。四十一

歳。福島縣信夫郡荒井村字野村一八に生れ、同地に現住。地主。昭和五年九月アララギに入會、現在會員。

**野村 蓉子** 二十七歳。大阪府天下

武庫郡魚崎町横屋字井手一〇に現住。昭和五年「帯木の會」に入り今日に至る。

**野村 肇** 二十五歳。東京市淺草區淺草橋二ノ一に現住。學生。小學時代より作歌す。府立第三中學にて橋宗利氏の薰陶を受く。昭和十年「鶴鴿」創刊にあたり同人となり「エラン」と改題後ほきつづき同人。

**野村 作太郎** 四十二歳。兵庫縣姫路市田寺九五に生れ、同

地に現住。鐵道省神戸乗務員。「六甲」の同人たりしことあり。其後新短歌欄に投稿を續けしも現在「鐵道雜誌」のみに投稿。

**野村 綱男** 四十二歳。宮城縣郡城市に生れ、宮崎縣高原

町に現住。醫師。大正八年より二ヶ年潮音に學ぶ。

**野村 泰三** 本名退藏。四十三歳。兵庫縣印南郡東神吉村

砂部に生れ、同縣加古川町寺家町一三二に現住。小學校教員。大正六年姫路師範在學中白日社に入り、前田夕暮氏の指導を受く。同社解散後一時創作社に入り、若山牧水氏の指導を受く。爾後獨り作歌を楽しみ今日に至る。

**野本 サダ** 五十二歳。神奈川縣橋

本 樹郡大師河原村に生れ、東京市大森區大森八ノ三四五に現住。醫師の妻。大正十四年十月より讀賣新聞の婦人歌壇に投稿す。大正十五年一月より「短歌雜誌」に投稿し、松村英一氏の選をうけて昭和六年

に至る。昭和四年七月より山下陸奥氏に師事す。目下「一路」の同人。

**野本三郎** 三十歳。東京市に生れ。同市王子區神谷町二ノ

一四二〇に現住。會社員。昭和三年より作歌、昭和九年六月「短歌鑑賞」を創刊し今日に至る。

**野本多霞夫** 本名孝雄。二十八歳。福島縣平町新川町一

に生れ、同地に現住。商業。中學校卒業後家業に従事。學生時代雜誌の短歌欄に投稿、昭和八年潮音社友となり現在に至る。

**野元純彦** 四十四歳。鹿兒島縣日置郡串木野町下名に生

れ、臺灣基隆市天神町二六に現住。臺灣鑛業株式會社員。中學の時加藤因氏に教をうけ、大正六年二月若山牧水氏「創作」を復活するや其門に入り今日に至る。

**野元正彦** 鹿兒島市松原町に生れ。大正五年潮音に加盟。

七高在學中肺を病みて歿す。行年二十三。遺歌集「野元正彦歌集」あり。

**野呂凡平** 本名高野照寶。五十三歳。千葉縣成田町に生

れ、栃木縣那須郡大田原町成田山遍照院に現住。僧侶。昭和五年より作歌、現在敬禮社友、短歌星雲社友。

**埜中正也** 二十五歳。長崎縣南高來郡南有馬町大江に生

れ、北滿三江省依蘭城外一ノ瀾部隊日高隊に現住。軍人。昭和十年より琢磨歌壇に投稿す。

**能勢房子** 明治四十一年三月、福岡市博多下洲崎町に生

れ、同市下洲崎町二〇に現住。昭和三年福岡女子美術學校卒業當時より作歌、昭和八年新詩社同人として與謝野寛、晶子兩氏に師事して今日に至る。

**能重眞太郎** 三十歳。千葉縣安房郡勝山町下佐久間に生れ

同縣東葛飾郡湖北村中峠に現住。小學校教員。昭和五年頃より作歌、同人誌「郷人」に歌を出す。その後中絶、昭和十一年七月より創作社に入社、社友として今日に至る。

**能美千秋** 三十二歳。福岡縣八幡市上津役大字小嶺二三

四に生れ、同縣飯塚市外片島に現住。嘉穂中學校教諭。昭和四年以來松村英一氏に師事して今日に及ぶ。現在國民文學社友、日方同人。詩集「原始林」(愛の作圖題)等の著あり。

**能村潔** 三十九歳。福井縣坂井郡丸岡町に生れ、奈良

市法蓮町一〇五四に現住。奈良女子師範教諭。年少舊「詩歌」に入社し、村岡黑影氏に導かれて作歌、後國學院大學國文科在學中、折口信夫氏の指導を受く、後専ら詩作に傾倒し、

川路柳虹氏に師事、舊「詩話會」會員たりき。

**登里有三** 二十八歳。千葉縣長生郡五鄉村中善寺區に生

れ、東京市品川區大井金子町六三八三に現住。三菱重工業職工。十三四歳より作歌、一時中絶、二十歳を越ゆる頃より再び作歌、現在北原白秋氏に師事し「多磨」短歌會に屬す。

**則莊司** 本名國領義雄。明治四十年七月二十日、東京

市淺草區千束町三丁目に生れ、同市荒川區日暮里町三ノ一四一一に現住。藥局經營。昭和六年千葉醫大藥學部卒業。昭和十年かくのみ社入社、今日に至る。

**法月俊郎** 明治二十一年四月十三日、静岡市吳服町に生

れ、同市鷹匠町三丁目に現住。清水市史編纂主任。初め不二之舎に歌を學ぶ。明治四十二年五月尾上柴舟氏に師事、車前草社、水穂初期の社友となる。民俗、土俗の研究に志し暫く作歌を疎みしが、昭和七年より復活し創作、不二に歌を發表す。同十二年春同志と静岡歌話會を組織す。

**乘松正二** 二十六歳。静岡縣磐田郡二俣町二俣に生れ、

東京市目黒區清水町四八七小川方に現住。郵便局員。昭和八年七月村野次郎氏主宰の香蘭に入りて現在に至る。

はの部

**羽方輝治** 三十四歳。茨城縣西茨城郡西山内村字福原に生れ、東京市中野區宮園通三ノ三五に現住。

會社員。作歌十四年、昭和七年迄あしかび會員。同年東電短歌會を創立し、歌誌「青煙」を發行編輯し今日に至る。歌集「筑波嶺」あり。

**羽田猪市** 昭和十一年十一月二十六日、四十六歳にて愛媛縣南宇和郡御莊町に死亡。縣立南宇和農業學校國語科教諭。昭和七年地方歌誌「くさの葉」創刊以來致年まで其同人たり。昭和十年一月「霸王樹」準同人となる。

**羽田野繁子** 明治三十五年大分縣大野郡上井田村朝地に生れ、東京市小石川區女子大學寮舎内に現住。大正七年より作歌、常春同人。

**羽根淵傳一郎** 二十四歳。豊橋市中世古町一一五に生れ、同市花田町南新起七七に現住。賣藥商。昭和九年野菊社に入社、後昭和十年より水廻社に入り今日に至る。

**羽野磨洒夫** 本名正雄。三十二歳。香川縣三豊郡勝岡村に生れ、同地に現住。農業。明治大學法科卒業。

昭和十年一月より昭和十一年十二月までアララギに屬す。

**羽場筍三** 本名松井俊。長野縣上伊那郡伊那富村に生れ

同縣諏訪郡永明村に現住。教員。昭和四年九月アララギに入會、初め森山汀川氏に、昭和十二年より土屋文明氏に師事し今日に及ぶ。アララギには大草杜土として發表。

**羽原立夫** 二十七歳。廣島縣深安郡市村大目に生れ、同地に現住。教員。昭和四年頃より作歌、昭和六年歌誌「眞樹」に加盟、今日に至る。

**羽山富得** 本名しん子。二十四歳。靜岡縣志太郡藤枝町本に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和六年十月「草の實」入社、現在に至る。

**波多江友吉** 三十二歳。福岡縣糸島郡前原町波多江五二一に生れ、同地に現住。農業。昭和六年五月より作歌、同七年四月中島哀浪氏主宰の「ひのくに」に入社して今日に至る。

**波多野土芝** 本名利一。明治三十三年六月十日生。本籍岐阜縣武儀郡上之保村大字鳥屋市。同郡金山町に現住。海員。大正十五年一月岡山縣兒島商船學校航海科卒業。昭和九年三月日本海員掖濟會發行雜誌「海の世界」短歌欄（石樽千亦氏選）に投稿、昭和十一年一月アララギに入

會し今日に至る。二十二歳。北海道に生れ、北海道深川町メム六ノ川四に現住。作歌經歷といふほどのものなし。

**波多野幸彦** 五十四歳。新潟縣北蒲原郡分田村に生れ、同郡新發田町外荒町に現住。小學校長。幼時父及兄に歌を學びし外師無く數次友人と雜誌を發刊したるも長く續かず、現在所屬なし。

**波多野傳八郎** 本名金子新一。三十三歳。神奈川縣鎌倉郡川上村に生れ、横濱市中區黄金町一ノ一に現住。鶏肉鶏卵川魚商。昭和八年頃より作歌、香蘭桐の花を経て多磨會員となる。

**波多野眞一** 本名幅尚徳。明治四十年七月九日、長野縣北安曇郡陸郷村に生れ、同地に現住。農業。昭和三年九月より早川幾忠氏に師事し、昭和七年一月より「高嶺」準同人、同年十一月友人と共に「山火」を創刊し、昭和八年三月「高嶺」を退社、昭和十年十月號を以て「山火」廢刊となるに及び、童話の研究に没頭す。

**波場直矩** 本名幅尚徳。明治四十年七月九日、長野縣北安曇郡陸郷村に生れ、同地に現住。農業。昭和三年九月より早川幾忠氏に師事し、昭和七年一月より「高嶺」準同人、同年十一月友人と共に「山火」を創刊し、昭和八年三月「高嶺」を退社、昭和十年十月號を以て「山火」廢刊となるに及び、童話の研究に没頭す。

**芳賀日出男** 二十七歳。宮崎縣兒湯郡上穂北村に生れ、長崎市濱口町二六九榮田方に現住。長崎醫科大學學生。昭和八年七月アララギ短歌會に入會、今日に至る。

**土師 龍吉**

本名孝夫。三十五歳。岡山市榮町に生れ、岡

山縣吉備郡高松町大字原古才に現住。吳服商。昭和四年池上陽太郎、坂本幹郎氏等と高松短歌會を結成、「短歌雜誌」に松村英一氏の選を受け、同五年「國民文學」に入社す。

**葉山耕三郎**

本名鹿島覺。明治二十八年七月二日、大分縣

東國東郡伊美村五六〇に生れ、大阪市天王寺區西高津中寺町四に現住。教師、記者、新聞編輯、官吏等。明治四十五年より作歌、大正七年「水麴」に加盟。同十二年「潮」を、同十三年「西海文學」を創刊、昭和三年「詩歌」復活に参加、前田夕暮氏に師事、同七年「韻律」を創刊。歌集「世紀の顔」あり。

**長谷川如是閑**

本名萬次郎。明治八年

區上ノ原町六に現住。著述業。中學時代國語傳習所に學びてより作歌すれど、獨學にして一切師をとらず。嘗て「我等」「批判」を主宰す。著書に「現代國家批判」、小説「額の男」隨筆「犬、猫、人間」其他。「長谷川如是閑全集」あり。

**長谷川源司**

三十一歳。八王子市小

町七に現住。染料販賣。昭和二年青垣會に入り現在に至る。

**長谷川信子**

五十四歳。山形縣米澤市代官町に生れ、樺太

豊原町東五條南九丁目に現住。中學校音楽教師。大正十四年頃より作歌、初め「日光」に投稿、同誌休刊となるや「詩歌」同人となる、同誌が新短歌に轉向するや歌作に遠ざかること數年、昭和十一年より水町京子氏主宰の「遠つびと」に投稿して今日に至る。

**長谷川抱星**

本名佐右衛門。明治二

井縣大野郡上穴馬村字上半原に生れ、嘉義市榮町三ノ八六に現住。新聞記者。大正六年六月より作歌、アララギ、心の花等に投じ、人形、南邦藝術の同人となり、回歸線を主宰す。歌集「灼熱の下」あり。

**長谷川静逸**

本名義雄。三十歳。靜

岡縣賀茂郡岩科村道部一二に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和九年九月より田口白汀氏の現實短歌社に入社し今日に至る。

**長谷川吉司**

明治三十三年十一月二

五二四に生れ、同市旅籠町四二四に現住。帝國生命保險株式會社員。昭和三年九月アララギ入會、今日に至る。

**長谷川銀作**

四十五歳。靜岡市に生

れ、東京市中野區高根町六に現住。會社員。大正六年創作社に入り

義兄若山牧水氏に師事す。かつて「新創作」を發刊し「ぬはり」にも關係せり。現在「創作」社友。歌集「桑の葉」あり。

**長谷川ゆりえ**

三十八歳。舊姓日黒。

山形縣西置賜郡豐田村に生れ、東京市中野區高根町六に現住。大正十二年六月若山牧水氏の「創作」に入り、後「ぬはり」に據りしことあり。現在「創作」社友。

**長谷川精作**

明治二十九年安藝國の

津町に現住。滋賀縣農林技師。中學の頃より作歌すれど、師なし。

**長谷川健三**

二十七歳。靜岡縣磐田

郡井通村一言に生れ、同地に現住。昭和四年七月、青虹社に加盟、大脇月甫氏の指導を受く。昭和七年頃より次第に歌に遠ざかり現在歌作なし。

**長谷川千振**

本名勝彦。二十八歳。

宮崎縣兒湯郡西都原のほとりに生れ、大分縣佐伯町仲町二丁目に現住。自動車用部分品販賣。昭和七年アララギ入會、中村憲吉氏の選を受けしが、昭和九年同氏逝去より土屋文明氏に師事、現在に至る。

**長谷川茂夫**

明治四十四年六月五日

一五に生れ、大阪府高槻町北大手に現住。日



本生命保險株式會社本店勤務。昭和三年地上社入社、窪田空穂、對馬完治、森田佐一郎の諸氏の指導を受けて今日に至る。現在地上社同人「榎の木」會員たりし事あり。

**長谷川 央** 三十九歳。山梨縣南巨摩郡西島村に生れ、東京市世田谷區太子堂町九に現住。小學校教員。大正十三年より一ヶ年間創作社友「藝術と自由」同人、新短歌協會員。「新緑」短歌創造」による。「短歌文學」解散後「主情派」を起し二年間つづく。現在「蔓草」の同人。著書に「野鶉」あり。

**長谷川 さと** 二十三歳。名古屋市中区伊勢山町一五三に現住。昭和八年より青木禮子氏につきてこのはな會の會員となる。

**長谷川 潔** 三十五歳。明治三十七年六月十二日、兵庫縣赤穂郡鹽屋村鹽屋六四九に生れ、神戸市湊東區桶町一ノ二六五に現住。食料品製造販賣業。後備陸軍歩兵少尉。昭和九年十月高嶺社に入社、今日に至る。

**長谷川 鈴** 明治四十三年一月十九日、東京市澁橋區角筈一ノ七六五に生れ、同市豊島區堀之内町五〇に現住。教師。昭和八年三月創作社に入社、今日に至る。

**長谷川 可村** 本名常吉。六十九歳。兵庫縣赤穂郡赤穂に生れ、神戸市湊東區桶町一ノ二六五に現住。食料品製造販賣。昭和九年三月より作歌、高嶺社に入社して今日に及ぶ。

**長谷川 曠二郎** 本名英次郎。三十五歳。茨城縣新治郡石岡町染谷に生れ、同地に現住。農業。昭和四年三月國民文學社に入社し、半田良平氏に師事して今日に至る。

**長谷川 半兒** 本名半治。明治二十八年六月十二日高田市に生れ、名古屋市中區柳原町二ノ二六に現住。書畫商。大正十二年より作歌、窪田空穂氏選の新愛知新聞歌壇に數年發表す。

**長谷川 草一** 本名富一。二十五歳。新潟縣南蒲原郡下條村に生れ、同縣三條市北四日町に現住。鋸製作業。初期或雜誌にて廣野三郎氏の選を受けしことあり。また短歌研究に投稿せしことあれど結社に屬せず。

**吐山 芳子** 三十二歳。韓國仁川に生れ、朝鮮慶尙南道鎭海邑縣洞里に現住。眞人社同人。

**馬場 俊吉** 本名俊平。二十七歳。福島縣野澤町に生れ、浦和市常盤區櫻町五四八に現住。醫師。中學時代より短歌雜誌に投稿す。昭和七年「青

虹」に入社、同八年退社、同年「薊」に入社、今日に至る。

**馬場 秀雄** 三十七歳。福岡縣糸島郡雷山村大字多久七二七に生れ、同地に現住。農業。大正十年「國民文學」に入社、松村英一氏の選をうく。國民文學、地上、朝の光三誌合併「國歌」となり半田良平氏の選をうく。昭和三年中島哀浪氏主宰「ひのくに」に加盟、現在にいたる。

**馬場 恒吾** 六十四歳。岡山縣邑久郡長濱村に生れ、東京市四谷區南寺町一〇に現住。新聞記者より評論家になる。著書としては「現代人物評論」「大隈重信傳」「議會政治論」「立上がる政治家」「キツプリングの短篇小説」等あり。若山牧水氏の作を愛讀して歌に入る。

**馬場 靜浪** 本名伊之助。明治二十一年一月三十日、東京市蒲田區六郷町に生れ、同市京橋區新川二ノ一に現住。早稻田大學政治經濟科中途退學。大正十三年四月北原白秋氏に就き、現在一多磨」に據る。

**馬場 汐人** 本名勇。明治三十年四月福井市に生れ、名古屋市南區八熊町字東起五六一に現住。會社員。十七八歳頃より作歌、大正十五年秋依田秋圃氏に師事す。昭和六年三月同志と相謀り「武都紀」を刊行、編輯兼發行人となり今日に至る。

る。尙同志創行當時より淺野梨郷氏の教をも受く。歌集「蘭」あり。

**馬場謙一郎** 明治三十七年十一月十五日、新潟縣刈羽郡柏崎町に生れ、東京市本郷區駒込林町一六八に現住。報知新聞社工務局勤務。大正十二年頃より島木赤彦氏に師事シアララギ會員たり。氏の歿後藤澤古實氏、高田浪吉氏の選を受け今日に至る。

**實珠山雪枝** 三十四歳。埼玉縣北埼玉市元横山町一八九に現住。東京府立織染學校教諭妻。昭和九年八月より同十二年初迄山下陸奥氏に師事す。

**坊英五郎** 二十七歳。熊本縣に生れ、東京市本郷區駒込林町一、芳文館一四號に現住。會社員。高等學校時代より作歌。

**萩倉ちさる** 靜岡縣駿東郡富士岡村神山に生れ、東京市四谷區坂町五五に現住。大正十年竹柏會入會、石榑千亦氏の指導を受け今日に至る。

**萩原 四志** 二十七歳。鹿兒島縣日置郡串木野町別府に生れ、滿洲國安東五番通五ノ六に現住。滿洲國官吏。昭和七年三月ポトナムに入社、現在に至る。

**萩原英太郎** 三十三歳。埼玉縣大里郡榛澤村大字西田二〇に生れ、同地に現住。役場書記。十八歳頃より作歌、昭和六年頃より新聞雜誌等に發表しはじむ。昭和十年一月「書藻」に加盟、現在に至る。

**萩原 大助** 大正二年三月山梨縣東山梨郡大藤村に生れ、大阪市西成區旭南通一ノ七望月方に現住。交通労働者たりしこと五年、現在職業なし。昭和九年「短歌評論」に参加して短歌を學び現在に至る。

**萩原 もと** 三十四歳。千葉縣香取郡中村借當に現住。農業。昭和九年二月アララギに入會、岡麓氏の指導をうけ現在に至る。

**萩原 功** 二十九歳。千葉縣香取郡中村に現住。農業。昭和四年アララギの會員となり、岡麓氏の教を受け現在に及ぶ。

**萩原 長** 二十七歳。香川縣仲多度郡吉野村九六六ノ第一に生れ、同郡琴平町一二五に現住。國幣中社金刀比羅宮社務所員。昭和十年十月より山下陸奥氏に師事、一路に入會して現在に至る。

**萩原 菊世** 四十二歳。東京市日本橋區軀殼町一ノ四に生

れ、同市牛込區戸山町三七に現住。佐佐木信綱氏に師事す。

**萩原 貞雄** 明治三十年鹿兒島市に生る。東京帝大經濟學部卒業、横濱正金銀行入行、同行上海、印度カルクツタ、倫敦支店を經、現在大阪支店詰。海外生活前後十四年に及ぶ。

**萩原眞都子** 明治四十一年廣島縣鹽田郡東生口村に生れ、昭和五年同地に歿す。享年二十三。小學校教員。大正十五年汜濫社に入社、武田全氏の指導を受く。遺稿「病床雜詠」あり。

**萩原 君子** 明治四十四年七月十七日に、京都府舞鶴町北田邊に生れ、京都市左京區下鴨北園町三五に現住。昭和四年「籐木」入社、今日に至る。

**萩原 芳** 明治三十五年十月二十七日、岡山縣和氣郡福河村に生れ、京都市下鴨北園町三五に現住。商業青年學校教諭兼實務女學校教師。第六高等學校短歌會同人、昭和五年蒼穹社入社、昭和十一年同社退社。

**萩原 靜子** 二十五歳。東京澁谷に生れ、東京市豊島區長崎東町一ノ一五三八に現住。十六歳の時主婦の友短歌に投稿、昭和十年頃より警視廳雜誌「自警」に投書、今日に至る。

**萩原 榮次** 號鬼峯。大阪府中河内郡南木本に生れ、昭和十一年九月歿す。享年五十九。醫師。大阪府立醫學校在學中より歌を好み、卒業後前橋に赴く。

**薄 葦 穂** 二十九歳。神奈川県高座郡上溝町元町二九一八に生れ、同地に現住。昭和四年郷土短歌社に入り作歌、翌年若林昇氏に師事す。轉じて山蓐、桐の花、菁藻に入る。現在今井規清、若林昇、高橋俊人の三氏に師事す。なほ蓐の香同人、花蓐編輯。

**白駒 白夢** 本名一義。明治四十三年一月、三重縣河藝郡明村福徳に生れ、同郡上野村に現住。小學校教員。中學時代より作歌、ロオプ、日輪、山脈などの地方雜誌を出したることあり。大正九年國民文學に入り松村英一氏に師事す。現在は歌より遠ざかる。

**箱崎 正雄** 二十三歳。神奈川県中郡大山町大山大六一に生れ、同地に現住。小學校訓導。中學時代より作歌し同人誌に發表。師範學校時代「日本短歌」に投稿、後「多磨」の會員となりしも一時休み最近に至る。

**問 鷺 郎** 明治四年三月二十七日岐阜縣惠那郡中津町に生れ、明治四十一年二月一日逝く。東京物理

學校に學び、後ち家業酒造業を営む。歌は佐佐木信綱氏の指導を受く。

**橋形 定子** 二十五歳。兵庫縣明石市船町に生れ、同市相生町三ノ二六に現住。タイピスト。水薺及び青波社友。

**橋口 次夫** 明治四十一年三月十八日、鹿兒島縣日置郡市來町淺町二一に生れ、滿洲國安東滿鐵益濟寮二九號に現住。滿鐵社員。昭和八年「水薺」入社、今日に至る。なほ昭和十一年十一月歌誌「アカシヤ」創刊、同誌同人。

**橋口 三喜** 四十二歳。鹿兒島縣始良郡清水村弟子丸に生れ、鹿兒島市上之園町三九に現住。銀行員。大正十五年二月潮音に入社し今日に至る。

**橋口 信吉** 二十九歳。鹿兒島縣薩摩郡求名村に生れ、同縣肝屬郡内之浦町南方に現住。小學校教員。昭和七年七月アララギ入會。

**橋口 アヤ** 二十四歳。長崎縣東彼杵郡川棚町字新ヶ谷に現住。農業。佐世保高女卒業。號晚水。二十八歳。鹿兒島縣川内町に生れ、朝鮮咸鏡北道慶興郡に現住。朝鮮石炭工業株式會社勤務。昭和六年より咸南にて水薺出版社。向日葵の同人、昭和十年四月水薺に入社。

**橋口 正** 兒島縣川内町に生れ、

**橋田 東聲** 本名丑吾。明治十九年十二月二十日、高知縣幡多郡中筋村有岡に生る。農商務省、東洋拓殖等を経て文部省學生課に勤務、學生思想調査に従事せり。晩年東京外國語學校教授に任ぜらる。高等學校時代より作歌、大正八年白井大翼氏と雜誌霸王樹を創刊。歌集「地懐」「橋田東聲歌集」の外歌論集等數種の著書あり。

**橋田 木犀子** 本名徳次郎。明治三十三年四月十九日栃木縣栃木町に生れ、東京市目黒區上目黒三ノ一七五六に現住。官吏。かつて週信協會雜誌の「週信歌壇」佐佐木信綱氏選「天業民報」天業歌壇「與謝野晶子氏選」に投稿せしとあるのみ。

**橋爪 丘の人** 四十二歳。長野縣下伊那郡龍丘村時又に生れ、同郡千代村大郡に現住。小學校教員。昭和七年ぬはり社友となり今日に至る。なほ昭和十年より長野市のいはひば會員となる。

**橋爪 啓** 三十一歳。和歌山縣東牟婁郡下里町高之に生れ、同郡西向町古田に現住。小學校教員。昭和五年頃より作歌、師なく所屬雜誌なし。

**橋本 關雪** 明治十六年十一月神戸區淨土寺町石橋七一に現住。日本畫家、帝室技藝員。南畫への道程、關雪詩稿、南船集、

續關雪詩稿、關雪隨筆、その他の著書あり。

**橋本 敏夫** 四十二歳。福島縣會津若松市に生れ、東京市

淀橋區十二社四一九に現住。安田銀行員。大正六年霸王欄創刊に參畫し其同人たりしが、後、常春、砂丘同人を経て大正十四年香蘭同人となり今日に至る。

**橋本 政一** 明治二十六年五月十日 福岡縣山門郡柳河町字

細工町に生れ、門司市大里黄金町三丁目に住。門司鐵道病院齒科醫長。北原白秋氏門。香蘭、日光同人、歌と觀照同人を経て現在多磨會員。

**橋本 俊男** 三十五歳。東京市日本橋區兩國二四に生れ、

同地に現住。貴金屬商。アララギ會員。岡麓氏に師事す。

**橋本 愛愁** 本名武雄。明治四十二年十月三十一日、新潟

縣西頸城郡糸魚川横町一三〇に生れ、東京市小石川區大塚坂下町九二に現住。十八歳上京製版工となる。二十一歳の頃より作歌、昭和八年四月紫羅蘭花社會員となり現在に至る。

**橋本 徳壽** 明治二十七年九月十日 横濱市に生れ、東京市

中野區宮園通一ノ二六に現住。社團法人漁船技術員養成所技師。古泉千樞氏に師事す。昭和二十一年十一月同門の友と「青垣」を創刊して

現在に至る。

**橋本 清** 四十二歳。兵庫縣有馬郡高平村片古二六六に

生れ、同地に現住。農業。中學時代より作歌せしが後斷念し、八九年前より再び作歌す。

**橋本 正** 二十八歳。明治四十四年六月二十二日、大分

縣大分郡石城川村に生れ、同地に現住。農業。昭和二年より作歌、大分新聞歌壇にて故若山牧水氏の選を受け、後土屋文明氏の選を受け今日に及ぶ。

**橋本 康以** 號野醉。三十七歳。佐賀縣藤津郡古枝村下古

枝に生れ、同地に現住。小學教員。かつて佐賀啄木會、藤津短歌會を主宰し、啄木、歌誌有明を刊行す。現在中島哀浪氏主宰の「ひのくに」同人。詩歌集「雜草園」あり。

**橋本 哲夫** 明治四十一年一月、栃木縣足利郡小俣町七〇

八に生れ、同地に現住。昭和二年より作歌、雜誌其他に投書したることあるも、未だ師に就きたること無し。

**橋本 清太郎** 東京市品川區北品川一ノ三八に生れ、同地に

現住。造船業。並木秋人氏の「常春」より土屋靜男氏主宰の「泰山木」に移り、現在「あしかび」に據る。

**橋本 明子** 二十二歳。東京市小石川區久堅町一四に生れ

同市世田谷區上馬二ノ一三三三に現住。學生。作歌を始めてより六年、師なし。

**橋本 白潮** 本名庄之進。明治三十三年四月十三日、北海

道紋別郡紋別町に生れ、同地に現住。元公吏。病氣靜養中。大正十一年より作歌、札幌にて千田迅一郎、谷口波人氏等の指導を受く。大正十四年より、昭和三年迄創作社友、昭和四年以後作歌殆どなし。

**橋本 威子** 四十歳。群馬縣桐生市本町二ノ一四九に生れ

同地に現住。教員。大正八年より作歌、昭和五年香蘭入社、今日に至る。

**橋本 文彦** 大正五年二月一日、大分郊外の農家に生る。

昭和十年小倉野戰重砲兵第六聯隊に二ヶ年服務し砲兵上等兵。現在日本人造羊毛株式會社大分工場勤務。十五歳の頃より作歌、「大分歌人」志高、「由布」に據りしことあり。

**橋本 かつ子** 福島縣田村郡三春町大町一一五に生れ、埼玉

縣浦和市高砂町四一三五零石方に現住。昭和八年より作歌、水谷靜子氏に師事し、現在多磨會員。

**橋本 淺夫** 明治四十五年七月二十日、長崎市伊良林町一

ノ二に生れ、大連市楓町一〇二伊藤方に現住。官吏、關東局屬。昭和八年七月滿洲短歌會入會、同十年一月創作社入社、今日に至る。

**橋本 太吉**

明治五年廣島縣尾道市に生れ、昭和八年六十二歳にて歿す。實業家。大正三年頃より竹柏會に入り、佐佐木信綱氏に師事す。

**橋本 重治**

郡御木澤村大字平澤字橋橋二五六に生れ、同縣郡山市堂前町一五田村方に現住。辯護士事務員。昭和十年十九歳より歌に親しみ、昭和十一年二月「歌と評論」に入社、藤川忠治氏の指導を受けつつ今日に至る。

**橋本 英子**

本名英尾。福井縣遠敷郡熊川村熊川に生れ、大連市初音町にて歿す。享年四十五。初め諸雜誌に投書、昭和三年三月アララギに入會。

**橋本 滋**

本名茂。二十八歳。兵庫縣武庫郡鳴尾村本郷角間に生れ、西宮市森具字御茶家所一〇一六に現住。銀行員。昭和四年より作歌、新進歌人社に入り、光永比佐夫氏に師事し現在に至る。昭和十年十二月より夾竹桃を發行編輯に當りしも現在休刊中。

**蓮澤 黎香**

二十八歳。香川縣大川郡石田村に生れ、同郡

松尾村に現住。僧侶。昭和七年より「創作」に所屬。

**蓮野 忠一**

二十九歳。富山縣東岩瀬町大字東岩瀬町五八二に生れ、同町大字西宮村一九六に現住。町役場雇。昭和十一年一月アララギに入會し、齋藤茂吉氏の選をうけ現在に至る。

**秦 和夫**

明治三十三年十二月二十五日、京都府愛宕郡雲が畑村に生る。二十歳の時、西陣唐織業の段下家に入り、その頃より病み昭和三年八月三十一日、京都市紫竹竹殿町に歿す。時に二十九歳。歌は大正十四年敬禮社に入り吉植庄亮氏に師事、別に雜誌日光にも關係す。

**秦 俊子**

大正四年十月五日生。京都府久世郡淀町新町に現住。昭和十一年京都府立女子専門學校文學科卒業。昭和九年十月より山下陸奥氏に師事して今日に至る。現在一路會會員。

**秦 龍生**

本名龍勝。明治三十七年二月、福岡縣糸島郡可也村小金丸眞宗大派法照寺内に生れ、同寺に現住。法照寺住職。二十二歳頃より作歌、木下利玄、前田夕暮、大熊長次郎の諸氏に師事せしことあり。現在「多磨」會員。

**秦野 美德**

明治四十四年四月北海道紋別郡上湧別村に生れ、同地に現住。大正十五年三月高等小學校

卒業後農業に従事し、歌友と月刊歌誌「黎明」「山脈」「屯田」等を發行、昭和四年現役志願にて近衛歩兵に入隊、除隊歸郷以來大澤雅休氏の「野菊」に投稿、今日に至る。

**幡島 浩**

本名平野壽平。二十二歳。名古屋市中區葛町に生れ、同市南區明治町一ノ四に現住。會社員。昭和七年頃より高崎正秀氏に師事し、同八年青角髮に入會、現在に至る。

**幡野 七郎**

二十九歳。銚子市末廣町五丁目に生れ、東京市小石川區丸山町三四第百銀行寮に現住。銀行員。土筆、勁草等に籍を置きし事あり。現在土筆同人。

**畑 節子**

三十六歳。兵庫縣赤穂郡上郡町に生れ、同縣印南郡上莊村國包に現住。初期矢澤孝子氏に師事、七八年前より安江不容氏に師事し現在に至る。

**畑中 金吉**

舊姓大平。明治三十二年十一月九日、長野縣伊那郡喬木村阿島に生れ、大正十三年三月同郡市田村に移り畑中と改姓。小學校教員。大正九年九月潮音社に入り太田水穂氏に師事、大正十一年知友と雜誌「夕樺」を刊行せしが數年にして廢刊、昭和六年潮音を退く。

**畑中 康夫**

本名由雄。二十七歳。大阪市に生れ、大阪府

豐中市麻田大阪市立刀根山病院第一北館三號室内に現住。無職。昭和二年頃より作歌、新聞雜誌等に投稿、昭和八年一月より國民文學に入社、松村英一氏に師事して現在に至る。

**畑中南余子**

和歌山縣西牟婁郡周參本名定一。三十七歲。

見町に生れ、名古屋市東區田代町御棚妻一〇三に現住。住友銀行員。十數年前より作歌するも師につかず、近時「武都紀」會員となり淺野梨郷氏の指導を受く。

**島山兼人**

三十二歲。廣島縣安藝郡矢野町に生れ、同縣縣立賀茂高女教諭。學生時代同人雜誌「耕人」を發行し又「中國新聞」「神戸新聞」等に投稿せし事あり。其後「兵庫教育」現代詩歌「現實短歌」等の雜誌に寄稿す。

**八田勝一**

三十三歲。長野縣上水内郡若槻村田子に生れ同縣殖科郡植生村小島に現住。書籍商。昭和二年頃より作歌、國民文學に入社し川崎杜外氏に師事、氏の逝去後松村英一氏に師事し今日に至る。

**服部 躬治**

明治八年三月二十八日 福島縣須賀川町の商家に生る。直太郎長男なり。二十六年落合直文氏の淺香社に入る。三十一年尾上柴舟氏、久保猪之吉氏等と共に、いかづち會を發起し新

派短歌興隆に力を致す。三十三年「戀愛詩評釋」を著す。此頃より跡見女學校に勤め、國文學、作歌法等を教ふ。深川區木場の人小池濱子と結婚す。三十四年一月以後、與謝野鐵幹氏等の後を襲いで、雜誌「文庫」の短歌選者たること四年に涉る。此間多くの俊秀を出す。此年七月歌集「迦具土」を出す。後作三十七年雜誌「あまびこ」を發行、翌年第二集を出して頓挫す。此年師直文歿す。三十九年、四十年の間に跡見女學校を辭し明治大學講師となる。同人内海月杖氏の推舉による。四十四年（明治廿七年）明治書院より短歌教科書を出す。此種の物としては最古き物なり。大正十年十月濱子を喪ひ、十二年の關東震災に生命を賭けし著述國語辭典原稿を燒き漸く愉しむことなし。十三年高圓寺の假寓より本郷丸山福山町福山館に移り十四年三月六日右旅館にて病歿す。年五十一歲。國文學は曾て飯田町國學院夜間部に學びしことあり。後落合氏の門に入ると雖も、歌は師承なきを以て誇りとせり。

**服部 嘉香**

明治十九年四月四日東京市に生れ、同四十二年早稻田大學英文科卒業。早稻田大學社員、日本中學校教師、早稻田大學講師、關西大學教授を経て、現在また早稻田大學講師。中學一年生の頃より作歌、大正二年詩歌雜誌「現代詩文」を自刊、一年繼續、同三年三木露風氏等と詩誌「未來」に據り、大阪にては歌誌

「白楊」道程」を發行す。作文、國文法、書簡文、商業文に關する著書約三十五種あり。東京市世田谷區上北澤町三ノ八九九に現住。

**服部 榮一**

明治四十二年千葉縣市原郡海上村に生る。大正十五年より「日光」に投稿。昭和三年「詩歌」同人となる。病氣の爲め巢鴨中學を中途退學し、昭和四年東京市世田ヶ谷區北澤に寫眞攝影業を開く。昭和十年二十七歲を以て病歿す。昭和十一年遺詠集「秋立つ日」刊行さる。

**服部 綾足**

本名直一郎。明治十一年三月岐阜縣高須町に生れ、同地に現住。四十五歲迄吳服商、現在無職。日清戰爭の頃より作歌、明治三十七年三月竹柏園入門、大正十一年の春頃迄「心の花」に發表、「白すみれ」（明治三十五年刊）稿本「草川集」あり。

**服部 童村**

本名善吾。三十歲。福根九に生れ、同地に現住。自作農。昭和四年より作歌、同七年「心の花」に入會、現在は「一路」同人。

**服部 忠志**

三十歲。岡山市外幡多同地に現住。國語教師。昭和六年三月國學院大學高等師範部卒業。昭和二年九月「蒼穹」入社、岡野直七郎氏に師事し今日に至る。昭

和七年一月「短歌詩人」を創刊、自ら編輯經營す。

**服部 満** 二十四歳。岡山縣上道郡御休村に生れ、大阪

市住吉區旭町三ノ一〇清水榮次郎方に現住。會社員。昭和十年初頭より作歌、昭和十年十一月「創作」に入る。

**服部美智子** 二十六歳。岡山縣邑久郡福田村福中に生れ、

岡山市外幡多村澤田八一八に現住。昭和九年三月服部忠志に嫁し、同時に「短歌詩人」に入社す。

**服部源三郎** 六十四歳。三重縣飯南郡柳田村山添に生れ、

東京市世田谷區東玉川町七二に現住。昭和十年春社交俱樂部交詢社内和歌同好會開設と同時に會員となり今日に至る。

**服部 宗緩** 四十一歳。奈良縣高市郡阪合村大字越に生れ

同地に現住。醫師。大正五年、前期白日社に入り一年半にして退く。日光創刊に際し同誌に投稿。昭和二年廢刊と同時に撤櫃に入る。昭和五年淺野梨郷氏に直接指導を受く。昭和九年一月撤櫃同人となる。淺野梨郷氏の武都紀主宰と共に同社に入り今日に至る。

**服部 直人** 三十二歳。東京市小石川區白山御殿町に生れ

同市澁橋區上落合一ノ二二二に現住。日本大

學出版部編輯長。大正十五年鳥船社に籍を置きしことあり。昭和十二年水壘社に入る。

**服部 銀月** 本名銀作。明治三十五年十二月二十日、岐阜

市外鏡島昭和町一九七八ノ三に生れ、同地に現住。織物商。大正七年頃より作歌。個誌「ゆりかご時代」を發行せしことあり。昭和四年「自然同人」なる。爾來「常春」、「現實短歌」同人たりしも昭和八年より「短歌」同人として今日に及ぶ。歌集「微風」あり。

**服部 魁夫** 岡山縣淺口郡大島村西大島五三三五に生れ、

東京市淺草區左衛門川岸二に現住。病院會計。昭和八年より九年まで「心の花」、九年より十年まで「一路」に作品を投ぜしも兩會離反に際し退會す。昭和九年同志と共に「短歌鑑賞」を創刊し今日に至る。

**初瀬多賀子** 二十八歳。東京市下谷區竹町一に生れ、佐世

保市泉町四五に現住。昭和十年多磨入會、現在に至る。

**初瀬 勇** 三十五歳。佐世保市泉町四五に生れ、同地に

現住。齒科醫師。昭和十年多磨入會、現在に至る。

**初井 長寛** 本名佐一。四十一歳。

姫路市龍野町一丁目に生れ、同地に現住。昭和七年香蘭同人となり

て現在に至る。

**初井しづ枝** 三十九歳。兵庫縣姫路市大黒町に生れ、同市

龍野町一丁目に現住。大正十五年日光入社、北原白秋氏に師事し、香蘭に入り、短歌民族にも席をおく。現在多磨會員。

**鳩貝 藤郎** 本名藤。三十歳。茨城縣眞壁郡大實村堀込一

五一〇に生れ、同地に現住。教員。昭和三年頃より作歌、いはらき歌壇、文藝に投じ、後伊志布美、アララギ、心の花、短歌月刊等の會員となり、又むらぎも、短歌建設、短歌線、教育人生、短歌科等の同人。現在山柿同人。

**花木 房子** 本名木村英。三十四歳。

和歌山縣海南市黒江町に生れ、大阪府豐能郡池田町石橋莊園大村方に現住。昭和四年二月アララギ入會、現在に及ぶ。

**花田比露思** 本名大五郎。明治十五年三月十一日、福岡縣

朝倉郡安川村に生れ、和歌山市西徒町一に現住。中學明善校、五高を経て、京都帝大法科大學に學び、明治四十一年卒業、大阪朝日新聞記者となり、大正七年十月退社、近江銀行、大正日々新聞社、讀賣新聞社等に勤めしが、

大正十三年七月、京都帝大學生監事務を囑託せられ、尋で京大助教授學生監、京大書記官兼京都高等蠶糸學校教授、大阪商大教授兼學

生監等を歴任し、昭和七年三月末、和歌山高  
商校長に任せられ今日に至る。歌は正岡子規  
の流を汲むと雖も別に師に就かず、明治四十  
年病氣休學中萬葉集を通讀して得る所あり、  
獨り詠んで自ら樂しむ。後同志と雜誌「しほ  
さる」あけび」等を刊行す。著書「歌集さん  
げ」「歌に就いての考察」「萬葉集私解」等あ  
り。

### 花田 定穂

三十五歳。島根縣簸川  
郡出西村大字阿宮に生  
れ、同縣八束郡美保關町大字美保關に現住。  
神職。昭和四年十月アララギに入會、現在に  
至る。

### 花摘喜久子

三十八歳。福島縣若松  
市堅三日町一三に生れ  
東京市荒川區尾久町四ノ一四七七に現住。大  
正十年夏より作歌、昭和八年夏より讀賣新聞  
歌壇（與謝野晶子氏選）に投稿。

### 花野 春風

本名孝一。四十歳。長  
野縣松本市に生れ、東  
京市牛込區富久町一八に現住。古書籍商。  
潮音社友として太田水穂氏に師事す。

### 花村 夕風

本名尊三。舊姓岩波。  
四十歳。長野縣諏訪郡  
中洲村に生れ、同縣東筑摩郡片丘村に現住。  
鐵道職員。大正七年より作歌、大正八年九月  
より同十三年十月までアララギ會員、昭和七  
年より八年にかけて佐野翠坡氏主宰「短歌生

活」の同人たり。

### 花村 桂子

二十二歳。長野縣東筑  
摩郡片丘村に生れ、同  
地に現住。農蠶業。愛知縣農會報にて依田秋  
圃氏の選を受く。

### 花本 等

號露月。明治三十六年  
十月十四日、廣島縣安  
藝郡江田島村字切串に生れ、米領布哇島バイ  
ア町に現住。新時代社記者。昭和三年ヒロ蕉  
雨會入會、昭和九年眞樹會入會、昭和十一年  
アララギ短歌會に入る。

### 花輪 史城

本名秀春。二十八歳。  
山梨縣中巨摩郡豐村十  
五所四四四に生れ、同地に現住。公吏。昭和  
三年四月より作歌、中村美穂氏に師事、みづ  
がきに入會、昭和四年一月同志と歌誌「なま  
よみ」を發行す。

### 花岡 謙二

明治二十年二月九日東  
京麴町に生れ、同市豊  
島區長崎本町三ノ五一九に現住。歌誌「向日  
葵」詩歌「藝術と自由」「短歌創造」等に關  
係す。歌集「空に描く」「歪められた顔」「草  
の葉はゆれる」詩集「母子像」等の著あり。

### 花岡 孝三

三十歳。山形縣米澤市  
に生れ、北海道小樽市  
稻穂町都通に現住。藥劑師。小樽中學在學中  
より作歌、昭和六年西岡徳藏氏らと歌誌「こ  
のくれ」發刊編輯に携り今日に至る。

### 花岡於沙女

本名脩。二十一歳。徳  
島縣美馬郡那里村喜來  
に生れ、和歌山市和歌浦町一〇藤井方に現住。  
學生。中學三四年頃より作歌、花田比露思氏  
の指導を受けつつあり。「みつがき」社友。

### 華山 申四郎

明治四十一年四月三日  
横須賀市深田一二二に  
生れ、千葉縣香取郡常磐村東松崎に現住。大  
正十五年四月立正大學入學と同時に立正短歌  
會に入會、山上、泉氏に師事、昭和四年六月  
「立正短歌」を「かぐのみ」として編輯に當  
る。昭和八年一月歌誌「紅潮」創刊主宰す。  
歌集「華供養」あり。

### 埜 きぬ子

二十歳。東京市に生れ  
水戸市砂久保町二ノ四  
九三〇に現住。昭和十年水戸高女卒業、翌十  
一年一月報知いはらき歌壇に投稿、同年多磨  
に入會、今日に至る。

### 埜 はる

長野縣上田市に生れ、  
明治三十九年五月二十  
二日歿。享年三十八。醫師埜龜齡の妻。歌は  
夫に師事す。

### 埜原 壽二

本名藤田長治。京都府  
與謝郡本庄村字浦入一  
〇五四に生れ、東京府北多摩郡清瀬村字野鹽  
ベトレームの園に現住。元小學校教員。現在  
病氣靜養中。昭和九年四月より作歌、「やま  
ぶき」に入會。



**濱川 一 郎** 二十四歳。函館市會所町三九に生れ、小樽市

奥澤町一丁目タケ丘入口に現住。船舶乗組事務員。昭和七年「新藝」に入社、翌八年「潮音」に入社、現在に至る。

**濱川 政 吉** 香川縣木田郡牟禮村に生れ、三十三歳にして他界す。農業。二十歳頃より作歌。

**濱川 正 雄** 三十六歳。長崎市に生れ、臺北市樺山町二二

に現住。官吏。大正十一年十二月「リラの花」を解散し、新に同人雜誌「あらたま」を創刊し現在まで續く。

**濱 口 操** 二十七歳。三重縣北牟婁郡三野瀬村大字海野

に現住。高女卒業後上京、女子高等學園在學中より作歌、歸京後昭和八年秋より神戸の歌誌「六甲」に入會す。

**濱 田 耕 作** 號青陵。明治十四年二月二十二日生。和泉岸

和田藩士濱田源十郎長男。帝國學士院會員、文學博士。早稻田中學、三高を経て、東京帝大文科大學史學科(西洋史)卒業。爾後日本美術史、考古學等を研究、大正二年考古學研究の爲英、佛、伊三國に留學、京都帝大助教、同教授、昭和十二年七月同大學總長に任せらる。歌歴は全くなし。自己流なり。

**濱田 千 枝 子** 明治三十六年九月七日 東京市小石川區原町一

六に生れ、同市中野區本町通五ノ一に現住。女學校二年頃より作歌、父の添削をうけ、また婦人之友に投稿せしが昭和十二年秋より土屋文明氏に師事す。

**濱田 初 廣** 大正二年十二月二十一日、高知縣幡多郡中筋

村大字九樹四八三番口號地に生れ、福岡縣門司市大里町大久保五八五三に現住。陸軍造兵廠小倉工廠工員。昭和十年五月、草炎社に入社、今日に至る。

**濱田 逸 郎** 明治十六年一月、熊本縣植木町に生れ、同市

池田町に現住。運送業。明治四十三年の頃、與謝野寛、晶子兩氏の教を受けしが、間も無く兩氏渡歐せしため中絶、昭和七年より再び作歌、今日に及ぶ。

**濱田 喜 代 子** 筆名木佐晴子。三十七

歳。鹿兒島縣鹿兒島郡吉田村東佐多浦に生れ、同縣日置郡伊集院町下谷口に現住。青年學校教諭妻。大正十三年若山牧水氏の創作に入り、氏の歿後二年よりアララギに轉じ、齋藤茂吉氏に師事し現在に至る。

**濱田 武 雄** 三十三歳。青森市大字

米町七八に生れ、青森縣西津輕郡中村大字蘆泡に現住。森林官。商

業學校在學中より作歌、卒業後土地の文藝雜誌「黎明」に加はりたることあれど、其の外結社に入りたることなし。

**濱田 秀 子** 四十四歳。神奈川縣高座郡有馬村に生れ、東

京市目黒區向原町一九九に現住。十五歳より作歌すれど師につきしことなし。

**濱田 利 雄** 三十歳。鹿兒島に生れ

一に現住。清水組社員。若山牧水氏の「詩歌時代」に投稿してより熱心に作歌、鹿兒島にて松田常憲氏と相識り一時「水薺」に入社せしことあり。現在所屬なし。

**濱田 政 二郎** 四十一歳。神戸市に生

れ、廣島市鐵砲町一三三に現住。廣島女學院専門學校教授。二十歳頃より作歌、時々朝日歌壇等に發表せしのみ。

**濱田 盛 秀** 明治四十三年三月、鹿

兒島縣日置郡伊集院町大田に生れ、同町飯牟禮に現住。小學校訓導。中學時代昭和三年四月「水薺」に入社、今日に至る。

**濱地 富 美 子** 四十七歳。東京市本郷

區弓町に生れ、大阪府東區北久太郎町一ノ四五に現住。高女卒業頃より鎌田正夫氏に學び、その逝去後中絶、後同志と「せせらぎ會」を結び、昭和十一年春「霸王樹」に入社、今日に及ぶ。

**濱中林太郎**

三十八歳。桐生市に生れ、同市三吉町一七八

に現住。銀行員。同市第一銀行勤務。二十歳頃より作歌、昭和九年春「橄欖」に入社し現在に至る。

**濱野修**

明治三十一年東京に生れ、同市杉並區阿佐ヶ

谷五ノ八に現住。東京帝大美學科に學ぶ。大正六七年頃一高短歌會にて窪田空穂、島木赤彦、古泉千櫻、釋道空、太田水穂諸氏の指導を受く。後吉植庄亮氏の「橄欖」に入る。著書に「クラスト評傳三煙草の歴史」あり。

**濱野基齊**

町三に生れ、長崎市外浦町二十九歳。東京市四

谷區大番町四五佐藤方に現住。醫師。昭和二年頃より作歌、學校關係の短歌會、二三の歌誌に關係せし事あり。昭和六年「青垣會」入會。橋本德壽氏の指導を受け今日に及ぶ。

**濱本義徹**

郡高松町大字原古才に

生れ、同地に現住。小學校教員。昭和四年高松短歌會入會、岡山の生咲義郎氏主宰「かげとも」社友たり。「短歌雜誌」に投稿して松村英一氏の選を受けしことあり。

**半田良平**

明治二十年九月十日、

栃木縣上都賀郡北大飼村深津に生れ、東京市淀橋區上落合一ノ四二七に現住。東京中學校教師。明治三十八年頃

松村英一、植村壽樹、對馬元治氏等と相識り、窪田空穂氏を中心とする十月會に加はり、機關雜誌「紫陽花」に歌を発表、明治四十三年同會第二歌集「黎明」を編纂す。大正三年「國民文學」發刊されるに及び、同人の一員として今日に至る。歌集「野づかさ」歌論集「短歌新考」「短歌詞章」新釋和歌叢書「大隈言道歌集」「香川景樹歌集」及び「芭蕉俳句新釋」等十餘種の著あり。

**半田不二夫** 三十五歳。神奈川縣足柄下郡岩村に生れ、川

崎市扇町三七日満倉庫内に現住。會社員。作歌經歷といふほどのものなし。

**板東繁** 二十九歳。大阪市東區仁右衛門町に生れ、同

市住吉區聖天下二ノ三三に現住。煙草日用品及裁縫。昭和七年七月「蒼穹」入社。

**板東治之** 三十七歳。徳島縣に生れ、大阪府豊能郡池田

町石橋莊園に現住。銀行員。昭和五年四月、アララギ會員となり中村憲吉氏の選を、氏歿後は土屋文明氏の選を受け今日に至る。

**坂東猛** 三十三歳。徳島縣麻植郡川島町に生れ、東京

市瀧野川區中里町三二一に現住。會社員。大正十一年「國民文學」に入社、松村英一氏に師事、今日に至る。

**坂内萬**

明治三十二年三月三日

會津若松市の近郊に生れ、福島市外森合西養山八に現住。福島商業

教諭。中學卒業後關西の某專門學校に學ぶ。大阪府立圖書館に奉職せしことあり。歌は師なし。大正十一年、同人雜誌「混沌」を創め、三年にして廢刊。その後竹柏會の門に入りしも退きて今日に至る。

**晚葉二太郎**

三十歳。石川縣江沼郡西谷村九谷に生れ、同

地に現住。炭燒兼農業。昭和六年より作歌、同年六月より短歌草原社に入り、柳瀬留治氏に師事し今日に至る。

**早川孝**

本名孝平。明治二十二

年四月七日、岐阜縣惠那郡付知町九五〇に生れ、名古屋市外鳴海町平手二七に現住。名古屋棧橋倉庫株式會社取締役支配人。明治三十五年服部躬治氏の指導にて作歌、同三十八年、雜誌「曉」發行、同四十年に至る。明治四十五年上京、佐佐木信綱氏の門に入り、心の花同人となる。後名古屋に移り短歌同人として今日に至る。

**早川富潤**

四十歳。山梨縣三里村

五七に現住。教員。自ら「清尚短歌會」を興し、更に歌誌「天竺」を主宰す。昭和八年「光藻」を出版。

**早川 徹** 明治四十二年、沼津市に生れ、昭和十二年三月二十九日死去。行年二十九。乾物商。昭和九年春より作歌、直ちに「霸王樹」に入社。

**早川 和男** 三十三歳。山梨縣に生れ、甲府市北大路五に現住。教員。昭和五年頃より作歌、昭和八年四月、同志と歌誌「赫土」を創刊し、翌年廢刊す。昭和十年六月歌誌「美知思波」創刊と共に入會し現在に及ぶ。

**早川 幾忠** 明治三十年三月十日、區天沼二ノ五六三に現住。會社員。松倉米吉相坂一郎氏其他と行路詩社を起し、後「光」同人たり。現在高嶺社を經營す。

**早川 孝吉** 三十四歳。富山縣中新川郡白萩村蓬澤に生れ、同地に現住。小學校教員。短歌個人誌「白萩」を發行す。又「光」「創作」の會員となりしことあり。現在アララギ會員。

**早川 三郎** 二十六歳。臺灣嘉義市字佐町二二五に現住。小學校教員。昭和十一年四月頃より毛利雨一柳氏の指導をうけ昭和十二年一月、創作社に入社、中村柗花氏の選を受く。

**早川 智子** 四十五歳。八王子に生れ、東京市杉並區天沼

二ノ五六三に現住。昭和三年より「高嶺」により、早川幾忠氏の指導を受け今日に至る。

**早川 かつ** 明治二十七年十一月二日付知町五一五八に生れ、愛知縣愛知郡鳴海町字細口二七に現住。大正四年、竹柏園の門に入る。目下日本歌人に屬す。

**早崎 夏衛** 本名義一。三十五歳。大阪市に生れ、東京市

淀橋區下落合二ノ七五二に現住。會社員。潮光、心の花、短歌作品、カメレオン、日本歌人等を経て現在短歌精神を主宰す。歌集「白彩」「緑の茵」あり。

**早竹兵士郎** 明治四十三年十二月五日、北海道上川郡名寄町四條通五丁目

に生れ、同地に現住。十九歳の秋より作歌、昭和五年より「愛語」「吾妹」「自然」短歌研究」を経て、最後に同十年六月「多磨」創刊に際し入會、現在に至る。

**早水 城春** 本名正美。明治三十三年九月十三日、群馬縣北甘樂郡富岡町五

一に生れ、同地に現住。小學校教員。大正二年頃より作歌、昭和六年四月「歌と觀照」創刊に當り入社、現在に至る。

**林 圭子** 本名窪田銚子。四十三歳。東京に生れ、同市小石川區雜司ヶ谷町八八に現住。窪田空穂の妻。大正九年頃より窪田空穂に師事して今日

に及ぶ。現在楓の木同人。昭和三年歌集「標栢の花」出版。

**林 宏一** 本名奥田久馬。大分市に生れ、大正十四年死去。行年二十八。教員。アララギ會員として藤澤古實氏に師事す。

**林 三郎** 二十八歳。東京市に生れ、同市芝區三田豐岡町四二に現住。糸商。嘗て詩歌誌「黎明調」に據り、昭和七年一月、雜誌「すだかけ」を發行し、のち詩歌誌「野茨」と改め主宰刊行、現在に及ぶ。

**林 晴三** 二十九歳。廣島縣安藝郡倉橋島村に生れ、同地に現住。商業。昭和五年より作歌。

**林 霞江** 本名藤丸。明治三十八年十二月十五日、福岡縣遠賀郡中間町に生れ、樺太眞岡港高濱町に現住。醫師。「吾妹」「彫像」「青虹」「木苺」等に關係す。一時雜誌「葵」を發行、尙時々「樺太短歌」に寄稿。「短歌に於ける音覺考抄」の著あり。

**林 孝** 明治四十四年八月二十日、廣島縣佐伯郡五日市町大字五日市に生れ、同地に現住。農業。作歌經歷といふほどのものなし。

**林 登臣** 弘化二年春、越後高田に生る。宣長門林國雄

の孫。幼名國臣。十三歳の時、平田鐵胤の門に入り、傍ら洋學を修む。英國公使さとう氏と親交あり。終身國學を本領とし、語原の研究をよくす。諏訪神社宮司より華族女學校教授に至りて官職を退く。明治二十四年、平田盛胤等と國文國語專門學校を興し、國學を講ず。「杉生居」と號す。大正十一年正月歿す。年七十八。著書「日本文典」「日本新辭林」

「日本語原の研究」「日本語原學」等多し。

**林 太郎** 號垂穂。三十六歳。東京市芝區白光明に生れ

同市目黒區清水町五〇〇に現住。商店員。昭和六年頃詩歌誌「黎明調」の社友となり、同七年一月詩歌誌「すだかけ」(後「野茨」と改題)創刊に當り編輯同人となり現在に至る。

**林 翠** 二十六歳。福井縣今立郡河和田村に生れ、同

地に現住。漆器製造御商。十六歳頃より作歌、昭和五年ボトナム短歌會に入會、今日に至る。

**林 吉之助** 明治三十一年六月、奈良縣郡山町に生れ、同

地に現住。新古書籍商。大正四年頃、大朝歌壇(佐佐木信綱氏選)大每歌壇(與謝野晶子氏選)に投稿。大正十年頃より「心の花」「明星」に投稿。昭和六年歌誌「閑野」を主宰發行、昭和十年休刊、今日に至る。

**林 幹人** 二十九歳。北海道石狩國中富良野村に生れ、

同地に現住。農業。昭和五年八月、小田觀整氏主宰新塾に入社、また昭和六年二月「潮音」に入社し今日に至る。

**林 茂則** 明治四十一年一月二十一日、福井縣今立郡河

和田村片山に生れ、同地に現住。美術漆器商。昭和十年十月、木苺詩社に入社し現在に至る。

**林 道夫** 明治三十一年東京に生れ、同市中野區上高田

一ノ六四に現住。大正十一年東京帝大經濟學部卒業。安田銀行馬喰町支店勤務。大正八年高等學校在學中「潮音」に入社し現在に至る。

**林 茂人** 明治二十七年、長野縣小縣郡和村に生れ、同

縣北佐久郡南大井村に轉籍。林と改姓、現住す。大正七年五月潮音社入社、今日に至る。

**林 惠喜子** 本名立原エキ。三十二歳。長崎縣南高來郡島

原町に生れ、中華民國唐山老站街得月巷一三號に現住。元教員。昭和五年四月「こねり」入社、同十二月退社。昭和六年二月「青垣」に入社し現在に至る。

**林 美那子** 明治四十四年五月二十三日、信濃下伊那郡會

地村駒場に生れ、山口縣長府町時町平澤方に現住。女學校教諭。昭和十年、高橋俊人氏の指導を受け、同十一年青藻社に入社。

**林 成子** 明治三十一年一月、京都府相樂郡加茂町に生れ、奈良市鍋屋町八に現住。醫師。昭和三年七月「潮音」に入社、今日に及ぶ。

**林 大** 二十六歳。東京市本郷區駒込に生れ、同市瀧

野川區田端町に現住。父に従ひて作歌、現在佐佐木信綱博士の門に入り竹柏會同人。

**林 宏亮** 明治三十四年二月十一

〇三に生れ、昭和八年四月十三日歿す。大正十四年「眞人」に入社。

**林 澄雄** 大正二年二月一日、東京市赤坂區青山南町三

ノ五に生れ、同地に現住。絲綢商。昭和四年頃早稻田實業在學中より作歌、同九年思索の旅社に入り、同十一年創作社に入り現在に至る。

**林 宣男** 三十九歳。松江市灘町

六八に生れ、同地に現住。日本畫家。大正七年頃より作歌、同八年京都に遊學、口語歌誌「露臺」の同人となりしが、後定型短歌に復歸、昭和三年「霸王樹」同人となる。昭和六年辭して、同七年「珊瑚樹」を創刊、今日に至る。

**林 光子** 明治三十五年東京に生れ、同市中野區上高田

一ノ六四に現住。大正九年高女卒業「潮音」

に入社し現在に至る。

**林 梧一** 本名吾一。二十六歳。岐阜縣惠那郡陶町猿爪

に生れ、東京市澁谷區代々木富ヶ谷町一四三  
五高崎方に現住。國學院大學生。昭和六年より、高崎正秀氏の指導を受けて作歌、翌七年  
同氏及び友人等と「青角髪」發行、同十二年  
五月廢刊。

**林 松之輔** 二十五歳。八王子市八  
日町七〇に生れ、同地

に現住。割烹業。昭和八年五月「八王子短歌」  
主宰者鈴木金二氏の指導を受け、同年十月、  
アララギに入會す。現在「八王子短歌」同人。

**林 千穎** 本名利太郎。五十一歳。  
伊豆天城山麓狩野川畔

月ヶ瀬に生れ、福岡縣田川中學校住宅に現住。  
教員。年少より諸雜誌に投書、「創作」に少時  
據りしことあり。

**林 丕沙子** 本名久子。明治四十四  
年八月一日、静岡縣燒

津町に生れ、東京市小石川區大塚坂下町一一  
四元講道館に現住。元小學校教員。静岡の  
「不二」より轉じ「地上」入社、今日に至る。

**林 掬泉** 本名菊之輔。四十一歳。  
京都市上京區新町頭上

清藏口町に生れ、同區鞍馬口通新町東入長乘  
東町に現住。西陣織物金襴製造業。二十歳頃  
より作歌、大正十一年六月「國民文學」に入

社、植松壽樹氏の指導をうけ今日に及ぶ。

**林 みち子** 三十一歳。福井縣今立  
郡味眞野村池泉に生れ

東京市麻布區六本木町一に現住。昭和十一年  
より「あけび」に入會、花田比呂恵氏の教を  
受け今日に至る。

**林 富美子** 二十四歳。東京市小石  
川區大塚窪町一六に生

れ、同區大塚上町一四に現住。小學校訓導。  
昭和十年十月より土屋文明氏の選を受く。ア  
ララギ會員。

**林 冷子** 本名藤田蓮子。四十二  
歳。山口縣都濃郡下松

町に生れ、廣島縣安藝郡江田島村海軍兵學校  
官舎に現住。海軍教授藤田幹造妻。山本康夫  
氏に師事、眞樹同人。

**林 和夫** 二十九歳。千葉縣香取  
郡古城村萬力に生れ、

同縣銚子市末廣町一丁目に現住。教員。少年  
時代より作歌すれど特別なる作歌經歷なし。  
三十四歳。宮城縣松島  
町磯崎に生れ、同地に

**林 武夫** 三十四歳。宮城縣松島  
町磯崎に生れ、同地に

現住。教員。昭和四年、一時「香蘭」に入社  
せしことあり。其後、北原白秋氏の「多磨創  
刊と共に入會、現在に及ぶ。

**林 理友** 石川縣中興村に生る。  
九州帝大英文科出身。  
東京高等工藝學校講師。昭和八年四月、勁草

社に入り宇都野研氏に師事、昭和十年十一月  
死去。行年三十六。

**林 龍一** 二十六歳。岐阜縣惠那  
郡福岡村高山一九五九

に生れ、同地に現住。農業。郷土文藝誌「ふ  
るさと」同人、「ぬけり」誌友。

**林 田實** 明治四十一年七月七日  
兵庫縣朝來郡田町に

生れ、大阪市東淀川區三國本町一ノ二に現  
住。昭和十年東京高師國漢科卒業、大阪府天  
王寺師範學校に赴任し現在に至る。

**原 三郎** 明治三十年六月二十八  
日、群馬縣佐波郡芝根

村下之宮に生れ、東京市世田谷區代田二ノ九  
六三に現住。東京醫專教授、醫學博士、藥理  
學專攻。大正五年、前田夕暮氏主宰の白日报社  
に入社。同六年五月より同七年五月迄嬰兒詩  
社を主宰し、歌誌「嬰兒」發行、後に玫瑰會  
に加はる。昭和三年白日报社「詩歌」復活に當  
り參加。青い蛙詩社主宰。歌集「朝の實驗室」  
「簡明藥理學」藥理學實習」等の著書あり。

**原 美登** 二十六歳。宮城縣亶理  
郡山下村に生れ、平安

南道順川郡順川面平安南道原蠶種製造所官舎  
に現住。官吏。昭和六年渡鮮、同八年曼陀羅  
社に入社、現在に至る。

**原 正邦** 三十五歳。山形縣北村  
山郡山口村に生れ、同

地に現住。小學校教員。昭和四年「詩歌」に入り、前田夕暮氏に師事、同七年退社。同年六月「霸王樹」入社、白井大翼氏の指導を受け現在に及ぶ。

原 一雄 二十七歳。群馬縣高崎市に生れ、同市大手前に現住。米穀商。「青垣」に據る。

原 常雄 明治三十二年八月二十日、大分縣下毛郡山口村田口七九八に生れ、同地に現住。小學校教師。十八九の頃より作歌、大正九年頃「アララギ」に據りしことあるも其の後「霸王樹」に入社、現在に至る。かつて友人等と「砂金」「大分歌人」等の歌誌を發行せしとあり。

原 眞弓 本名清治。明治三十四年四月、大阪府春木村に生れ、東京市目黒區上目黒五ノ二四二八に現住。東京商大出身。元支那海關幫辦、前滿洲國稅關理事官。中學四年の時より作歌、大正十一年「花田比露思氏」の「あけび」に入り、同年安江不空氏の門に入る。昭和十二年、歌集「嚴疆」出版。あけび、滿洲短歌、やまぶき同人。

原 都久雄 本名徳太郎。三十三歳。神奈川に生れ、東京市蒲田區蒲田町五七八に現住。出版會社員。復活スバル「三田短歌」心の花」等を経て現在「一路」の會員、並びに作歌當初より「ゆかり」の同人。

原 久子 二十八歳。東京市牛込區赤城下町四三に生れ、朝鮮咸鏡南道咸興府錦町一ノ六に現住。名古屋市立第二高女四年頃より依田秋圃氏の門に入る。歌誌「武都紀」の同人。

原 正俊 二十六歳。東京に生れ、朝鮮大邱府三笠町七一日に現住。無職。京城にて「新羅野」會員となり現在に及ぶ。

原 菊枝 明治四十一年二月、東京市四谷區信濃町に生れ、同市目黒區碑文谷一ノ一四二〇に現住。教員。昭和八年三月より同十年四月迄「香蘭」に屬す。同十年五月「多磨」創刊時より會員として現在に至る。

原 芳文 四十歳。長野縣下伊那郡神稻村伴野に生れ、同地に現住。農。竹柏會々員。

原 勝 明治三十九年三月、長崎縣佐世保市に生れ、東京市目黒區碑文谷一ノ一四二〇に現住。教員。昭和八年以來山上と泉氏主宰「かくのみ」林古溪氏主宰「わがうた」に屬す。

原 知一 明治十七年五月七日山形市七日町三二五に生れ、同地に現住。僧侶。中學四年頃より作歌、昭和五年大谷大學豫科に入學と共にアラ

ラギに入會、結城哀草果氏に師事す。本名小河正。二十七歳。三重縣志摩郡大王岬(波切町)に生れ、同地に現住。三重縣立志摩水産學校を病の爲退學。その頃より作歌、地方歌誌「白鳥」同人。

原 剛 明治三十五年青森縣藤崎町に生れ、昭和二年二月歿す。青森師範卒業後教鞭をとること二年、病を得て辭す。鬪病八年、この間萬葉集研究の傍ら作歌。歌集「籠り居」あり。

原 喜美子 三十六歳。京都市に生れ、東京市牛込區納戸町二五に現住。竹柏會入門、心の花同人。昭和八年、歌集「船出」刊行。

原 澤英 三十七歳。群馬縣利根郡新治村大字布施に生れ、同縣中之條町、吾妻館に現住。小學校教員。東京にて小學校女學校教員となり退職、郷里にて十年餘作歌、又上京して東洋大學に學び、森本治吉氏に教を受く。

原 田靜子 六十八歳。福岡縣鞍手郡古月村に生れ、新潟縣新井町大日本セルロイド會社宅に現住。昭和十一年三月「歌と觀照」社々友となりて作歌、現在に至る。

れ、同町西一ノ一四六三に現住。三菱銀行員。作歌經歷といふ程のものなし。

原田士朗

本名兵士郎。二十七歳。愛知縣南設樂郡新城町

東新町に生る。小學校教員。昭和十年より愛知教育歌壇にて太田水穂氏の指導を受け現在に至る。また名古屋の「東邦」同人たり。

原田村雀

本名虎之助。大正三年六月十一日、京都市西

九條猪熊町三に生れ、同地に現住。農。十九歳頃より作歌、翌年「國民文學」に入社、松村英一氏、菊池庫郎氏に師事す。

原田春乃

三十六歳。福岡縣遠賀郡遠賀村廣渡に生れ、

東京市目黒區洗足驛前ハウスに現住。御歌所寄人金子元臣氏秘書。大正七年より十年頃迄「水穂」にて作歌、一時中絶、昭和六年、歌と觀照一創刊されるに及び入社、岡山巖氏に師事し現在に至る。

原田信

三十五歳。長野縣諏訪郡玉川村に生れ、同地

に現住。農業。大正十二年より潮音社に入社して今日に至る。

原田重雄

舊姓申澤。三十一歳。長野縣北佐久郡三井村

安原に生れ、同縣輕井澤町に現住。教員。學生時代より作歌、昭和六年アララギ會員となり今日に及ぶ。

原田さつき

本名皐月。三十一歳。岡山縣英田郡大原町に

生れ、大阪市西淀川區塚本町一六七に現住。昭和二年頃より作歌、郷里の新聞其他に投稿せしが、その後中絶、昭和八年四月、いぶき入社、今日に至る。

原田光男

三十二歳。徳島縣海部郡川東村大字大里に生

れ同市前川町字前川七四ノ一に現住。教員。昭和九年潮音社に入社、現在に及ぶ。

原田實

二十九歳。佐世保市山ノ田水池畔に生れ、

同地に現住。官吏、佐世保海軍工廠勤務。昭和五年十月「秦皮」に入社、昭和六年四月退社し「嫩籬」に入社、同十年八月退社、同年十二月「香蘭」に入社し現在に至る。

原田徹夫

本名内海昭。大正元年兵庫縣揖保郡揖西村に

生れ、京都市左京區淨土寺馬場町二一鈴鹿方に現住。同志社大學生。最初「短歌評論」詩精神の誌友にして「歌」及び「詩」を發表せしことあり。大阪の「啄木研究」の同人、「鍛冶」の誌友。尙大學内の文藝雜誌「同志社派」の同人。

原田彦治

本姓矢島。三十七歳。長野縣諏訪郡金澤村に

生れ、同郡上諏訪町本町に現住。小學校教員。大正十一年アララギに入會し島木赤彦氏に師

事し、同氏歿後、森山汀川氏の指導を受けて今日に至る。

原田福壽

明治四十年十二月十四日、佐賀市唐人町に生

れ、東京市世田ヶ谷區宇奈根町四〇〇わかもと工場内に現住。自動車運轉手。大正十二年十月より短歌研究会に入り、金子薫園氏に師事し今日に至る。

原田謙次

明治二十六年八月八日長崎市に生れ、東京市

王子區上十條町一一七八に現住。著述業。大正元年、佐佐木信綱氏の門に入る。歌集「放浪」饗宴「劫火」あり。

原田二郎

嘉朝と號す。嘉永二年十月十日三重縣伊勢松

阪に生れ、昭和五年五月五日歿す。行年八十二。財團法人原田積善會の創設者。佐佐木弘綱、信綱兩氏に歌を學ぶ。昭和六年四月、「原田嘉朝集」出版せる。

原田得三

明治三十六年四月十八日、千葉縣長生郡八積

村金田に生れ、同地に現住。小學校教員。師範三年より作歌、新聞雜誌の讀有文藝欄に投稿せしのみ。

原田清

本名清五郎。二十四歳。東京市芝區三田松坂町

三八に生れ、同市目黒區月光町一六四に現住。小學校教員。早稻田大學在學中「早蕨短歌會」

に入り、諸家の指導を受けて作歌す。

**原田 爲一** 大正六年三月、山口縣吉敷郡井關村に生れ、

宇部市宇部窒素工業株式會社内に現住。山口高商卒業、昭和十二年より宇部窒素調査係勤務。山口高商短歌研究會を組織し一方眞樹社に屬す。後「自然」社友となる。

**原田 勝美** 二十八歳。東京市淺草區雷門一ノ一二に生

れ、栃木縣足尾町大字赤澤に現住。足尾鑛業所員。大正十五年八月吾妹入社、昭和五年三月かぐのみ入社、同八年四月立春入社、同九年四月香蘭入社。

**原田 しづる** 二十一歳。群馬縣北甘樂郡額部村大字南後箇

九一六に生れ、同地に現住。昭和九年四月より短歌月刊の楠田敏郎氏に師事す。

**原田 恒** 二十六歳。備中六條院町白土ヶ岡に生る。學

生。昭和七年歌と評論社入社、現在に及ぶ。別に歌誌「山脈」を主宰す。

**原田 憲雄** 大正八年二月二十三日京都市上京區下長者町

千本西入福島町三七四に生れ、同地に現住。龍谷大學生。中學時代より作歌、大塚五郎氏の門に入り、後水麴會員となり現在に至る。

**原田 進** 二十九歳。備中六條院町白土ヶ岡に生る。教

員。昭和五年歌と評論社入社、今日に至る。

**榛澤 せい子** 二十七歳。千葉縣安房郡丸村大井二六五に生

れ、同地に現住。農業。昭和六年秋、河井醉茗氏主宰「女性時代」に入社、現在に至る。

**榛原 繁一郎** 本名森正直。明治三十

二年三月十四日、京都府竹野郡木津村字今井に生れ、津市刑部五二に現住。教員。大正八年以來「國民文學」に出誌、窪田空穂、松村英一兩氏に師事す。但し最近三四年作歌なし。

**榛原 しの子** 本名佐々木つる子。明

巖根村高柳に生れ、愛媛縣喜多郡大洲町に現住。元女學校教員。帝國女子專門國文科在學中岡麓氏に就きて作歌、卒業後「草の實」に入會し、北見志保子氏の指導を受く。昭和十一年秋「草の實」を脱會し、北原白秋氏の多

摩會員となり現在に及ぶ。

**榛原 仁保布** 本名渡邊渡利。三十五

歳。長野縣南安曇郡南總高村重柳に生れ、同縣小縣郡丸子町腰越に現住。小學校教員。アララギ會員にして齋藤茂吉氏に師事す。

**張間 禧一** 明治三十五年四月十九

日、能登國輪島町に生れ、金澤市上鷹匠町二〇に現住。縣立工業學校奉職。東京美術學校在學中、歌會等にて香

取秀眞氏の指導を受く。昭和四年四月アララギ入會、現在土屋文明氏の指導を受く。

**張本 義道** 明治三十年十月二日、

長崎縣北高來郡田結村に生れ、同地に現住。眞宗本願寺派僧侶。尋常小學の頃より作歌、一時中絶、昭和四年五月、創作入社、今日に至る。

**春木 紫煙** 本名西田清信。四十六

歳。石川縣鹿島郡南大吞村熊淵字佛ノ前武田方に生れ、富山縣氷見郡女良村中波二七六に現住。小學校教員。明治末期富山師範在學中より作歌、主として地方新聞に發表す。大正六年六月、潮音に加入し現在に至る。

**春田 阿京** 本名美智。宮崎縣宮崎

郡佐土原町に生る。大正十五年七月アララギに入會、昭和十一年死亡。行年三十一。

**春成 やす子** 三十歳。栃木縣鹽谷郡

氏家町櫻野に生れ、東京市下谷區坂本二ノ四ノ一に現住。事務員。昭和五年七月水麴に入社、現在に至る。

**春山 鶴子** 本名飯島つるの。群馬

縣佐渡郡名和村大字戸谷塚三五四に生れ、大正十五年十月十日歿。行年二十四。大正十年四月相州平塚海岸に轉

地療養の際アララギに入りて作歌、土田耕平

氏の門に入る。